新潟県埋蔵文化財調査報告書　第155集

関越自動車道関係発掘調査報告書

金　屋　遺　跡　II

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

関越自動車道関係発掘調査報告書

金屋（かなや）遺跡 Ⅱ

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道は昭和60年10月に全線開通し、平成３年11月には関越トンネルが４車線化し、新潟と関東圏を結ぶ大動脈となりました。その結果、社会・経済・文化的に絶大な効果をもたらしています。この関越自動車道が通過する魚沼地方は、新潟県内でも有数の豪雪地帯です。そこで路面凍結による交通事故の発生や登坂不能車両による通行止めの減少を目的に、関越自動車道六日町雪氷Ｕターン路が計画されました。この雪氷Ｕターン路は、作業車を関越自動車道本線下に通すことでＵターンを可能にする道路で、迅速な雪氷対策が可能になるものと期待されています。

本書は、この六日町雪氷Ｕターン路の建設に先立ち、平成16・17年度に実施した金屋遺跡の発掘調査報告書です。金屋遺跡は関越自動車道本線の建設に先立ち、昭和57・58年度にも発掘調査を実施しています。その分についての報告書は刊行済みです。

調査の結果、弥生時代、古墳時代、古代（9世紀～10世紀）の集落であることが判明しました。特に古墳時代の調査では、古墳前期の竪穴住居が確認でき、遺跡の西側に位置する県史跡蟻子山古墳群との関連が注目されます。また古代の調査では、１軒の竪穴住居から佐渡や頸城地方などの窯で焼かれた須恵器が出土し、魚沼地方がこれらの地域と交流を持っていたことが分かります。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助をいただいた南魚沼市教育委員会ならびに地元住民の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配をいただいた東日本高速道路株式会社新潟管理局湯沢管理事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本報告書は、新潟県南魚沼市余川字蟻子山35－1ほかに所在する金屋遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は、関越自動車道六日町雪氷Ｕターン路の建設に伴い日本道路公団（現、東日本高速道路株式会社）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。

4　埋文事業団は掘削作業等を株式会社みくに考古学研究所に委託して発掘調査を実施した。

5　整理作業および報告書作成に係る作業は当該年度に行った。

6　出土遺物および調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。

7　遺物の注記は、金屋遺跡の略記号「KN」に３次調査（平成16年度調査）の「3」を付した「KN3」および４次調査（平成17年度調査）の「4」を付した「KN4」とし、出土地点や層位を続けて記した。

8　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

9　遺物番号は種別に係りなく通し番号とし、本文および観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

10　引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

11　航空写真の撮影は、平成16年度は株式会社イビソクに委託して行った。

12　遺物実測は現場作業中に行い、平成16年度調査分の出土遺物のトレースは株式会社みくに考古学研究所で行った。

13　自然科学分析（第Ｖ章３）は株式会社パリノ・サーヴェイに委託して行った。

14　遺構図・遺物図（H17年度調査分）のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコン COOLPIX995）で撮影し、遺構写真同様デジタル化して編集を行った。なお、図面作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。

本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ・トレース原図・貼り込み版下

遺構図面図版：デジタルデータ・レイアウト図・文字データ

遺物図面図版：トレース原図・トレース図（個別）・拓影・レイアウト図

写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

15　本書の執筆は山崎忠良（埋文事業団調査課班長）、笹川　隆（同主任調査員）、實川順一（株式会社みくに考古学研究所）、桑原　健（同）がこれにあたり、編集は飯坂盛泰（埋文事業団調査課班長）、山崎、實川が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章…笹川・山崎　第Ⅱ章・第Ⅳ章２・第Ⅵ章2A・2C…實川

第Ⅲ章・第Ⅳ章１・第Ⅴ章１・第Ⅵ章１…桑原

第Ⅴ章３…辻本崇夫・矢作健二・石岡智武（株式会社パリノ・サーヴェイ）その他…山崎

16　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる（敬称略　五十音順）。

安立　聡　　池田　亨　　金子 拓男　　神谷 佳明　　小島 敦子　　小島 幸雄　　笹沢 正史

佐藤 雅一　　高木 公輔　　田村 浩司　　藤原 敏秀　　望月 静雄

会津坂下町教育委員会　　魚沼市教育委員会　　（財）群馬県埋蔵文化財センター　　上越市教育委員会

東日本高速道路株式会社新潟管理局湯沢管理事務所　　南魚沼市教育委員会　　南魚沼市役所

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 1

A　調査と体制 …… 1

1）試掘調査 …… 1　　2）本発掘調査 …… 2

3）調査体制 …… 4

B　整理作業と体制 …… 5

1）整理作業 …… 5　　2）整理体制 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境 …… 7

2　周辺の遺跡 …… 8

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定 …… 10

2　基本層序 …… 10

A　水田側調査区 …… 11

B　丘陵側調査区 …… 11

3　遺構・遺物の検出状況 …… 13

A　平成16年度調査 …… 13

1）水田側調査区 …… 13　　2）丘陵側調査区 …… 13

B　平成17年度調査 …… 14

1）上　　層 …… 14　　2）中　　層 …… 14

3）下　　層 …… 14

第Ⅳ章　平成16年度調査

1　遺　　構 …… 16

A　概　　要 …… 16

B　記述の方法 …… 16

1）平面形態 …… 16　　2）断面形態 …… 16

C　遺構各説 …… 17

1）水田側調査区 …… 17　　2）丘陵側調査区 …… 19

2　遺　　物 …… 20

A　概　　要 …… 20

B　土　　器 …… 20

1）縄文時代 …… 20　　2）古墳時代 …… 20

3）古　　代 …… 22

第Ⅴ章　平成17年度調査

1　遺　　構……24
A　概　　要……24
B　記述の方法……24
C　遺構各説……24
1）上層の遺構……24　2）中層の遺構……25
3）下層の遺構……26

2　遺　　物……27
A　概　　要……27
B　石器の分類……27
C　上層出土土器……27
D　中層出土遺物……28
1）土　　器……28　2）石　　器……29
E　下層出土遺物……29
1）土　　器……29　2）石　　器……30
F　試掘トレンチ出土土器……30

3　金屋遺跡における層序対比……30
A　はじめに……30
B　試　　料……31
C　分析方法……31
D　結　　果……33
E　考　　察……35
1）指標テフラの対比……35　2）周辺地域のローム層との対比……35
3）崩落土について……36

第Ⅵ章　ま　と　め

1　遺構の時期的変遷……38
A　弥生時代中期後半……39
B　古墳時代前期後半……39
1）平成16・17年度調査……39　2）昭和57・58年度調査……39
C　古　　代……41
1）平成16・17年度調査……41　2）昭和57・58年度調査……41
D　金屋遺跡の遺構の変遷……41

2　出土土器について……43
A　縄文土器……43
B　弥生時代から古墳時代の土器……43
C　古代の土器……46
1）04SI40出土資料……46　2）04SD327出土資料……46
3）05SI31出土資料……46　4）包含層出土資料……47
5）小　　結……48

《要　　約》……49

《引用・参考文献》……50

《観　察　表》……52

挿図目次

第１図　試掘調査トレンチ位置図 ･････････････････2
第２図　金屋遺跡の位置 ･････････････････････････7
第３図　金屋遺跡と周辺の地形図 ･････････････････8
第４図　金屋遺跡と周辺の遺跡 ･･････････････････9
第５図　グリッド設定図 ･････････････････････････10
第６図　基本層序図 ･････････････････････････････12
第７図　分析試料採取位置と層序 ･････････････････31
第 8 図　重鉱物組成および火山ガラス比･････････33
第 9 図　重鉱物・火山ガラス･････････････････････37
第10図　弥生時代中期後半の遺構･････････････････40
第11図　古墳時代前期後半の遺構･････････････････40
第12図　古代の遺構･････････････････････････････42
第13図　弥生中期から古墳中期の土器･････････････44
第14図　古代の土器･････････････････････････････47

表　目　次

第１表　古墳時代の編年表 ･･････････････････････21
第２表　古代の編年表 ･･････････････････････････22
第３表　重鉱物・火山ガラス比分析結果 ･･････････32
第４表　出土土器の器種組成 ･････････････････････38

図版目次

図面図版

図版 1　金屋遺跡遺構全体図
図版 2　H16年度 水田側 遺構全体図
図版 3　H16年度 水田側 遺構分割図（1）
図版 4　H16年度 水田側 遺構分割図（2）
図版 5　H16年度 水田側 遺構分割図（3）
図版 6　H16年度 水田側 遺構分割図（4）
図版 7　H16年度 水田側 遺構断面図
図版 8　H16年度 水田側 遺構分割図（5）
図版 9　H16年度 水田側 遺構分割図（6）
図版10　H16年度 水田側 遺構個別図（1）
図版11　H16年度 水田側 遺構個別図（2）
図版12　H16年度 水田側 遺構個別図（3）
図版13　H16年度 丘陵側 遺構全体図
図版14　H16年度 丘陵側 遺構分割図（1）
図版15　H16年度 丘陵側 遺構分割図（2）
図版16　H16年度 丘陵側 遺構分割図（3）
図版17　H16年度 丘陵側 遺構個別図
図版18　H16年度 出土土器（1）
図版19　H16年度 出土土器（2）
図版20　H16年度 出土土器（3）
図版21　H17年度 上層 遺構全体図
図版22　H17年度 上層 遺構個別図
図版23　H17年度 中層 遺構全体図
図版24　H17年度 中層 遺構分割図（1）
図版25　H17年度 中層 遺構分割図（2）
図版26　H17年度 中層 遺構分割図（3）
図版27　H17年度 中層 遺構個別図（1）
図版28　H17年度 中層 遺構個別図（2）
図版29　H17年度 中層 遺構個別図（3）
図版30　H17年度 下層 遺構全体図
図版31　H17年度 下層 遺構分割図（1）
図版32　H17年度 下層 遺構分割図（2）
図版33　H17年度 下層 遺構分割図（3）
図版34　H17年度 下層 遺構個別図（1）
図版35　H17年度 下層 遺構個別図（2）
図版36　H17年度 出土土器（1）
図版37　H17年度 出土土器（2）
図版38　H17年度 出土石器

写真図版

図版39　遺跡近景・基本層序（1）
図版40　基本層序（2）・H16年度 水田側 竪穴住居（1）
図版41　H16年度 水田側 竪穴住居（2）
図版42　H16年度 水田側 竪穴住居（3）・溝（1）
図版43　H16年度 水田側 溝（2）
図版44　H16年度 水田側 溝（3）
図版45　H16年度 水田側 溝（4）
図版46　H16年度 水田側 溝（5）・土坑（1）
図版47　H16年度 水田側 土坑（2）・性格不明遺構（1）
図版48　H16年度 水田側 性格不明遺構（2）・河川跡
図版49　H16年度 丘陵側 掘立柱建物・溝（1）
図版50　H16年度 丘陵側 溝（2）・土坑（1）
図版51　H16年度 丘陵側 土坑（2）
図版52　H16年度 出土土器（1）
図版53　H16年度 出土土器（2）
図版54　H16年度 出土土器（3）
図版55　H17年度 上層 遺跡近景（下層）・礎石建物・性格不明遺構

図版56　H17年度 中層 竪穴住居（1）
図版57　H17年度 中層 竪穴住居（2）
図版58　H17年度 中層 竪穴住居(3)・掘立柱建物（1）
図版59　H17年度 中層 掘立柱建物（2）・溝・土坑
図版60　H17年度 下層 南側・掘立柱建物（1）
図版61　H17年度 下層 掘立柱建物（2）
図版62　H17年度 下層 掘立柱建物（3）
図版63　H17年度 下層 土坑・作業風景
図版64　H17年度 出土土器（1）
図版65　H17年度 出土土器（2）
図版66　H17年度 出土石器

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

関越自動車道では、降雪期の除雪の効率化を図るために、六日町インターチェンジから南側に約500mの地点で、除雪車のための雪氷Ｕターン路の建設が計画されている。日本道路公団（現、東日本高速道路株式会社）は雪氷Ｕターン路着工に向けて県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委からの委託を受けた埋文事業団は平成14（2002）年４月に予定法線内を踏査し、埋蔵文化財の分布調査を行った。建設予定地は関越自動車道の西側（下り線側）が山林、東側（上り線側）が畑地・水田で、西側の山林は丘陵の裾部に位置している。この丘陵一帯には県指定史跡の「蟻子山古墳群」（昭和47年指定）が存在し、また丘陵下には周知の「金屋遺跡」が位置する。この金屋遺跡は関越自動車道の建設に伴い、昭和57・58年度に本発掘調査を実施している。

分布調査の結果、下り線側道脇に古墳の可能性を示唆する墳丘状の高まりを確認、上り線水田側では遺物は採集されなかったが、扇状地性の堆積物に覆われている可能性があり、試掘調査が必要であると県教委に報告した。日本道路公団からの依頼を受けて、県教委は再び埋文事業団に調査を委託し、平成15（2003）年５月に南魚沼市余川字蟻子山地内で試掘調査を実施した。その結果、西側（以下、丘陵側調査区）・東側（以下、水田側調査区）ともに、古墳時代・古代（平安時代）を中心とする遺物包含層を確認、遺構も検出されたため、丘陵側調査区の2,190m^{2}に水田側調査区の2,070m^{2}を加えた4,260m^{2}について本発掘調査が必要であると県教委に報告した。その後日本道路公団・県教委・埋文事業団の三者で調査範囲・工程について協議した結果、古墳と考えられる高まりの位置する丘陵側西端部分（735m^2）を保存することとし、工事範囲から除外し、関越自動車道を跨いで、丘陵側2,300m^2（845m^2×２層＋610m^2×１層）に水田側2,070m^{2}を加えた延4,370m^{2}の本発掘調査を実施することを決定した。

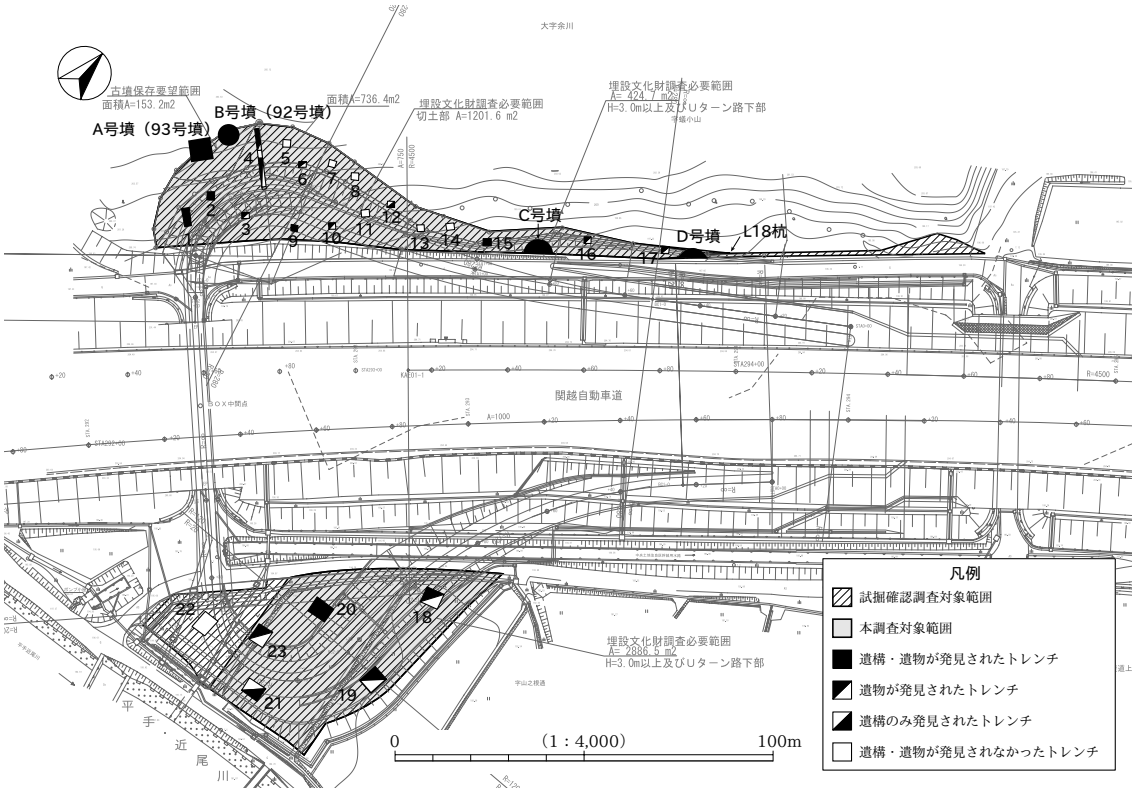
2　調査と整理作業

A　調査と体制

1）試 掘 調 査（第１図）

試掘調査は、埋文事業団が平成15（2003）年５月６日～16日にかけて実施した。調査は対象範囲4,790m^{2}に任意にトレンチを設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無の確認や土層の堆積状況等の確認を行った。

調査の結果、丘陵側調査区では開墾等の撹乱の痕跡もなく、遺物包含層が良好に残存していた。現地表下10～20cmで平安時代の遺物包含層、同30～40cmで古墳時代の遺物包含層が確認できた。出土した遺物は縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代のものであるが、数量的には古墳時代の遺物が多く、次いで平安時代のものが多い。特に１・２・９トレンチでは遺物が比較的多く出土した。全体的には遺物の出土量は南側で多く、北側で少ない傾向が認められ、５・７・８・11～14トレンチでは遺物は出土しなかった。遺物と同様に遺構についても南側に多く、１トレンチでは竪穴住居と推定される遺構が１基、



第１図　試掘調査トレンチ位置図

２・４・９・12・15トレンチでも遺構を検出した。また２・９トレンチ付近では、性格は不明ながら、緩斜面を一辺約10mのほぼ方形に削平した平坦面が観察された。また４か所で古墳及び墳丘状の高まりを確認でき、その形状について調査を行い、調査区南側からＡ～Ｄ号墳と仮称した。これらのうち、調査区西端に位置するＡ号墳は周堤と周溝をもつ方墳、Ｂ号墳はＡ号墳の周堤上に位置することから、Ａ号墳より新しい時期に築造された円墳であると判断された。Ａ・Ｂ号墳は蟻子山古墳群の他の古墳と比べても規模等に遜色がなく、確実な古墳であると考えられる。Ｃ・Ｄ号墳は、関越自動車道下り線側道脇に位置し、円墳と仮定すれば２基とも側道で削られており、Ｃ号墳は半壊、Ｄ号墳は８割以上が削られている。今回の調査では古墳であることの確認はできず、昭和56年度の側道工事の際の排土山の可能性も考えられた。なお、調査区北端の三角形状の狭い平坦面は、すでに削平されていると判断し、本発掘調査の必要がないことを確認した。水田側調査区では、現地表下40～100cmで平安時代の遺物包含層、同50～110cm付近で古墳時代の遺物包含層を確認した。遺構は20・21トレンチで古墳時代の所産と思われる遺構が検出された。一方調査区南側の畑地部分は、近接する平手・近尾川による浸食が見られ、遺物も出土しないことから、本発掘調査の必要はないと判断された。この試掘調査によりＡ・Ｂ号墳は古墳と認定され、Ｂ号墳（円墳）は92号墳、Ａ号墳（方墳）は93号墳と古墳番号がついた。

2）本発掘調査

平成16年度

調査区は関越自動車道建設に伴い、昭和57・58年度に本発掘調査を実施している金屋遺跡の隣接部分にあたる。試掘調査の後、調査区西端で確認された92・93号墳は蟻子山古墳群の一部として県の遺跡台帳に登録されている。蟻子山古墳群は県指定の重要な史跡であることから、調査区西端の一部を雪氷Ｕ

ターン路建設予定法線から除外することになり、調査面積は水田側・丘陵側合せて延4,370m^{2}となる。このうち平成16年度は水田側2,070m^2、丘陵側610m^{2}の合計2,680m^{2}を調査対象範囲とした。調査は水田側の調査を先行し、その後そこを排土置き場に充てながら丘陵側の調査を行うことで計画の設計がなされた。なお、両調査区とも遺物が希薄なため、遺物包含層掘削まで重機で行うこととした。

水田側調査区では、4月14日に排水のための暗渠工事を開始し、4月26日には重機による表土除去と包含層掘削を開始した。遺物は疎らに分布して出土していたが、調査区西側を中心に古墳・平安時代の土師器や須恵器が出土し、また包含層掘削の段階から16L・16Mでは、隣接する2軒の竪穴住居のプランを確認できた。5月14日には作業員25名を投入し、調査区中心から東西南北に残した十字のベルトによる土層の調査を進め、5月19日には遺構の精査・発掘を開始した。遺構は竪穴住居のある16L・16Mを中心に土坑・溝・ピット等を数多く検出した。また、調査区の南東側を流れる平手・近尾川の支流と考えられる河川跡を検出した。6月23日には遺構の調査が終了し、6月24日にラジコンヘリによる空撮を行った。平面図と地形図の測量は、各遺構調査と同時に進行し、7月1日には水田側調査区の現場内作業が全て終了した。6月30日には県教委の終了確認を得ている。

丘陵側調査区では本発掘調査に先立ち、調査区西端の等高線測量を5月12日から5月17日にかけて行った。7月6日から重機による表土除去、包含層掘削を開始、遺物の出土が少なかったこともあり、3日間で掘削は完了した。なお、調査区北端では地山までの掘削深度が現地表下2m以上になり危険と判断、遺構・遺物も検出できなかったことから、2L以北の調査はD号墳を除いて終了とした。7月12日からは作業員20名体制で遺構の精査・発掘を始めたが、調査区が蟻子山丘陵裾部に位置し、山林であったことから杉株の撤去に困難を極め、作業員の増員を余儀なくされた。また南西側8F付近は谷筋と見られ、湧水も多く排水トレンチを設けても常に一面水が滲み出し、いつまでも乾かない状態であった。遺構は掘立柱建物を検出した6H・7Gに集中しており、建物の周囲を巡る周溝、大型の土坑等を検出した。遺構調査と併行して平成15年度の試掘調査で未だ性格のわからなかったC・D号墳の調査にも7月12日から着手した。C号墳ではT字形のトレンチを地山まで掘り下げ、土層断面を観察した。その結果、周溝等は確認できず、古墳・平安時代の包含層上に礫混じりの褐色粘質土が盛土されていることが分かり、古墳ではないと判断した。D号墳については遺存率が低かったため、側道に平行してトレンチを設定し、地山まで掘り下げ調査した。D号墳もC号墳と同様に遺物包含層の上に多数の礫を含む灰黄褐色シルトが盛土されており、土嚢袋の一部と思われるものも混入していたことから、古墳ではないと判断した。C号墳についてはその後重機で地山まで掘り下げ、他の調査区内と同様に遺構精査を行った。8月3日には丘陵側調査区全ての遺構発掘が終わり、8月6日に終了写真を撮影した。平面図測量は7月28日から行い、地形測量と合わせて8月10日まで行った。8月11日には県教委の終了確認を受け、現場作業は全て終了し、8月23日に残務処理を終えて現場から撤収した。

平成17年度

調査区は平成16年度丘陵側調査区の南に当たり、面積は延1,690m^2（845m^2×2層）である。4月中旬から重機を使用して除雪を行い、4月下旬から排土置き場の排水処理を行った。その後4月25日に土層を確認し、平成17年度調査区中央では明確な間層（Ⅳb層）を挟み包含層が2層存在することを確認した。またⅢa層では、Ⅲa層を整地した平坦面と礎石建物が検出された。その結果平成17年度の調査では、Ⅲa層・Ⅳb層・Ⅶ層の3層に分けて遺構を検出した（以下、上層・中層・下層）。

４月26日から重機による表土除去を開始し、５月６日には終了した。５月９日から作業員25人を投入し上層の調査と併行し、中層の包含層（Ⅲａ～Ⅳａ層）掘削を開始した。Ⅲａ層からは縄文時代から古代の遺物が出土したが、Ⅲｂ層を掘り込む古墳前期の竪穴住居（05SI31）が確認されたことから、中層は古墳前期と判断した。５月27日には中層の完掘写真を撮影した。５月28日からはⅣｂ層及び下層の包含層（Ⅵａ層）掘削を開始した。しかし出土遺物が少ないことから、６月８日から重機で確認面（Ⅷ層）まで掘削を行った。Ⅵａ層からは縄文時代から古代の遺物が出土したが、６月上旬には掘立柱建物が検出され、柱穴から弥生中期の土器が出土した。そのため下層は弥生中期と判断した。なお平成16年度丘陵側調査区ではⅣｂ層が堆積していないことから、Ⅷ層で古墳時代・古代（平安時代）の遺構も検出された。６月14日に下層南側の空撮、６月27日には下層北側の完掘写真を撮影して調査を終了した。

3）調 査 体 制

試掘調査

調査期間　平成15（2003）年５月６日～５月16日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　黒井　幸一　（事務局長）

管　　理　長谷川二三夫（総務課長）

庶　　務　高野　正司　（総務課班長）

調査総括　藤巻　正信　（調査課長）

調査指導　田海　義正　（調査課国土交通省担当課長代理）

調査担当　石川　智紀　（調査課班長）

調査職員　片岡　千恵　（調査課嘱託員）

支援組織　株式会社みくに考古学研究所

現場代理人　関　　健二

本発掘調査（平成16年度）

調査期間　平成16（2004）年４月14日～８月13日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　黒井　幸一　（事務局長）

管　　理　長谷川二三夫（総務課長）

庶　　務　高野　正司　（総務課班長）

調査総括　藤巻　正信　（調査課長）

調査指導　田海　義正　（調査課本発掘調査担当課長代理）

調査担当　飯坂　盛泰　（調査課班長）

調査職員　笹川　隆　　（調査課主任調査員）

支援組織　株式会社みくに考古学研究所

現場代理人　岩井　正一

調　査　員　實川　順一

本発掘調査（平成17年度）

調査期間　平成17（2005）年4月26日～6月27日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　波多　俊二　（事務局長）

管　　理　長谷川二三夫（総務課長）

庶　　務　長谷川　靖　（総務課班長）

調査総括　藤巻　正信　（調査課長）

調査指導　田海　義正　（調査課本発掘調査担当課長代理）

調査担当　山崎　忠良　（調査課班長）

調査職員　島津　賢男　（調査課主任調査員）

入江　清次　（調査課主任調査員）

支援組織　株式会社みくに考古学研究所

現場代理人　関　　健二

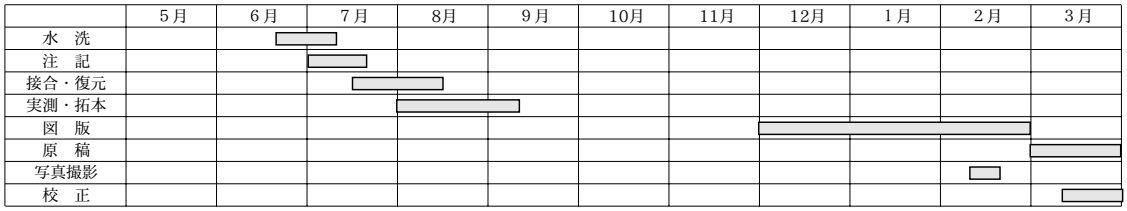
調　査　員　實川　順一

B　整理作業と体制

1）整 理 作 業

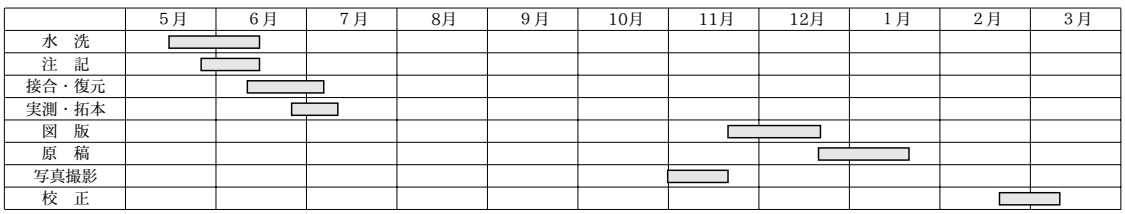
平成16年度

遺構図面の整理及び出土遺物の水洗・注記・接合復元・実測は、調査現場で本発掘調査と併行して行った。本格的な整理作業は平成16年11月～平成17年3月にかけて、みくに考古学研究所で行った。



平成17年度

遺構図面の整理及び出土遺物の水洗・注記・接合復元・実測・拓本作業は、調査現場で本発掘調査と併行して行った。遺物は図化できる最低限の復元を行った。11月上旬から図版作成、遺物の写真撮影、原稿執筆を行った。



2）整 理 体 制

平成16年度

整理期間　平成16（2004）年12月1日～平成17（2005）3月31日

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

整　　理　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　黒井　幸一　（事務局長）

管　　理　長谷川二三夫（総務課長）

庶　　務　高野　正司　（総務課班長）

整理総括　藤巻　正信　（調査課長）

整理指導　田海　義正　（調査課本発掘調査担当課長代理）

整理担当　飯坂　盛泰　（調査課班長）

整理職員　笹川　　隆　（調査課主任調査員）

支援組織　株式会社みくに考古学研究所

整理職員　實川　順一

作 業 員　桑原　健・冨沢由美子・桑原淳子・玉田信子・今成京子・小野塚紀子・冨田千恵・貝瀬あゆみ

平成17年度

整理期間　平成17（2005）年11月1日～平成18（2006）年3月31日

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

整　　理　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　波多　俊二　（事務局長）

管　　理　長谷川二三夫（総務課長）

庶　　務　長谷川　靖　（総務課班長）

整理総括　藤巻　正信　（調査課長）

整理指導　田海　義正　（調査課本発掘調査担当課長代理）

整理担当　山崎　忠良　（調査課班長）

支援組織　株式会社みくに考古学研究所

整理職員　實川　順一

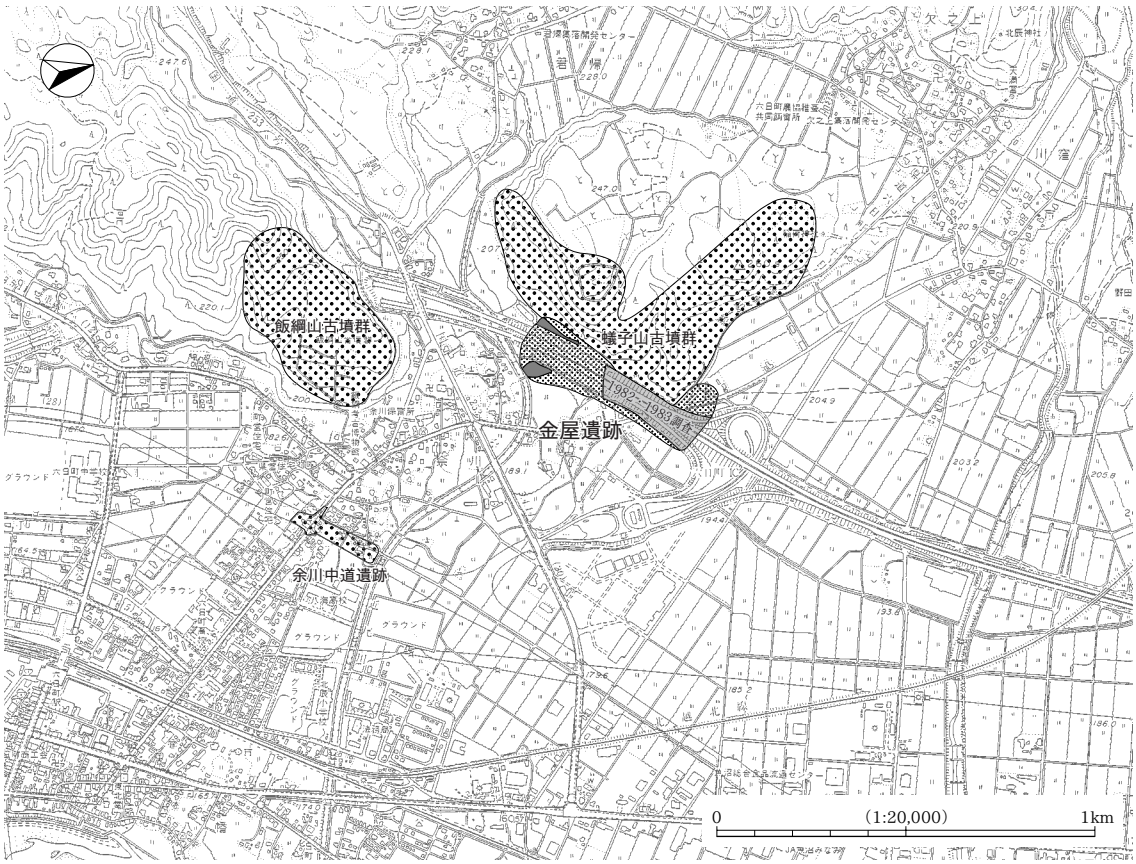
作 業 員　桑原　健・冨沢由美子・桑原淳子・今成京子・小野塚紀子・貝瀬あゆみ

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境

金屋遺跡が所在する南魚沼市は新潟県の南東部に位置し、市内を北流する魚野川の東側は花崗岩を主とした古生層の深成岩で構成され、断層等による起伏が著しく、標高1,500mから2,000m級の山からなる谷川連峰・三国山脈・越後山脈が北東に連なっている。一方西側は第三紀中新統上部の地層で構成された油田符曲帯地域で、標高500m以下の低山が南北に連なる魚沼丘陵が位置する。その中央には上越国境に源をもつ魚野川と、それに注ぎ込む河川によって発達した扇状地が広がる六日町盆地が位置している。なお、中央の魚野川を境にしてこのような地質を異にする東西両岸は地形も異なっている。魚野川右岸の東側は起伏の著しい山地のため谷が深く、六日町盆地へ急崖をなしている。また魚野川に注ぐ水無川・三国川等水量の豊富な河川により広大な扇状地を形成している。一方対岸の魚沼丘陵東麓は低山のため、急峻部と山腹緩斜面とで成立し、さらにその緩斜面から流れ出て魚野川に注ぐ庄之又川･鎌倉沢川等の小河川が下位段丘を埋めて扇状地を形成している（第２・３図)。

遺跡は魚沼丘陵東麓に位置する独立丘の蟻子山東側裾部と、庄之又川によって形成された扇状地上に立地する。また、遺跡の南側は蟻子山西側の山腹緩斜面に湧水源をもつ近尾川と上ノ原から流れ出る平手川が合流して魚野川に注ぐ平手・近尾川によって区画されている。



第２図　金屋遺跡の位置　〔南魚沼市（旧六日町）都市計画図 1:10,000原図〕

2　周辺の遺跡

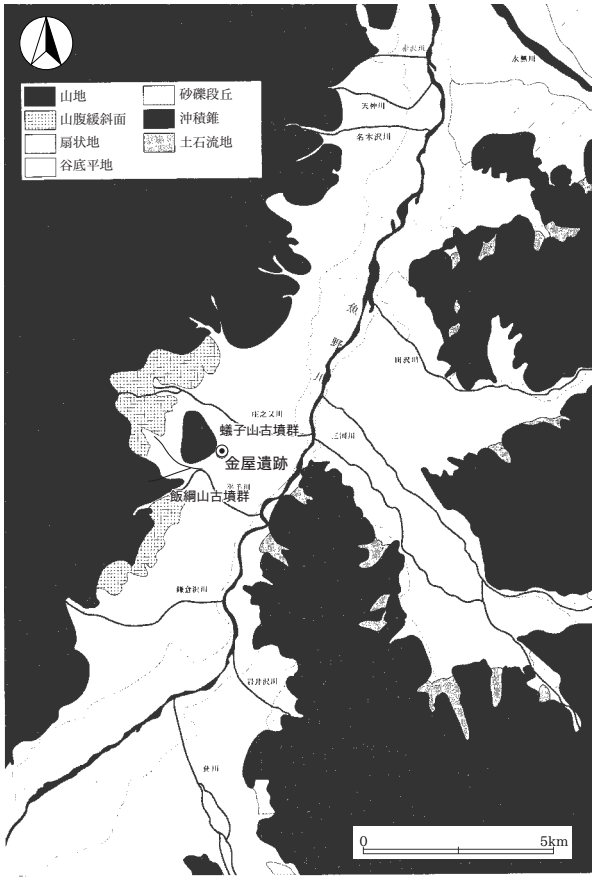
南魚沼市が位置する南魚沼地域では、魚野川に注ぐ登川・三国川・鎌倉沢川・庄之又川等の河川によって造りだされた大小の扇状地が発達した六日町盆地と、この盆地後背の山地・丘陵に多くの遺跡が立地している。第４図は縄文時代から古代までの遺跡を示したものである。

縄文時代の遺跡は早期から晩期まで存在し、特に中期から後期の遺跡が卓越する。中期から後期の遺跡には山地・丘陵に立地する栃窪蟻子山遺跡（15）・飯綱山遺跡（Ⅰ）（21）と扇状地に立地するお江作り遺跡（17）・八幡遺跡（22）がある。晩期の大久保遺跡（28）等は低位段丘に立地する。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と重複するお江作り遺跡（17）・飯綱山遺跡（Ⅰ）（21）・北沖遺跡（23）・飯綱山遺跡（Ⅱ）（32）等と古墳時代の遺跡と重複する来清西遺跡（20）・来清東遺跡（24）等がある。後者は丘陵縁辺や扇状地扇央に多い。単独遺跡は扇状地先端部に立地する清長寺遺跡（16）や扇状地前方の低地に立地する一水口遺跡（19）がある。また荒神遺跡（30）は魚野川左岸の段丘面に立地する。

古墳時代は中期になると、魚野川流域にも古墳が造営され、約180基の古墳が魚野川の左岸に確認されている。古墳のほとんどは中小規模の円墳で初期群集墳と呼ばれる古墳群である。その中で丘陵上に立地する古墳には蟻子山古墳群（2）・飯綱山古墳群（3）がある。蟻子山古墳群は93基が確認されている魚沼地方最大規模の古墳群で、その年代は５世紀後半から６世紀前半と考えられる。昭和47（1972）年に県史跡に指定され、また平成15（2003）年に発見された２基の古墳も平成17（2005）年に追加指定された。一方丘陵末端に立地する古墳には名木沢古墳（27）等がある。さらに丘陵縁辺の扇状地に小規模古墳が造営される万貝古墳（12）、４基が円形にまとまる糠塚古墳群（13）、７基がほぼ直線に並ぶ南山古墳群（14）が確認されている。古墳時代の集落は金屋遺跡（1）・余川中道遺跡（4）等初期群集墳周辺の丘陵縁辺の扇状地に位置するが、小規模古墳群周辺には現在確認できない。なお、余川中道遺跡（4）・来清西遺跡（20）・来清東遺跡（24）では土器の廃棄場、石製模造品・勾玉・臼玉等の祭祀遺物も検出され、祭祀跡も確認された。

古代は魚野川左岸に位置する金屋遺跡（1）や糠塚Ⅱ遺跡（36）のほか、右岸の小河川流域の扇状地にも蟹田遺跡（25）・寺見堂遺跡（31）等の集落跡が確認できる。その一方で、山地縁辺には三巌庵跡（33）等の寺院が建立される。また左岸に位置する長表遺跡（11）からは３条の溝が検出され、土師器・須恵器・木製品とともに墨書土器も大量に出土した。古代になると、



第３図　金屋遺跡と周辺の地形図
〔新潟県『土地分類基本調査図　十日町』1979年より作成〕

No.	遺　跡　名	時　代	No.	遺　跡　名	時　代	No.	遺　跡　名	時　代
1	金屋遺跡	縄文～平安	13	糠塚古墳群	古墳	25	蟹田遺跡	奈良・平安・中世
2	蟻子山古墳群	古墳	14	南山古墳群	古墳	26	下田遺跡	古墳
3	飯綱山古墳群	古墳	15	栃窪蟻子山遺跡	縄文・平安	27	名木沢古墳	古墳
4	余川中道遺跡	古墳	16	清長寺遺跡	弥生	28	大久保遺跡	縄文・古墳
5	前原遺跡	奈良・平安	17	お江作り遺跡	縄文・弥生	29	上山古墳	古墳
6	北原遺跡	奈良・平安	18	江戸塚	室町	30	荒神遺跡	弥生
7	天池遺跡	奈良・平安	19	一水口遺跡	弥生	31	寺見堂遺跡	平安
8	朴ノ木遺跡	奈良・平安	20	来清西遺跡	弥生・古墳	32	飯綱山遺跡（Ⅱ）	縄文・弥生
9	大清水遺跡	古墳	21	飯綱山遺跡（Ⅰ）	縄文・弥生	33	三厳庵跡	奈良
10	木ノ芽遺跡	奈良・平安	22	八幡遺跡	縄文	34	林京遺跡	平安
11	長表遺跡	弥生・奈良～中世	23	北沖遺跡	縄文・弥生	35	猪ノ尻経塚	平安
12	万貝古墳	古墳	24	来清東遺跡	弥生・古墳	36	糠塚Ⅱ遺跡	奈良・平安

第４図　金屋遺跡と周辺の遺跡　〔国土地理院「十日町」1：50,000原図〕

右岸にも遺跡が位置するものの、縄文時代から古代の遺跡数から依然として遺跡分布の主体は左岸にあったことがうかがえる。

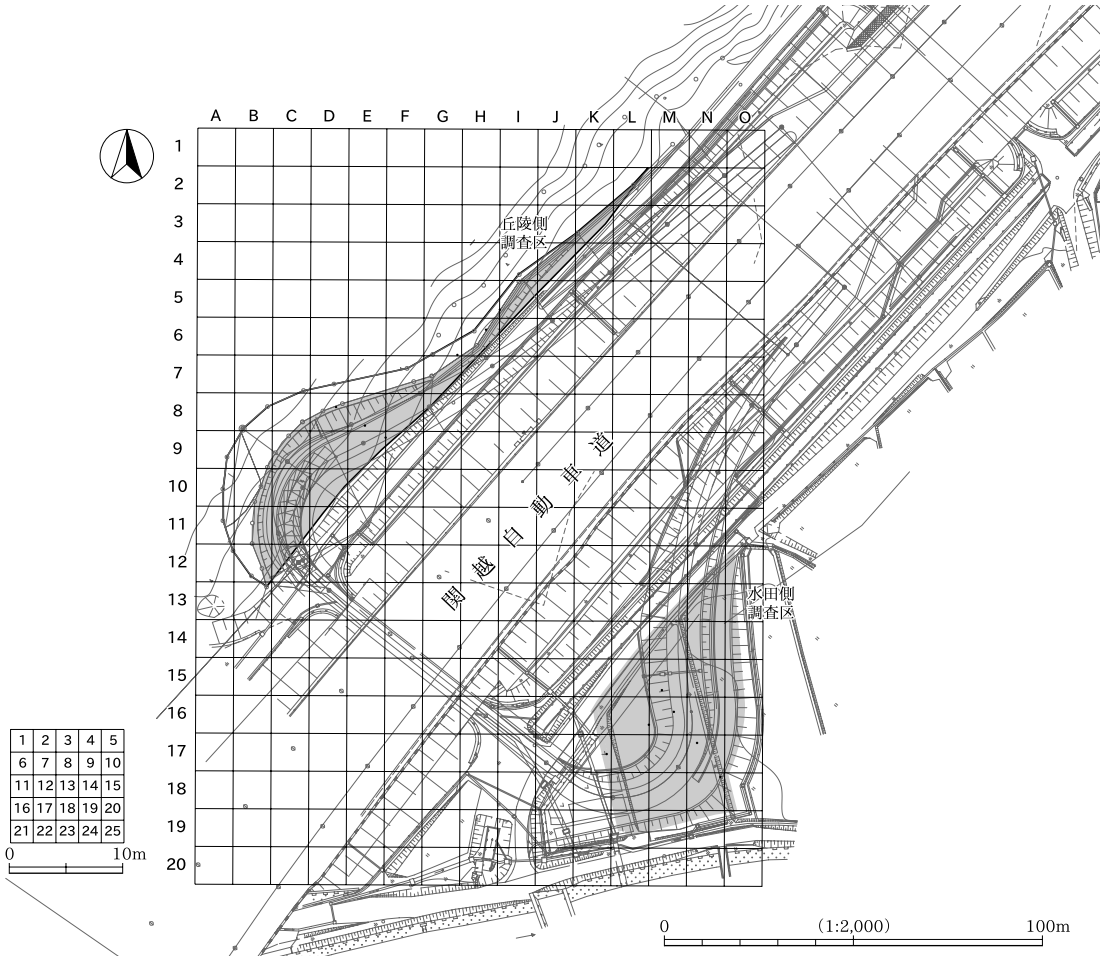
第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定

グリッドは２調査区を網羅するように設置した（第５図）。グリッドの設定には、水田側調査区外に任意に「T－1」（X＝119849.185・Y＝32946.772）を設け基準とした。なお、丘陵側調査区内の8Fの座標はX＝119970.000・Y＝32920.000、水田側調査区内の16Mの座標はX＝119880.000・Y＝32990.000である。グリッドには大グリッド・小グリッドの２種類があり、大グリッドは10mの方眼を組み、南北軸を北から算用数字で１～20とし、東西軸を西から順にアルファベットでA～Oまで付した。両者の交点に杭を打ち、「1A」のように組み合わせてグリッドを呼称した。小グリッドは大グリッド内を2m四方で25分割し、北西側から順に算用数字１～25を付し、「1A1」と呼称した。

2　基 本 層 序

調査区は沖積扇状地上（水田側調査区）と丘陵裾部（丘陵側調査区）の２地点に分かれ、両者では土層堆



第５図　グリッド設定図

積が異なる層が見られたため、一応区別しておく（第６図）。なお色調は『新版標準土色帖』［農林水産省農林水産技術会議事務局1993］を用いた。

A　水田側調査区

土層の堆積状況は、北西側から南東側に緩やかに傾斜しており、撹乱の痕跡はほとんど見られない。堆積土層は９層に分層でき、さらにⅡ層は５層、Ⅲ層は２層、Ⅳ層は３層、Ⅴ層は２層に細分した。その中で灰色粘質土のⅤａ・ｂ層が古代（平安時代）の遺物包含層である。古墳時代では遺構等は見られるが、明確な遺物包含層は形成していなかった。遺構確認面はⅦ層である。

Ⅰ層　オリーブ黒色粘質土。しまりあり、粘性あり。灰白色砂粒・炭化物粒子を含む。
層厚５～10cm。

Ⅱａ層　オリーブ黒色粘質土。しまりあり、粘性あり。灰白色砂粒を含む。層厚約5cm。

Ⅱｂ層　灰オリーブ色粘質土。しまりあり、粘性あり。灰白色砂をブロック状に含む。層厚約5cm。

Ⅱｃ層　灰色粘質土。しまりあり、粘性あり。白色砂粒を含む。層厚約10cm。

Ⅱｄ層　灰色粘質土。しまりあり、粘性あり。白色砂粒を少量含む。層厚約5cm。

Ⅱｅ層　灰色粘質土。しまりあり、粘性あり。白色粒子・炭化物を含む。層厚２～5cm。

Ⅲａ層　灰オリーブ色粘質土。しまりあり、粘性あり。一部橙色に変色。下位に砂粒を含む。
層厚約5cm。

Ⅲｂ層　オリーブ黒色粘質土。しまりややあり、粘性なし。褐色粘質土と灰色砂との混合土。
層厚２～5cm。

Ⅳａ層　黒色粘質土。しまりなし、粘性あり。炭化物粒子を含む。層厚約5cm。

Ⅳｂ層　オリーブ黒色砂質土。しまりなし、粘性なし。層厚２～3cm。

Ⅳｃ層　黒色粘質土。しまりなし、粘性あり。灰色粘質土を含む。層厚２～5cm。

Ⅴａ層　灰色粘質土。しまりあり、粘性あり。炭化物粒子を含む。古代の遺物包含層。層厚２～10cm。

Ⅴｂ層　灰色粘質土。しまりあり、粘性あり。古代の遺物包含層。層厚約5cm。

Ⅵ層　オリーブ黒色粘質土。しまりあり、粘性あり。炭化物粒子を含む。層厚５～10cm。

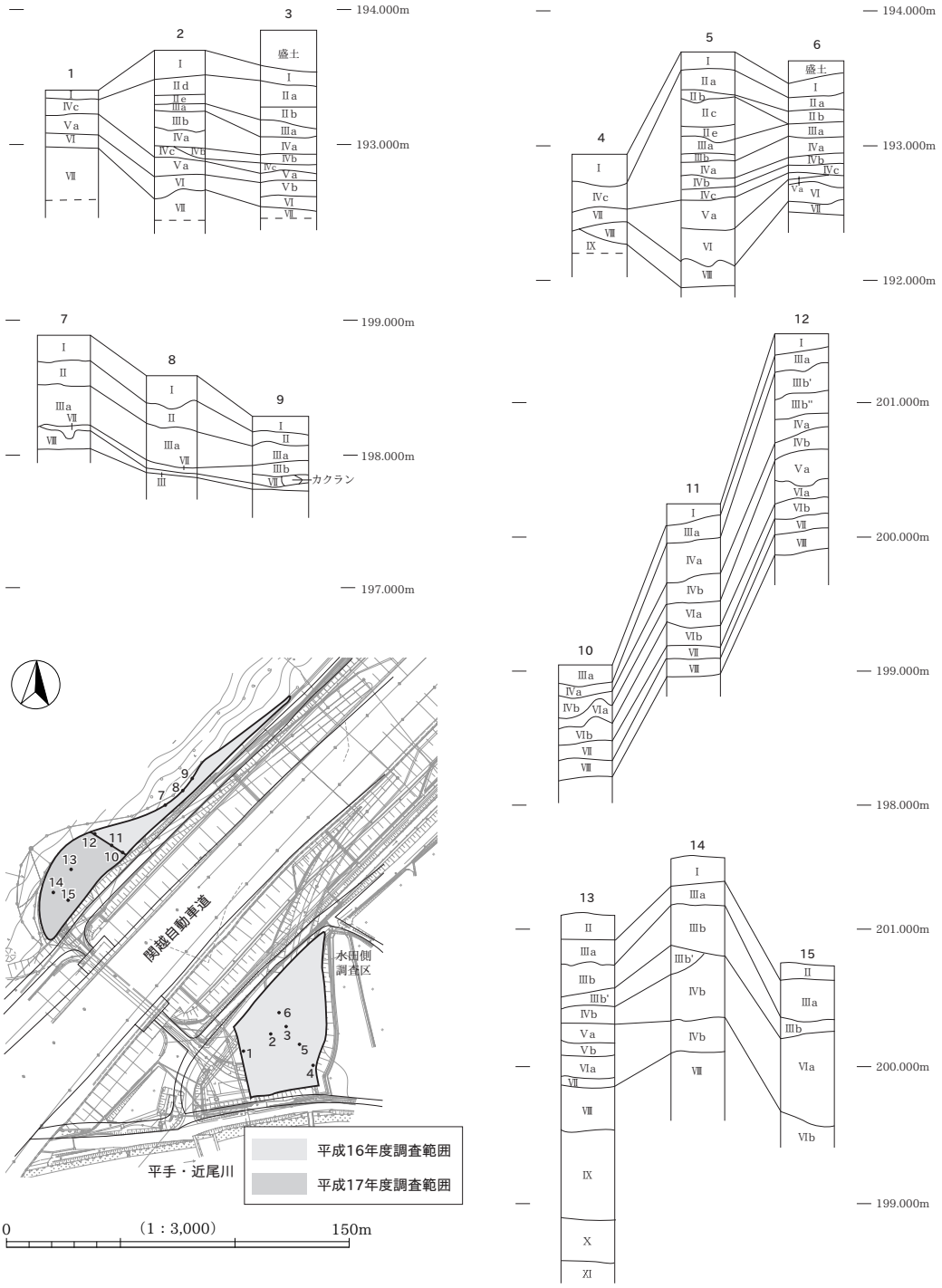
Ⅶ層　灰色粘質土。しまりあり、粘性あり。炭化物粒子を含む。遺構確認面。層厚５～10cm。

Ⅷ層　オリーブ黒色砂質土。しまりなし、粘性なし。層厚約5cm。

Ⅸ層　砂礫土。

B　丘陵側調査区

丘陵側調査区は14層に分層できる。遺物包含層はⅣｂ層を挟んで２層確認できる。Ⅲａ層・Ⅲｂ層からは縄文時代から古代（平安時代）の遺物が出土するが、古墳時代・古代（平安時代）が主体となる。主にⅣｂ層が遺構確認面となる。Ⅵａ層は縄文時代から古代（平安時代）の遺物が出土するが、主体は弥生時代で、Ⅷ層が遺構確認面となる。またⅢａ層でも遺構が検出されたことからⅢａ層を上層、Ⅳｂ層を中層、Ⅷ層を下層とした。遺構出土の遺物から、Ⅳｂ層検出の遺構は古墳前期の所産、Ⅷ層検出の遺構は南側（平成17年度調査区）では弥生中期、北側（平成16年度調査区）では古墳時代・古代（平安時代）の所産である。Ⅷ層で弥生中期と古墳時代・古代の遺構が検出されるのは、北側にはⅣｂ層が堆積せず、また北側が



第６図　基本層序図

丘陵裾部に位置することから、南側に比べⅠ層からⅧ層までの層厚が薄いことに起因する。また中層・下層とも時期幅のある遺物が出土しているが、これは魚沼丘陵東麓が地すべり地帯で、蟻子山が崩落した結果、他時期の遺物が混入したものと考えられる。なお、Ⅳｂ層の供給源も蟻子山と考えられる（第Ⅴ章3）。

Ⅰ層　　黒褐色粘質土。しまりなし、粘性あり。層厚５～10cm。

Ⅱ層　　黒褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。礫を少量含む。水田側調査区Ⅱａ層相当。
　　層厚５～10cm。

Ⅲａ層　黒色粘質土。しまりややあり、粘性あり。礫を少量含む。上層遺構確認面。中層遺物包含層。

層厚５～10cm。

Ⅲｂ層　黒褐色粘質土。しまりややあり、粘性あり。中層遺物包含層。層厚５～10cm。

Ⅲｂ'層　黒褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。黒色土と黄褐色土との混合土。部分的に推積。層厚約5cm。

Ⅲｂ"層　黒褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。黄褐色土をブロック状に含む。部分的に推積。層厚約5cm。

Ⅳａ層　黒色粘質土。しまりあり、粘性あり。層厚５～10cm。

Ⅳｂ層　褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。黄褐色土主体の黒色土との混合土。中層遺構確認面。層厚５～10cm。

Ⅴａ層　黒褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。黄褐色土と黒色土との混合土。層厚５～10cm。

Ⅴｂ層　褐色粘質土。しまりあり、粘性ややあり。礫を多く含む。層厚５～10cm。

Ⅵａ層　黒色粘質土。しまりあり、粘性あり。黄褐色土を少量含む。下層遺物包含層。層厚５～30cm。

Ⅵｂ層　暗褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。暗褐色土と黄褐色土との混合土。層厚５～15cm。

Ⅶ層　暗褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。黒色土と黄褐色土との混合土。層厚約5cm。

Ⅷ層　褐色粘質土。しまりあり、粘性あり。下層遺構確認面。層厚５～10cm。

3　遺構・遺物の検出状況（第４表）

A　平成16年度調査

1）水田側調査区

遺　　構

竪穴住居２軒、溝16条、土坑４基、河川跡１条等を検出し、それらは河川跡（04SD17）よりも北側に密に分布していた。特に竪穴住居を検出した16L・16M付近に遺構分布の中心が見られた。14N・14O付近でも、溝やピットを比較的多数検出した。河川跡（04SD17）よりも南側では遺構分布密度が希薄であった。時期別の遺構の分布は、古墳時代前期後半の遺構では、溝１条、ピット３基、性格不明遺構３基を検出した。主に調査区北側に分布している。古代（平安時代）の遺構は、竪穴住居２軒、溝１条、ピット７基を検出した。竪穴住居周辺に分布の中心がある。

遺　　物

本調査区から出土した遺物は、竪穴住居を検出した16L・16M付近に多く分布している。土器は、古墳時代前期後半の土師器の甕形土器（以下、形土器を省略）・小型壺・鉢・高杯・器台が出土し、古代（平安時代）では９世紀前葉と10世紀前葉の土師器の長胴甕・無台杯や９世紀前葉の須恵器の大甕・無台杯・有台杯・杯蓋が出土した。また、04SI40からは９世紀前半の良好な一括資料が出土している。

2）丘陵側調査区

遺　　構

掘立柱建物１棟、溝５条、土坑５基等を検出した。6H・7H・7Gが主な遺構の分布の中心で、掘立柱建物もこのグリッドで検出した。その他のグリッドでは、ピット等が散漫に分布していた。時期別の遺構の分布を見ると、古墳時代前期後半では溝１条、土坑２基を検出し、古代（平安時代）の遺構は掘立柱建

物１棟を検出した。古墳時代と古代（平安時代）の遺構は、6H・7H・7Gに分布しており、似たような分布を示している。

遺　　物

古墳時代前期後半の土師器の甕や古代（平安時代）の土師器の長胴甕・杯、須恵器の大甕のほか、縄文時代前期後半の土器片も数点出土した。縄文土器は調査区北西側のみの出土である。また掘立柱建物を検出した6H・7H・7Gに遺物分布の中心がある。

B　平成17年度調査

平成17年度は丘陵側調査区南側を調査した。調査の結果、３層に分かれて遺構が検出された。そこで層位ごとに検出状況を記述する。なお平成16年度丘陵側調査区の遺構確認面はⅧ層（下層）である。

1）上　　層

遺　　構

Ⅲａ層で遺構が確認された。9D周辺で礎石建物１棟、性格不明遺構１基（05SX1）を検出した。05SX1はⅢａ層を整地することで、傾斜地に平坦面を作出する。礎石建物はこの平坦面のやや北東側に位置し、礎石の多くは被熱していた。05SX1の平坦面は調査前にも確認でき、また礎石建物は現地表下約10cmで検出される。なお、遺構の時期は明確にしえなかった。

遺　　物

Ⅰ層からは縄文土器や古代（平安時代）の土師器の椀、内黒の椀等が出土した。Ⅱ層では9Cで古代（平安時代）の土師器の椀や須恵器の杯が出土した。全体的に遺物の出土量は少ない。

2）中　　層

遺　　構

Ⅳｂ層が遺構確認面で、竪穴住居２軒、掘立柱建物１棟、溝２条、土坑・ピット29基を検出した。竪穴住居は古墳時代前期後半の所産で、他遺構も同時期と判断する。分布に関しては、竪穴住居等は11B・11Cに位置する一方、掘立柱建物や土坑・ピット等は９列以北に位置し、10列周辺には遺構は分布しない。

遺　　物

縄文時代から古代（平安時代）の遺物が出土したが、そのうち古墳時代前期と古代（平安時代）が主体となる。また層位的にはⅢａ層と竪穴住居からの出土が多い。時期別では、縄文土器は9D・12Bで、弥生土器は9D・11C周辺でそれぞれ少量確認できる。古墳時代前期と古代（平安時代）の土器は竪穴住居の位置する11B・11Cや10Cに分布の中心がある。このほかその多くが縄文時代の所産と思われる石器は、11B・11C・12B・12Cや9D周辺に分布する。

3）下　　層

遺　　構

Ⅷ層が遺構確認面で、掘立柱建物２棟、土坑・ピット38基を検出した。掘立柱建物の柱穴から弥生中期後半の土器が出土しており、掘立柱建物は弥生中期後半の所産と考えられ、他遺構も同時期と判断する。分布は、掘立柱建物は丘陵裾部の12Bや10Dの周辺に位置する。土坑・ピットは11列以南に多く、９列

以北は遺構の分布が希薄である。中層の遺構分布とは異なる。

遺　　物

縄文時代から古代（平安時代）の遺物が出土したが、中層に比べ出土量は少ない。縄文土器は11C・12Bに分布し、弥生土器は05P51等から出土した。古墳時代の土師器は11B等に分布する。縄文時代の所産と思われる石器の分布は中層と同様である。また11DⅣb層からは扁平片刃石斧（115）、9EⅦ層からはナイフ形石器（118）が出土した。

第Ⅳ章　平成16年度調査

1　遺　　構

A　概　　要

平成16年度調査では、竪穴住居２軒、掘立柱建物１棟、土坑10基、河川跡１条、溝21条、性格不明遺構５基、ピット354基を検出した。これらの遺構は、水田側調査区南側に位置する04SD17河川跡より北側で多く確認した。04SD17は、かつての近尾川に合流する支流と考えられる。遺構の時期は出土遺物から、古墳時代前期後半と古代（9世紀前葉及び10世紀前葉）と推定される。なお土器の編年については第Ⅳ章2Bを参照していただきたい。

B　記述の方法

個々の遺構の説明には、本文（挿図含む）・図面図版・写真図版を用いる。しかし検出した全ての遺構を網羅しているわけではなく、特に重要と思われる遺構について掲載した。

遺構番号　遺構の名称は、調査年度・遺構種類・番号の順に表記した。遺構の番号は地区や層位・遺構種類に関係なく、1からの通し番号とした。しかし、掘立柱建物については、別に通し番号を付している。遺構種類については、竪穴住居（SI）、掘立柱建物（SB）、溝・河川跡（SD）、土坑（SK）、性格不明遺構（SX）、柱穴・ピット（P）というように略称を用いて表記し、略称の前に調査年度「04」を付した。なお土坑・ピットについては、長軸及び短軸が80cm以上の掘り込みをもつものを土坑に分類し、それ未満のものをピットとして分類した。

図　　版　図面図版は1/800の全体図と1/100の分割図、1/40のセクション図、1/80のエレベーション図、個別図を基本とした。個別図では主に竪穴住居・掘立柱建物・土坑・性格不明遺構を扱い、溝・河川跡については分割図にセクション図とともに掲載した。遺構写真は重要な遺構で、遺存状態の良好な遺構等を掲載した。

遺構の形態分類　平面形態・断面形態の分類は、上越市（旧中郷村）和泉Ａ遺跡［荒川・加藤ほか1999］の分類を参考にした。

1）平 面 形 態

円　　形：長径が短径の1.2倍未満のもの。
楕 円 形：長径が短径の1.2倍以上のもの。
方　　形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
長 方 形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの。
不 整 形：凸凹で一定の平面形をもたないもの。

2）断 面 形 態

台 形 状：底部に平坦面を持ち、緩やか～急角度に立ち上がるもの。

箱　　状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。

弧　　状：底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立ち上がるもの。

半 円 状：底部に平坦面を持たない碗状で、急斜度に立ち上がるもの。

U 字 状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。

袋　　状：確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾して立ち上がるもの。

V 字 状：点的な底部を持ち、急斜度に立ち上がるもの。

漏 斗 状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。

階 段 状：階段状の立ち上がりを持つもの。

C　遺 構 各 説

1）水田側調査区

竪穴住居（図版10・11・40～42）

竪穴住居は２軒検出した。ともに16L・16Mに位置し、約2.5m離れている。主軸はカマドの位置する壁と向かい側の壁に直交する線とし、この線が真北を中心に東西に偏する角度で表わした。

04SI39　16Mに位置している。主軸はN－7°－Eを指す。基本層序確認の際に住居の一部を確認し、周辺の精査を行ない隅丸方形のプランを検出した。平面形は長軸3.2m（南北）、短軸2.9m（東西）のほぼ隅丸方形を呈し、面積は約9.3m^{2}の広さで床面はほぼ平坦である。竪穴の深さは確認面から25cm前後である。カマドは住居の南東隅に位置する。カマド周辺から中央部にかけての床面には、カマド構築に用いられたと見られる河原石が散在する。また、遺構内部や遺構周辺には、柱穴や周溝は検出されなかった。覆土は４層に分層でき、１層は黄褐色砂質土と炭化物が混じり、２層には白色砂粒・炭化物が混入している。３層には褐色砂質土や白色砂粒が混じっている。４層はしまりがなく、炭化物が混じっていた。

カマドの遺存状態は比較的良好で、天上部は崩落しているが、両袖の主要部分と煙道の一部が遺存している。両袖は、袖の付け根から袖口まで河原石を立て芯としている。河原石の配列から焚き口の幅は35cm前後と推定され、長さ70cm前後、最大幅は40cmである。煙道は長さ約70cm、幅約25cm、約20°の傾斜で排煙口に向かっている。出土遺物は住居床面からの出土は認められず、覆土から10数点の土師器の長胴甕が出土している。その内の１点は04SI40のカマド内の長胴甕（29）に接合した。

04SI40　16L・16Mに位置し、主軸はN－20°－Wを指す。本遺構も基本層序確認時に確認し、周辺の精査を行い隅丸方形のプランを検出した。平面形は長軸3.9m（南北）、短軸3.5m（東西）のほぼ隅丸方形を呈し、面積は約13.7m^{2}の広さである。床面は中央部から北側にかけてはほぼ平坦で、カマド周辺は焼土・炭化物を含む貼床が認められる。竪穴の深さは確認面から25cm前後である。柱穴は遺構内からは検出できなかったが、壁の中ほどが張り出し、小ピットをもつ。壁縁柱穴の一部と見られる。これらの小ピットの深さは床面から10～20cmである。カマドは住居の南東隅に位置するが、煙道は検出できなかった。覆土は５層に分層でき、１層には炭化物・鉄分が混入しており、２層には灰色砂質土が混じっていた。３層はa・bに分層でき、3b層は3a層に比べ、砂質土を多く含む。４層は黒色粘土ブロックが混じる灰色粘質土で、貼床と考えられる。

カマドの遺存状態は比較的良好で、天上部は崩落しているが、両袖の主要部分が遺存している。両袖は、袖の付け根から袖口まで河原石を立て芯としている。しかし、河原石の配列とカマド覆土の断面観察により２回構築されたと考えられる。１回目の構築は南東隅に寄った壁面に芯材の河原石が「コ」の字状に遺

存する部分である。２回目の構築は、焚き口付近に倒れている河原石とその下の潰れている長胴甕が出土した部分で、１回目のカマドを一部壊して構築されている。また、土層観察の結果、炭化物を多量に含んだ層を２層検出している。１回目のカマドは床面から25cm前後掘り込み、火床としている（SPD－SPD'）。長さは焚き口まで1.1m前後あり（2回目の構築で一部壊されている）、壁面の幅は河原石の配列から55cm前後である。２回目のカマドは１回目のカマドを壊した後に縮小して構築しているが、南北の土層断面の観察（SPC－SPC'）から壁面の芯とした河原石の配列は再利用したものであると考えられる。火床は床面から25cm前後を掘り込み、長さ95cm前後、幅は焚き口部分で55cm前後である（SPE－SPE'）。火床から約20°の傾斜で約55cm上がった所で50°の角度で遺構確認面に立ち上がる（SPC－SPC'）。

出土遺物は、カマドから土師器の長胴甕が２個体（27・29）とその周辺に須恵器の無台杯（22～26）・有台杯（18～21）・杯蓋（17）等が散在していた。また北東隅には須恵器の大甕（30）が床面から若干上の位置で出土した。これらの遺物から時期はＶ１期（9世紀前葉）の所産と考えられる。

溝（図版３～７・42～46）

15条検出した。幅が一定で細長く深度が浅い溝や平面形が不整形の溝は、規模が様々で底面に凹凸がある。竪穴住居南側16M・17Mで検出した04SD108・110・116・117・138は、遺存状態が良好でないものも見られるが、大きさ・形状もほぼ同じで、幅20cm、深さ10cm前後の浅い溝である。排水等の役割を担っていたと推測され、人為的な溝と考えられる。その他の溝は使途不明であり、自然の溝の可能性もある。溝からの遺物の出土は少ない。

土　　坑（図版12・46・47）

４基検出した。蛇行する04SD17北西側の竪穴住居周辺で確認した。平面形は楕円形・方形・不整形のものが見られ、断面形は台形状や弧状である。

04SK33　15N9に位置する。平面形は長径164cm、短径82cmの楕円形、深さは16cm前後で、断面形は台形状を呈する。覆土は自然堆積で３層に分かれる。土坑の底面に礫が食い込んだ状態で散在していた。礫を投げ捨てるように廃棄したものと推測される。遺物は出土していない。

04SK146　17L6・７に位置する。平面形は長軸112cm、短軸72cmの不整形、深さは20cmで、断面形は弧状を呈する。覆土は単層で遺物は出土していない。

04SK152　17L11・12に位置する。平面形は長軸96cm、短軸76cmの不整形、深さは10cm前後で、断面形は台形状を呈する。覆土は単層で遺物は出土していない。

04SK258　15M16・17・21・22に跨って検出した。平面形は長軸200cm、短軸180cmの方形、深さは17～42cmで、断面形は台形状を呈するが、底面には凹凸がある。覆土は４層に分かれ、２～４層には粘質土が堆積する。遺物は出土していない。

性格不明遺構（図版12・47・48）

４基検出した。04SX1・２・３の３基は14Mに位置している。

04SX1　14M12・16・17に位置する。西側を排水用暗渠で切られているが、平面形は長径110cmの不整円形を呈すると考えられる。深さは30cm前後で、断面形は漏斗状である。覆土は４層に分かれ自然堆積である。出土遺物は８～９期（古墳時代前期）の土師器の小型甕（1）と高杯（2）がある。

04SX2　14M17に位置する。平面形は長径84cm、短径72cmの不整円形、深さは45cmで、断面形は半円状に近い。覆土は２層に分かれ自然堆積である。８～９期（古墳時代前期）の高杯（3）が出土した。

04SX3　14M12・13・17・18に位置する。平面形は長径332cm、短径196cmの不整楕円形、深

さは20cm前後で、断面形は台形状を呈する。覆土は２層に分かれ自然堆積である。７～８期（古墳時代前期）の土師器の甕（4）が出土した。

04SX56　18N23・24に位置する。平面形は長径142cm、短径92cmの不整楕円形、深さは5cm前後で、断面形は弧状を呈する。04SD17付近に位置する遺構で、周囲にはピットが位置する。遺物は出土していない。

河　川　跡（図版２・５・８・48）

河川跡は調査区の南東側で１条検出した（04SD17）。

04SD17　水田側調査区の中心から、北東・東・南東へと分岐する河川跡である。流路の方向や規模から考えて、近くを流れる近尾川の支流であったと推定される。分岐する３条の河川跡であるが、土層の堆積状況や遺物の有無等から、時期的な差異が認められ、ここでは北東側支流を04SD17-1、東側支流を04SD17-2、南東側支流を04SD17-3として便宜的に分けて呼称する。３条が分岐している中心部分は、17M・18Mに位置する。幅は1.5～2.0m、深さは50～60cmを測り、断面形はV字状や弧状で、立ち上がりは急斜度である。河床は平坦なところが多く、径10～20cmの礫に覆われていた。覆土はⅦ・Ⅷ層を主体とする粘質土ないしシルトに灰色粘質土が若干混じったものであり、河床に近づくにつれ粘性が増し、水分含有量が多くなる。覆土の堆積状況や川岸の様子から湛水していたものと推定される。出土遺物は古墳時代～古代の土師器で、甕の口縁部・体部の破片が１～４層にかけて入り混じった状態で出土した（6・7）。流れ込みと考えられる。

2）丘陵側調査区

掘立柱建物（図版17・49）

04SB1　6H・7G・7Hに位置する。関越自動車道の側道に大部分を削られているため、面積等の詳細は不明である。柱穴は３基確認した。いずれも径50～96cm、深さは04SK319が24cm、04P314が44cm、04P329は60cmを測り、柱穴の間隔は3.5～3.7mである。周囲には04SD327と04SD330が位置し、04SD327が04SB1に付随する雨落溝と考えられる。新旧関係は、切り合い関係から04SD327の方が新しい。04SD327からはⅦ１期（10世紀前葉）の所産である土師器の無台椀が２点出土した（47・48）。また04SD327から南西へ3mの地点では20cm前後の段差を確認した。傾斜地を平坦に整地してから建物を構築したことがうかがえる。

溝（図版15・16・49・50）

掘立柱建物（04SB1）に付随する04SD327を除くと、４条検出した。

04SD301　7G17・18・22に位置する。全長340cm、幅20cm、深さ7cmのL字状の溝で、断面形は弧状である。この溝の東側には04SK316があり、関連性がうかがえる。遺物は出土していない。

04SD330　7G4・5・9・10に位置する。全長370cm、幅100cm以上、深さ36cmを測る。04SB1に付随する04SD327に切られるが、04SD327より深く掘り込まれ、溝の立ち上がりが確認できた。断面形は緩やかな半円状を呈し、覆土は５層に分けられ、自然堆積である。遺物は４層から古墳時代前期と思われる土師器の甕（40）・小型壺（41）の破片が出土した。

04SD364　5I22に位置する。全長70cm、幅24cm、深さ22cmを測る。この周囲にはピットが散漫に分布しているのみであった。断面形は一部段を有しているが、詳細は不明である。遺物は出土していない。

04SD395　8E5に位置する。全長235cm、幅73cm、深さ24cmを測る。この溝の周辺には遺構はなく、単独で検出した。詳細は不明であるが断面の観察から、傾斜に沿って台形状に掘られているため、丘陵から流れてくる水の進入を防ぐ役割を果たしていた可能性もある。遺物は出土していない。

土　坑（図版17・50・51）

4基を検出した。04SK328と04SK358は切り合い関係から04SK328の方が新しい。

04SK316　7G23に位置する。一部側道により切られているが、ほぼ完形で検出した。平面形は長径108cm、短径84cmの楕円形、深さは39cmで、断面形は台形状を呈する。覆土は2層に分けられ、自然堆積である。遺物は出土していない。

04SK328　7H6に位置する。平面形は長軸80cm、短軸72cmの方形、深さは12cmで浅く、断面形は台形状を呈する。覆土は灰黄褐色粘質土と褐色粘質土の混合層である。遺物は出土していない。

04SK331　6H14・15に位置する。東側半分は側道により切られているが、平面形は径260cmの円形と思われる。深さは48cmで、断面形は台形状を呈する。覆土は自然堆積で5層に分けられる。遺物は2層から古墳時代の土師器甕の底部片（42）が出土した。

04SK358　7H6に位置する。平面形は長さ74cmの方形で、深さは40cm、断面形は箱状を呈する。覆土は自然堆積で3層に分けられる。1層には径10～20cmの礫を多量に含み、古墳時代の土師器の甕・壺片も数点混じって出土した（43）。礫は配列したような痕跡はなく、1層が埋まりはじめた段階で、まとめて廃棄したものと考えられる。

2　遺　　物

A　概　　要

遺物は縄文時代前期後半、古墳時代前期、古代の土器が出土した。遺物量は平箱で7箱である。9世紀前葉の遺物は、04SI40のカマド周辺から須恵器の有台杯・無台杯がまとまって出土した。これらは胎土・焼成・器形の観察から、4か所の須恵器生産地から持ち込まれた可能性が推測される。

B　土　　器

土器の掲載は、水田側調査区と丘陵側調査区に分け、遺構から出土したものを主体とし、さらに年代ごとにまとめた。遺構から出土した土器は共伴関係を明示するため、遺構単位で示し、遺構番号を併記した。なお、記述は年代ごとに行う。

1）縄文時代（図版20・54）

5点を図示する。いずれも前期後半の諸磯b式に比定する。36・37は半截竹管による爪形文を施している。35は口縁部破片、38・39は胴部破片で、ともに地文にRL縄文を施している。いずれも器種は深鉢で、丘陵側調査区のⅢa層から出土した。

2）古墳時代（第1表、図版18・20・52・54）

古墳時代の遺物はすべて土師器で、須恵器の出土はなかった。遺物が出土した遺構は、水田側調査区の04SX1・2・3、04SD17-1、04P10・12、丘陵側調査区の04SD330、04SK331・358である。な

お編年に関しては「新潟シンポ編年」［日本考古学協会新潟大会実行委員会1993］に準拠する。第Ⅴ・Ⅵ章も同様である。

新潟シンポ	川村編年［川村2000］	漆町編年［田嶋1986］
5期	1段階	5群
6期	2段階	6群
7期	3段階	7群
8期	4段階	8群
9期	5段階	9群
10期	6段階	10群

第1表　古墳時代の編年表

遺構出土の土器（1～8・40～43）

04SX1（1・2）　小型甕・高杯の脚部を図示する。1の器種は小型甕で、器形は平底から緩やかに立ち上がり、わずかに頸部が外反して短く開き、口縁部に至る。口縁端部はナデ調整が施され丸く仕上げられ、口縁部には指圧痕を残す。口縁部内面には横方向のハケメ調整、体部外面には縦方向のハケメ調整が施されている。2は畿内系高杯の脚部で、杯部から直線的に垂下する。内外面ともにナデ調整が施される。1・2とも8～9期に位置づける。

04SX2（3）　3は高杯の杯部で、外面中ほどにやや不鮮明な稜が認められる。外面はナデ調整、内面はハケメ調整・ミガキ調整が施される。時期は8～9期に位置づける。

04SX3（4）　4は甕の口縁部で、断面形は「コ」の字に近い。口縁端部はナデ調整が施され、面をもつ。口縁部の形状等から7～8期に位置づける。

04P10（5）　5は小型壺で、口縁部は「く」の字に屈曲し短く外反する。口縁部はナデ調整が施され、端部に丸みをもつ。外面はハケメ調整が施される。時期は8～9期に位置づける。

04P12（8）　8はラッパ状に開く高杯の脚部である。内外面はナデ調整が施される。時期は8～9期に位置づけておく。

河川跡04SD17-1（6・7）　6・7はともに甕の破片である。6の口縁部はやや肥厚し、内外面にはナデ調整が施される。7は底部からの立ち上がりが緩やかである。内外面にはハケメ調整、外面には指圧痕が見られる。ともに8～9期に位置づけておく。

04SD330（40・41）　40は外反する甕の口縁部片で、内外面ともナデ調整が施される。41も体部から「く」の字に開く甕の口縁部片で、内外面ともナデ調整が施される。40・41とも破片が小さく詳細は不明だが、古墳時代前期の所産である可能性がある。

04SK331（42）　42は甕の底部で、外反しながら緩やかに立ち上がる。外面にはハケメ調整後の指圧痕が見られる。破片が小さく時期の詳細は不明だが、古墳時代の所産と思われる。

04SK358（43）　43は内外面ともナデ調整が施される壺の底部で、平底である。破片が小さく時期の詳細は不明ではあるが、古墳時代の所産と思われる。

包含層出土の土器（9～16）

9は器台で、脚部中央がわずかに膨らむ。受部と脚部は焼成前に穿孔されている。時期は8～9期に位置づける。10は畿内系高杯の脚部で、膨らみはもたず、直線的に垂下する。焼成前に穿孔され、内外面ともにナデ調整が施されている。時期は8～9期に位置づける。11・12は有孔鉢である。11は丸底に近い底部から直線的に開く器形となる。底部の穿孔は外面から施され、底部内面には指圧痕が残る。外面調整は口縁部がナデ調整、体部はハケメ調整である。8～9期に位置づける。12は平底の底部で、穿孔は11同様外面から施されている。内外面ともにナデ調整が施されている。

13～15は甕である。13の口縁部は大きく外反し、体部は球形を呈する。口縁端部内面には不鮮明な凹線が巡る。体部外面はナデ調整、内面はハケメ調整が施されている。14は球形の体部から「く」の字に外反し、口縁に至る。端部はナデ調整が施され、面をもつ。内面の調整は口縁部がハケメ調整、体部がヘラケズリ調整である。15の口縁部は頸部から外反し、端部に面をもち、上方に摘み上げられる。内外

面ともにハケメ調整が施されている。13は9～10期、14・15は7～8期に位置づける。16は大きく外反する壺の口縁部片である。口縁端部はナデ調整が施され、丸く仕上げられる。外面の頸部にはハケメ調整が施されている。時期は8～9期に位置づける。

3）古　　代（第2表、図版19・20・52～54）

古代の土器は9世紀前葉と10世紀前葉の2時期を中心とした土器が出土した。9世紀前葉（Ⅴ1期）に相当する遺構は、水田側調査区の竪穴住居2軒（04SI39・40）、河川跡04SD17-2である。10世紀前葉（Ⅶ1期）に相当する遺構は、丘陵側調査区の掘立柱建物に付随する04SD327の雨落溝である。なお編年については、『新潟県の考古学』の編年［春日1999］に準拠する。第Ⅴ・Ⅵ章も同様である。

遺構出土の土器（17～30・47・48）

04SI39　カマド内や床面からの出土は皆無で、覆土から土師器の杯や甕の破片が20数点出土した。外面にタタキ目の残る破片1点が隣接する04SI40のカマドから出土した29の長胴甕と接合した。

時期	暦年代
Ⅴ1期	9C前葉～中葉
Ⅴ2期	
Ⅵ1期	9C後半～10C初頭
Ⅵ2期	
Ⅵ3期	
Ⅶ1期	10C前葉～11C前葉
Ⅶ2期	
Ⅶ3期	

第2表　古代の編年表

04SI40（17～30）　カマドからは焚き口部に2個体の長胴甕（27・29）がカマドの芯材とした河原石の下から潰れた状態で出土した。カマド周辺の東西1.8m×南北0.7mの範囲には須恵器の有台杯（18～21）・無台杯（22～26）が10点ほど散在していた。北西隅からは杯蓋（17）が出土しており、北側には口縁部と底部の欠損した大甕（30）が頸部を下にして出土した。しかし30は床面から10cm上の位置にあり、04SI40とは時間差をもつ。なお須恵器（17～26・30）については、器形の特徴・調整・胎土等から17～20・30は東頸城郡末野窯跡群産、26は小泊窯跡産、21は阿賀野川以北の窯跡産、22～25は魚沼郡の窯跡産の可能性がある。出土遺物の時期はⅤ1期に比定できる。

17は杯蓋である。扁平な擬宝珠形のつまみを有し、口縁端部は内側に屈曲する。18～21は有台杯で、いずれも底部から直線的に開く器形で、20の口縁部は外反する。底部切り離し技法は、21は回転糸切りで、その他は回転ヘラ切りである。高台は18・20が内端接地、19が外端接地である。22～26は無台杯である。22は底部から内湾ぎみに立ち上がる。26は底部から直線的に開く器形で、他の無台杯に比べ、口径が大きく、器高が低い。23～25は底部から直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。また底部は比較的顕著な上げ底状となる。底部切り離し技法は22・25が回転糸切り、23・24は静止糸切り、26は左回転のヘラ切りである。27～29は土師器の長胴甕である。28の口縁端部は上方へ摘み上げられる。調整は27・28の口縁部はロクロナデ、体部内外面はヘラケズリである。29の口縁部はロクロナデ、体部内外面の上半部はロクロナデである。また体部外面下半部はタタキ目、その内面には当て具痕が残る。なお29は04SI39出土の破片と接合した。30は須恵器の大甕である。口縁部と底部は欠損している。頸部にロクロナデが施され、体部外面には格子目状のタタキ目とカキ目、内面には同心円の当て具痕が残る。なお、体部を外面から叩き割っている。割られた破片に敲打痕が残っており、砕片が接合した。

04SD327（47・48）　47・48の器種は土師器の無台椀で、底部から直線的に開く器形である。48の方が身がやや深い。底部切り離し技法はともに回転糸切りである。いずれもⅦ1期の所産である。

包含層出土の土器（31～34・44～46）

31・32は須恵器の有台杯で、底部から直線的に開く器形である。底部切り離し技法はともに回転ヘラ切り法である。なお32は04SD17覆土3層出土の破片と接合した。33・34は土師器の無台椀で、Ⅶ1

期の所産である。33は底部から直線的に開く器形であるが、34は底部から内湾ぎみに立ち上がる。34はほかの土師器の無台椀と比較して器壁が厚い。底部切り離し技法は、33が風化のため不明、34が回転糸切りである。44～46は須恵器の甕である。44は口径57.8cmを測り、口縁部外面には波状文が施される。V1期の所産である。45・46は体部片である。ともに外面にはタタキ目とカキ目、内面には同心円の当て具痕が残る。

第Ⅴ章　平成17年度調査

1　遺　　構

A　概　　要

平成17年度調査では、上・中・下層の３時期の遺構確認面で遺構を検出した。当初、中層と下層のみの調査であったが、現地表面で上層の遺構（05礎石建物２・05SX1）が確認でき、明らかに中・下層の遺構とは確認面が異なるため、以下では独立して記述を行う。

上層の遺構は、礎石建物１棟、性格不明遺構１基を検出した。これらの遺構は、調査区北側に位置している。所属時期は遺物を伴っていないため不明であるが、地元の方に訊ねたところ、明治頃には調査区周辺に薬師堂があり、雪崩で倒壊した後、別の場所に移設されたということである。

中層の遺構は主にⅣｂ層で、竪穴住居２軒、掘立柱建物１棟、溝２条、土坑２基、ピット27基を検出した。出土遺物から、遺構の多くは８～９期頃（古墳時代前期後半）の所産と考えられる。遺構の分布は、調査区中央部に空白部分があるほかは、ほぼ調査区全域に分布する。特に調査区北側が密集する。

下層の遺構はⅧ層で、掘立柱建物２棟、土坑５基、ピット33基を検出した。出土遺物から、遺構の多くは弥生時代中期後半の所産であると考えられる。遺構の分布は、調査区北側に遺構が集中していた中層の様相とは異なり、掘立柱建物等の主要な遺構は、調査区南側半分に集中している。

なお、土器の編年については、第Ⅳ章2Bを参照していただきたい。

B　記述の方法

記述の方法は平成16年度調査と同様とするが、遺構略称の前には調査年度「05」を付した。その他については、第Ⅳ章1Bを参照していただきたい。

C　遺 構 各 説

1）上層の遺構

礎石建物（図版22・55）

05礎石建物２　9Dに位置し、Ⅲａ層で検出した。05SX1の上に構築されており、05SX1（平坦面）の形成後、本遺構が構築されたことがうかがえる。また、本遺構は05SX1（平坦面）の中心ではなく、やや北東側にずれた位置に建てられている。建物は内陣と外陣で構成されている。外陣は１間（2.90m）×１間（1.82m）で、面積は約5.28m^{2}である。内陣も１間（1.36m）×１間（0.88m）で、規模は外陣の1/2程度である。主軸はＮ－42°－Ｗを指し、南東を向く。礎石に用いられている石材は、頁岩や安山岩、閃緑岩である。特に頁岩は地元では馬糞石と呼ばれている特徴的な石材である。またこれらの石材の多くに、被熱の痕跡が確認できる。形状を見ると、扁平で広い面をもつものや、比較的厚みがあり、いびつな形状のもの等、形態にバラエティーがあり、形状による石材の選択性はうかがい知ることができない。これらの石材は遺跡周辺を流れる平手川や近尾川で採取可能である。

遺構の構築時期については、遺物を伴っていないため正確な時期は不明である。聞き取り調査の結果か

らは、明治頃には存在した薬師堂の可能性があるが、詳細は不明である。

性格不明遺構（図版22・55）

05SX1　9C～9Eに位置し、Ⅲａ層で検出した。東に傾斜する斜面に、Ⅲａ層を整地する形で平坦面を作出している。この平坦面の規模は、長軸12.9m、短軸6.4mを測り、傾斜の関係で東側が開く形態となる。おおよそ方形状に整地され、現地表面からの深さは15～20cm程度であった。遺物を伴っておらず詳細な構築時期は不明であるが、05礎石建物２を構築の際、本遺構を形成したと考えられる。

また、中層の遺構ではあるが、05SX1の丘陵側には05SD30が存在する。05SD30の覆土にはⅢａ層が堆積し、05SX1はそのⅢａ層を整地して構築されている。断面を観察すると（図版26）、05SD30はⅢｂ層を切り土する形で構築され、その後Ⅲａ層が流れ込み埋没しているが、埋没後もある程度の平坦面が残り、その平坦面を利用して、05SX1が構築されたと考えられる。

2）中層の遺構

竪穴住居（図版27・28・56～58）

05SI31　11B、11Cに位置し、Ⅲｂ層で検出した。本遺構の西側には、蟻子山92・93号墳が位置する。南西隅を試掘１トレンチによって切られているが、残存状態から平面形は隅丸方形を呈し、断面形は台形状を呈すると考えられる。規模は長軸5.2m、短軸4.8m、深さ40cmで、Ⅲｂ層を64cmほど掘り込んで構築されている。面積は約25m^{2}である。覆土は３層に分層でき、１・３層が黒褐色土で、２層が暗褐色土である。１層には褐色ローム土がブロック状に含まれている。遺構内には焼土が１か所確認され、長軸60cm、短軸56cmの範囲に広がっている。遺構の中央部やや北よりに位置し、炉跡と考えられる。一方カマドは検出されなかった。また、遺構内で検出された05P40・57は平面形はいずれも円形を呈し、深さもほぼ同じであるため、柱穴として扱った。柱穴の覆土には、05SI31の覆土１・３層と同様の黒褐色土が堆積している。周囲には05SI38と05SD32が位置し、本遺構はこれらを切って構築されている。遺構内の北東隅には、長さ40cmほどの扁平な河原石が床面から16cmほどの高さから検出された。出入り口のステップの可能性が考えられる。

出土遺物は、８～９期（古墳時代前期）の土師器（51～54）やⅥ１～２期（９世紀後半）の土師器（55～64）・須恵器（73）等が混然として出土した。しかし、８～９期の甕（52）が床近くの壁面から出土しているため、本遺構の所属時期を８～９期と考えたい。

05SI38　11B、12Bに位置し、Ⅲｂ層で検出した。本遺構はその大半を05SI31に切られており、全体像が不明であるが、平面形状はおおよそ隅丸方形を呈すると思われる。規模は残存状況から判断して、05SI31よりも大型であったと考えられる。長さ6.4m、深さは40cmほどを測る。断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる。覆土は２層に分層でき、黒色系覆土が堆積する。05P55・56は深さも一定であることから、05SI38に伴う柱穴として扱った。柱穴の覆土は黒色系覆土であり、住居の覆土と一致する。また遺構内からは、壁際に沿って幅16cmほどの周溝を検出したが、カマドは検出されなかった。周辺には05SD32が05SI31・38の周囲を巡るように位置する。しかしこの溝が05SI31に切られる点、05SD32と05SI38の主軸がほぼ一致する点から、05SI38に伴う溝であると考えられる。

遺構内からは７期（古墳時代前期）の高杯（74）が出土しているため、本遺構の所属時期は、05SI31よりも１段階古い７期と考えられる。また、周溝より磨石類（106）が１点出土している。

掘立柱建物（図版29・58・59）

05SB28　9D、9E、10Dに位置し、Ⅳb層で検出した。桁行２間（3.8m）、梁行１間（3.1m）の側柱構造である。柱間寸法は桁行1.8～1.9m、梁行3.1mで、面積は約11.8m^{2}である。主軸はN－40°－Eを指し、等高線に平行するように構築されている。柱穴は６基確認でき、径26～56cm前後の円形から不整形を呈する。深さは26～62cm前後であった。覆土には黒色系覆土・褐色系覆土が堆積するが、下層に褐色系覆土が堆積する傾向にある。周辺にはピットが散在するが、掘立柱建物は確認できない。また、柱穴からは遺物は出土していない。

溝（図版26～28・56・59）

05SD30　8D、9C、9Dに位置し、Ⅲb層・Ⅳb層で検出した。主軸がN－30°－E・N－65°－Wを指し、直角に向きを変えているため、人為的な溝であると考えられる。全長15.4m、幅140cmの比較的大型の溝である。断面形は緩やかな台形状を呈し、深さは26cmを測る。覆土は３層に分層でき、１層黒褐色粘質土と２層暗褐色粘質土の間にⅢa層が堆積する。西側ではⅢb層を、東側ではⅣb層を掘り込む。遺物は出土していない。

05SD32　11B、11C、12Cに位置し、Ⅲb層で検出した。05SI31・38の周囲を巡っている。本遺構が05SI31に切られること、主軸が05SI38と一致することから、05SI38の周囲を巡る溝であると考えられる。規模は全長9.6m、幅64cmで、深さは22cmと比較的浅い。断面形は台形状を呈し、立ち上がりは急斜度である。覆土は単層で、黒色粘質土が堆積している。遺物は出土していない。

土坑（図版29・59）

05SK11　12C7・12に位置し、Ⅲb層で検出した。周辺には05SI31・38等が位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径99cm、短径84cm、深さ21cmを測る。断面形は緩やかな弧状である。覆土は２層に分けられ、１層が暗褐色粘質土で、２層が黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

3）下層の遺構

掘立柱建物（図版34・35・60～62）

05SB100　調査区の南縁である12B、12Cに位置し、Ⅷ層で検出した。桁行４間（6.8m）、梁行１間（3.0m）の側柱構造の建物である。柱間寸法は、桁行1.6～1.7m、梁行3.0mで、面積は20.4m^{2}であった。主軸はN－70°－Wを指し、等高線に直交する形で構築されている。柱穴は８基確認できる。平面形は円形から楕円形を呈し、径は28～80cmほどである。確認面からの深さは20～40cmと一定しないことから、柱を立てた後に整地している可能性が考えられる。覆土は全て黒色系覆土が堆積する。また調査区の南縁に位置していることから、05P63・64に対応する柱穴が調査区外に延びていると推測される。周辺にピットが散在するが、堀立柱建物は確認できない。遺物は05P51から弥生時代中期後半の甕（94）・壺（95）が出土しており、この建物は弥生時代中期後半に属すると考えられる。

05SB102　10D、11Dに位置し、Ⅵb層・Ⅷ層で検出した。関越自動車道の側道に遺構の一部を切られており、本遺構は更に南東側に延びると推測される。残存状況から、桁行１間（1.6～1.9m）、梁行１間（3.0m）以上の側柱構造であると判断できる。主軸はN－60°－Wを指し、柱穴は４基確認できる。柱穴の平面形は円形・楕円形等を呈し、径28～52cmを測る。深さはばらつくが、底面の標高はほぼ同じである。深さがばらつくのは05P95・96（Ⅷ層検出）と05P97・98（Ⅵb層検出）の検出面の違いに起因すると考えられる。覆土はおおむね黒色系覆土であるが、褐色系覆土も確認できる。遺物は05P98から、

弥生時代中期後半の甕（96）が出土している。そのため本遺構は05SB100とほぼ同時期の所産と考えられる。

土坑（図版35・63）

05SK58　11C1・2に位置し、Ⅷ層で検出した。平面形は不整形を呈し、長軸158cm、短軸84cm、深さ32cmを測る。断面形は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層でき、黒褐色粘質土とⅥb層が推積する。遺物は出土していない。

05SK59　11B15に位置し、Ⅷ層で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸82cm、短軸76cm、深さ34cmを測る。断面形は半円状で、やや急斜度に立ち上がる。覆土は3層に分けられ、1・2層が黒褐色粘質土で、3層が黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

05SK68　11B25、11C21、12B5、12C1に位置し、Ⅵa層・Ⅷ層で検出した。平面形は方形に近く、長軸110cm、短軸96cm、深さ26cmを測る。断面形は弧状を呈し、急斜度に立ち上がる。覆土は2層に分層でき、黒色系覆土が堆積する。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の壺（97）・有孔鉢（98）や石皿（117）が出土している。

2　遺　　物

A　概　　要

平成17年度調査で出土した主な遺物は、縄文時代晩期、弥生時代中期後半から後期、古墳時代前期から中期、古代（9世紀・10世紀）の土器や石器である。各層の主体は上層が古代、中層が古墳時代・古代、下層が弥生時代・古墳時代となりそうであるが（第4表）、各層とも前後の時期の遺物を含む。以下では層位ごと、種別ごとに記述する。なお土器の編年については第Ⅳ章2Bを参照していただきたい。

B　石器の分類

不定形石器と磨石類の分類は清水上遺跡での分類［鈴木1996］に準拠する。以下に関連する分類のみ記す。

不定形石器

B1類：片側縁と端部に小型・急角度の連続剥離。スクレイパー。

B2類：底縁に小型・急角度の連続剥離。スクレイパー。

F1類：側縁に中型・小型・急角度の不連続剥離。

J　類：側縁・底縁に使用痕的微細剥離。

磨　石　類

A類：磨痕だけのもの。

G類：敲打痕だけのもの。

C　上層出土土器（図版36・64）

上層の遺物はⅠ・Ⅱ層からの出土で、全て土器である。Ⅰ・Ⅱ層からは縄文時代、古墳時代、古代の土器が出土した。そのうち縄文土器2点を図示した（49・50）。古墳時代の土器は土師器の杯、古代の土器は土師器の椀や須恵器の杯等である（第4表）。

49・50はいずれも縄文土器で、器種は深鉢である。49は口縁部に縄文帯、胴部にはあやくり文が確認できる。晩期後半の所産である。50は撚糸Rが施文される。

D　中層出土遺物

1）土　　器（図版36・37・64・65）

中層からは縄文時代から古代の土器が出土した。そのうち弥生時代から古代の土器を図示した(51～93)。なお、中層出土の縄文時代の土器は粗製の深鉢である（第4表）。

遺構出土の土器（51～75）

05SI31（51～73）　05SI31からは古墳時代前期（51～54）と古代（55～68・73）の土器等が出土した。51～53は甕である。51の体部から「く」の字に屈曲する口縁部はやや長めで、肥厚する。底径は6cmを測る。52の口縁部はやや肥厚し、端部は内側に向かって突出する。体部内面は削られ、器壁はやや薄い。布留系の甕である。53の口縁部は体部から緩やかに外反し、端部に面をもつ。54の器種は器台で、すかしが3か所確認できる。時期は51～54は8～9期に位置づけられる。

55～64は土師器の無台椀である。口縁部の形態には内湾するもの（55～58）と外反するもの（59～61）が確認でき、器壁も比較的薄いもの（55・57～59・61）と厚いもの（56・60）が認められる。また底部の立ち上がりも内湾しながら立ち上がるもの（55～57・59・63・64）と外反しながら立ち上がるもの（58・60・62）が確認できる。65～67は内黒の無台椀である。65の口縁部は内湾し、66の口縁部は外反する。65・66とも丁寧な調整が施される。67は底部から直線的に立ち上がる。68は小甕で、口縁部は外傾した後、短く摘み上げられる。55～67はⅥ1～2期に位置づけられる。65・66の類例は、昭和57・58年度調査SI5・6出土土器に確認できる。68は55～67・73の時期からⅥ期頃に位置づけておく。69～72はタタキ成形の土師器で、72の工具の幅が広いほかは、いずれも幅が狭い。破片が小さく、時期は明確にできない。

73は須恵器の甕で、外面に格子目のタタキ、内面に同心円文の当て具痕を残す。時期は供伴する土器からⅥ1～2期に位置づける。小泊産である。

05SI38（74）　74は高杯で、05SI38の床面から出土した。杯部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、下位にはやや不鮮明な稜が認められる。ハの字に大きく開く脚部にはすかしが3か所設けられる。時期は7期に位置づける。

05P36（75）　05P36は9E7に位置し、試掘調査時に検出された。75の器種は甕で、体部から「く」の字に屈曲する口縁部はやや長めで、底径は4.7cmとやや大きい。時期は8～9期に位置づける。

包含層出土の土器（76～93）

76は縄文時代晩期末から弥生時代の深鉢である。口縁部は無文となり、端部にはLR縄文が施される。胴部には沈線により工字文状の文様が作出される。口縁部と胴部の間には粘土粒を添付し、区画する。77も縄文時代晩期末から弥生時代の深鉢である。口縁端部に粘土粒を添付し、それを起点に沈線を施すことで、工字文状の文様が作出される。78・79は櫛描波状文が施される甕の体部片で、時期は弥生時代中期後半に位置づける。

80・81の器種は壺で、口縁部は大きく外反する。80の口縁端部は面取りされ、内面、外面ともハケメ調整が施される。80は7～8期に、81は8～9期に位置づける。82は内外面とも赤彩される高杯である。83は畿内系高杯の脚部で、外面は赤彩される。82・83ともに8～9期に位置づける。84は甕で、

口縁部は直立ぎみに立ち上がった後、外傾する。古墳時代中期頃に位置づけておく。

85～87は土師器の無台椀である。86の口縁部は外反し、やや肥厚する。88は内黒の無台椀である。85・86はⅥ1～2期の所産である。87・88の時期もⅥ期頃であろうか。89は土師器の小甕とする。口縁部は外反ぎみに開く器形である。時期は明確ではない。90～92は羽釜で、いずれもつばの断面形は三角形である。92の口縁部は外反する。いずれもⅦ期頃の所産である。93は須恵器の長頸瓶で、Ⅴ2期頃の所産であろうか。

2）石　　器（図版38・66）

遺構出土の石器（106）

05SI38（106）　106は磨石類で、全体に磨痕が認められる。A類に分類でき、平坦面が確認できる。

包含層出土の石器（107～116）

107・108は不定形石器である。107は両側縁に連続した剥離痕が認められ、先端部欠損後、表面に剥離を施す。B1類に分類できる。108は裏面両側縁に剥離痕が認められるが、特に右側縁の剥離痕は微細な剥離である。F1類に分類できる。石材はともに流紋岩である。109～112は磨石類で、109はA類、110・111はG類に分類できる。112には使用痕は確認できないが、炭化物が付着することから磨石類とした。113・114は石核である。113は剥片剥離後の剥離面に微細な調整が施される。連続した調整であることから刃部を作出した可能性がある。115は扁平片刃石斧である。法量は長さ7.4cm、幅5.85cm、厚さ1.45cmを測り、刃部は直線的である。石材はハンレイ岩である。116は頁岩の砥石で、下端のみ遺存する。

E　下層出土遺物

1）土　　器（図版37・65）

下層からは縄文時代から古墳時代の土器が出土した（94～104・第4表）。

遺構出土の土器（94～98）

05SB100（94・95）　柱穴の1基（05P51）から弥生時代中期後半の土器が出土した（94・95）。94の器種は甕で、口縁端部にはLR縄文が施文される。体部には櫛描きによる縦位の羽状文が施される。95の口縁端部にもLR縄文が施文され、肥厚する。頸部にはハケメ調整が施される。器種は壺である。

05SB102（96）　柱穴の1基（05P98）から弥生時代中期後半の土器が出土した（96）。96は櫛描文が施される甕の体部片である。

05SK68（97・98）　97は壺の体部片で、外面にはハケメ調整、ミガキ調整が施される。98は有孔鉢で、調整は内外面ともハケメ調整である。97・98とも弥生時代後期から古墳時代前期に位置づける。

包含層出土の土器（99～104）

99～101はあやくり文が施される深鉢で、縄文時代晩期後半の所産である。102は櫛描波状文が施される甕の体部片である。103も櫛描波状文が施されるが、器種は甕としておく。口縁端部には刻み目が確認できるが、磨耗しており、縄文の可能性もある。ともに弥生時代中期後半の所産である。104は高杯の脚部で、内湾しながら開く。すかしは4か所設けられる。古墳時代中期前半頃の所産であろう。

2）石　　器（図版38・66）

遺構出土の石器（117）

05SK68（117）　117は石皿で、磨痕が認められる。石材は多孔質安山岩である。

包含層出土の石器（118～122）

118は二側縁加工のナイフ形石器で、胴部がやや張り、基部が尖る。石材は黒曜石である。119～121は不定形石器である。119は底縁に連続した剥離痕が認められ、B2類に分類できる。石材は安山岩である。120・121は側縁に微細な剥離痕が確認できる。ともにJ類に分類でき、石材は頁岩である。122は明確な使用痕は認められないが、炭化物が付着する。磨石類に分類する。

F　試掘トレンチ出土土器（図版37・65）

試掘18トレンチ出土土器を1点図示する（105）。105の器種は高杯で、磨耗してやや不鮮明なものの、口縁部に2か所小突起が確認できる。弥生時代後期に位置づける。

3　金屋遺跡における層序対比

A　はじめに

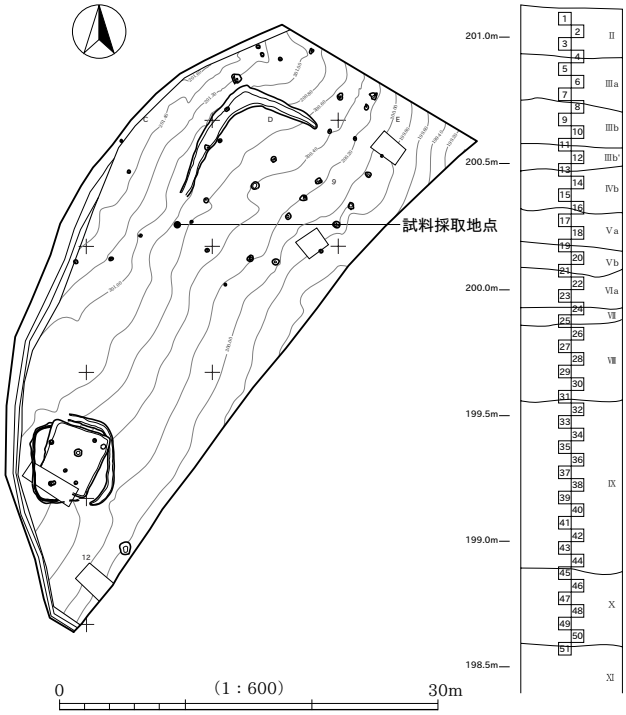
新潟県南魚沼市金屋遺跡は、魚野川低地の左岸に位置する丘陵である蟻子山の東側裾部に位置する。遺跡のすぐ南側には魚野川の支流である平手・近尾川が流れており、その両岸には魚沼丘陵の東縁部に相当する丘陵が広がっている。この地域は、上ノ原地域とよばれており、その地形・地質については、渡辺・荒川による記載がある［渡辺・荒川1981］。蟻子山は、その記載からははずれているが、その標高や地形および位置関係から、おそらく更新世中期の砂礫層である小栗山層によって構成されている丘陵であると考えられ、遺跡の載る裾部の平坦面は、更新世後期に形成された扇状地堆積物とされている、野瀬ヶ原層に対比される地層によって構成されている段丘と考えられる。

今回の金屋遺跡の発掘調査では、主に弥生～古墳時代および平安時代の遺構・遺物が検出されているが、縄文土器や旧石器等も出土している。これらの遺物包含層は、褐色および暗褐色～黒色を呈する火山灰土（いわゆるローム）と黒ボク土から構成されている。今回の調査区で作成された土層断面では、段丘構成層と考えられる礫層の上位に厚さ約1.5mのローム層と厚さ約1mの黒ボク土層が確認されているが、黒ボク土層の中～下部には厚さ約50cmの礫を含んだ褐色のローム層が狭在する。発掘調査所見では、この層位について、段丘背後の蟻子山の崩落土で、この層位から出土する縄文土器等は、丘陵上にあった遺物が崩落により巻き込まれたものである可能性があるとしている。

今回の分析調査では、調査区内で作成された土層断面を対象として、重鉱物分析および指標テフラに由来する火山ガラスの産状を明らかにすることにより、金屋遺跡における層序の対比を行う。重鉱物分析は、信濃川流域および魚野川流域に分布するローム層の対比手法として、これまでに多くの調査例があり、有効な手段となっている。また、今回調査対象とした断面では、火山ガラスからなるテフラであるAT（後述）およびAs-K（後述）の検出が予想されることから、それぞれのテフラに由来する火山ガラスの産状も重要な対比指標になると考えられるのである。同時に、重鉱物組成や火山ガラスの産状は、上述した崩落土と考えられている層位の検証材料にもなり得ることから、崩落土の由来等についても検討を行う。

B　試　　料（第7図）

試料は、05SX1セクション（A－A'）より採取された。作成された断面は、厚さ約2.5mの土壌断面であり、最下部には礫層の最上部が確認されている。発掘調査所見により、上位よりⅡ・Ⅲa・Ⅲb・Ⅲb'・Ⅳb・Ⅴa・Ⅴb・Ⅵa・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・ⅩⅠの各層までの分層がなされている。



第7図　分析試料採取位置と層序

Ⅱ層からⅢb層までは厚さ約50cmの黒ボク土層に相当し、Ⅳb・Ⅴa・Ⅴb層は礫を含んだローム層（Ⅴa層はやや暗色を帯びる）、Ⅲb'層はⅢb層からⅣb層への漸移層である。Ⅲb'層からⅤb層までは厚さ約50cmである。Ⅴb層の下位のⅥa層は黒ボク土層であり、Ⅶ層は黒ボク土層からローム層への漸移層となり、両層合わせて厚さは20cmほどである。Ⅷ層からⅩ層までは厚さ1.3mほどの褐色の均質なローム層である。

この層位のローム層は全体的に砂質であるが、その中でⅨ層は、上下の層位にくらべるとやや粘土分が多く感じられる。ⅩⅠ層は、礫層の最上部である。分析用の試料は、Ⅱ層上部からⅩ層下底まで、厚さ5cmで連続に51点が採取された。試料には、上位より試料番号1～51が付されている。なお、上述の層序および各試料の採取層位は、分析結果を示した第8図に柱状図にして示す。本分析では、全51点について重鉱物分析および火山ガラス比分析を行った。

C　分析方法

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm－1/8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

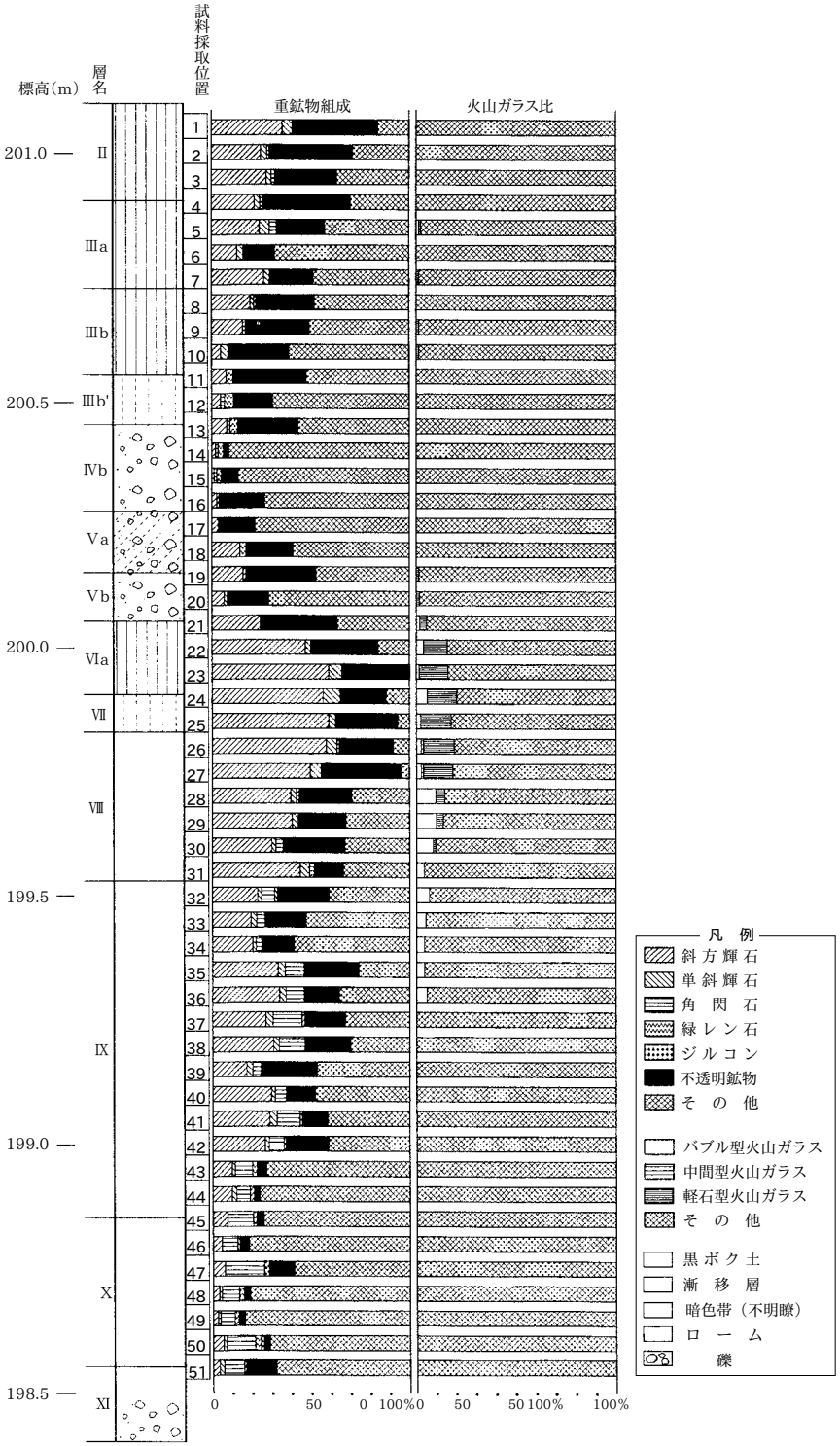
火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ザクロ石	電気石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	89	13	2	2	0	0	0	0	108	36	250	0	0	0	250	250
2	62	8	3	0	1	0	0	0	105	71	250	1	0	0	249	250
3	69	6	5	0	0	0	0	0	78	92	250	0	0	1	249	250
4	54	7	3	0	1	0	0	0	111	74	250	0	0	1	249	250
5	60	13	9	0	0	0	0	0	60	108	250	3	0	3	244	250
6	32	8	2	0	0	0	0	0	39	169	250	1	0	2	247	250
7	66	7	2	0	1	0	0	0	55	119	250	0	0	3	247	250
8	49	4	2	0	3	0	0	1	74	117	250	1	0	2	247	250
9	39	2	4	0	1	0	0	0	80	124	250	0	0	3	247	250
10	11	10	0	0	2	0	0	0	76	151	250	0	1	3	246	250
11	18	2	2	0	9	0	0	1	92	126	250	1	0	1	248	250
12	11	2	5	0	12	0	0	2	48	170	250	0	0	0	250	250
13	19	2	4	0	10	0	0	0	76	139	250	0	0	0	250	250
14	5	1	3	0	6	0	0	0	7	228	250	0	0	1	249	250
15	3	1	3	0	6	0	0	1	21	215	250	0	0	0	250	250
16	6	1	1	0	3	0	0	0	57	182	250	1	0	0	249	250
17	8	2	1	0	2	0	0	0	46	191	250	1	0	2	247	250
18	35	2	2	0	8	0	0	0	59	144	250	2	0	0	248	250
19	39	2	1	0	4	0	0	0	88	116	250	0	0	3	247	250
20	15	4	2	0	0	0	0	1	52	176	250	1	1	4	244	250
21	61	2	1	0	0	0	0	0	97	89	250	4	0	9	237	250
22	118	7	0	0	0	0	0	0	85	40	250	9	1	30	210	250
23	147	17	0	0	0	0	0	0	85	1	250	3	2	37	208	250
24	140	22	0	0	0	0	0	0	58	30	250	14	1	37	198	250
25	147	9	0	0	0	0	0	0	79	15	250	5	2	39	204	250
26	144	14	3	0	0	0	0	0	68	21	250	6	3	39	202	250
27	124	14	1	0	0	0	0	0	101	10	250	6	3	37	204	250
28	99	7	4	0	0	0	0	0	66	74	250	24	2	12	212	250
29	101	8	2	0	2	0	0	0	60	77	250	25	1	9	215	250
30	75	5	9	0	1	0	0	1	78	81	250	21	0	3	226	250
31	111	12	6	0	0	0	0	1	37	83	250	10	0	0	240	250
32	57	5	16	0	4	0	0	0	65	103	250	16	0	2	232	250
33	49	7	10	2	2	0	0	0	52	128	250	12	0	0	238	250
34	51	4	7	0	0	1	0	0	41	146	250	10	0	0	240	250
35	83	9	24	0	0	0	0	0	69	65	250	10	0	0	240	250
36	85	8	23	0	2	0	0	0	44	88	250	13	0	0	237	250
37	67	9	37	0	4	0	0	0	51	82	250	2	0	0	248	250
38	77	7	33	0	1	0	0	0	57	75	250	0	0	0	250	250
39	43	8	10	0	2	0	0	0	71	116	250	2	1	0	247	250
40	74	5	14	0	0	0	0	1	36	120	250	0	0	0	250	250
41	72	9	29	0	3	0	0	2	32	103	250	2	2	0	246	250
42	66	5	19	1	3	0	0	1	53	102	250	0	1	0	249	250
43	24	4	22	0	6	0	0	0	11	183	250	0	0	0	250	250
44	24	6	17	1	5	0	0	0	7	190	250	0	0	0	250	250
45	18	2	33	0	4	0	0	0	9	184	250	0	2	0	248	250
46	11	2	20	0	3	0	0	1	11	202	250	0	0	0	250	250
47	15	2	50	1	6	0	1	0	32	143	250	0	0	0	250	250
48	8	3	22	0	6	0	0	1	8	202	250	0	0	0	250	250
49	6	3	18	0	5	0	0	1	8	209	250	1	0	0	249	250
50	13	4	36	1	7	0	0	4	8	177	250	0	0	0	250	250
51	8	6	25	0	3	0	0	0	38	170	250	0	0	0	250	250

第３表　重鉱物・火山ガラス比分析結果

D 結　　果

結果を第３表、第８図に示す。重鉱物組成は、斜方輝石、不透明鉱物、「その他」とした粒子のいずれかを主体とし、他に少量または微量の単斜輝石、角閃石、緑レン石等の鉱物が含まれるという組成であり、それら各鉱物の量比は層位によって異なっている。なお、「その他」とした粒子は、その外観から、風化



第８図　重鉱物組成および火山ガラス比

変質等により表面を酸化鉄で覆われた鉱物粒であると考えられる。以下に、下位より重鉱物組成の層位的な特徴を述べる。

Ⅹ層（試料番号51～45）：「その他」が全体的に多く約70％を占めるが、それを除くと角閃石が最も多く、少量の斜方輝石と不透明鉱物および微量の単斜輝石と緑レン石を伴う。

Ⅸ層：試料番号43・44の最下部、試料番号39～42の下部、試料番号35～38の中部、試料番号32～34の上部に分けられる。最下部は「その他」が多く、70％を超えるが、それを除くと斜方輝石と角閃石がともに少量であるが、ほぼ同量程度であり、他に単斜輝石、緑レン石、不透明鉱物が微量含まれる。下部も「その他」が最も多いが、その量比は40～50％程度となる。それを除くと斜方輝石が最も多く、角閃石と不透明鉱物は少量、単斜輝石は微量である。緑レン石は極めて微量である。中部では、「その他」は30％程度となり、斜方輝石もこれと同量程度となる。これに斜方輝石よりやや少量の不透明鉱物とさらに少量の角閃石および微量の単斜輝石が伴われる。上部は、「その他」が50～60％で最も多く、それを除くと斜方輝石と不透明鉱物が同量程度で多く、少量の角閃石と微量の単斜輝石を含むという組成である。

Ⅵａ層・Ⅶ層・Ⅷ層：試料番号28～31のⅧ層中～下部、試料番号23～27のⅥａ層下部～Ⅷ層上部、試料番号21・22のⅥａ層上部に分けられる。Ⅷ層中～下部は、斜方輝石が40％程度あり、最も多く、「その他」は30％程度である。不透明鉱物は「その他」より若干少ない20％ほどであり、他に微量の斜方輝石と角閃石が含まれる。Ⅵａ層下部～Ⅷ層上部は、今回分析した層位の中で斜方輝石の量比が最も高く、約60％を占める。これに次いで不透明鉱物が約20％を占め、単斜輝石と「その他」は少量伴われるが、角閃石はほとんど含まれない。Ⅵａ層上部は、下記のⅤｂ層への漸移的な組成を示す層位である。

Ⅳｂ層・Ⅴａ層・Ⅴｂ層：Ⅴｂ層（試料番号20）とⅤａ層上部（試料番号17）およびⅣｂ層下部（試料番号16）は、いずれも「その他」が70％前後を占めており、それを除くと不透明鉱物が20％程度あり、斜方輝石は少量～微量である。Ⅴａ層下部（試料番号18・19）は、「その他」が50～60％であり、それを除くと不透明鉱物20～30％で若干多く、これよりやや少量の斜方輝石と微量の緑レン石を伴う組成である。Ⅳｂ層中部および上部（試料番号14・15）は、今回分析した層位の中で最も「その他」の量比が多く、80～90％を占める。他に斜方輝石、角閃石、緑レン石、不透明鉱物が微量含まれる。

Ⅲｂ'層（試料番号11～13）：「その他」が最も多く、50～70％を占めるが、それを除くと不透明鉱物が多い。他に少量の斜方輝石と微量の角閃石および緑レン石を含む。

Ⅱ層・Ⅲａ層・Ⅲｂ層：Ⅲｂ層下部（試料番号10）では、「その他」と不透明鉱物および斜方輝石の量比はそれぞれ下位のⅢｂ'層と同程度であるが、緑レン石が極めて微量しか含まれず、代わりに単斜輝石が微量含まれることで区別される。Ⅲｂ層中部（試料番号9）からⅢａ層下部（試料番号7）においては、「その他」は40％前後であるが、斜方輝石が上位ほど多くなり、不透明鉱物がその逆の傾向を示す。この層位では、斜方輝石と不透明鉱物以外の鉱物は極めて微量である。Ⅲａ層中部からⅡ層（試料番号6～1）では、「その他」が上位に向かって減少する傾向が認められる。「その他」を除くと、斜方輝石と不透明鉱物がほぼ同量程度で多く、微量の単斜輝石と角閃石を伴う組成である。

火山ガラス比分析では、Ⅸ層上部（試料番号36）からⅥａ層上部（試料番号22）までの広い層位にわたって、バブル型火山ガラスが少量ふくまれ、Ⅷ層上部（試料番号27）からⅥａ層上部（試料番号22）の層位に軽石型火山ガラスの比較的顕著な濃集が認められる。これ以外の層位には、火山ガラスはほとんど含まれない。

E 考　　察

1）指標テフラの対比

今回の分析結果において、最も有効な層序対比の指標は、Ⅷ層上部からⅥa層上部にかけて認められた軽石型火山ガラスの濃集である。この火山ガラスは、信濃川流域におけるテフラの分布とローム層最上部という層位およびその形態から、浅間草津テフラ［As-K、町田・新井2003］に由来する可能性が高い。As-Kは、関東地方北西部の指標テフラである浅間板鼻黄色テフラ［As-YP、新井1962］と同一噴火輪廻のテフラであるとされていることから、その噴出年代については、放射性炭素年代では1.3～1.4万年前［町田・新井1992］、層位学的な年代も加味した暦年では1.5～1.6万年前としてよい。今回の分析結果では、As-Kの火山ガラスは、濃集層準が比較的明瞭ではあるが、上述した層位に一様に拡散している。このように土壌中に特定テフラが混交して産出する場合は、テフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致するという早津の例［早津1988］に従い、降灰層準を推定することが多い。これに従えば、金屋遺跡におけるAs-Kの降灰層準は、試料番号27付近のⅧ層上部に想定される。

一方、Ⅸ層上部からⅥa層上部までの広い層位にわたって拡散するバブル型火山ガラスは、As-Kとの層位関係と信濃川流域におけるテフラの分布およびその形態から、鹿児島湾北部の姶良カルデラを給源とする姶良Tn火山灰［AT、町田・新井1976］に由来すると考えられる。ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか1987・村山ほか1993・池田ほか1995・宮入ほか2001等）から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている［町田・新井2003］。町田・新井［町田・新井2003］は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。今回の断面におけるATの火山ガラスはⅧ層中部付近に若干濃集する傾向があるように見えるが、上述したAs-Kとの層位および年代関係を考慮すると、ATの降灰層準はⅧ層中部よりも下位にあると考えられる。上述した早津の例に従えば、濃集層準の下限を探すことになるが、ここで、試料番号36をみると、量比は少量とはいえ、そのバブル型火山ガラスの出現は、試料番号37に比べれば顕著であるといえる。したがって、金屋遺跡におけるATの降灰層準は、試料番号36付近のⅨ層上部である可能性がある。

上述した2枚のテフラの降灰層準から、Ⅸ層中部以下は2.6～2.9万年前以前、Ⅸ層上部からⅧ層中部は2.6～2.9万年前以降1.5～1.6万年前以前、Ⅷ層上部以上は1.5～1.6万年前以降の年代がそれぞれ与えられる。

2）周辺地域のローム層との対比

信濃川流域のローム層については、新潟火山灰グループ［新潟火山灰グループ1981・1995］をはじめとする分析例が多数あり、また、金屋遺跡周辺におけるローム層の分析例は、荒川・渡辺［荒川・渡辺1981］等にみることができる。ここでは、これらの分析例との比較から、金屋遺跡のローム層の対比を検討する。

上述の荒川・渡辺［荒川・渡辺1981］には、金屋遺跡から西南方にある桝形山溶岩上のローム層およ

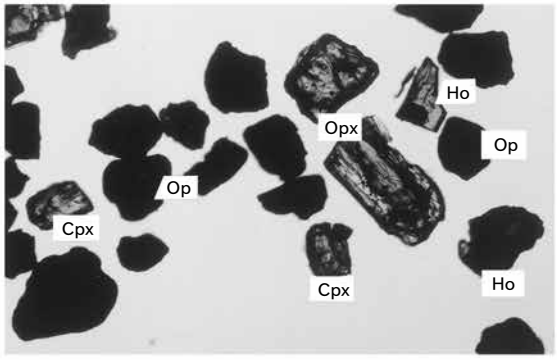
び遺跡からは、魚野川沿いに上流に位置する旧塩沢町五十嵐における飯士山火砕流上のローム層の分析例が記載されている。前者の分析例からは、「上ノ原ローム層」の層序が呈示され、後者の分析例では「魚野川ローム層」の層序が呈示されている。金屋遺跡のローム層であるⅧ層からⅩ層までの層位は、上述した指標テフラの層位から、上ノ原ローム層の上部層（U・U層）および魚野川ローム層の上部Ⅲ層に対比されることは確実である。さらに、U・U層は下部のU・U1層と上部のU・U2層に細分されているが、各層の特徴の一つとして、U・U1層では角閃石が多く、U・U2層では斜方輝石が多いという重鉱物組成があげられる。この特徴は、魚野川ローム層の上部Ⅲ層においても、その上半部と下半部とに認められている。今回の重鉱物分析では、全体的に「その他」の量比が多いために、斜方輝石と角閃石の相対関係が分かり難くなっているが、「その他」を除いてみると、Ⅸ層最下部で斜方輝石と角閃石がほぼ同量となり、Ⅹ層では斜方輝石よりも角閃石の方が多いことが読み取れる。したがって、金屋遺跡のⅨ層およびⅧ層は上ノ原ローム層のU・U2層および魚野川ローム層上部Ⅲ層の上半部に対比され、Ⅹ層は上ノ原ローム層のU・U1層および魚野川ローム層上部Ⅲ層の下半部に対比されると考えられる。

一方、新潟火山灰グループ［新潟火山灰グループ1995］に呈示された信濃川ローム層との対比では、上述した２枚の指標テフラの層位から、金屋遺跡のⅧ層は貝坂ローム層のKE層に、その下位のⅨ層は貝坂ローム層のKD層にそれぞれ対比される。さらに上述した重鉱物組成の特徴から、金屋遺跡のⅩ層は、貝坂ローム層のKC層に対比されると考えられる。なお、新潟火山灰グループ［新潟火山灰グループ1995］では、黒ボク土層をKF層としていることから、金屋遺跡のⅥa層およびⅦ層はKF層の下部に対比されるとしてよい。

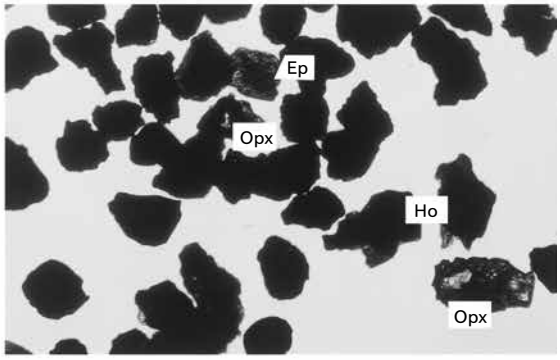
3）崩落土について

金屋遺跡の黒ボク土層中部に狭在するⅣb・Ⅴa・Ⅴbの各層は、礫を多量に含むことと褐色を呈するロームにより構成されていることから、発掘調査所見では、背後の丘陵斜面から崩落し再堆積した土壌であるとされた。重鉱物組成を、その上位および下位の黒ボク土層と比較すると、「その他」および斜方輝石の量比において明瞭な違いが認められる。この結果からも、Ⅳb・Ⅴa・Ⅴbの各層と上下の黒ボク土層との不連続性が指摘できる。また、Ⅳb・Ⅴa・Ⅴbの各層の重鉱物組成は、下位のローム層であるⅧ～Ⅹ層のいずれとも類似せず、さらに、「その他」が多いことは、より風化・変質の進行した古いローム層に由来することを示唆している可能性がある。これらのことから、Ⅳb・Ⅴa・Ⅴbの各層を構成しているロームは、丘陵上のローム層でも上位のローム層ではなく、より下位のローム層、例えば上ノ原ローム層の中部層（U・M層）に由来する可能性がある。

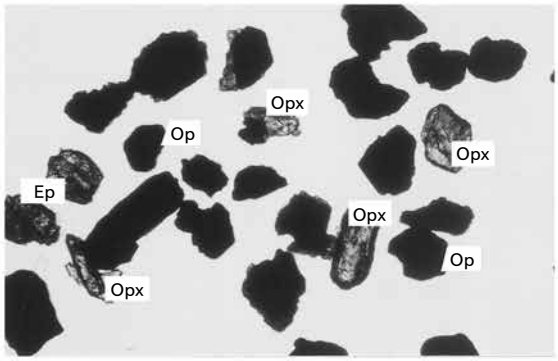
なお、Ⅳb・Ⅴa・Ⅴbの各層の堆積した年代については、今回の分析結果からは、それを具体的に示す指標（例えば約7300年前に噴出したとされる鬼界アカホヤ火山灰［K-Ah、町田・新井1978・2003等］）が得られなかったため、詳細にはわからない。今後、金屋遺跡周辺域において、分析例を蓄積した上でさらに検討することがのぞまれる。



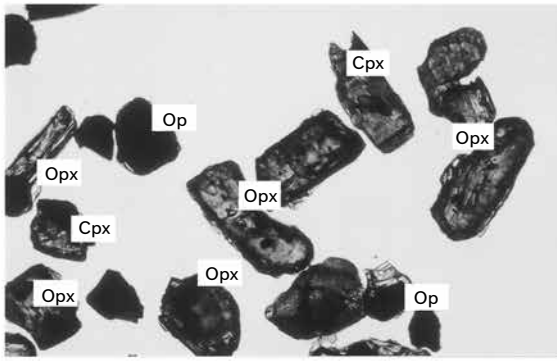
1．重鉱物（試料番号5）



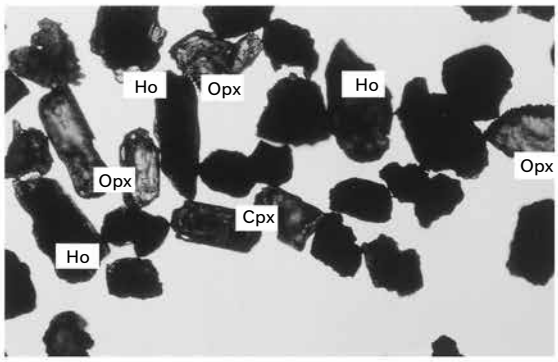
2．重鉱物（試料番号14）



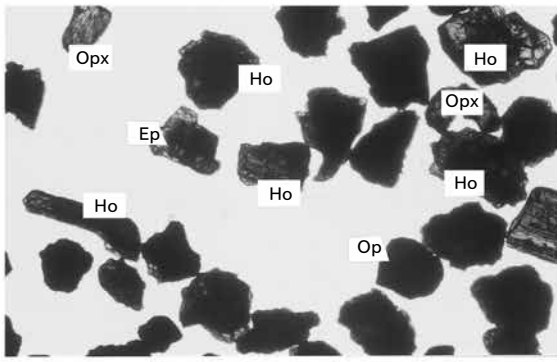
3．重鉱物（試料番号18）



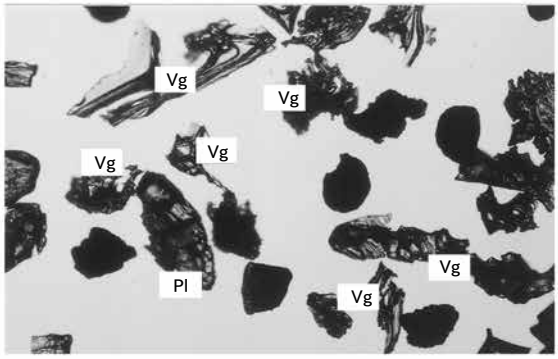
4．重鉱物（試料番号27）



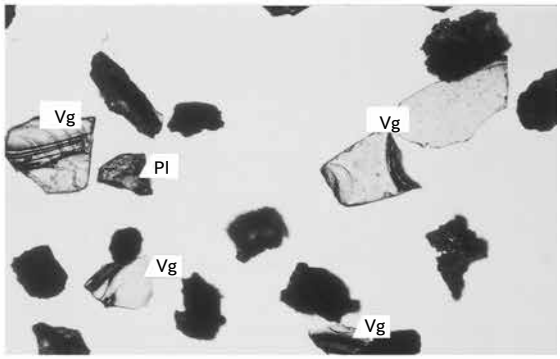
5．重鉱物（試料番号37）



6．重鉱物（試料番号47）



7．火山ガラス（試料番号27）



8．火山ガラス（試料番号36）

Pl：斜長石　Opx：斜方輝石　Cpx：単方輝石　Ho：角閃石　Ep：緑レン石
Op：不透明鉱物　Vg：火山ガラス

0.5mm

第９図　重鉱物・火山ガラス

第Ⅵ章　ま　と　め

平成16・17年度の発掘調査では、竪穴住居・掘立柱建物・礎石建物・溝・性格不明遺構・土坑・ピット等の遺構と、平箱で20箱ほどの遺物が出土した。遺構や遺物から本調査区では縄文時代、弥生時代中期後半、古墳時代前期後半、古代（9世紀～10世紀前葉）の4時期が重複していることが確認できた。以下、各時期の遺構と遺物について述べる。

1　遺構の時期的変遷

今回の調査で、弥生時代中期後半、古墳時代前期後半、古代の9世紀前葉期・10世紀前葉期の4つの時期の遺構を検出した。なお、9世紀後半の遺構は検出できなかったため、以下ではこの4時期の遺構について概観し、本遺跡における遺構の変遷について述べる。また、金屋遺跡は昭和57・58年度にも本発掘調査が行われている［北村ほか1985］。ここでは平成16・17年度調査で検出した遺構とともに、昭和57・58年度の調査成果についても適宜触れることにする。

		縄文時代	弥生時代			古墳時代						古代						
		縄文土器	弥生土器			土師器						土師器			須恵器			
		深鉢	甕	壺	高杯	甕	壺	鉢	杯	高杯	器台	甕	内黒椀	椀	甕	横瓶	杯	蓋
水田側調査区	04SI40											36					163	38
	04SD17					6				5								
	04P10						25											
	04SX1					19												
	04SX2									5								
	04SX3					3								2				
	04SX13							4										
	Ⅳa													2				
	Ⅴ					44	5	5		3	2			7			5	
	Ⅵa					96	5	12		10	8		2	30				
	Ⅶ																2	
	暗渠北西					15					6							
丘陵側調査区	04SD327									2				31				
	04SD330					6	2											
	04SK331										1							
	04SK358								5									
	05SI31		2			81	12			6		11	17	186	4			
	05SI38					4				11			2	37				
	05SK68													10				
	05P36					27												
	05P51		11	23														
	05P66	2																
	Ⅰ	2							2				2	4				
	Ⅱ													6			4	
	Ⅲa	12				32	27	15	7	7		14	2	183	4		4	
	Ⅲb						13							11				
	Ⅵa	4	5			4												
	不明													1				

第4表　出土土器の器種組成（口縁部残存率　　／36）

A　弥生時代中期後半（第10図）

平成17年度調査区Ⅷ層検出の遺構が該当する。遺構は丘陵側調査区南側の丘陵部斜面に比較的多く立地し、掘立柱建物の周辺に散在する傾向が認められる。掘立柱建物は2棟検出された。いずれも主軸は北西－南東を向き、丘陵の傾斜に直交する。05SB28の主軸が丘陵の傾斜に平行するのと対照的である。05SB102は東側を側道で削られており、柱穴は4基しか検出されなかったが、長軸方向の柱穴底面の標高は一定している。一方、05SB100の長軸方向の柱穴底面の標高は一定せず、上屋を建てた後整地した可能性がある。建物の規模については、05SB100を4間×1間の建物とすると約20.4m^{2}の面積となる。梁間は05SB100・102とも1間、柱間距離は約3.0mで、ほぼ同規模・同規格の建物である可能性が考えられる。なお竪穴住居は検出されず、集落の様相は確認できなかった。

また、弥生中期後半から古墳前期の間に蟻子山からの崩落土と考えられるⅣb層が堆積し、その後古墳時代前期（8～10期）の遺構が構築される。

B　古墳時代前期後半

1）平成16・17年度調査（第11図）

水田側・丘陵側の両調査区において、古墳時代前期後半（8～10期中心）に属する遺構を検出できた。水田側調査区では04SX1～3、04SD17-1・116、04P10・12・19を検出した。遺構の分布を見ると、そのほとんどが蟻子山麓に近い調査区北側に位置している。この時期にはすでに、近尾川の支流と考えられる04SD17が存在していた。また丘陵側調査区では、05SI31・38、04SK331・358、04SD330、05SD32等を検出した。これらの遺構は、全て丘陵部斜面に構築されている。このほかでは、平成17年度調査区Ⅳb層検出の遺構が該当するが、その多くが遺物の出土していない遺構で、他時期の遺構も含まれる可能性も残る。

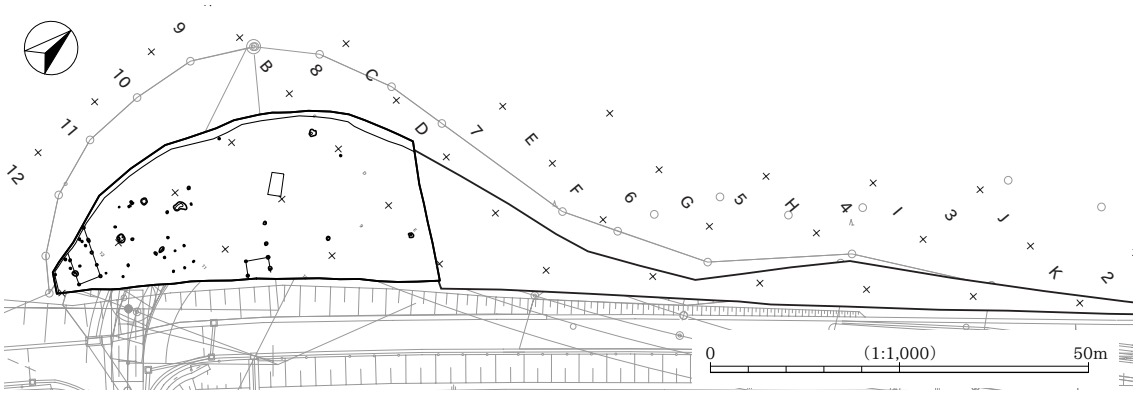
竪穴住居は2軒重複して検出された（05SI31・38）ため1軒のみでしか詳細を語ることはできないが、残存状況から2軒は似たような規模と考えられ、面積は約25m^{2}となる。05SI31はやや北よりに焼土が認められ、柱穴の配列は整然としない。また北東のコーナーに扁平な河原石が置かれ、出入り口のステップの可能性が考えられる。05SI31・05SI38の北側から東側にかけては、05SD32が位置する。

2）昭和57・58年度調査

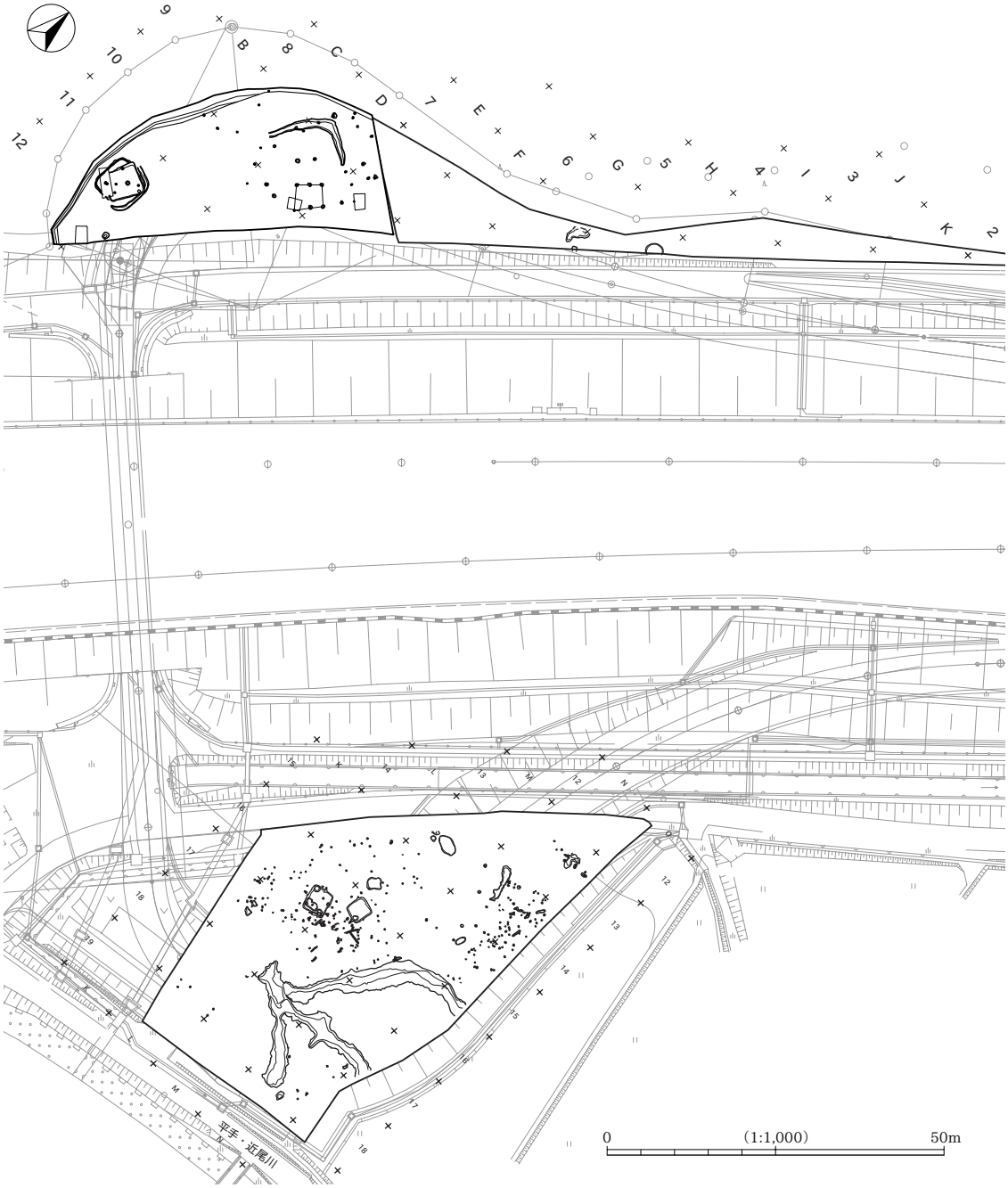
古墳時代の遺構・遺物では前期末の住居（SI12・13）と中期末～後期の遺物が検出されている［北村ほか1985・橋本1998］。SI12出土土器は報告書では中期に位置づけられているが［北村ほか1985］、漆町編年10群（新潟シンポ編年10期）に併行することが指摘されている［品田1992］。SI12等前期末の遺構は、旧河川によって形成された洪水堆積層よりも下で検出され、覆土の観察から旧河川の氾濫により埋没したと考えられる。

竪穴住居は2軒とも不整形な隅丸方形を呈し、面積はそれぞれ27m^2（SI12）と11m^2（SI13）であった。SI12の床面には炭化物の集中が認められ、主柱穴が3本検出された。SI13では炉が検出されたが、柱穴は確認できない。

このように古墳時代の金屋遺跡では、平成16・17年度調査と昭和57・58年度調査において遺構が検出され、古墳時代前期を中心に丘陵部斜面地と蟻子山麓付近の扇状地の双方に遺構が立地していること



第10図　弥生時代中期後半の遺構



第11図　古墳時代前期後半の遺構

が分かる。竪穴住居の面積については、昭和57・58年度調査の小型の１軒（SI13）を除き、近似した値を示している。

C　古　　代

平成16・17年度調査では、Ⅴ１期（9世紀前葉）とⅦ１期（10世紀前葉）の２時期の遺構を検出した。

1）平成16・17年度調査（第12図）

Ⅴ１期の遺構は、水田側調査区において04SI39・40、04SD11、04SD17-2、04P13・22・37・38・217・221・236を検出したが、丘陵側調査区では本期の遺構は検出できなかった。当該期の遺構は、蟻子山麓よりもやや下がった扇状地に立地し、水田側調査区のほぼ中央に分布の中心がある。また、竪穴住居は04SD17の周辺から２軒検出した（04SI39・40）。面積は９～14m^{2}の範囲内にあり、２軒とも隅丸方形を呈している。また、カマドは遺構内の南壁に構築されている。Ⅶ１期の遺構は丘陵側調査区の04SB1のみで、丘陵部斜面に立地している。

2）昭和57・58年度調査

竪穴住居９軒、掘立柱建物６棟、柵５列、溝13条、土坑30基、性格不明遺構３基、ピット多数が当該期の遺構にあたり、出土遺物からⅤ～Ⅷ期（９世紀前葉～11世紀前葉）に該当する。遺構の分布には時期的な違いは見られず、蟻子山麓から旧河川にかけての扇状地に立地している。

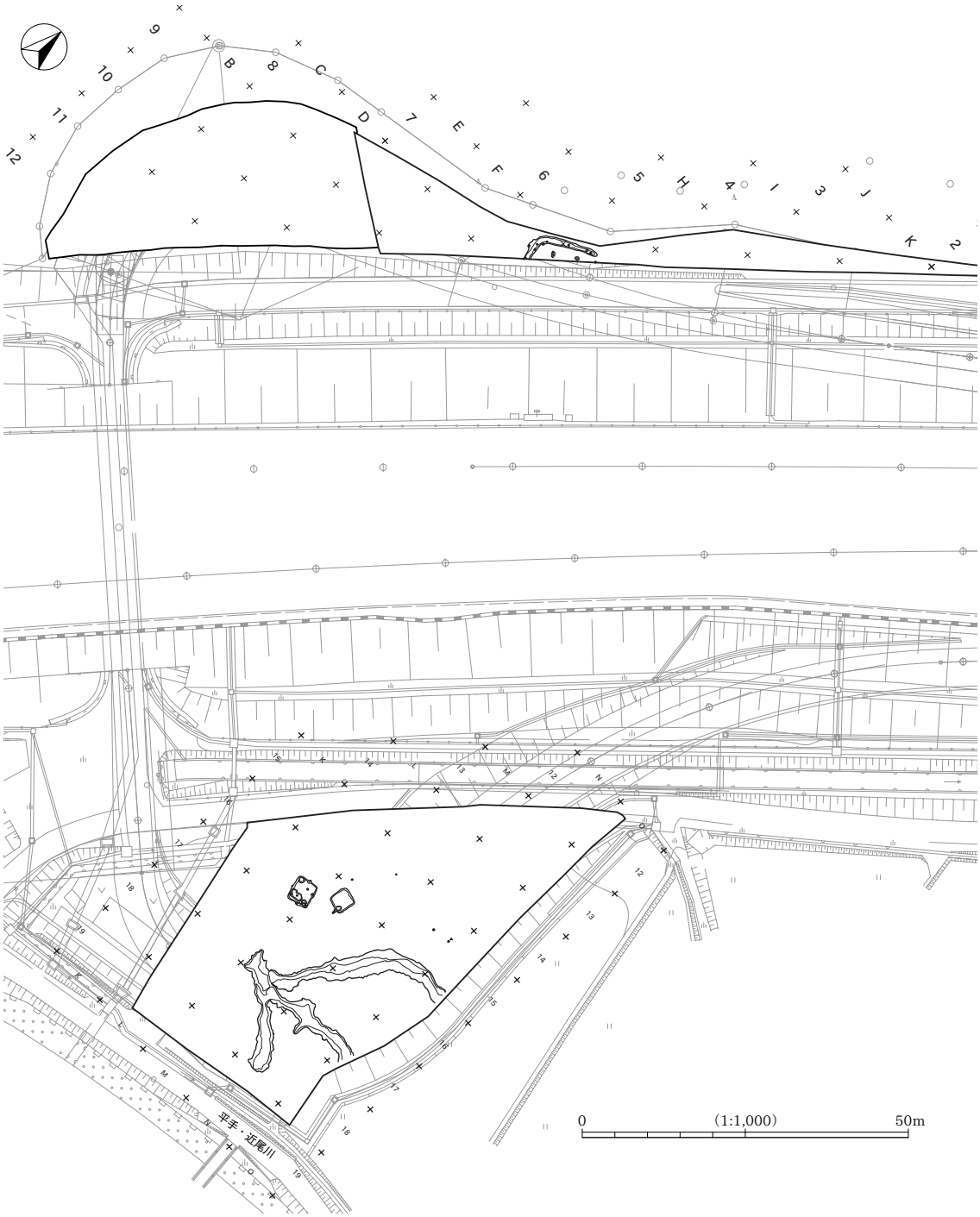
時期の判別できる竪穴住居は、Ⅴ２期（9世紀中葉）が１軒（SI2）、Ⅵ１～２期（9世紀後半）が２軒（SI5・6）である［春日1999］。平面形はやや不整形を呈するものが多く、その他正方形や長方形を呈するものも存在する。面積は約15～20m^{2}までの大型のものと、それ以下の小型のものに分けられる。前者は平面形が正方形や長方形等の比較的整った形状を呈する。それに比べ後者は不整形の方形や長方形を呈している。面積と平面形については、時期的な違いは認められなかった。また、カマドは全て南壁に構築されており、04SI39・40のカマドの位置と一致する。

次に掘立柱建物は、分布に顕著なまとまりは見られないが、竪穴住居周辺に分布する傾向にあるといえよう。建物は全て側柱構造で、棟持柱をもつ。主軸方向は整然とせず、まとまりが見られない。また、面積から２つのグループに分けることができる。大型のものは少数ではあるが、面積が50m^{2}を超える。小型のものは面積が12～20m^{2}の範囲内にある。

古代における金屋遺跡では、旧河川や04SD17等の河川跡付近を中心に遺構が位置している。丘陵部斜面にも遺構は若干位置するが、当該期の遺構は主に蟻子山麓付近やそれよりもやや下がった扇状地に立地する傾向にある。竪穴住居については、平成16・17年度調査と昭和57・58年度調査で時期が近く、また面積にはばらつきが見られたが、カマドが遺構内の南壁に構築される点については、古代を通しての共通点といえる。

D　金屋遺跡の遺構の変遷

以上、平成16・17年度調査と昭和57・58年度調査で検出された遺構を時期ごとに概観してきた。遺構の立地を見ると、弥生中期では丘陵側調査区の丘陵部斜面に、古墳前期では丘陵部斜面と蟻子山麓付近に位置している。また、古墳時代前期後半に水田側調査区において04SD17が形成される。Ⅴ１期（9



第12図　古代の遺構

世紀前葉）においても04SD17は存在し、その付近に竪穴住居が構築されている。ほぼ同時期には、昭和57・58年度調査区でも、旧河川沿いに竪穴住居等の遺構が存在する。これらの遺構は、蟻子山麓周辺やそれよりやや下がった扇状地に形成されている。Ⅶ1期（10世紀前葉）には、丘陵側調査区の丘陵部斜面で掘立柱建物が1棟のみ確認できた。昭和57・58年度調査区では、その後も竪穴住居等の遺構が旧河川沿いに形成されており、断続的にⅦ3期（11世紀）までこの地に集落が営まれていたと推測される。

このように時期ごとの遺構の分布を見てきた。弥生～古墳時代にかけては主要な遺構は丘陵部にのみ形成されていたが、古墳時代以降徐々に扇状地にも遺構が形成されるようになる。また弥生時代以降は、Ⅳb

層の堆積や旧河川による洪水堆積層から、蟻子山の崩落や河川の氾濫等の様々な自然災害が遺跡付近で発生していたと考えられ、それらの影響を受けながらも、この地に断続的に集落が形成されていた。

また古墳時代や古代においては、ほぼ同時期に300mほど離れた昭和57・58年度調査区にも竪穴住居等の遺構が形成される。昭和57・58年度調査区の中央部付近には沢地が形成されており、この沢地の北側には昭和57・58年度調査で検出された遺構の多くが位置している。この沢地より南側では、平成16・17年度調査で検出された遺構が位置しており、両調査区の間にはほとんど遺構が存在しない。このことから、平成16・17年度調査と昭和57・58年度調査で検出された遺構は、それぞれ別々の集落を形成する遺構である可能性が指摘できる。なお遺跡の南限については、04SD17以南では遺構がほとんど見られないため、今回調査した範囲が当時の生活範囲の南縁に当たると推測される。

2　出土土器について

A　縄 文 土 器

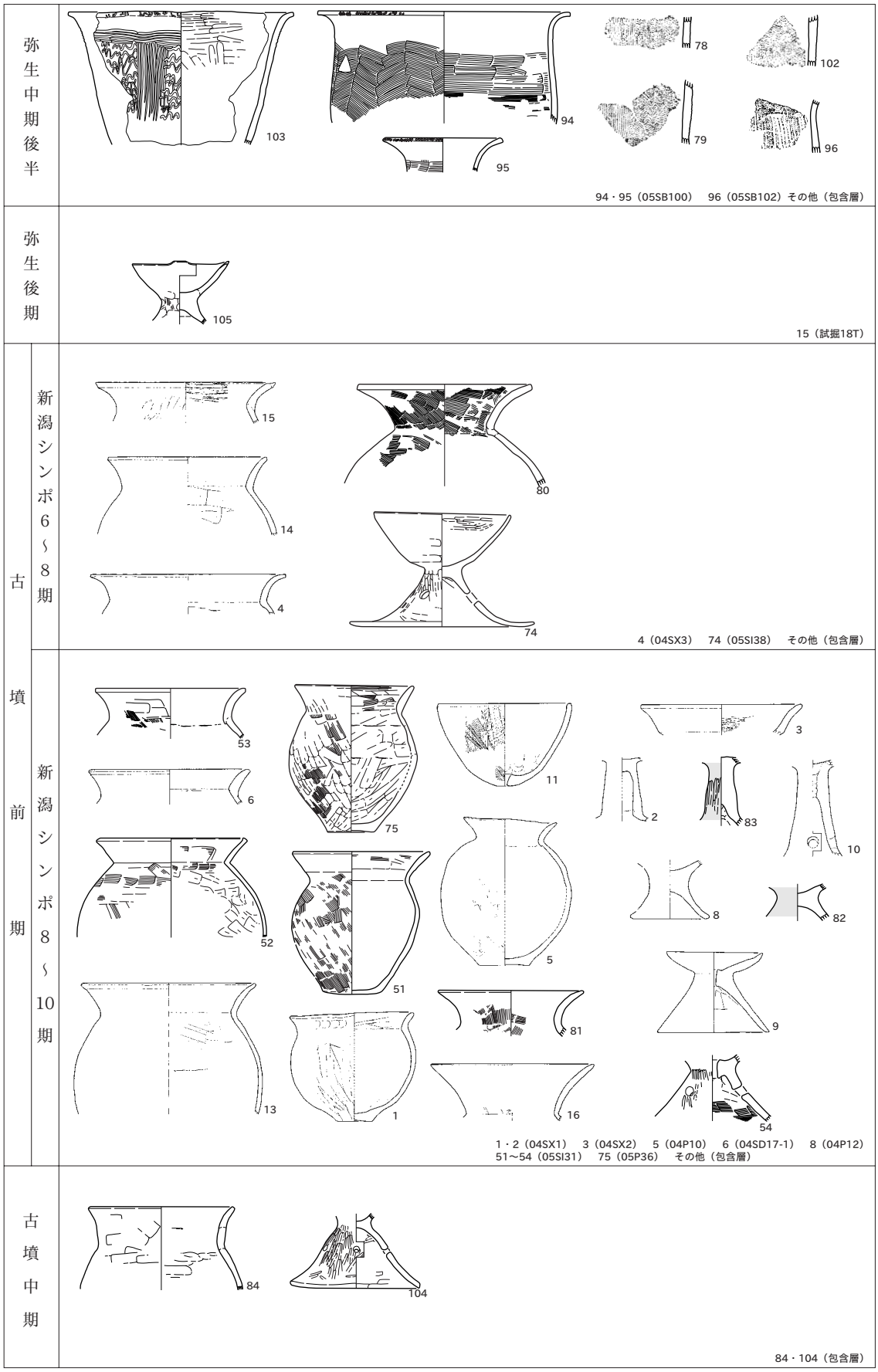
縄文時代の土器は丘陵側調査区の遺物包含層から数点出土した。その中には半截竹管によって爪形文が施文される土器が確認できる。特に37の連続爪形文は工具幅が広く、湯沢町岩原Ⅰ遺跡第Ⅳ群4類土器［北村1990］に類似し、縄文時代前期後半の諸磯b式古段階［今村1982］に位置づけられている。類例は、魚野川流域では、岩原Ⅰ遺跡のほか南魚沼市（旧塩沢町）万條寺林遺跡［池田ほか1988］、同市五丁歩C遺跡［佐藤・長澤1993］、同市十二木遺跡［家田ほか1988］等にあるが、良好な復元個体はなく、断片的な資料である。36も連続爪形文の施文から、同様の位置づけを考えることもできるが、37に比し工具幅が狭い。従って諸磯a式に並行する時期に位置づけられる可能性がある。このほか、胎土から縄文時代前期後半に位置づけられる可能性がある土器が出土している（35・38・39）。昭和57・58年度調査でも爪形文が施される土器は出土し、諸磯式に比定されている［田辺1985］。

このほか平成17年度調査では、縄文時代晩期に位置づけられる土器（49・99～101）も出土した。一方、昭和57・58年度調査では縄文時代早期から後期の土器が出土していることから、金屋遺跡では縄文時代早期から晩期の土器が断片的に出土していることが分かる。

B　弥生時代から古墳時代の土器（第13図）

弥生時代の土器は、平成17年度調査で遺構や包含層から出土した。76・77のように、縄文晩期末から弥生初頭に位置づけられるものも確認できるが、それ以外は中期後半から後期の所産である。

金屋遺跡出土の弥生中期後半の土器は栗林式系で、櫛描文が施文されるもの（78・79・94・96・102・103）が主体となる。周辺の遺跡からは、南魚沼市長表遺跡［戸根ほか1986］、同市来清西遺跡［安立2002］、同市来清東遺跡［安立2001］等で栗林式が出土している。来清東遺跡では1号住居出土土器を栗林Ⅰ式とⅡ式の過渡期とし［安立2001］、来清西遺跡では文様構成等から栗林式の中頃の所産とする［安立2002］。金屋遺跡出土の櫛描文が施文される栗林式のうち、器形がある程度判明する個体は94・103である。94の口縁端部にはLR縄文が、体部には櫛描きによる羽状文が施される。櫛描きの工具は8条1単位、幅1.2cmで、両端がやや深く施文される。体部の羽状文は器面の口縁部側から底部側に向かって、また左側から右側に向かって施文される。口縁部が大きく外反し、体部上位の張りはそれほど強くはなく、下位に若干の張りを持つ器形と思われる。94は来清東遺跡［安立2001］124の土器に



第13図　弥生中期から古墳中期の土器

類似する。103の口縁端部には刻み目が確認できるが、磨耗しており、縄文の可能性も残る。頸部には横位の櫛描直線文、体部には縦位の櫛描直線文と櫛描波状文が施される。櫛描きの工具は4条1単位である。器形は底部から直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。体部が張らず、甕というより深鉢に近い器形が特徴的である。このほか栗林式系として、05SB100の柱穴から95が出土した。95も口縁端部にLR縄文が施文されるが、頸部にはハケメ調整が施される。95の頸部ハケメ調整は櫛描直線文や、あるいは簾状文等を意識しているようにも見える。

弥生後期の土器は明確ではないが、当該期の土器として105を挙げておく。105は磨耗しており明確ではないが、口縁部の2か所に小突起が確認でき、箱清水式系の可能性がある。南魚沼地域は後期前半では天王山式の出土が目立ち、箱清水式等の中部高地系土器がほとんど出土しないことが指摘されているが［安立2001・2002］、105の存在は後期における中部高地との関連を考える上で示唆的である。

古墳時代の土師器は古代の土器とともに主体的に出土しているが、その多くが包含層出土である。時期については8～10期にややまとまりがあり、前後の時期のものを若干含むようである。

6～8期の土師器には甕（4・14・15）、壺（80）、高杯（74）が確認できる。甕は口縁端部に面をもち（4・14・15）、15は上方に摘み上げられる。この時期の壺は80が認められるのみである。80は口縁部が大きく開く器形で、端部に面をもつ。74の高杯は5～6期に盛行する東海系の高杯に系譜を求めておく。やや身の深い杯部に外反しながら広がる脚部が付いたもので、杯部下位に不鮮明な稜が認められる。74は05SI38出土で、8～9期の土師器を伴う05SI31に切られることからも、7期に位置づけることが妥当であろう。またタタキ成形される土師器（69～72）のうちのいくつかは、本期に位置づけられる可能性もあるが、破片が小さく、摩耗していることから、現状では不明としておく。

8～10期の土師器には甕（6・13・51～53・75）、小型甕（1）、有孔鉢（11）、壺（5・16・81）、高杯（2・3・8・10・82・83）、器台（9・54）が確認できる。甕には53のように口縁端部に面をもつものと13のように丸くおさめるものが認められる。また13の端部内面には不鮮明な凹線が巡る。外来系の甕では51・52・75が挙げられる。51・75は口縁部がやや長く、肩が張らず、底径が大きいことが特徴で、信州系の甕である。52は布留系の甕で、口縁端部に面をもち、内面は突出する。体部内面は削られ、ハケメ調整が施される。布留系の甕は来清東遺跡［安立2001］でも出土している。1の小型甕は昭和57・58年度調査SI12出土土器に類似の資料が認められるが、1に比べ頸部の屈曲が弱く、退化した感がある。SI12は10期に位置づけられることから［品田1992］、1の時期は04SX1で供伴する高杯（2）を参考にし、8～9期に位置づけておく。広口壺は7期くらいまでは比較的認められるが、16・81は、内面における口縁部と頸部の段差が不明瞭になる傾向が認められる。高杯については、畿内系屈折脚を有するもの（2・10・83）は8期以降認められる。2・10の脚部は膨らみをもたない棒状を呈し、83は脚部中央がやや膨らむ。このほかの高杯では3の杯部、8・83の脚部が挙げられる。9の器台は口縁端部が丸く仕上げられ、脚部中央が膨らむ。また器高も8cm前後と小型化している。なお昭和57・58年度調査のSI12からは10期の資料がまとまって出土している。

古墳時代中期ではわずかに84・104が出土したのみであるが、昭和57・58年度調査では中期から後期の土師器が出土している。

以上断片的な資料ではあるが、弥生時代から古墳時代の土器を概観した。弥生時代中期後半では栗林系が主体となる。一方弥生時代後期になると、魚沼地域は天王山式の出土が多くなる傾向にあるが［安立2001・2002］、金屋遺跡では中部高地系と思われる土器が1点確認できるのみである（105）。6～8期

では、在地の土師器のほか、東海系の退化したと考えられるもの（74）が確認できる。8～10期では畿内系の土師器（2・10・52・83）や信州系の土師器（51・75）も確認できる。外来系の要素のうち、中部高地の影響については南魚沼地域の地理的位置が関連していると考えられ、南魚沼の地域性といえる。

C　古代の土器（第14図）

1）04SI40出土資料

古代（平安時代）の遺物には、土師器・須恵器があり、これらは、水田側・丘陵側の両調査区の遺構や包含層で、古墳時代の遺物とともに主体的に出土した。中でも水田側調査区の04SI40出土資料は、比較的まとまっており、良好な一括資料として考えることができる。

器種組成は、須恵器の無台杯、有台杯、杯蓋、大甕があり、土師器では長胴甕が存在している（第4表）。これらには食膳具である土師器の杯が伴わないのが特徴で、須恵器食膳具は、その胎土から佐渡小泊産（26）、阿賀野川以北産（21）、魚沼郡産（22～25）、東頸城郡末野窯跡群産（17～20）の可能性がある。佐渡小泊産はその形状から下口沢窯跡段階と推測されるもので、出土数は無台杯の1点と少ない（26）。貯蔵具では須恵器の大甕1点（30）があるが、これは胎土等から東頸城郡の末野窯跡群産と推測される。

これら須恵器の製作技法上の特徴としては、食膳具の無台杯に、佐渡小泊産（26）の回転ヘラ切り（左回転）と推定魚沼郡産の回転糸切り（22・25）・静止糸切り（23・24）が存在している。有台杯は、推定阿賀野川以北産の糸切り法（21）と推定末野窯跡群産のヘラ切り法（18～20）で切り離した後、高台を貼付する2つの技法が存在する。土師器には長胴甕が存在するが、胴部の調整にはヘラケズリの27・28のほか、タタキ目を残す29の両者が存在する。

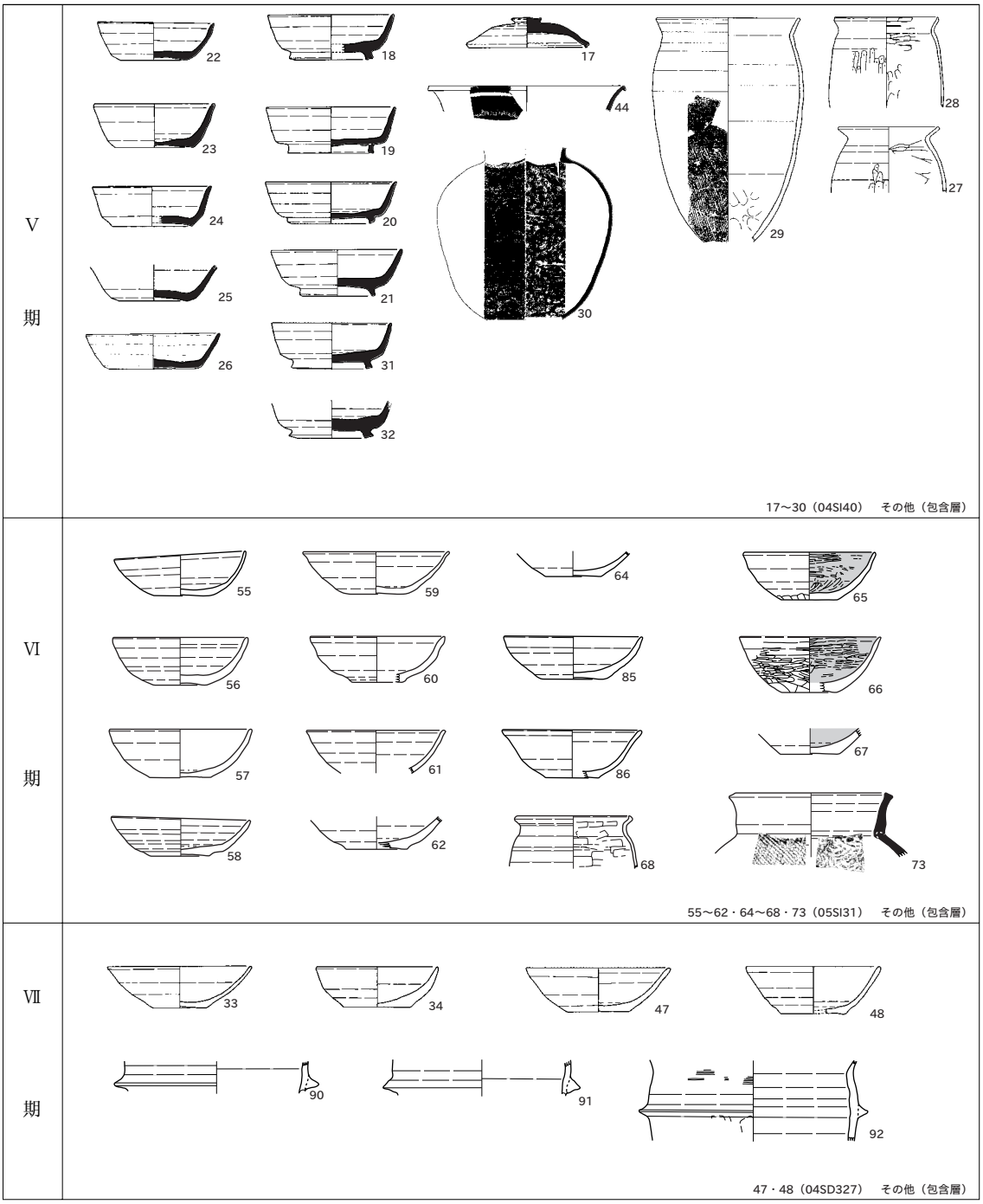
このような04SI40出土資料の土器群は、須恵器食膳具の佐渡小泊産（下口沢窯跡産）の存在や、土師器の食膳具を伴わない点等から、Ⅴ1期（9世紀前葉）と考えられる。近年、信濃川流域の十日町市馬場上遺跡46・47号住居跡出土資料が報告され、当該期に位置づけられている［菅沼2003］。

2）04SD327出土資料

土師器無台椀2点（47・48）が出土した04SD327は、丘陵側調査区に存在する。出土遺物のまとまりに欠けるが、48は器高指数が35以上で、身の深い形状を呈している。食膳具に須恵器を伴っていない点やその形状等を考慮すれば、Ⅶ1期（10世紀前葉）頃の位置づけが考えられるだろう。

3）05SI31出土資料

土師器の小甕（68）、無台椀（55～64）、内黒の無台椀（65～67）、須恵器の甕（73）が出土した。05SI31は土器の出土状況から古墳時代前期（8～9期）に位置づけられるが、古代の遺物も出土し、その多くは土師器の無台椀である。食膳具では土師器無台椀、内黒の無台椀が認められるが、須恵器は伴わない。内黒椀が出現し須恵器の食膳具を伴わないこと、Ⅵ1～2期の昭和57・58年度調査SI5・6から65・66に類似する内黒の椀が出土していること等から、土師器無台椀、内黒の無台椀はⅥ1～2期（9世紀後半）に位置づけておく。須恵器の甕（73）は小泊産で、供伴する土器からⅥ1～2期に位置づけられる。



第14図　古代の土器

4）包含層出土資料

包含層出土資料は少ないが、水田側調査区から土師器無台杯やⅤ１期（9世紀前葉）と推測される31・32の須恵器有台杯が出土している。また、時期の特定は困難だが、丘陵側調査区では、須恵器大甕の破片資料（44～46）等が出土している。丘陵側調査区ではⅥ１～２期の土師器無台椀（85・86）や内黒の無台椀（88）等が出土した。また煮沸具では羽釜（90～92）が出土した。羽釜はⅦ期頃の所産である。

5）小　　結

金屋遺跡では、以上のように遺構からⅤ１期（9世紀前葉）の良好な一括資料が出土したが、丘陵側調査区には少数ながらⅦ１期（10世紀前葉頃）の資料もあり、古代の土器様相は少なくとも２時期存在している。また、須恵器の製作地もⅤ１期（9世紀前葉）の在地窯跡産以外に少数の小泊産、末野窯跡群産や阿賀野川以北産が含まれている可能性があり、新潟県内の他地域と比較して、地域性をもって展開している可能性がある。いずれの時期も、資料は依然として不足しており、今回の出土資料だけでは、魚野川流域を含む魚沼地方の様相を明らかにはしえない。今後の調査に期待される。

要　　約

1　金屋遺跡は新潟県南魚沼市余川字蟻子山35－1ほかに所在する。

2　遺跡は魚沼丘陵東麓に位置する独立丘の蟻子山東側裾部と庄之又川によって形成された沖積扇状地上に立地する。遺跡西側には県史跡蟻子山古墳群が位置する。

3　関越自動車道六日町雪氷Ｕターン路の建設に伴い、平成15（2003）年５月に試掘調査を行い、平成16（2004）年４月14日～８月13日・平成17（2005）年４月26日～６月27日に本発掘調査を行った。

4　遺構は弥生時代中期後半の掘立柱建物２棟、土坑５基、ピット33基、古墳時代前期の竪穴住居２軒、掘立柱建物１棟、溝４条、土坑４基、ピット30基、性格不明遺構３基、河川跡１条、９世紀前半の竪穴住居２軒、溝１条、ピット７基、河川跡１条、10世紀前半の掘立柱建物１棟、時期不明の礎石建物１棟、溝18条、土坑８基、ピット344基、性格不明遺構３基を検出した。

5　遺物は旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の土器、弥生時代の土器・扁平片刃石斧、古墳時代の土師器、古代の須恵器・土師器と時期不明の石器が出土した。数量的には古墳時代の土師器、古代の須恵器が多い。古墳時代の土師器は前期後半を中心とする時期の甕、壺、鉢、高杯、器台が確認できる。古代の須恵器では９世紀前半の有台杯、無台杯、甕が出土した。須恵器は器形の特徴・調整・胎土の肉眼観察から、東頸城郡末野窯跡群産、佐渡小泊産、阿賀野川以北の窯跡産、魚沼郡窯跡産の可能性が考えられる。

6　遺構の分布状況から、今回調査を行った範囲は古墳時代前期・古代の集落の縁辺部にあたると考えられる。

引用・参考文献

安立　聡　2001　『塩沢町文化財報告書第19輯 来清東遺跡』 塩沢町教育委員会

安立　聡　2002　『塩沢町文化財報告書第20輯 来清西遺跡』 塩沢町教育委員会

新井房夫　1962　「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』Vol.10-No.4

荒川勝利・渡辺秀男　1981　「南魚沼郡六日町上ノ原地域のローム層」『六日町西山の自然』 六日町

荒川隆史・加藤　学　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集　和泉Ａ遺跡』 新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

家田順一郎ほか1988　『塩沢町文化財調査報告書８輯 十二木遺跡』 塩沢町教育委員会

飯坂盛泰ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第139集 余川中道遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫　1995　「南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代」『第四紀研究』Vol.34-No.5

池田　亨　1973　『六日町の文化財』

池田　亨ほか 1988　『塩沢町文化財調査報告書第９輯 万條寺林遺跡』 塩沢町教育委員会

今村啓爾　1982　「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3　有山閣

春日真実　1991　「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟県考古学談話会会報』第８号　新潟県考古学談話会

春日真実　1997　「越後・佐渡における９世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

春日真実　1999　「第２節 土器編年と地域性」新潟県考古学会編『新潟県の考古学』 高志書院

春日真実　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集 沖ノ羽遺跡Ⅲ（Ｃ地区）』 新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男ほか 1977　「伊乎乃郡の古墳」『新潟県文化財調査年報第15 南魚沼』 新潟県教育委員会

茅原一也ほか 1977　「新潟県南魚沼地域の地形および地質」『新潟県文化財調査年報第15 南魚沼』 新潟県教育委員会

川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第５号

北村　亮ほか 1985　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』 新潟県教育委員会

北村　亮　1990　「4）第Ⅳ群土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原Ⅰ遺跡 上林塚遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか 1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実　1991　「佐渡の須恵器」『新潟考古』第２号

笹沢正史　1999　「第２項窯業」 新潟県考古学会編『新潟県の考古学』 高志書院

佐藤雅一・長澤展生　1993　『塩沢町埋蔵文化財報告書第16輯 五丁歩Ｃ遺跡』 塩沢町教育委員会

塩澤町町史編纂委員会　2002　『塩澤町史 通史編上巻』 塩沢町

品田高志　1990　「越後における古墳時代の変遷－前期土器編年の現状と編年試案－」『柏崎市立博物館館報』No.4

品田高志　1992　「越後における古墳時代の変遷Ⅱ」『柏崎市立博物館館報』No.6

菅沼　亘ほか 2003　『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集 馬場上遺跡発掘調査報告書』 新潟県新十日町市教育委員会

鈴木俊成　1996　「Ｃ 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 清水上遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

田嶋明人ほか 1986　『漆町遺跡Ⅰ』 石川県埋蔵文化財センター

田辺早苗　1985　「1 縄文時代 a縄文土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』 新潟県教育委員会

戸根与八郎ほか　1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第43集 長表遺跡』 新潟県教育委員会
中村孝三郎・金子拓男ほか　1975 『六日町埋蔵文化財調査報告書2 長表遺跡』 六日町教育委員会
新潟火山灰グループ　1981 「新潟県下のローム層について その1－信濃川ローム層について－」『地球科学』35巻
新潟火山灰グループ　1995 「新潟県下のローム層 そのⅡ－信濃川ローム層の層序－」『地球科学』49巻
新潟県　1979 『土地分類基本調査図　十日町』
新潟大学人文学部　2001 「新潟県南魚沼郡六日町飯綱山27・65号墳発掘調査報告（1996～99年度）」『新潟大学考古学研究室調査報告書』3
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993 『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
農林水産省農林水産技術会議事務局　1993 『新版標準土色帖』
橋本博文　1998 「飯綱山10号墳1996年度の調査のまとめと今後の課題」『新潟大学考古学研究室調査報告書』1
早津賢治　1988 「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー－ATにまつわる議論に関係して－」『考古学研究』第34巻第4号
町田　洋・新井房夫　1976 「広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－」『科学』Vol.46-No.6
町田　洋・新井房夫　1978 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰」『第四紀研究』第17巻第3号
町田　洋・新井房夫　1992 『火山灰アトラス』 東京大学出版会
町田　洋・新井房夫　2003 『新編 火山灰アトラス』 東京大学出版会
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗　1987 「姶良Tn火山灰の^{14}C年代」『第四紀研究』第26巻第1号
宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎　2001 「姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック（演旨）」地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD-ROM）,Qm-010.
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦　1993 「四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の^{14}C年代－」『地質学雑誌』99巻10号
吉川俊久・長澤展生　2003 『三和村文化財調査報告書第12集 東広井遺跡発掘調査報告書』 三和村教育委員会
渡辺秀男・荒川勝利　1981 「南魚沼郡六日町上ノ原地域の第四系」『六日町西山の自然』 六日町

土器観察表（1）（白：白色粒子、黒：黒色粒子、礫：小礫、石：石英、雲：雲母、長：長石）

報告番号	種別	器種	産地	時期	調査区	グリッド	遺構	層位	法量（cm）			色調		炭化物		胎土	製作痕跡・備考
									口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	小型甕		8～9期	水田	14M17	04SX1	2・3	12.5	11.1	3.7	灰白	灰白	なし	なし	白・黒・礫石・雲	口縁部肥厚、内外面ハケメ
2	土師器	高杯		8～9期	水田	14M16	04SX1	1				にぶい黄橙	浅黄	なし	なし	白・黒	内外面ナデ
3	土師器	高杯		8～9期	水田	14M17	04SX2	1	16.3			浅黄	黒褐	なし	なし	白・礫	外面ナデ、内面ハケメ・ミガキ
4	土師器	甕		7～8期	水田	14M18	04SX3	1	20.2			にぶい黄橙	にぶい黄橙	なし	なし	白・礫・石雲	内外面ナデ
5	土師器	小型壺		8～9期	水田	14N15	04P10	1	9.4	15.2	5.0	浅黄	浅黄	なし	なし	白・黒・石	口縁部肥厚、外面ハケメ
6	土師器	甕		8～9期	水田	17M22	04SD17-1	2	16.6			にぶい橙	明褐灰	なし	なし	白・礫・雲	口縁部肥厚、内外面ナデ
7	土師器	甕		8～9期	水田	17M22	04SD17-1	1			7.6	浅黄	にぶい黄橙	なし	なし	白・礫・石雲	内外面ハケメ、底部指圧痕
8	土師器	高杯		8～9期	水田	15N17	04P12	1			8.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	なし	なし	白・礫・石雲	内外面ナデ
9	土師器	器台		8～9期	水田	15N15		Ⅵ	9.7	8.1	11.4	にぶい橙	浅黄	なし	なし	白・黒・礫石・雲	内外面ナデ
10	土師器	高杯		8～9期	水田	16M24		Ⅵ				にぶい黄橙	浅黄	なし	なし	白・黒・礫石・雲	内外面ナデ
11	土師器	有孔鉢		8～9期	水田	15N15		Ⅵ	13.6	8.5	1.6	浅黄	浅黄	なし	なし	白・黒・礫石	外面ハケメ、内面指圧痕
12	土師器	有孔鉢		古墳前期	水田	15L		暗渠			3.3	明褐灰	にぶい黄橙	なし	なし	白・黒・石	内外面ナデ
13	土師器	甕		9～10期	水田	16M12		Ⅵ	17.8			灰黄	浅黄	あり	なし	白・礫・石	外面ナデ、内面ハケメ
14	土師器	甕		7～8期	水田	16M12		Ⅵ	16.2			にぶい黄	にぶい黄橙	あり	なし	白・礫・石雲	外面ナデ 内面ヘラケズリ・ハケメ
15	土師器	甕		7～8期	水田	15N18		Ⅵ	18.4			黄褐	にぶい黄橙	なし	なし	白・黒・礫石・雲	内外面ハケメ
16	土師器	壺		8～9期	水田	14M18		Ⅴ	16.8			浅黄	にぶい黄橙	なし	なし	白・黒・礫石	外面ハケメ、内面ナデ
17	須恵器	杯蓋	末野窯跡群	Ⅴ1期	水田	16L19	04SI40	床	10.8	2.7		灰	灰黄	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、つまみ部貼付
18	須恵器	有台杯	末野窯跡群	Ⅴ1期	水田	16L15	04SI40	3	11.4	4.1	6.6	灰白	灰白	なし	なし	白・黒・雲	ロクロナデ、回転ヘラ切り
19	須恵器	有台杯	末野窯跡群	Ⅴ1期	水田	16L25	04SI40	床	11.8	4.3	7.8	灰褐	灰褐	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、回転ヘラ切り
20	須恵器	有台杯	末野窯跡群	Ⅴ1期	水田	16L25	04SI40	床	12.0	3.8	7.0	褐灰	灰白	なし	なし	白	ロクロナデ、回転ヘラ切り
21	須恵器	有台杯	阿賀野川以北	Ⅴ1期	水田	16L20	04SI40	2	12.0	4.3	6.5	灰	灰	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、回転糸切り
22	須恵器	無台杯	魚沼郡	Ⅴ1期	水田	16L20	04SI40	3	10.5	3.4	6.0	灰	灰	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、回転糸切り
23	須恵器	無台杯	魚沼郡	Ⅴ1期	水田	16L20	04SI40	竈2	10.8	3.9	7.2	灰白	灰白	なし	なし	白・黒・長	ロクロナデ、静止糸切り
24	須恵器	無台杯	魚沼郡	Ⅴ1期	水田	16L24	04SI40	床	10.8	3.6	7.4	にぶい褐	灰白	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、静止糸切り
25	須恵器	無台杯	魚沼郡	Ⅴ1期	水田	16L15	04SI40	1			6.4	灰白	灰白	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、回転糸切り
26	須恵器	無台杯	小泊窯跡	Ⅴ1期	水田	16L20	04SI40	3	12.3	3.2	8.1	黄灰	灰	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、左回転ヘラ切り
27	土師器	長胴甕		Ⅴ1期	水田	16L20	04SI40	3	20.2			にぶい褐	にぶい橙	あり	なし	白・黒・礫石	口縁部ロクロナデ 体部内外面ヘラケズリ
28	土師器	長胴甕		Ⅴ1期	水田	16L20	04SI40	2	21.0			にぶい褐	にぶい橙	なし	なし	白・黒・礫石	口縁部ロクロナデ 体部内外面ヘラケズリ
29	土師器	長胴甕		Ⅴ1期	水田	16L20	04SI40	竈1	22.4			浅黄	にぶい黄橙	なし	なし	白・黒・礫石・雲	外面ロクロナデ・タタキ（平行） 内面ロクロナデ・当て具（同心円）
30	須恵器	大甕	末野窯跡群	Ⅴ1期	水田	16L15	04SI40	2				灰白	灰白	なし	なし	白・礫・石雲	外面タタキ（格子目）・カキ目 内面当て具（同心円）
31	須恵器	有台杯	末野窯跡群	Ⅴ1期	水田	16M12		Ⅴ	11.0	4.2	6.4	灰白	灰白	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、回転ヘラ切り
32	須恵器	有台杯	末野窯跡群	Ⅴ1期	水田	16M25		Ⅴ			6.2	灰	灰白	なし	なし	白・黒	ロクロナデ、回転ヘラ切り 045SD17破片と接合
33	土師器	無台椀		Ⅶ1期	水田	13N12		Ⅵ	13.2	3.8	4.8	浅黄	にぶい黄橙	なし	なし	白・礫・石	ロクロナデ
34	土師器	無台椀		Ⅶ1期	水田	18L4		Ⅵ	11.0	3.6	6.0	灰黄	浅黄	なし	なし	白・石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
35	土器	深鉢		縄文前期後半	丘陵	2L8		Ⅲa				黄褐	灰黄褐	あり	なし	白・雲	RL縄文
36	土器	深鉢		縄文前期後半	丘陵	4K1		Ⅲa				黄褐	黄褐	なし	なし	白・雲	爪形文、輪積痕
37	土器	深鉢		縄文前期後半	丘陵	3K21		Ⅲa				褐	明褐	なし	なし	白・石	爪形文、輪積痕
38	土器	深鉢		縄文前期後半	丘陵	3J20		Ⅲa				明黄褐	明黄褐	なし	なし	白・礫	RL縄文、輪積痕
39	土器	深鉢		縄文前期後半	丘陵	2L17		Ⅲa				黄褐	褐	なし	あり	白	RL縄文、輪積痕
40	土師器	甕		古墳前期	丘陵	7G5	04SD330	4	16.2			灰白	灰白	なし	なし	白・石・雲	内外面ナデ
41	土師器	甕		古墳前期	丘陵	7H1	04SD330	1	9.0			にぶい黄	にぶい黄橙	なし	なし	白・石・雲	内外面ナデ
42	土師器	甕		古墳	丘陵	6H10	04SK331	2	18.4		5.6	黄褐	にぶい黄橙	なし	なし	白・黒・礫石・雲	内面ナデ、外面ハケメ、底部指圧痕
43	土師器	壺		古墳	丘陵	7H6	04SK358	1			3.5	浅黄	にぶい黄橙	なし	なし	白・黒・礫石	内外面ナデ
44	須恵器	甕	末野窯跡群	Ⅴ1期	丘陵	5H25		Ⅲa	57.8			褐白	にぶい赤褐	なし	なし	白・黒・石	口縁部波状文・ロクロナデ
45	須恵器	甕	末野窯跡群	古代	丘陵	3J20		Ⅲa				灰褐	灰褐	なし	なし	白・礫	外面タタキ（平行）・カキ目 内面当て具（同心円）
46	須恵器	甕	末野窯跡群	古代	丘陵	7F23		Ⅲa				褐灰	灰褐	なし	なし	白・礫	外面タタキ（平行）・カキ目 内面当て具（同心円）
47	土師器	無台椀		Ⅶ1期	丘陵	6H24	04SD327	1	13.2	4.0	5.8	灰黄	浅黄	なし	なし	白・礫	ロクロナデ、回転糸切り

土器観察表（2）（白：白色粒子、黒：黒色粒子、礫：小礫、石：石英、雲：雲母、長：長石）

報告番号	種別	器種	産地	時期	調査区	グリッド	遺構	層位	法量（cm）			色調		炭化物		胎土	製作痕跡・備考
									口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
48	土師器	無台椀		Ⅶ1期	丘陵	7G14	04SD327	1	12.2	4.3	6.0	明赤褐	明赤褐	なし	なし	白・礫・石	ロクロナデ、回転糸切り
49	土器	深鉢		縄文晩期後半	丘陵			Ⅰ				褐	褐	なし	あり	石・雲・礫	あやくり文
50	土器	深鉢		縄文	丘陵			Ⅰ				にぶい赤褐	暗赤灰	あり	なし	石・雲・礫長	撚糸R
51	土師器	甕		8～9期	丘陵		05SI31		14.1	14.7	6.0	灰黄褐	灰黄褐	あり	あり	石・雲	外面ハケメ、試掘1T
52	土師器	甕		8～9期	丘陵	11B15	05SI31	3	15.5			黒褐	黒褐	あり	なし	雲	外面ハケメ 内面ケズリ・ハケメ
53	土師器	甕		8～9期	丘陵	11C16・21	05SI31	1・2	15.4			明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・雲	外面ハケメ
54	土師器	器台		8～9期	丘陵	11B14・15	05SI31	1				浅黄橙	浅黄橙	なし	なし	石	外面ミガキ、内面ナデ・ハケメ
55	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11B15	05SI31	1	12.1	4.1	5.1	橙	橙	なし	なし	石・雲・礫	ロクロナデ、回転糸切り
56	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11B20	05SI31	1	12.4	4.4	5.0	橙	橙	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
57	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵		05SI31		13.1	4.5	5.6	橙	明褐	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り、試掘1T
58	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11B15	05SI31	1	12.8	3.6	5.3	黄橙	黄橙	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
59	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11C11	05SI31	1	13.4	3.9	5.4	明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
60	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11B15	05SI31	1	12.3	4.2	4.6	橙	黄橙	なし	なし	石・雲	ロクロナデ
61	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11C16	05SI31	1	12.8			明黄褐	明黄褐	なし	あり	雲・長	ロクロナデ
62	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11C11	05SI31	1			5.6	黄橙	黄橙	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
63	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11B15	05SI31	1			6.2	明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・長・角	ロクロナデ、回転糸切り
64	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11B15	05SI31	2			5.1	黄橙	橙	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
65	内黒	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵		05SI31		12.2	4.4	5.2	明黄褐		あり	なし	雲	外面ケズリ・ロクロナデ 内面ミガキ、試掘1T
66	内黒	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11C11	05SI31	1	12.9	5.1	5.0	にぶい黄褐		なし	なし	石・雲	外面ケズリ・ロクロナデ・ミガキ 内面ミガキ
67	内黒	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11B20	05SI31	1			5.4	明黄褐		なし	なし	石・雲	外面ケズリ・ロクロナデ 内面ロクロナデ
68	土師器	小甕		Ⅵ期頃	丘陵	11B25	05SI31	1	18.0			明褐	にぶい黄褐	なし	なし	石・雲	ロクロナデ
69	土師器	甕			丘陵	11B20	05SI31	1				浅黄橙	浅黄橙	なし	なし	石・雲・礫	タタキ成形
70	土師器	甕			丘陵	11B20	05SI31	1				黄橙	黄橙	なし	なし	石・長	タタキ成形
71	土師器	甕			丘陵		05SI31					橙	橙	なし	なし	石・礫・長	タタキ成形、試掘1T
72	土師器	甕			丘陵	11B20	05SI31	1				黄橙	黄橙	なし	あり	石・雲	タタキ成形
73	須恵器	甕	小泊窯跡	Ⅵ1～2期	丘陵	11C16	05SI31	2	15.0			灰	灰	なし	なし	石	外面タタキ（格子目） 内面当て具（同心円）
74	土師器	高杯		7期	丘陵	11B24	05SI38	床	14.1	11.8	19.0	黄橙	黄橙	なし	なし	石・雲	内外面ナデ・ミガキ
75	土師器	甕		8～9期	丘陵	9E7	05P36		12.3	15.2	4.7	暗赤褐	暗赤褐	なし	なし	石・礫	内外面ケズリ・ハケメ、試掘10T
76	土器	深鉢		縄文晩期末～弥生	丘陵	12B10		Ⅲa				灰黄	灰黄	あり	なし		LR縄文、工字文？
77	土器	深鉢		縄文晩期末～弥生	丘陵	12C7		Ⅲa				赤褐	赤褐	なし	なし	石	粘土粒、工字文？
78	土器	甕		弥生中期後半	丘陵	11B9		Ⅲa				灰黄褐	灰黄褐	なし	なし	石・雲・長	櫛描波状文、櫛描直線文
79	土器	甕		弥生中期後半	丘陵	11C7		Ⅲa				褐灰	褐灰	なし	なし	石・雲・角	櫛描波状文、櫛描直線文 内面ハケメ
80	土師器	壺		7～8期	丘陵	9D22		Ⅲa				明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・雲・礫	内外面ハケメ
81	土師器	壺		8～9期	丘陵	11D1		Ⅲa				明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・雲・礫	内外面ハケメ
82	土師器	高杯		8～9期	丘陵	12C6		Ⅲa				褐灰	褐灰	なし	なし	石	内外面赤彩
83	土師器	高杯		8～9期	丘陵	9C4		Ⅲa				橙	橙	なし	なし	石・雲・礫	畿内系屈折脚、外面赤彩
84	土師器	甕		古墳中期	丘陵	11C17		Ⅲb				明褐	明褐	あり	あり	石・雲・礫	外面ハケメ、内面ナデ
85	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	11C21		Ⅲa	12.8	3.9	5.7	橙	橙	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
86	土師器	無台椀		Ⅵ1～2期	丘陵	10C9		Ⅲa	12.8	4.4	5.0	明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・雲・礫	ロクロナデ
87	土師器	無台椀		Ⅵ期頃	丘陵	10C11		Ⅲa			4.9	明赤褐	明赤褐	なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
88	内黒	無台椀		Ⅵ期頃	丘陵	11C16		Ⅲa			6.0	明黄褐		なし	なし	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り
89	土師器	小甕			丘陵	11B20		Ⅲa	12.0			暗灰黄	暗灰黄	なし	あり	石	
90	土師器	羽釜		Ⅶ期頃	丘陵	11C16		Ⅲa				明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・雲	
91	土師器	羽釜		Ⅶ期頃	丘陵	11B20		Ⅲa				にぶい黄橙	にぶい黄橙	なし	なし	石・雲	
92	土師器	羽釜		Ⅶ期頃	丘陵	11B20		Ⅲa				にぶい黄褐	褐灰	なし	なし	石・角	
93	須恵器	長頸瓶	小泊窯跡	Ⅴ2期頃	丘陵	10C7		Ⅲa				灰白	灰白	なし	なし	石・長・角	ロクロナデ
94	土器	甕		弥生中期後半	丘陵	12B20	05SB100（05P51）	1	26.0			明黄褐	明黄褐	あり	なし	石・雲	櫛描羽状文、LR縄文 内面ハケメ

土器観察表（3）（白：白色粒子、黒：黒色粒子、礫：小礫、石：石英、雲：雲母、長：長石）

報告番号	種別	器種	産地	時期	調査区	グリッド	遺構	層位	法量（cm）			色調		炭化物		胎土	製作痕跡・備考
									口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
95	土器	壺		弥生中期後半	丘陵	12B20	05SB100（05P51）	1	12.3			明黄褐	明黄褐	なし	なし	石・雲	LR縄文、外面ハケメ
96	土器	甕		弥生中期後半	丘陵	10D12	05SB102（05P98）	1				にぶい黄褐	褐	あり	なし	石	櫛描文、内面ハケメ
97	土器	壺		弥生後期～古墳前期	丘陵	12C1	05SK68	1				橙	明黄褐	なし	なし	石·雲	外面ハケメ・ミガキ、内面ケズリ
98	土器	有孔鉢		弥生後期～古墳前期	丘陵	12C1	05SK68	1			2.4	明褐	黄橙	あり	なし	石	内外面ハケメ
99	土器	深鉢		縄文晩期後半	丘陵	12B14		Ⅵa				浅黄	浅黄	あり	あり	石·礫	あやくり文
100	土器	深鉢		縄文晩期後半	丘陵	12B14		Ⅵa				灰黄褐	灰黄褐	あり	なし	石·雲	あやくり文
101	土器	深鉢		縄文晩期後半	丘陵	12C12		Ⅵa				にぶい黄	黒	なし	あり	石	あやくり文
102	土器	甕		弥生中期後半	丘陵	12B10		Ⅵa				黒	灰黄褐	なし	あり	石・雲	櫛描波状文、櫛描直線文 内面ハケメ
103	土器	甕		弥生中期後半	丘陵	12B10		Ⅵa				明黄褐	明黄褐	あり	なし	石・雲・礫	櫛描波状文、櫛描直線文 内面ナデ・ミガキ
104	土師器	高杯		古墳中期	丘陵	11C17		Ⅵa			13.3	黄橙	黄橙	なし	なし	石・雲・礫	外面ミガキ、内面ナデ・ミガキ
105	土器	高杯		弥生後期	丘陵				9.9			にぶい黄橙	にぶい黄橙	なし	なし	石・雲	外面ナデ・ハケメ、試掘18T

石器観察表

報告番号	器種	分類	調査区	グリッド	遺構	層位	法量（mm・g）				石材	素材	備考
							長さ	幅	厚さ	重量			
106	磨石類	A	丘陵	11B24	05SI38	周溝	30.00	30.40	26.60	33.96	ヒン岩		全面磨痕、正面平坦
107	不定形石器	B1	丘陵	10D12		Ⅲa	50.00	23.00	12.00	7.04	流紋岩	縦長	両側縁に連続剥離、先端部欠損後表面剥離
108	不定形石器	F1	丘陵	9D22		Ⅲa	40.00	27.50	9.00	5.11	流紋岩	縦長	裏面左側縁に剥離痕、裏面右側縁に微細剥離痕
109	磨石類	A	丘陵	11C21		Ⅲa	45.00	40.00	36.00	85.42	ヒン岩		全面磨痕
110	磨石類	G	丘陵	12C1		Ⅲa	67.00	64.00	50.50	275.27	石英閃緑岩		全面敲打痕
111	磨石類	G	丘陵	11B20		Ⅲa	136.00	111.00	33.00	802.00	輝緑岩		敲打痕
112	磨石類		丘陵	11C21		Ⅲa	103.00	90.00	79.00	962.00	石英閃緑岩		使用痕確認できず、炭化物付着
113	石核		丘陵	12C11		Ⅲa	33.00	45.00	19.00	27.57	流紋岩		打面調整なし、剥片剥離後剥離面に調整
114	石核		丘陵	12B5		Ⅲb	67.70	89.00	39.60	150.96	流紋岩		打面調整あり、打面転位顕著
115	扁平片刃石斧		丘陵	11D3		Ⅳb	74.00	58.50	14.50	117.89	ハンレイ岩		
116	砥石		丘陵	11C2		Ⅲb	17.00	49.00	27.00	26.14	頁岩		下端のみ遺存
117	石皿		丘陵	12C1	05SK68	1	57.50	60.00	29.00	108.23	多孔質安山岩		磨痕
118	ナイフ形石器		丘陵	9E2		Ⅶ	38.50	18.00	7.00	3.84	黒曜石		二側縁加工
119	不定形石器	B2	丘陵	11C1		Ⅵa	59.00	86.00	16.00	77.53	安山岩		底縁に連続剥離
120	不定形石器	J	丘陵	11C15		Ⅵa	33.00	45.00	8.00	9.69	頁岩		正面右側縁に微細剥離痕
121	不定形石器	J	丘陵	12C16		Ⅵa	52.00	32.00	13.50	14.38	頁岩		側縁表裏面に微細剥離痕
122	磨石類		丘陵	11D6		Ⅵa	90.00	70.00	42.00	355.00	閃緑岩		使用痕確認できず、炭化物付着

図　　版

凡　例

1　遺構図版において、次のように分類してスクリーントーン・記号を貼付した。

炭化物層（C）

S：石　　P：土器

2　土器の断面は、須恵器の断面を塗りつぶし、これ以外を白抜きとした。

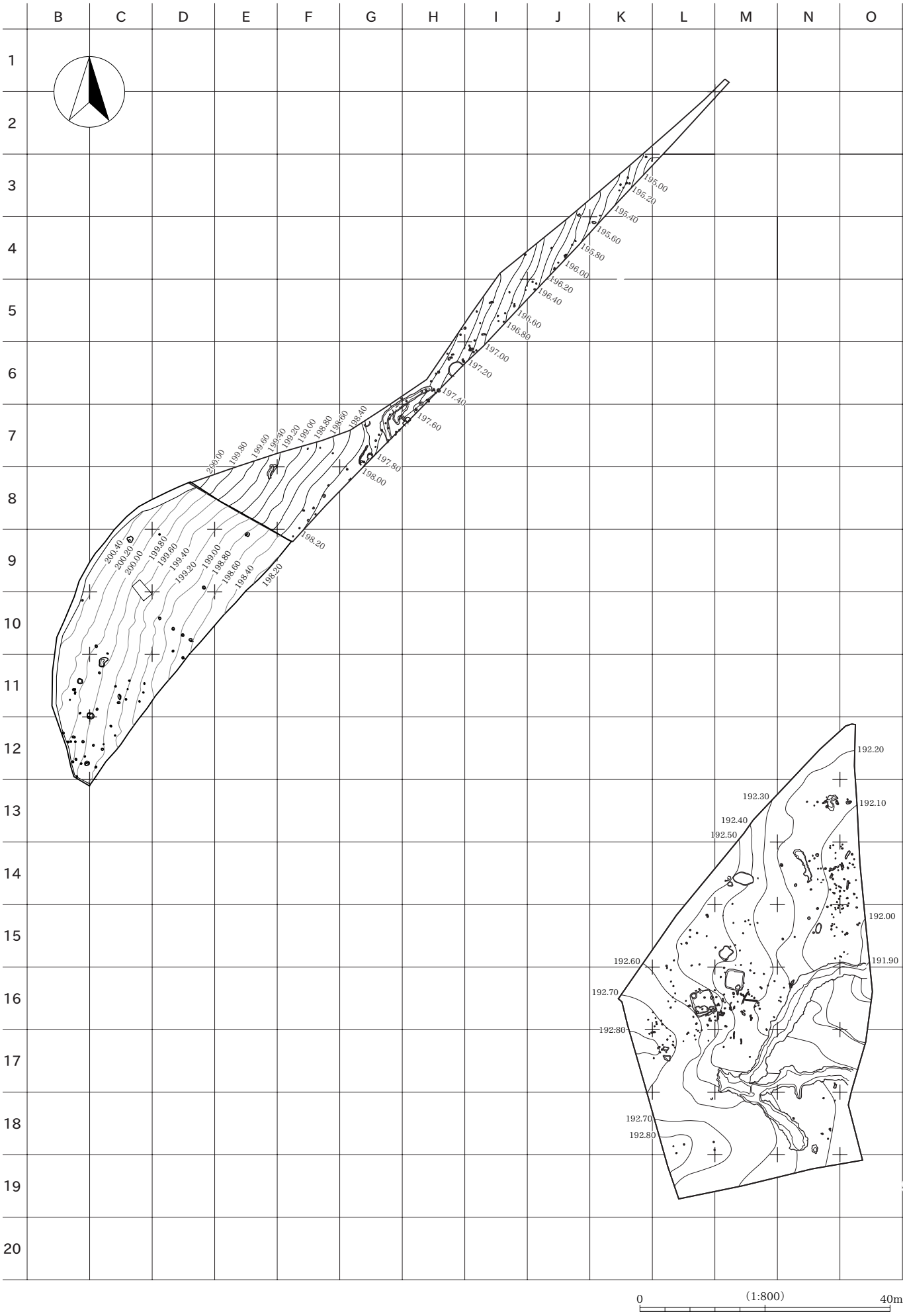
3　土器図版において、次のように分類してスクリーントーンを貼付した。

赤彩　　黒色処理

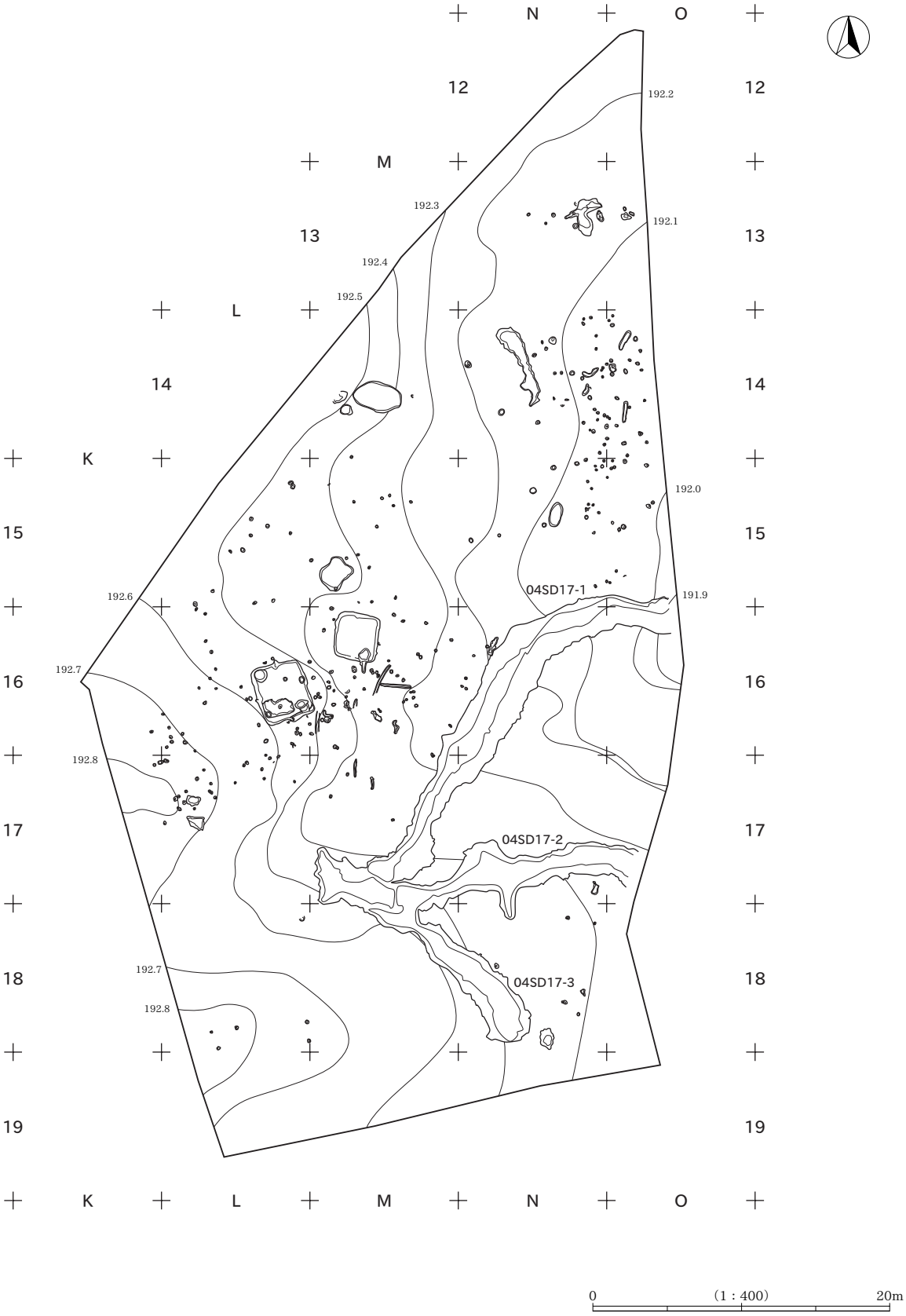
4　石器図版において次のように分類してスクリーントーンを貼付した。

磨痕　　敲痕　　炭化物

5　遺物写真の縮尺は、図面図版と同じである。

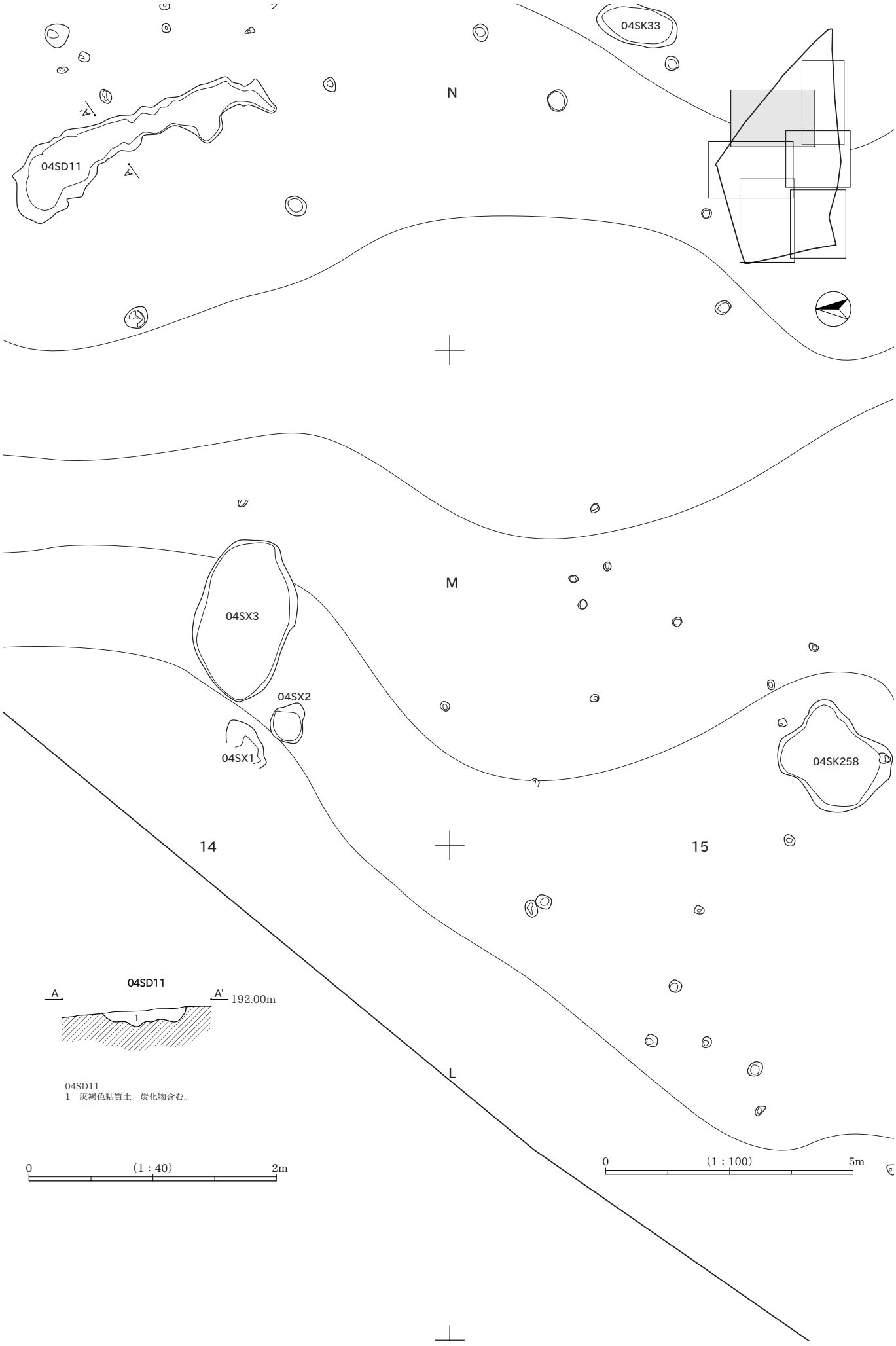

B C D E F G H I J K L M N O
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
195.00
195.20
195.40
195.60
195.80
196.00
196.20
196.40
196.60
196.80
197.00
197.20
197.40
197.60
197.80
198.00
198.20
198.40
198.60
198.80
199.00
199.20
199.40
199.60
199.80
200.00
200.20
200.40
192.20
192.30
192.10
192.40
192.50
192.00
191.90
192.60
192.70
192.80
0
(1:800)
40m

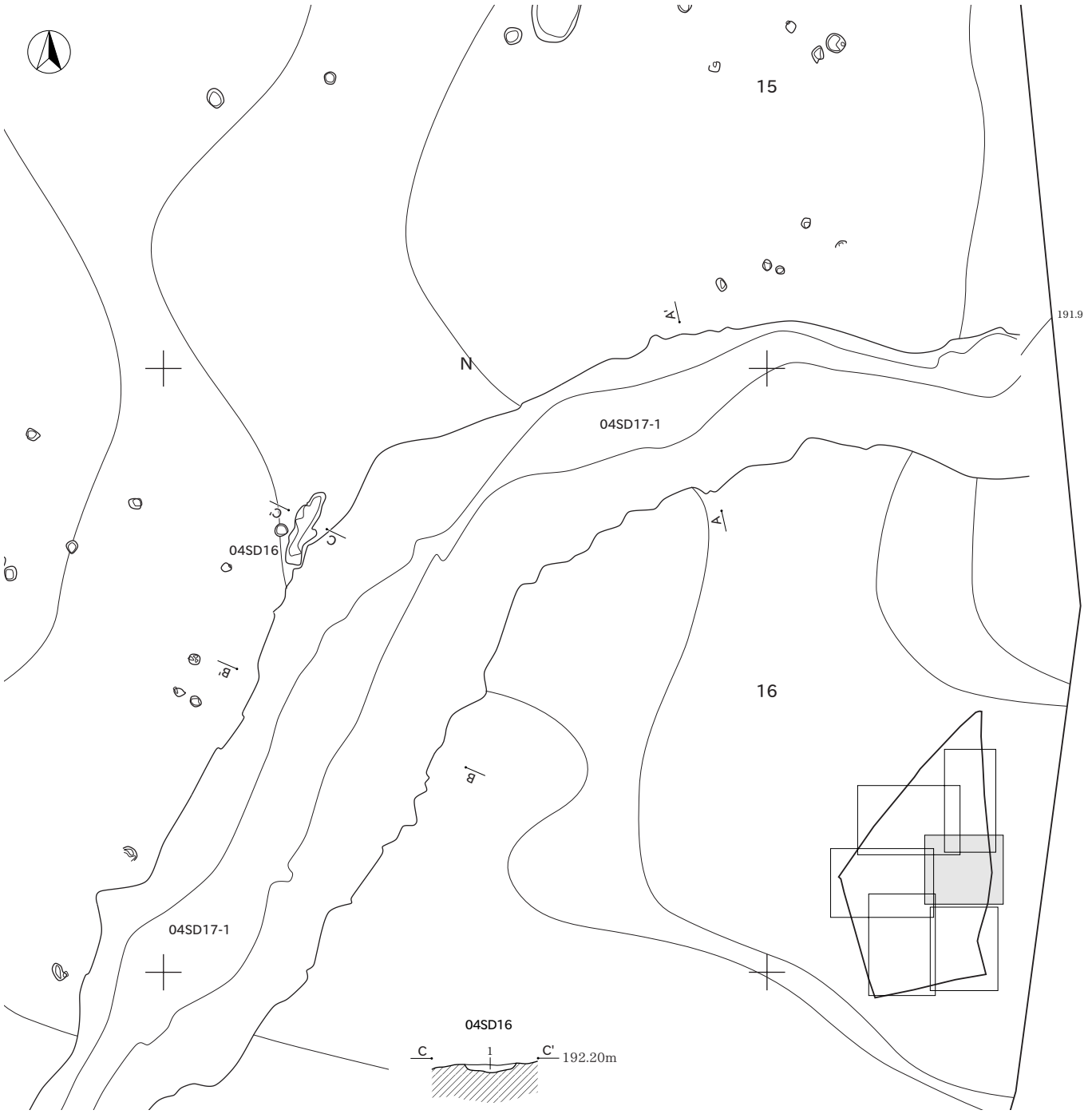
H16年度 水田側 遺構全体図



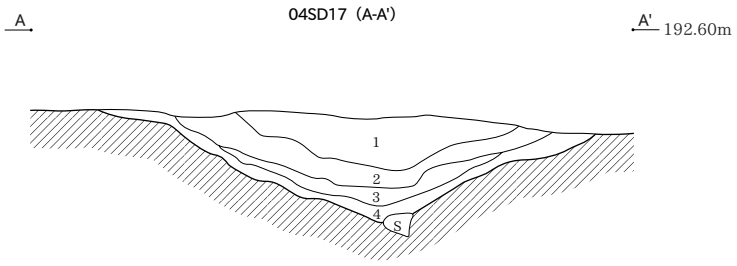
N
04SD14
13
04SD11
04SD28
04SD29
14
04SD27
04SK33
15
192.1
192.0
0
(1 : 100)
5m
A
A'
192.00m
04SD14
1
2
3
04SD14
1 灰オリーブ粘質土。
2 褐灰色粘質土。炭化物含む。
3 オリーブ灰色粘質土。にぶい黄色粘質土ブロック含む。
B
B'
192.00m
04SD27
1
04SD27
1 オリーブ黒色粘質土。砂質土少量含む。
C
C'
192.00m
04SD28
1
04SD28
1 灰色粘質土。砂質土少量含む。褐色粘土含む。
D
D'
192.00m
04SD29
1
04SD29
1 灰色粘質土。砂質土多く含む。
0
(1 : 40)
2m

H16年度 水田側 遺構分割図（2）

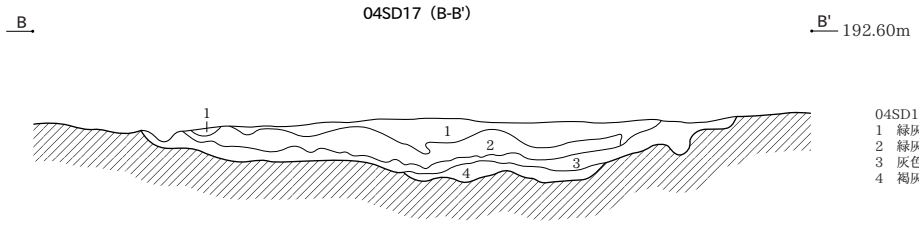




04SD16
1　灰黄褐色シルト。橙色シルト含む。



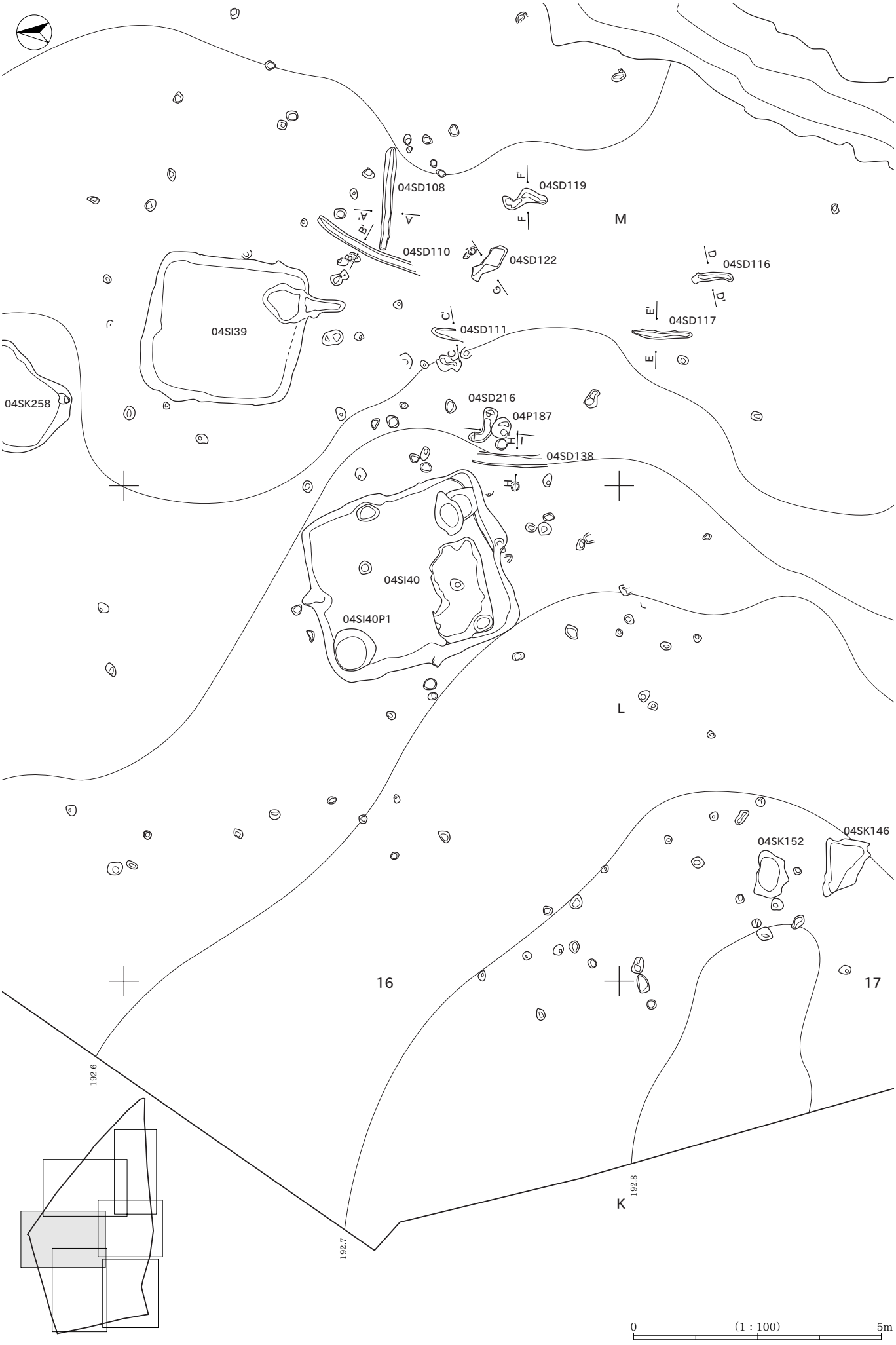
04SD17（A-A'）
1　灰色砂。橙色砂ブロック含む。
2　緑灰色シルト。橙色シルトブロック含む。
3　緑灰色粘質土。橙色粘質土含む。水分多く含む。
4　灰色粘質土。橙色粘質土含む。炭化物少量含む。底部に水分多く含む。

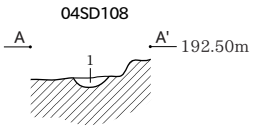


04SD17（B-B'）
1　緑灰色粘質土。橙色シルト含む。
2　緑灰色砂質シルトと橙色砂質シルトとの混合土。淡黄色砂多量に含む。
3　灰色粘質土。橙色粘質土を含む。炭化物少量含む。底部に水分多く含む。
4　褐灰色粘質土。礫多数含む。

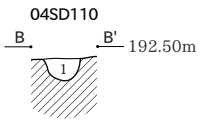
0　(1：40)　2m

H16年度 水田側 遺構分割図（4）

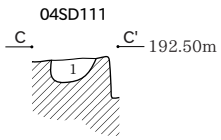




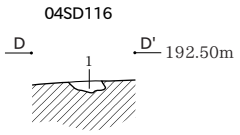
04SD108
1　暗オリーブ粘質土。鉄分・炭化物含む。



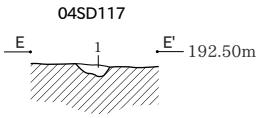
04SD110
1 オリーブ褐色粘質土。灰色砂質土・鉄分含む。



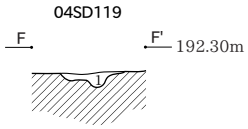
04SD111
1 灰色粘質土。白色砂粒・鉄分含む。



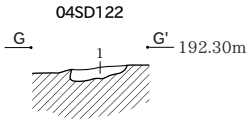
04SD116
1　褐灰色粘質土とにぶい黄色粘質土との混合土。



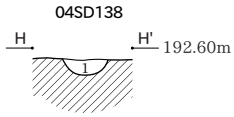
04SD117
1　褐灰色粘質土。にぶい黄色粘質土ブロック含む。



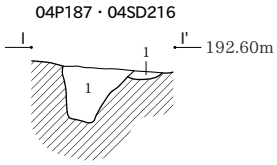
04SD119
1　褐灰色粘質土。部分的にオリーブ灰色と橙色の粘質土含む。



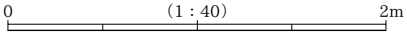
04SD122
1　褐灰色粘質土。灰オリーブ粘質土含む。



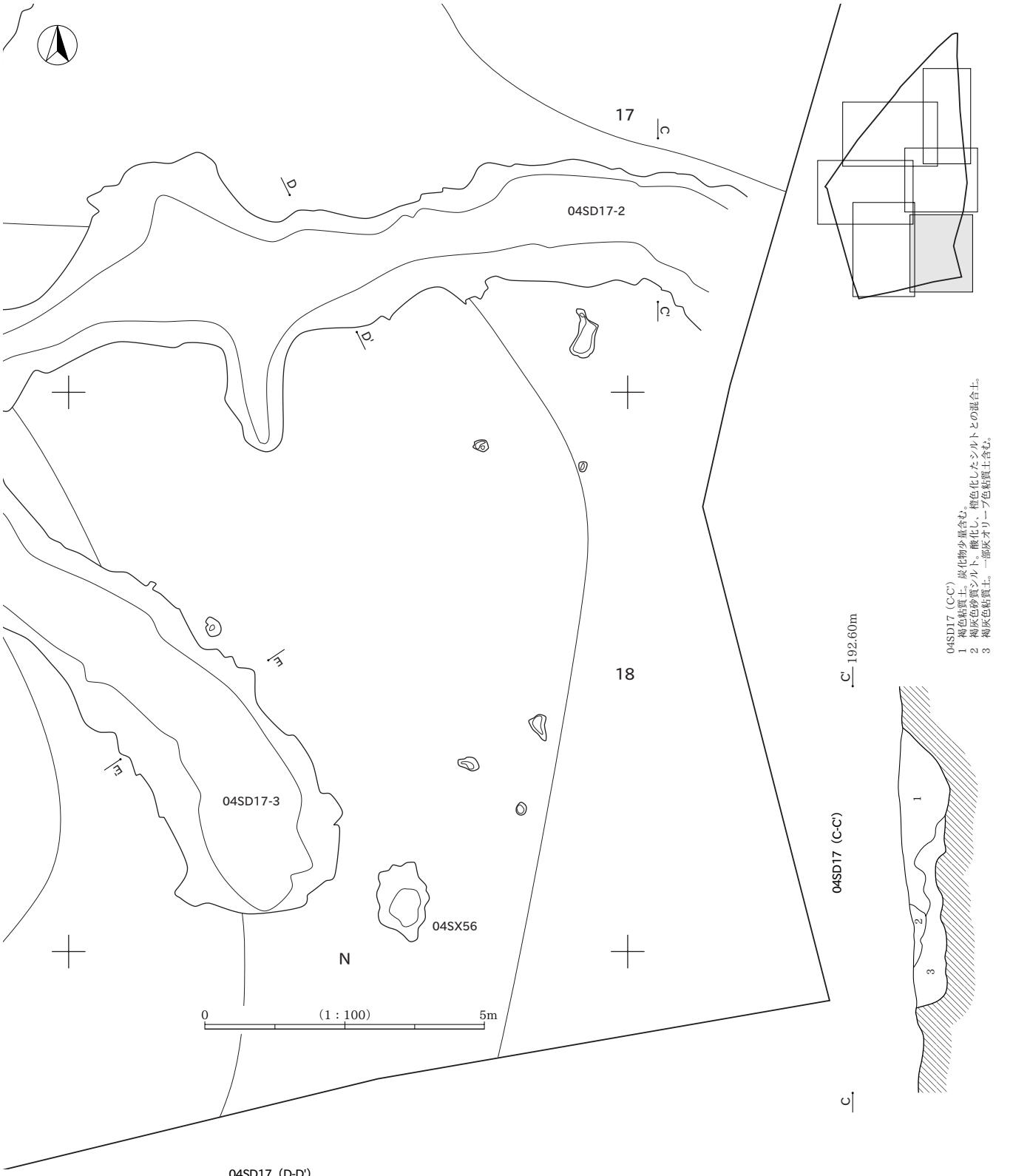
04SD138
1　オリーブ黒色粘質土。白色砂粒含む。

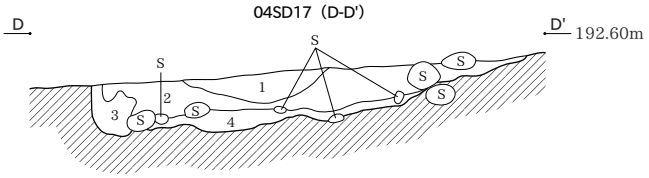


04P187
1　オリーブ黒色粘質土。炭化物含む。
04SD216
1　オリーブ黒色粘質土。

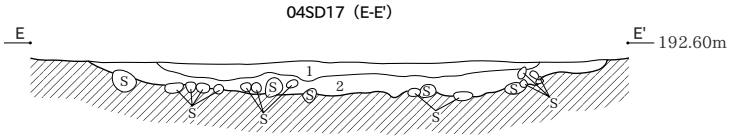


H16年度 水田側 遺構分割図（5）





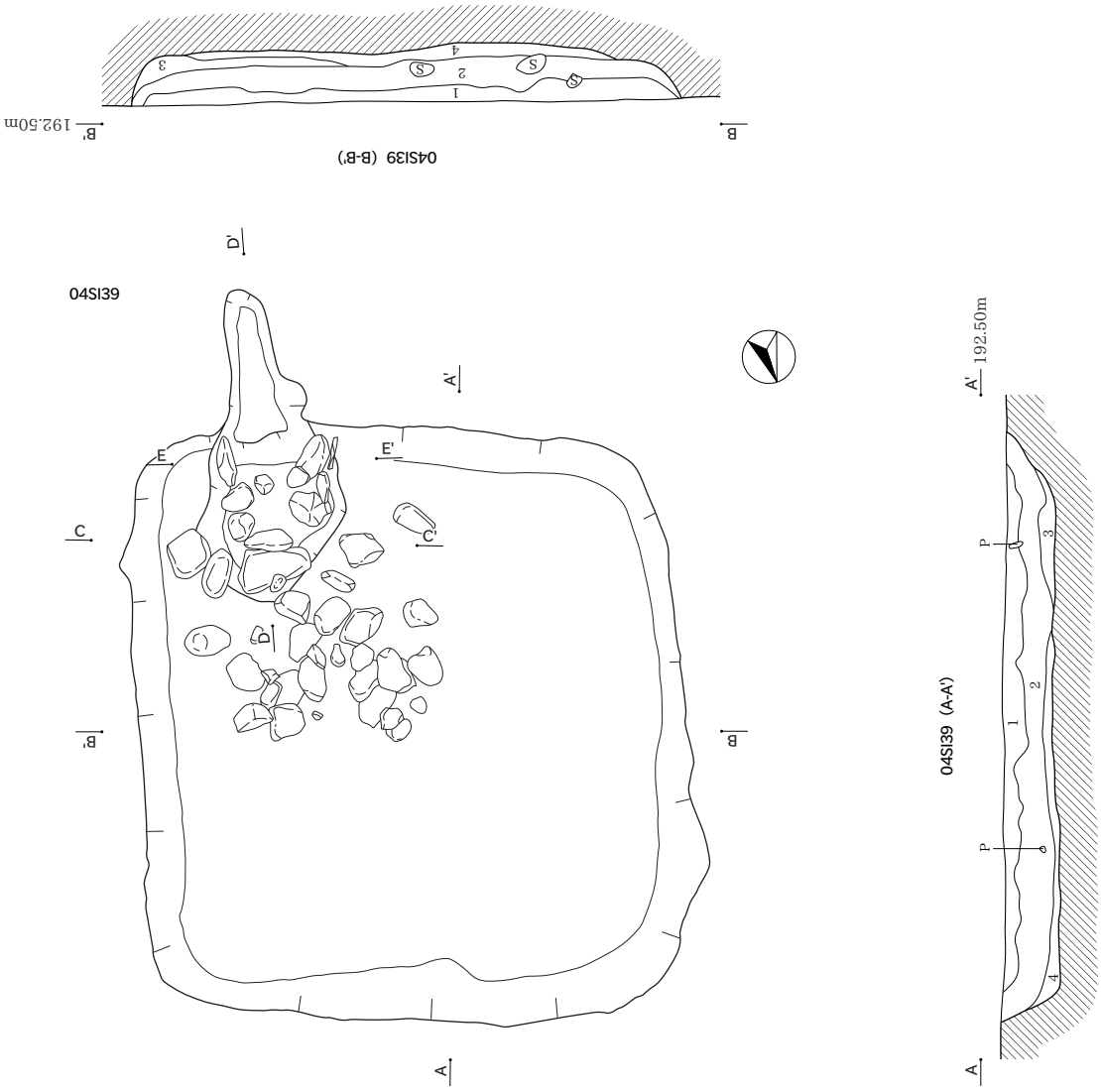
04SD17（D-D'）
1　褐灰色粘質土。淡黄色砂多量に含む。炭化物・礫含む。
2　褐灰色粘質土。橙色粘質土含む。
3　オリーブ灰色砂質シルト。
4　黄灰色粘質土。礫多数含む。砂粒子多量に含む。部分的に黄橙色化。



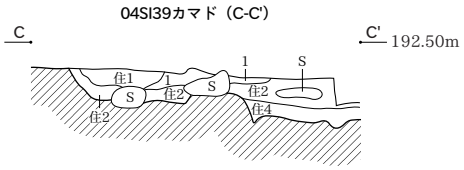
04SD17（E-E'）
1　黒褐色粘質土。白色砂粒子含む。
2　緑灰色粘質シルト。

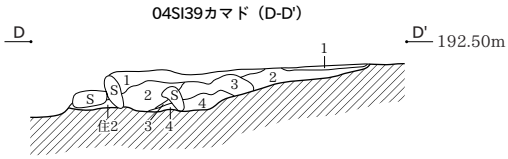
0　（1：40）　2m

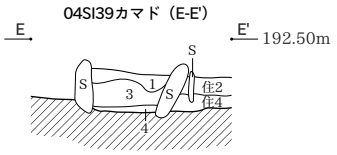
04SD117
04SD116
04SK152
04SK146
17
04SD17
18
L
M
19
0
（1：100）
5m



04SI39
1　オリーブ黒色粘質土。黄褐色砂質土・鉄分・炭化物含む。
2　灰色粘質土。白色砂粒・炭化物含む。
3　オリーブ黒色粘質土。褐色砂質土・白色砂粒含む。
4　オリーブ黒色粘質土。炭化物含む。

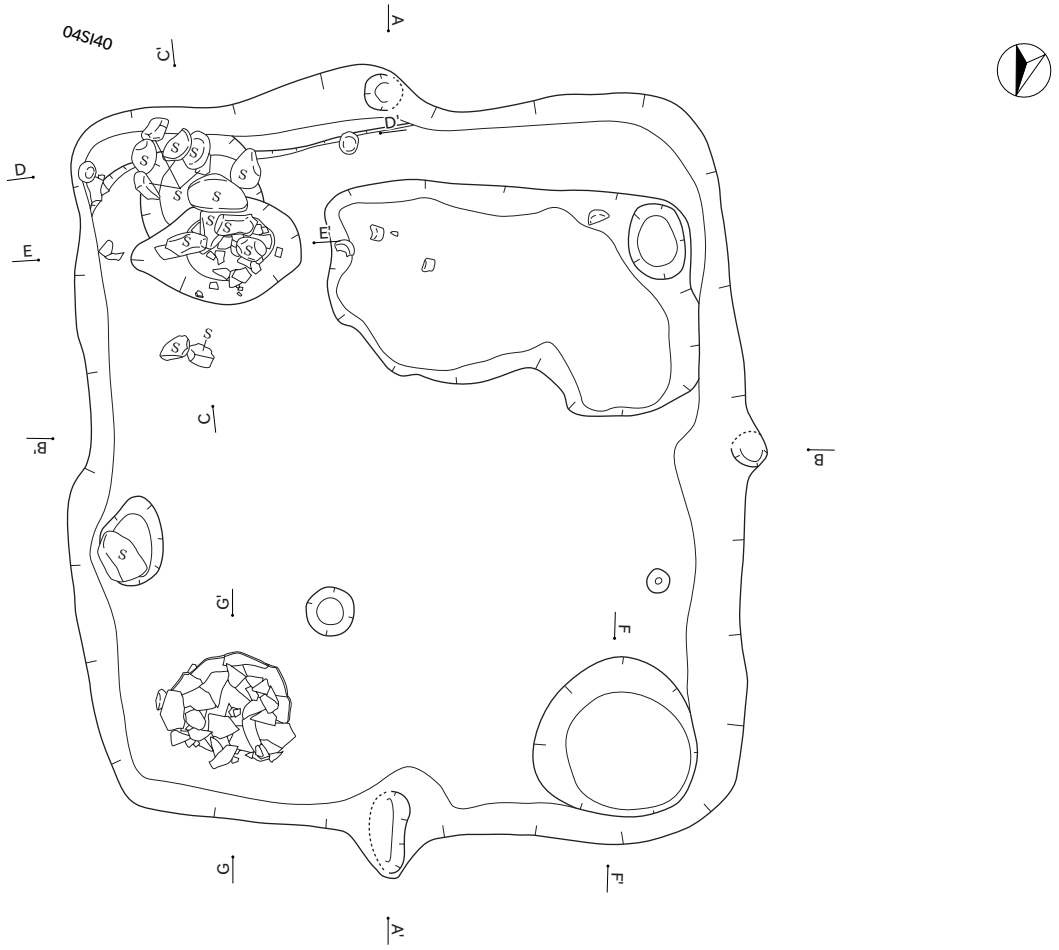




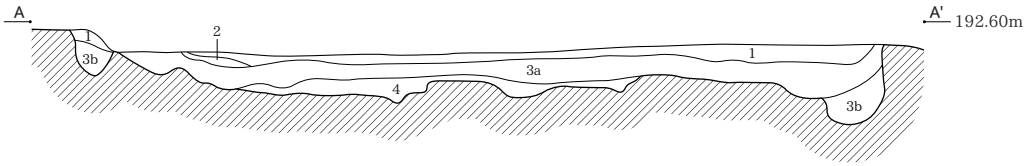


04SI39カマド
1　暗オリーブ褐色粘質土。灰色砂質土含む。
2　オリーブ黒色粘質土。
3　オリーブ黒色粘質土。炭化物・焼土粒子多量に含む。
4　灰オリーブ粘質土。炭化物・焼土粒子少量含む。

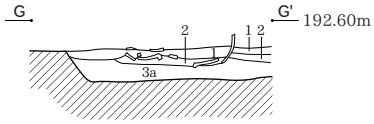
0　（1：40）　2m



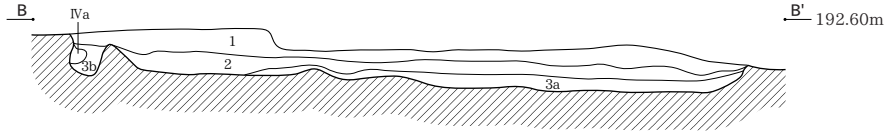
04SI40（A-A'）



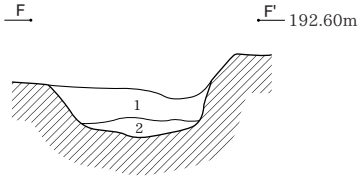
04SI40須恵器（30）



04SI40（B-B'）



04SI40-P1（F-F'）

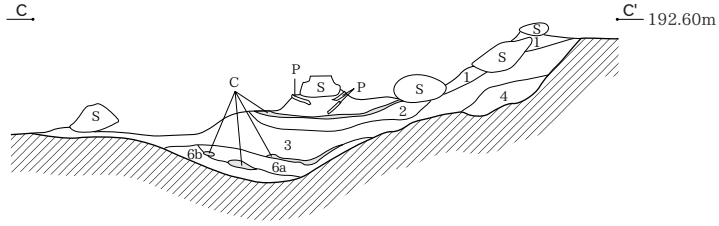


04SI40
1　灰色粘質土。炭化物・鉄分含む。
2　オリーブ灰色粘質土。灰色砂質土含む。
3a　オリーブ黒色粘質土。炭化物・灰色砂質土含む。
3b　オリーブ黒色粘質土。灰色砂質土多く含む。
4　灰色粘質土。黒色粘土ブロック・焼土・炭化物含む。

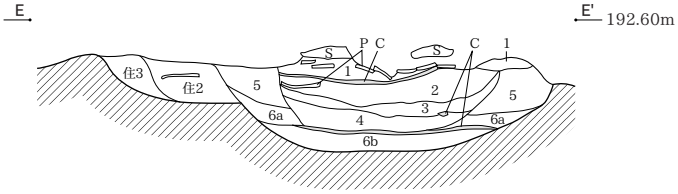
04SI40-P1（F-F'）
1　黒色粘質土。灰色砂質土含む。炭化物含む。
2　灰色粘質土。

0　（1：40）　2m

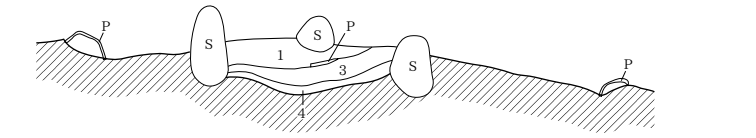
04SI40カマド（C-C'）



04SI40カマド（E-E'）

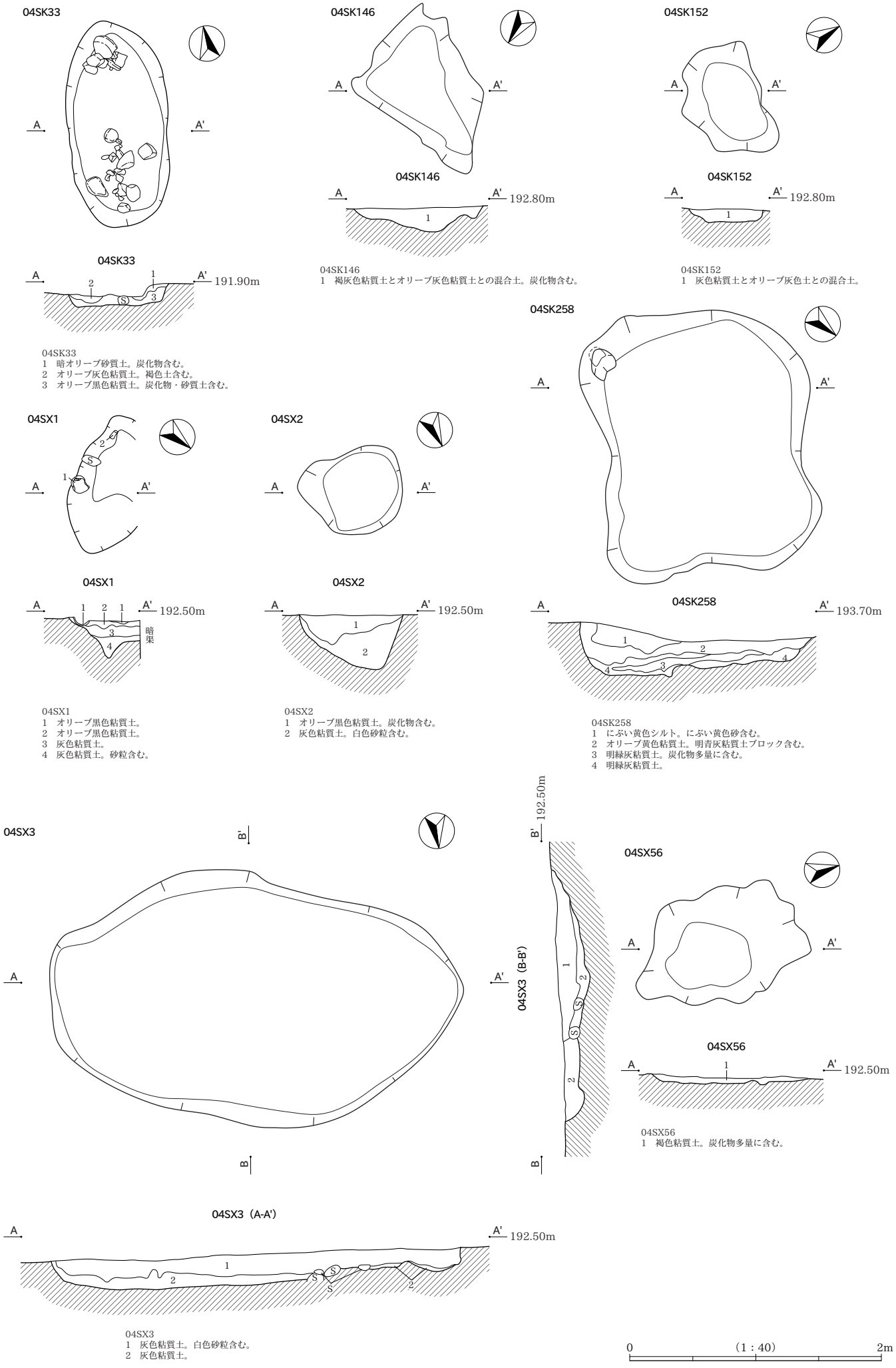


04SI40カマド（D-D'）



04SI40カマド
1　黄褐色粘質土。灰層含む。
2　オリーブ黒色粘質土。炭化物含む。
3　灰色粘質土。灰層含む。炭化物含む。
4　褐色粘質土。
5　明褐色粘質土。
6a　暗褐色粘質土。
6b　明褐色粘質土。灰色砂質土含む。

0　（1：20）　1m



04SK33
1　暗オリーブ砂質土。炭化物含む。
2　オリーブ灰色粘質土。褐色土含む。
3　オリーブ黒色粘質土。炭化物・砂質土含む。

04SK146
1　褐灰色粘質土とオリーブ灰色粘質土との混合土。炭化物含む。

04SK152
1　灰色粘質土とオリーブ灰色土との混合土。

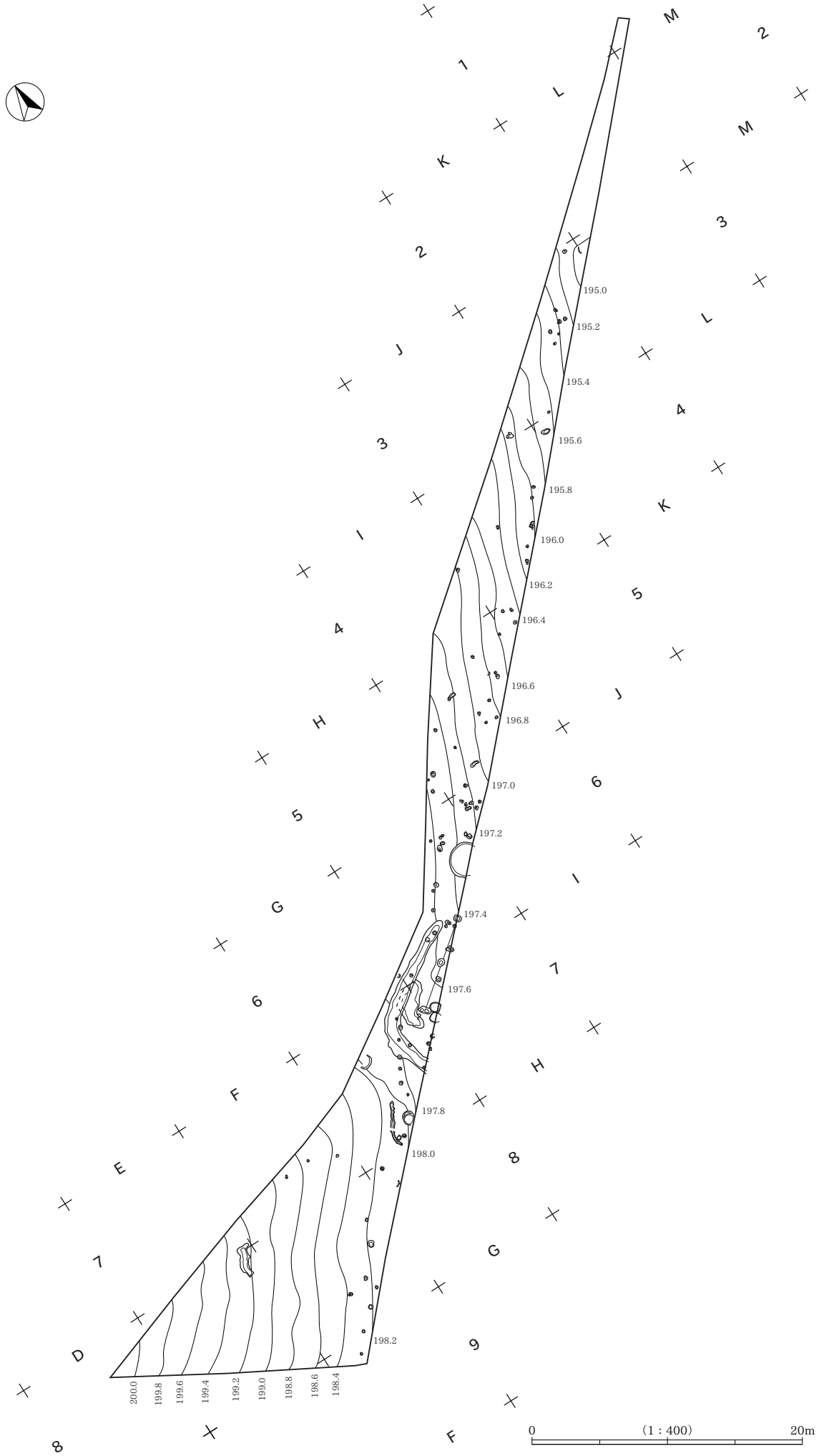
04SX1
1　オリーブ黒色粘質土。
2　オリーブ黒色粘質土。
3　灰色粘質土。
4　灰色粘質土。砂粒含む。

04SX2
1　オリーブ黒色粘質土。炭化物含む。
2　灰色粘質土。白色砂粒含む。

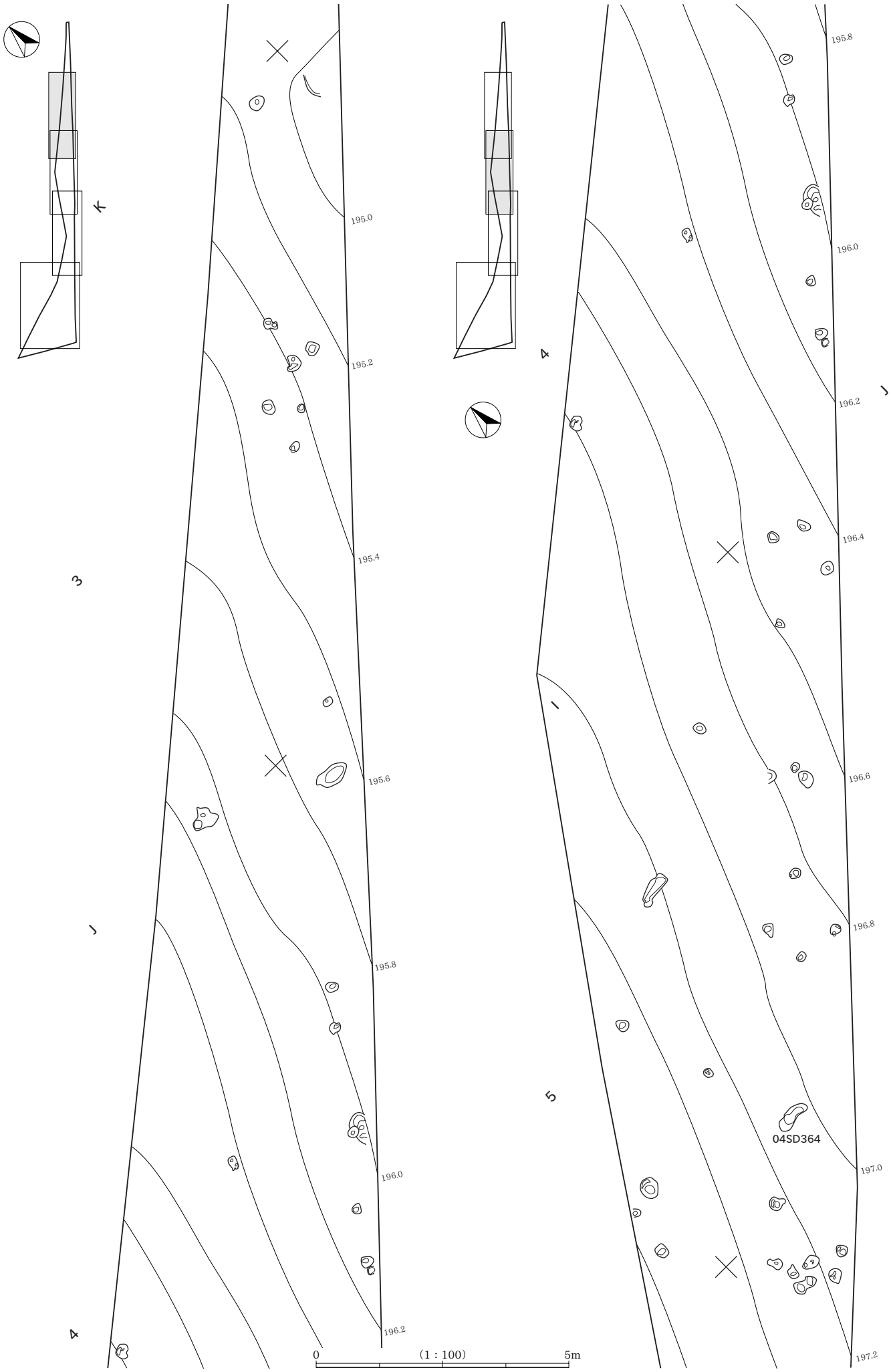
04SK258
1　にぶい黄色シルト。にぶい黄色砂含む。
2　オリーブ黄色粘質土。明青灰粘質土ブロック含む。
3　明緑灰粘質土。炭化物多量に含む。
4　明緑灰粘質土。

04SX56
1　褐色粘質土。炭化物多量に含む。

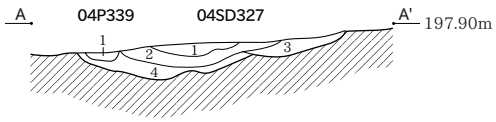
04SX3
1　灰色粘質土。白色砂粒含む。
2　灰色粘質土。


195.0
195.2
195.4
195.6
195.8
196.0
196.2
196.4
196.6
196.8
197.0
197.2
197.4
197.6
197.8
198.0
198.2
200.0
199.8
199.6
199.4
199.2
199.0
198.8
198.6
198.4
0
(1 : 400)
20m

H16年度 丘陵側 遺構分割図（1）



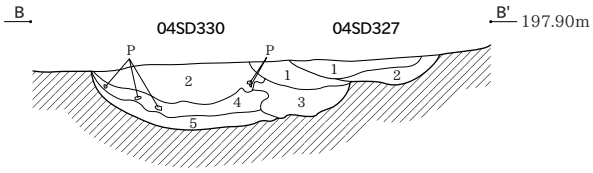
04SD327（A-A'）



04SD327（A-A'）
1　黒色粘質土。黄褐色粘質土ブロック少量含む。
2　黒褐色粘質土と黄褐色粘質土との混合土。
3　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土少量含む。
4　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土多く含む。

04P339
1　黒色粘質土。黄褐色粘質土少量含む。

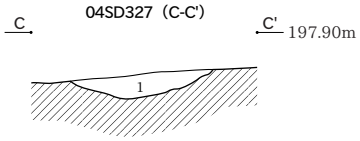
04SD327・04SD330（B-B'）



04SD330
1　黄褐色粘質土と黒色粘質土との混合土。
2　黒褐色粘質土。
3　褐色粘質土。
4　黒色粘質土。
5　黄褐色粘質土と黒色粘質土との混合土。

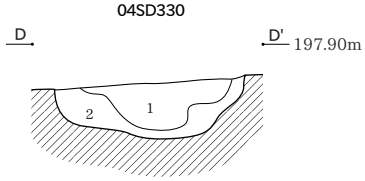
04SD327（B-B'）
1　褐色粘質土。黄褐色粘質土少量含む。
2　黒色粘質土。

04SD327（C-C'）



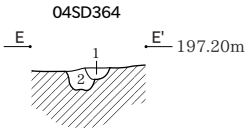
04SD327（C-C'）
1　黒色粘質土。

04SD330



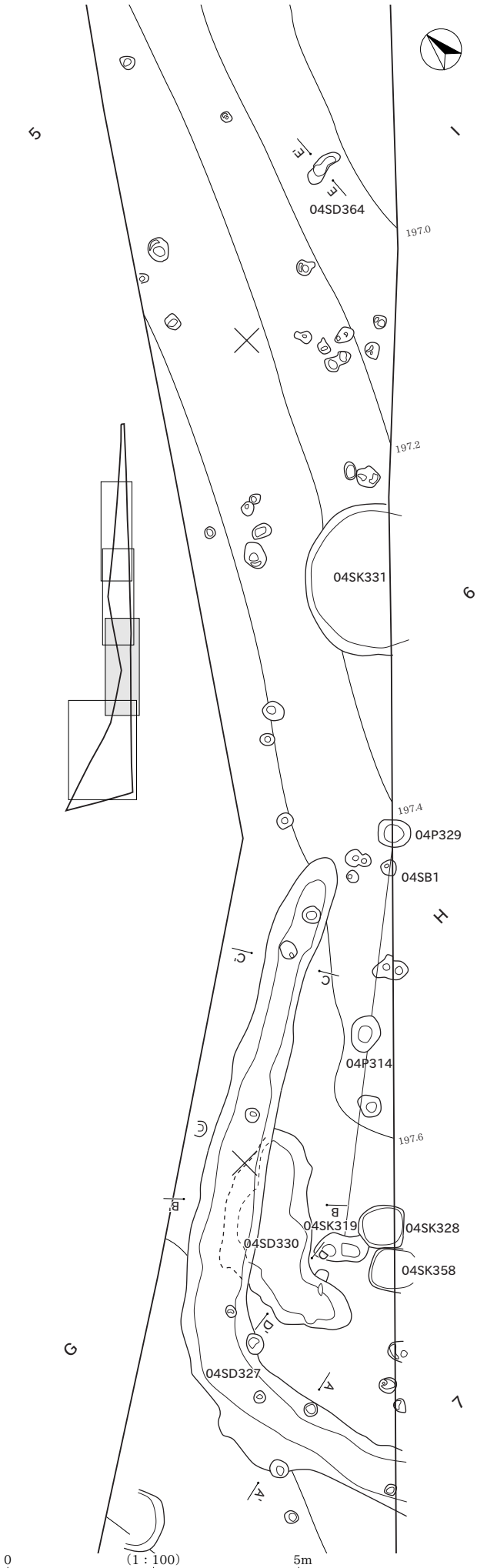
04SD330
1　黒色粘質土。
2　黄褐色粘質土と黒色粘質土との混合土。

04SD364



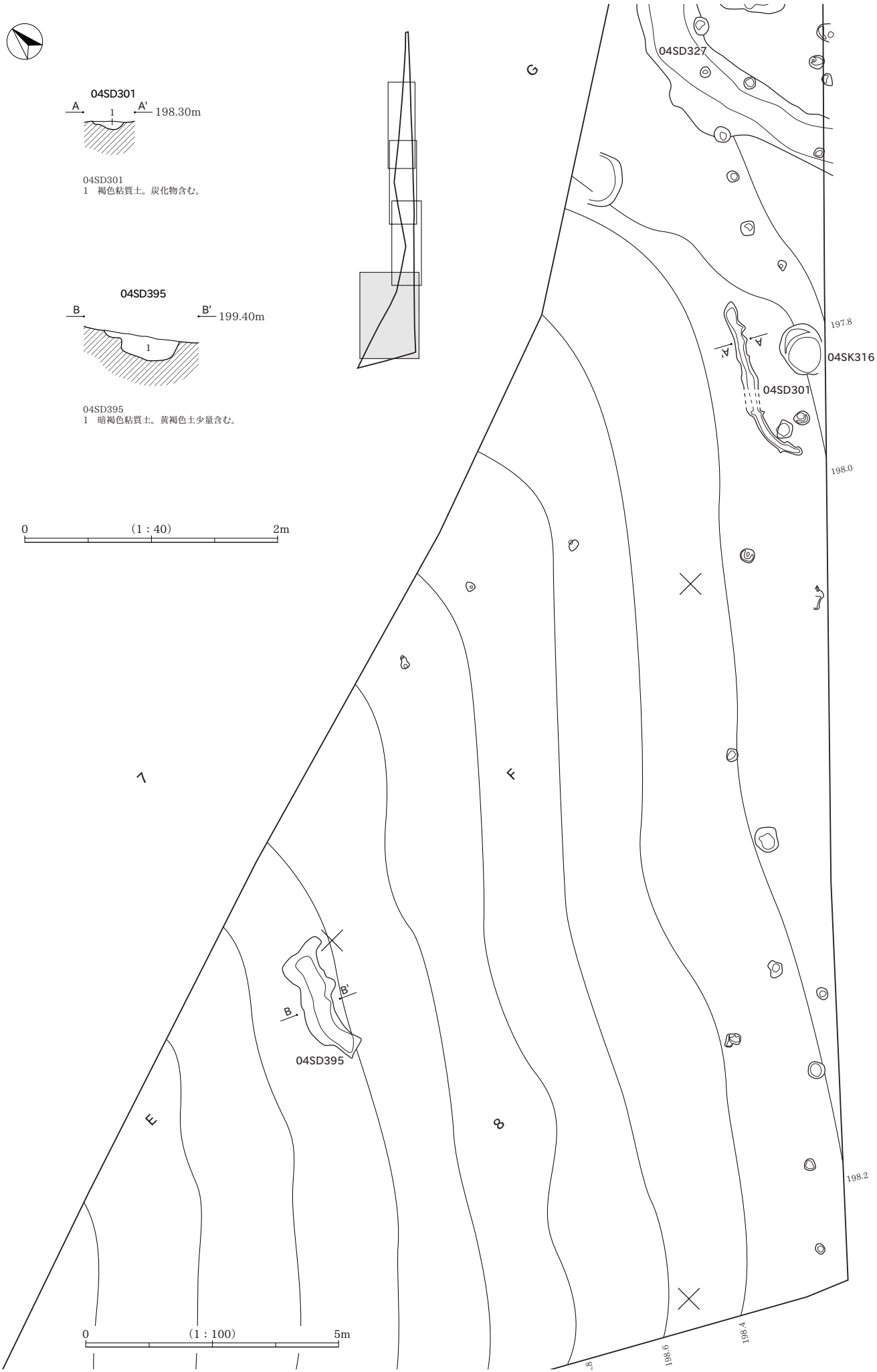
04SD364
1　黒褐色粘質土。黄褐色土ブロック含む。
2　黒褐色粘質土と黄褐色粘質土との混合土。

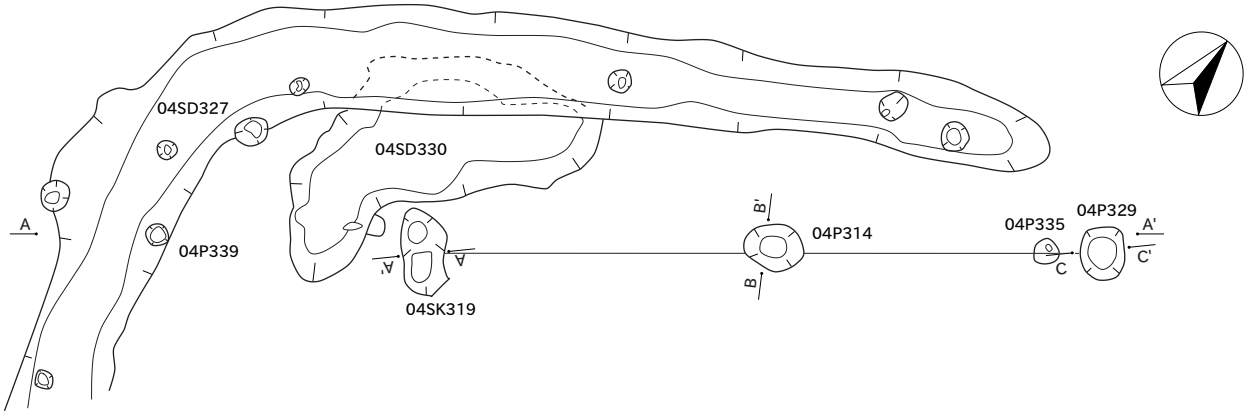
0　（1：40）　2m

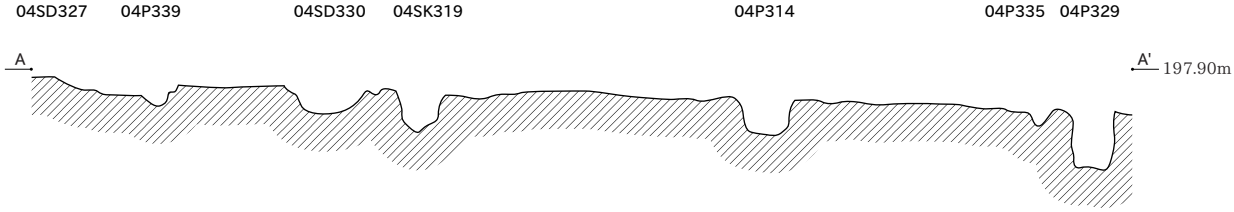


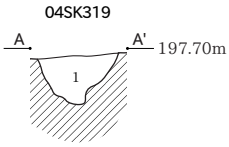
0　（1：100）　5m

H16年度 丘陵側 遺構分割図（3）

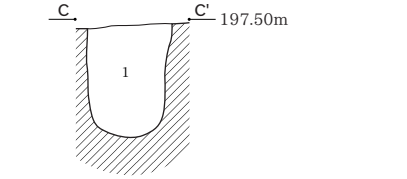


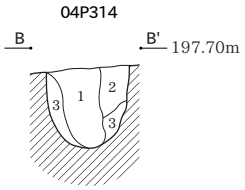






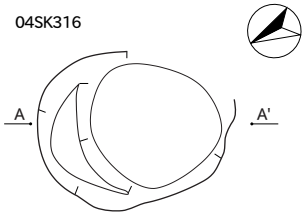
04SK319
1　黒色粘質土と黄褐色粘質土との混合土。

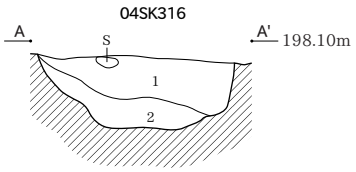




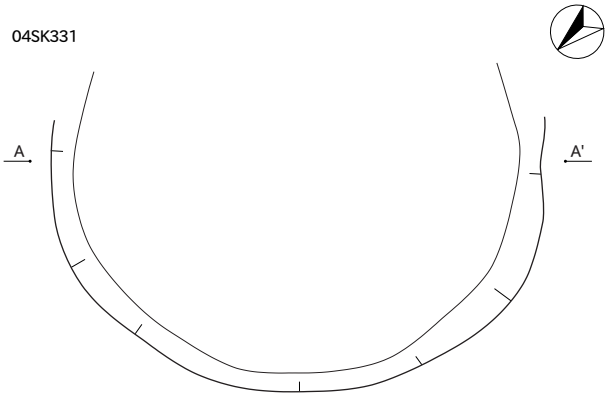
04P314
1　黒褐色粘質土。黄褐色土ブロック少量含む。
2　黒色粘質土。黄褐色土ブロック少量含む。
3　黒色粘質土と明黄褐色粘質土の混合土。

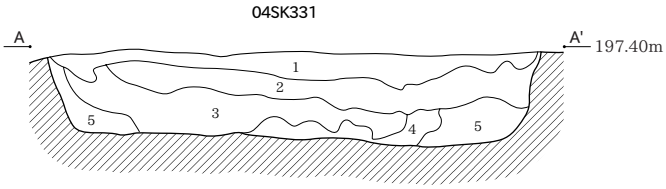
04P329
1　黒色粘質土。黄褐色土ブロック少量含む。



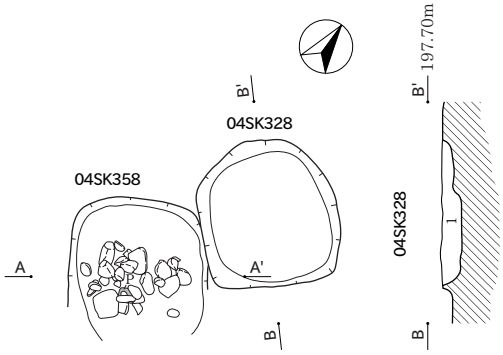


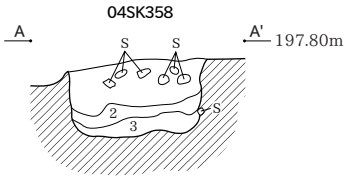
04SK316
1　黒色粘質土。黄褐色土少量含む。
2　黒色粘質土と黄褐色粘質土との混合土。





04SK331
1　黒色粘質土。
2　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロック含む。
3　暗褐色粘質土。黄褐色粘質土の割合が高い混合土。
4　黒褐色粘質土。黄褐色土含む。
5　黒色粘質土。

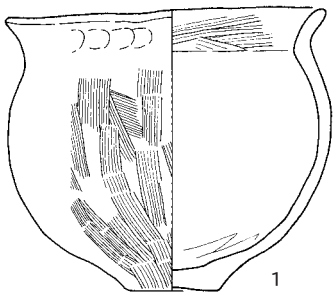


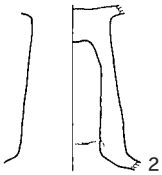


04SK328
1　灰黄褐色粘質土と褐色粘質土との混合土。小径の礫含む。

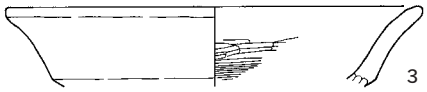
04SK358
1　暗褐色粘質土。礫含む。
2　にぶい黄褐色粘質土。黄褐色土含む。
3　黒褐色粘質土。

水田側　04SX1

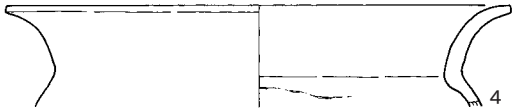




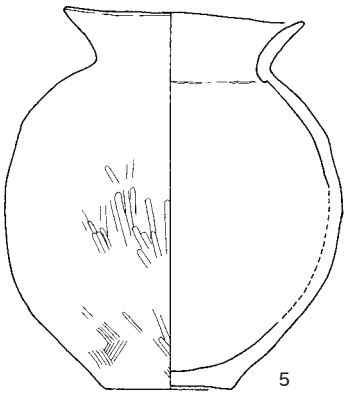
水田側　04SX2



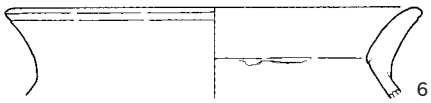
水田側　04SX3

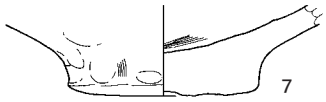


水田側　04P10

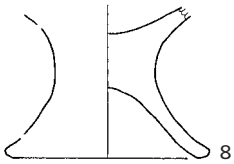


水田側　04SD17-1

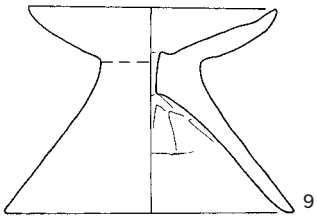


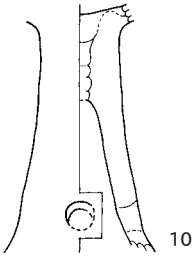


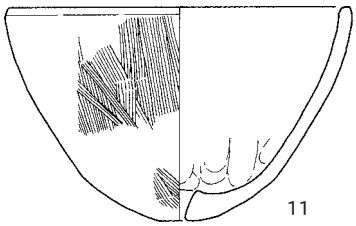
水田側　04P12

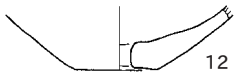


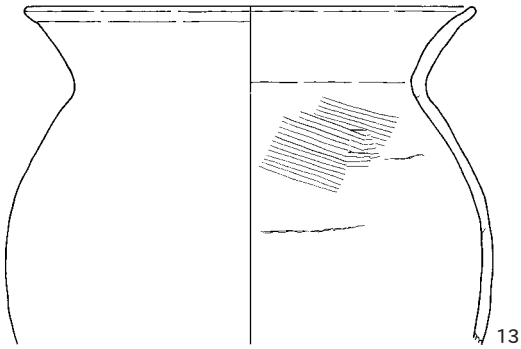
水田側　古墳時代の土器

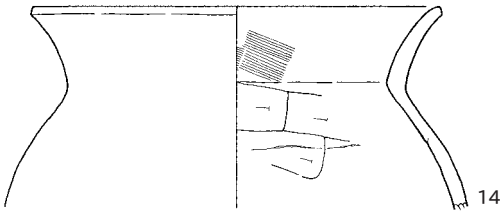


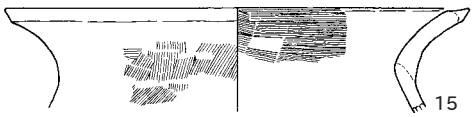


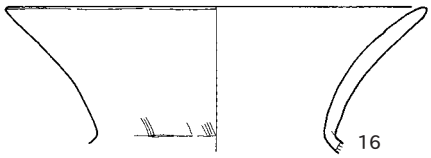






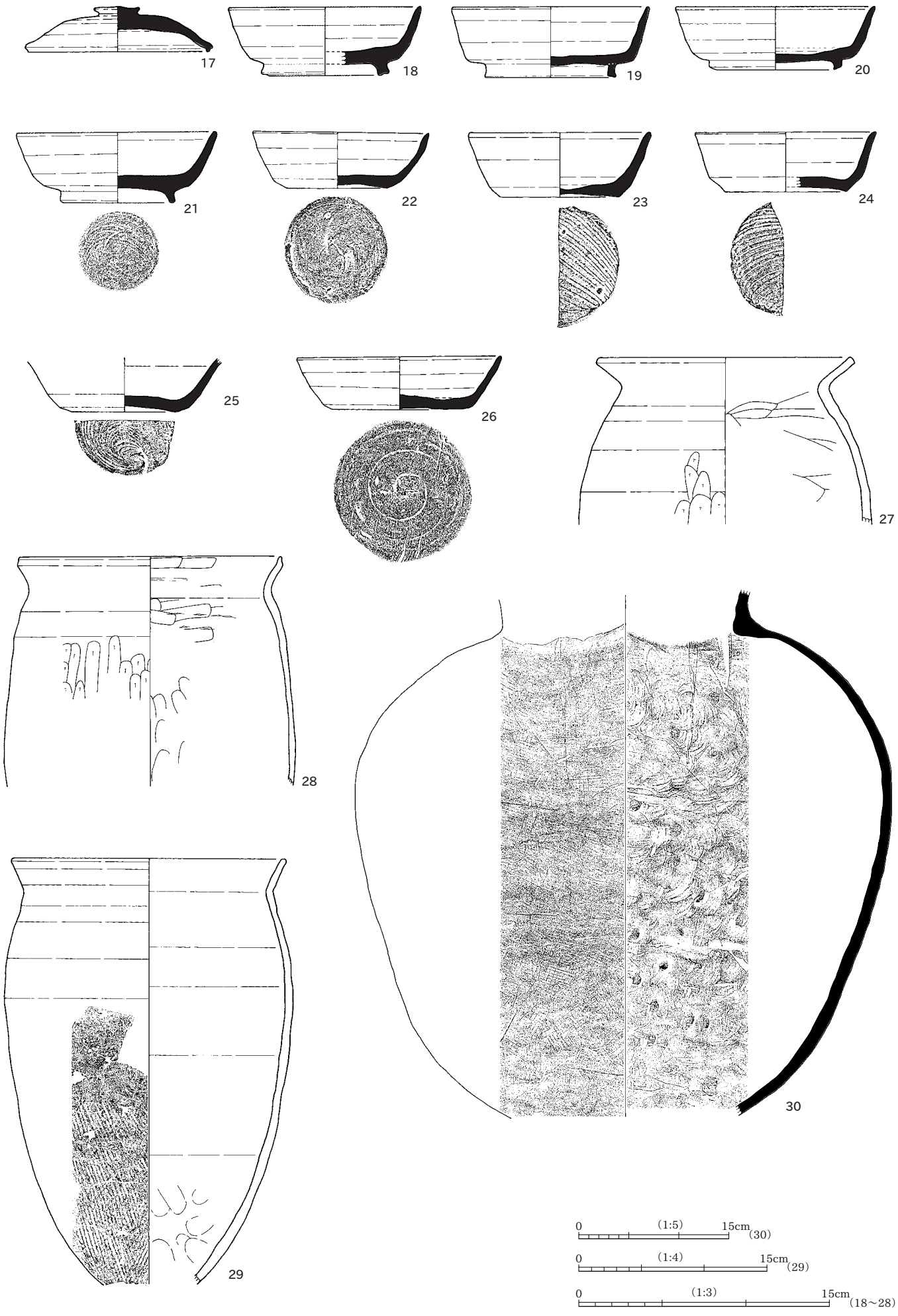




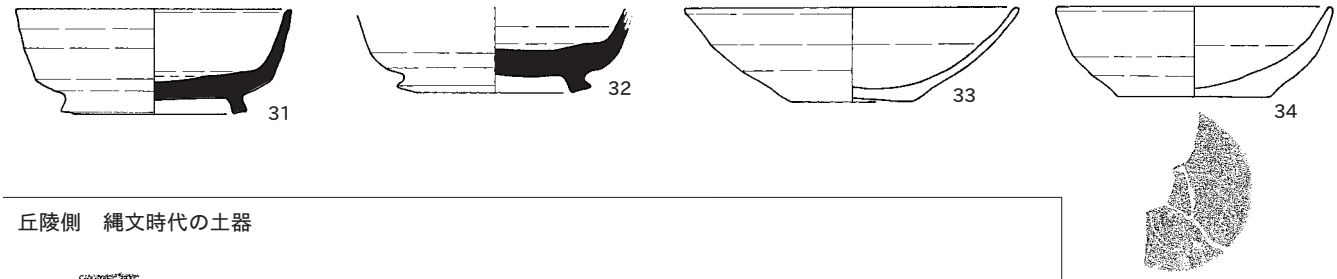


0　(1:3)　15cm

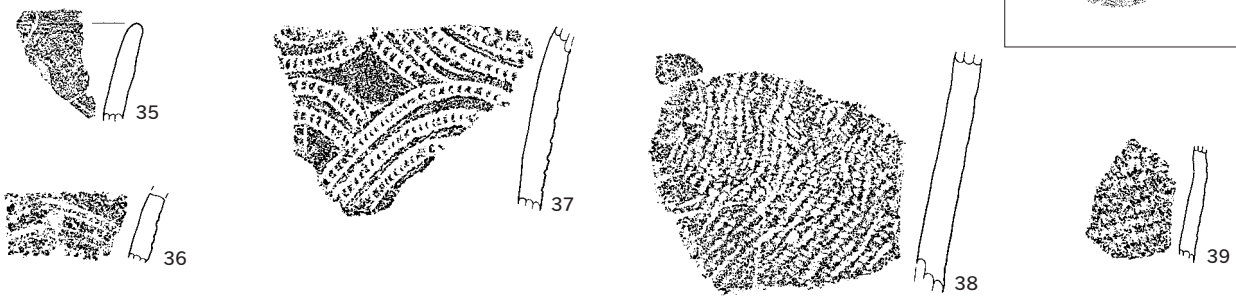
水田側　04SI40


17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0 (1:5) 15cm (30)
0 (1:4) 15cm (29)
0 (1:3) 15cm (18～28)

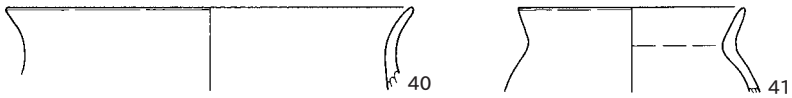
水田側　古代の土器



丘陵側　縄文時代の土器



丘陵側　04SD330

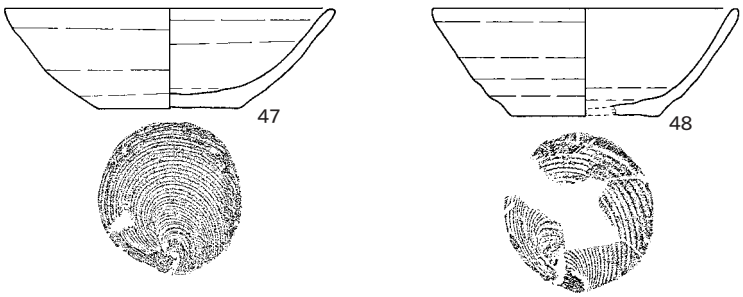


丘陵側　04SK331

丘陵側　04SK358

丘陵側　古代の土器

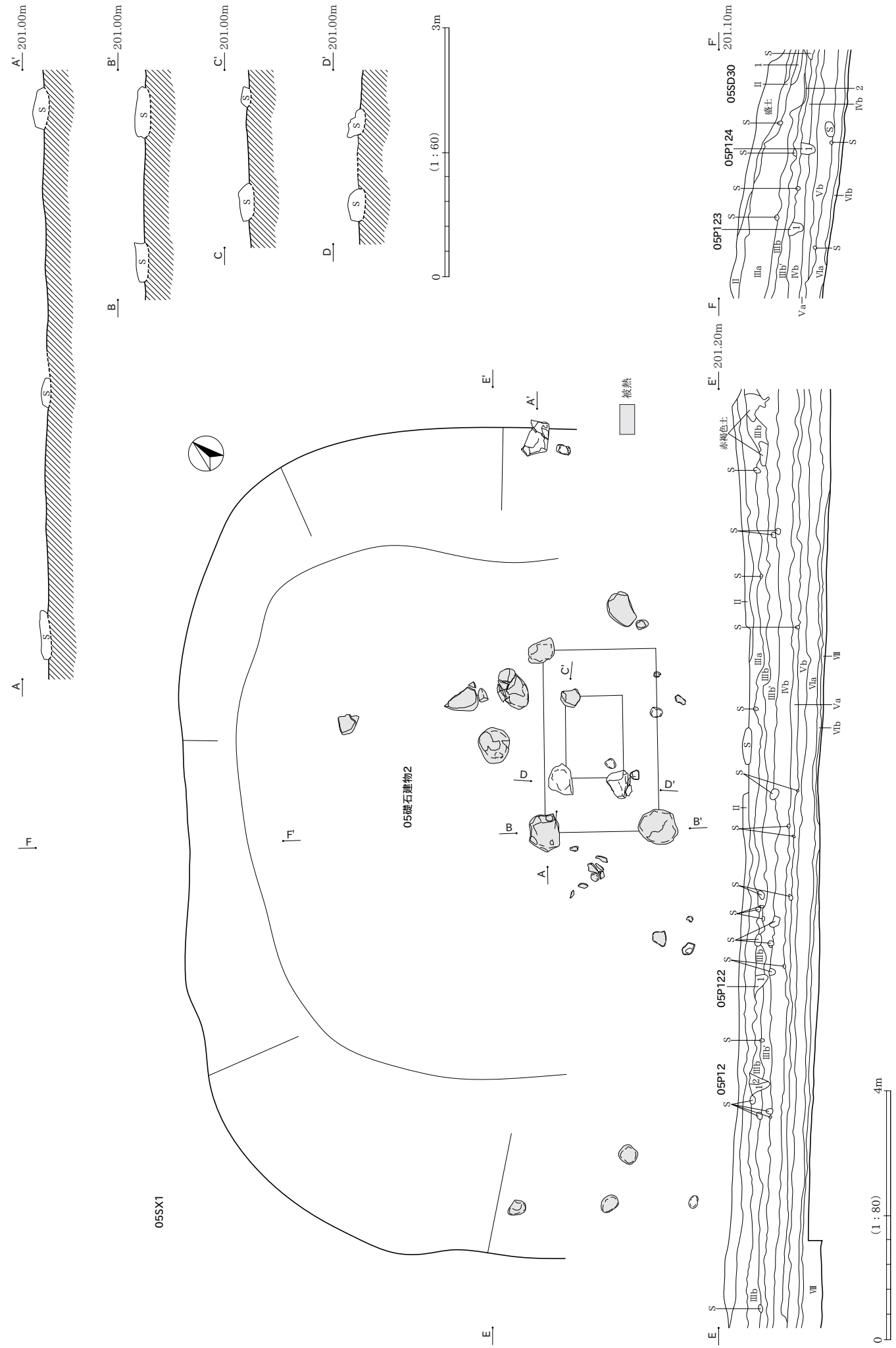
丘陵側　04SD327

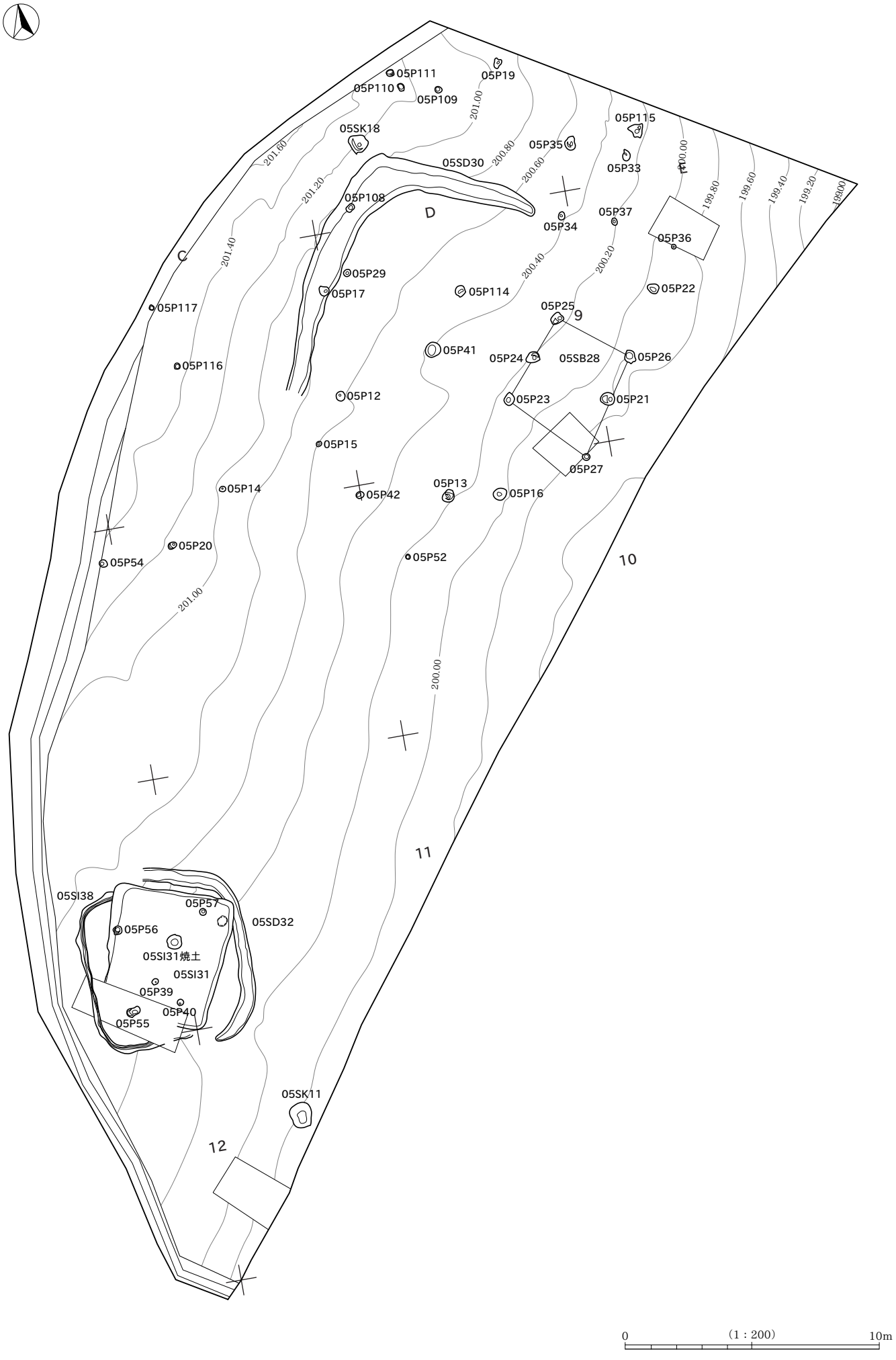


0　(1:5)　15cm (44)

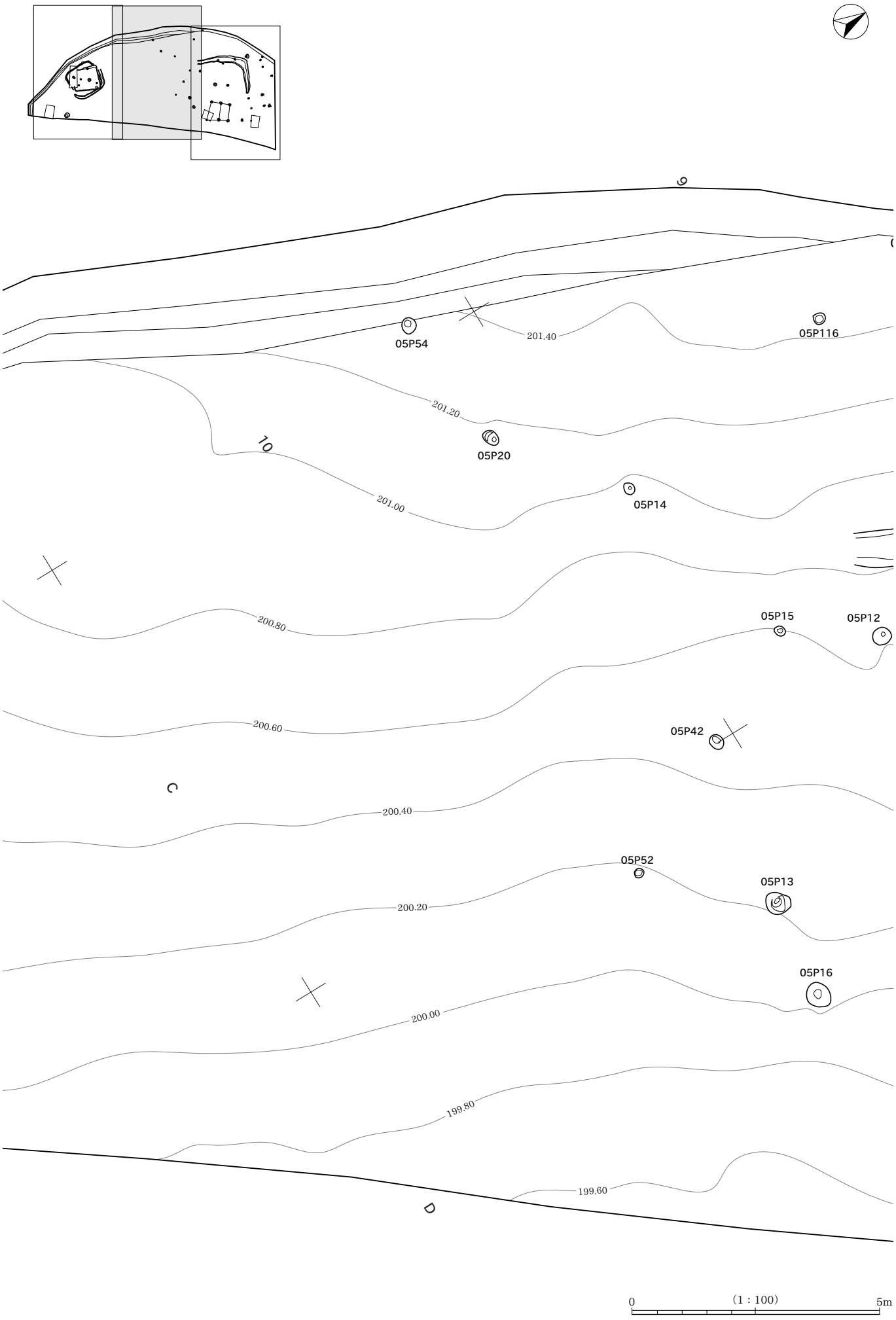
0　(1:3)　15cm

201.40
201.20
201.00
200.80
200.60
201.60
201.80
201.00
05SX1
05礎石建物2
E
9
D
C
10
11
12
0
(1：200)
10m

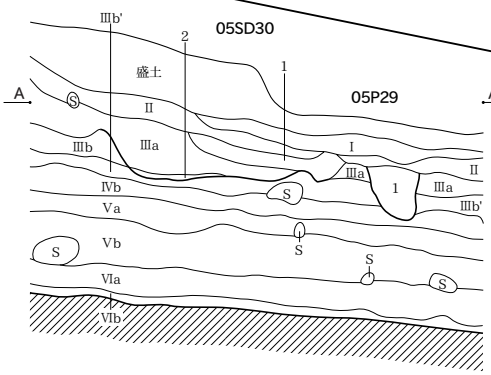

A' 201.00m
B' 201.00m
C' 201.00m
D' 201.00m
3m
(1 : 60)
0
A
B
C
D
F
F'
E'
A'
被熱
05SX1
05礎石建物2
C'
D
D'
B
B'
A
E
F' 201.10m
05SD30
05P124
05P123
盛土
E' 201.20m
赤褐色土
05P122
05P12
4m
(1 : 80)
0


05P111
05P19
05P110
05P109
201.00
05SK18
05P115
201.60
05P35
200.80
05SD30
200.60
05P33
200.00
201.20
05P108
D
05P37
199.80
199.60
199.40
199.20
199.00
05P34
05P36
C
201.40
200.40
200.20
05P29
05P17
05P114
05P22
05P117
05P25
9
05P41
05P24
05SB28
05P26
05P116
05P12
05P23
05P21
05P15
05P27
05P14
05P42
05P13
05P16
05P20
05P52
10
05P54
201.00
200.00
11
05SI38
05P57
05SD32
05P56
05SI31焼土
05SI31
05P39
05P40
05P55
05SK11
12
0
(1 : 200)
10m

H17年度 中層 遺構分割図（1）


9
10
C
D
05P54
05P116
05P20
05P14
05P15
05P12
05P42
05P52
05P13
05P16
201.40
201.20
201.00
200.80
200.60
200.40
200.20
200.00
199.80
199.60
0
(1：100)
5m

05P117
05P116
C
201.60
201.40
A
05SK18
05P111
201.20
05P108
05P110
05P17
05P29
A'
05P109
05P12
05SD30
D
201.00
05P19
05P41
05P114
200.80
200.60
05P35
05P34
200.40
05P23
05P24
05P25
05P33
05P115
05P16
05P37
200.20
05SB28
9
200.00
E
05P21
05P26
05P22
05P36
05P27
199.80
10
199.60
199.40
199.20
199.00

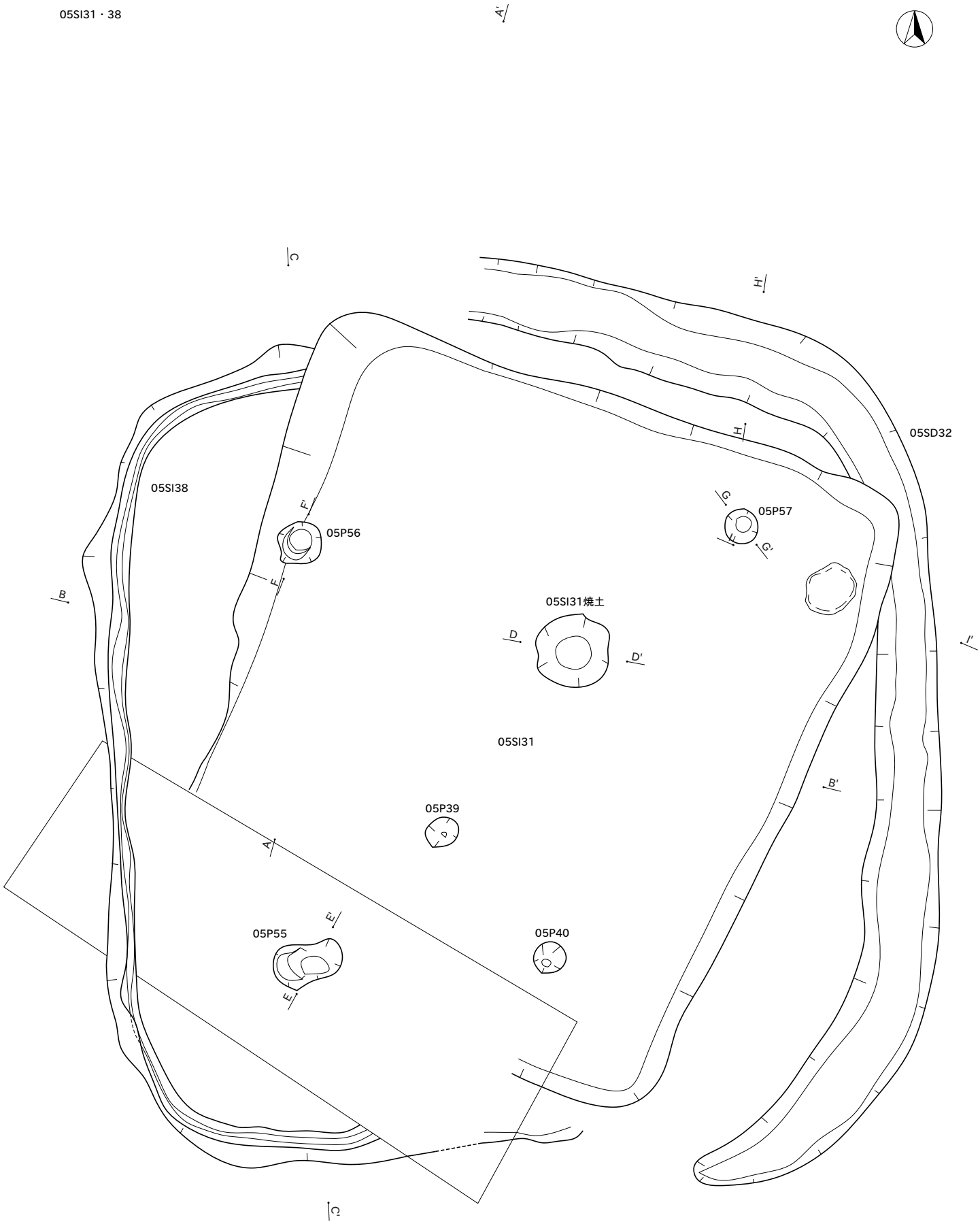


05SD30
1　黒褐色粘質土。礫（径5～10mm）をごく少量含む。
2　暗褐色粘質土。

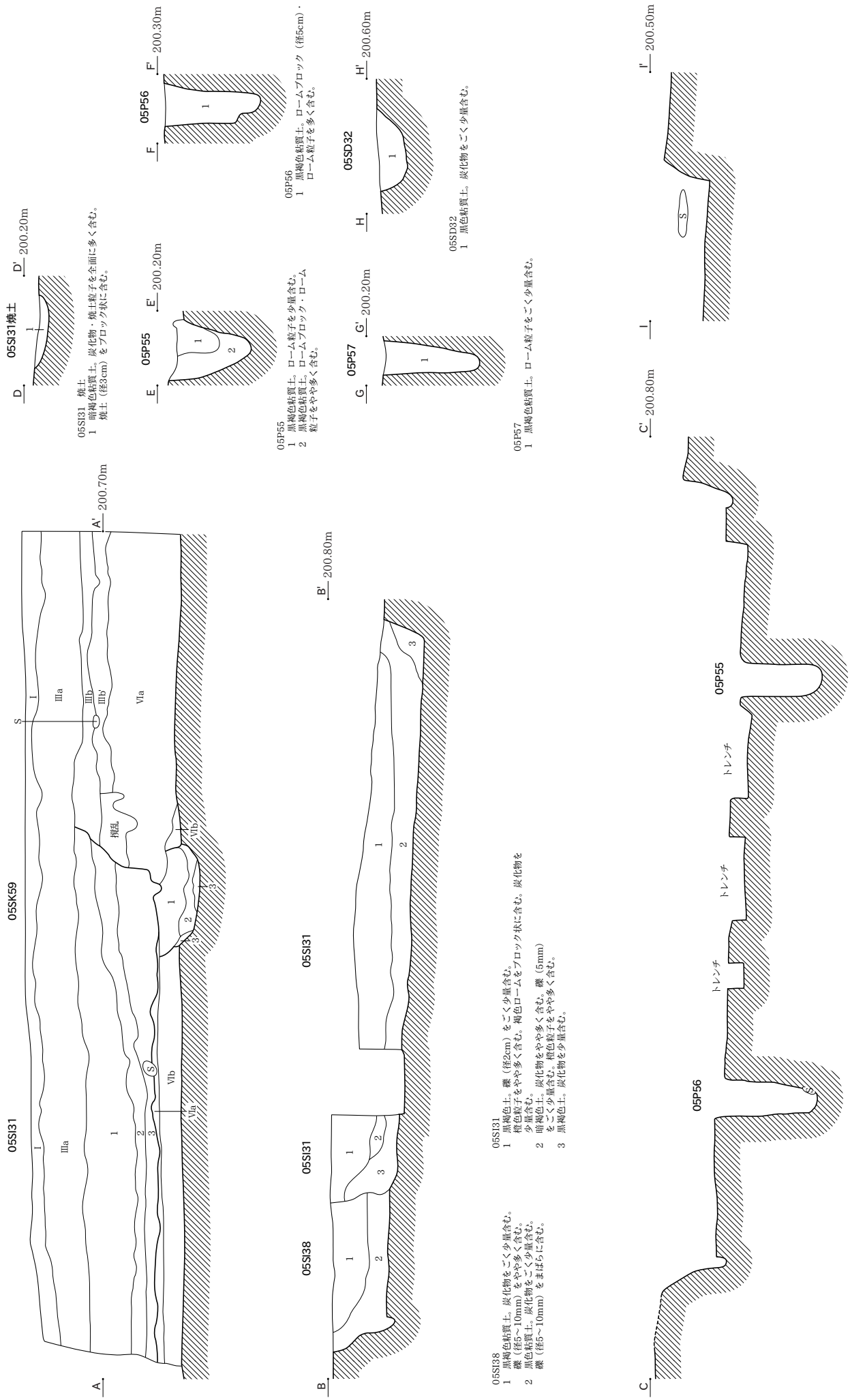
0　（1：40）　2m

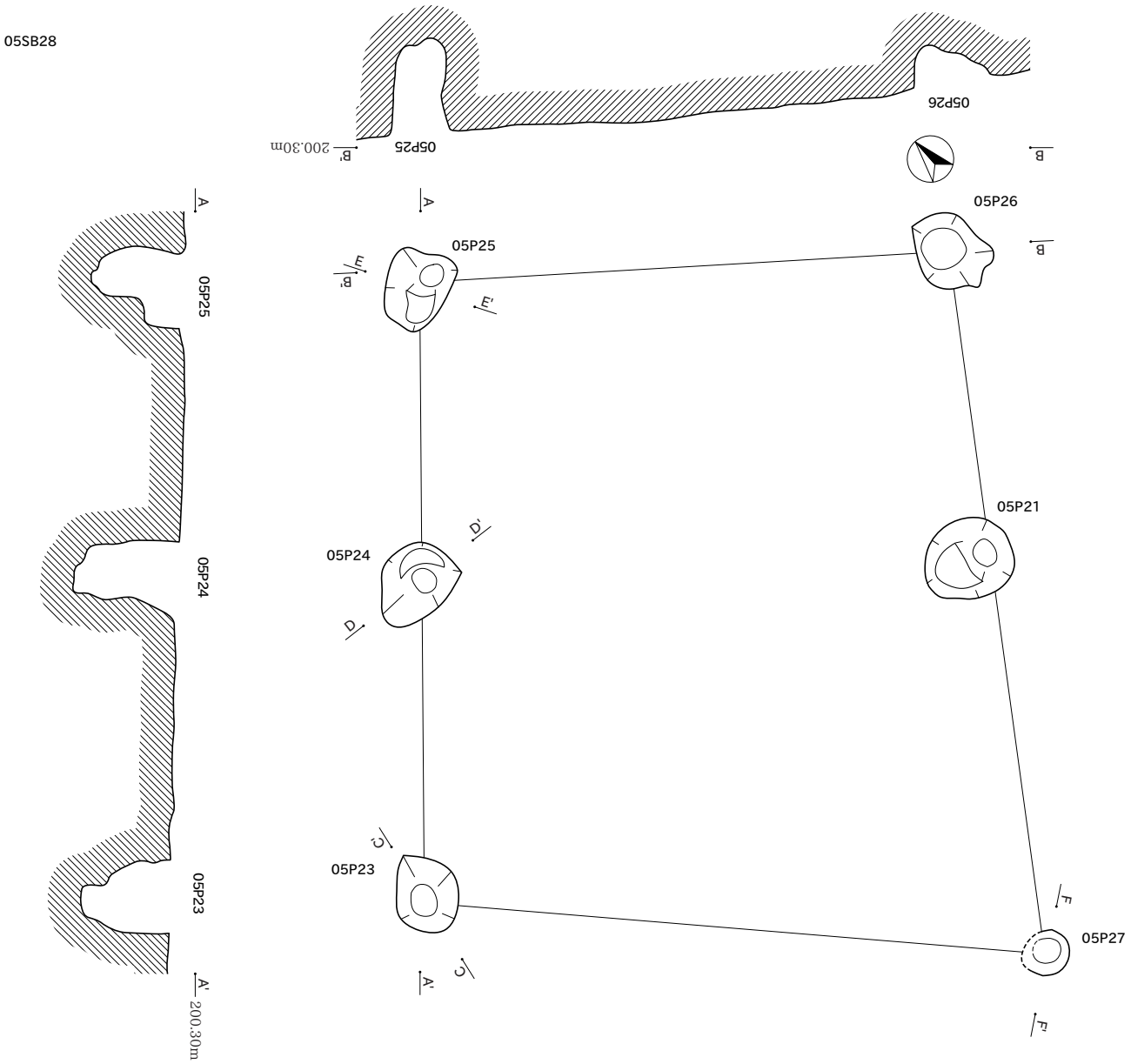
0　（1：100）　5m

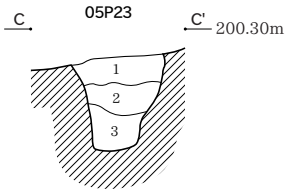
05SI31・38



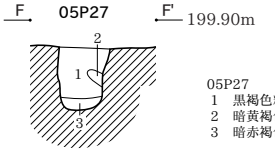
0　(1：40)　2m


05SI31焼土
D
D'
200.20m
05SI31 焼土
1 暗褐色粘質土。炭化物・焼土粒子を全面に多く含む。焼土（径3cm）をブロック状に含む。
05P56
F
F'
200.30m
05P56
1 黒褐色粘質土。ロームブロック（径5cm）・ローム粒子を多く含む。
05P55
E
E'
200.20m
05P55
1 黒褐色粘質土。ローム粒子を少量含む。
2 黒褐色粘質土。ロームブロック・ローム粒子をやや多く含む。
05D32
H
H'
200.60m
05SD32
1 黒色粘質土。炭化物をごく少量含む。
05P57
G
G'
200.20m
05P57
1 黒褐色粘質土。ローム粒子をごく少量含む。
I
I'
200.50m
C
C'
200.80m
S
2m
(1：40)
0
A
A'
200.70m
05SK59
05SI31
IIIa
IIIb
IIIb'
VIa
VIb
撹乱
B
B'
200.80m
05SI38
05SI31
05SI38
1 黒褐色粘質土。炭化物をごく少量含む。
礫（径5～10mm）をやや多く含む。
2 黒色粘質土。炭化物をごく少量含む。
礫（径5～10mm）をまばらに含む。
05SI31
1 黒褐色土。礫（径2cm）をごく少量含む。
橙色粒子をやや多く含む。褐色ロームをブロック状に含む。炭化物を少量含む。
2 暗褐色土。炭化物をやや多く含む。礫（5mm）をごく少量含む。橙色粒子をやや多く含む。
3 黒褐色土。炭化物を少量含む。
05P55
05P56
トレンチ
トレンチ
トレンチ

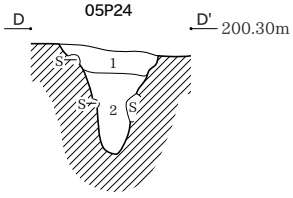




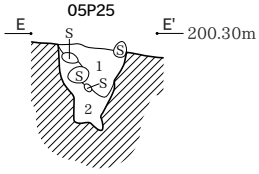
05P23
1　黒褐色粘質土。礫(径5cm)をごく少量含む。
2　黒色粘質土。礫(径3cm)をごく少量含む。
3　黒褐色粘質土。明黄褐色粘質土を全面にごく少量含む。



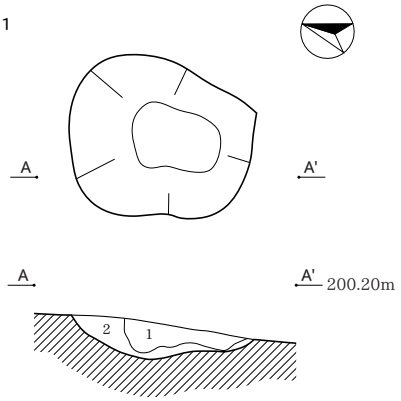
05P27
1　黒褐色粘質土。礫(径5～10mm)を全面にごく少量含む。
2　暗黄褐色粘質土。
3　暗赤褐色粘質土。礫(径5mm)をまばらに少量含む。



05P24
1　黒褐色粘質土。礫(径5cm)をまばらに少量含む。
2　極暗褐色粘質土。礫(径5～20cm)を全面に多く含む。



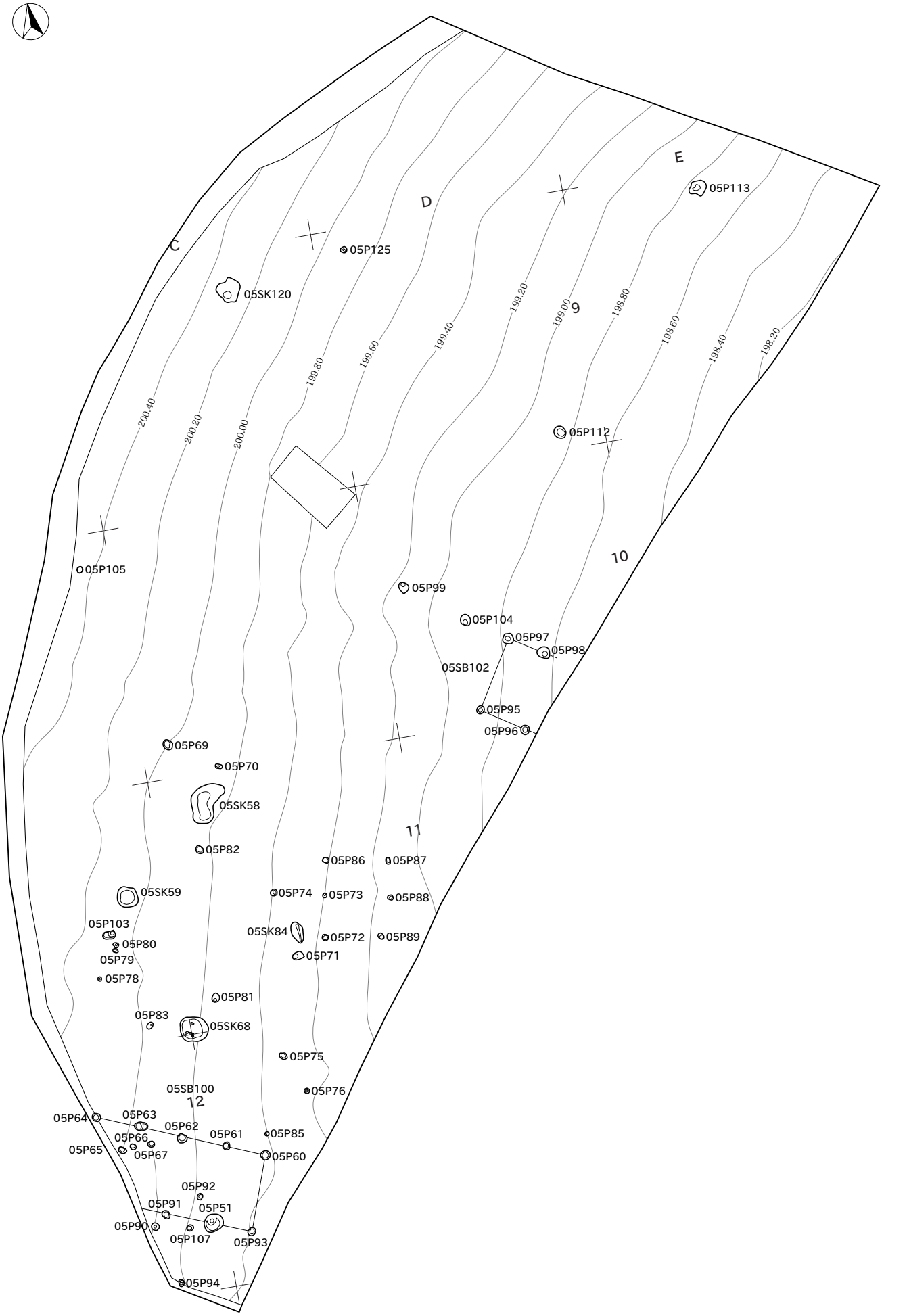
05P25
1　黒色粘質土。礫(径10～20cm)を全面に多く含む。
2　黒褐色粘質土。礫(径10～20cm)を全面に多く含む。



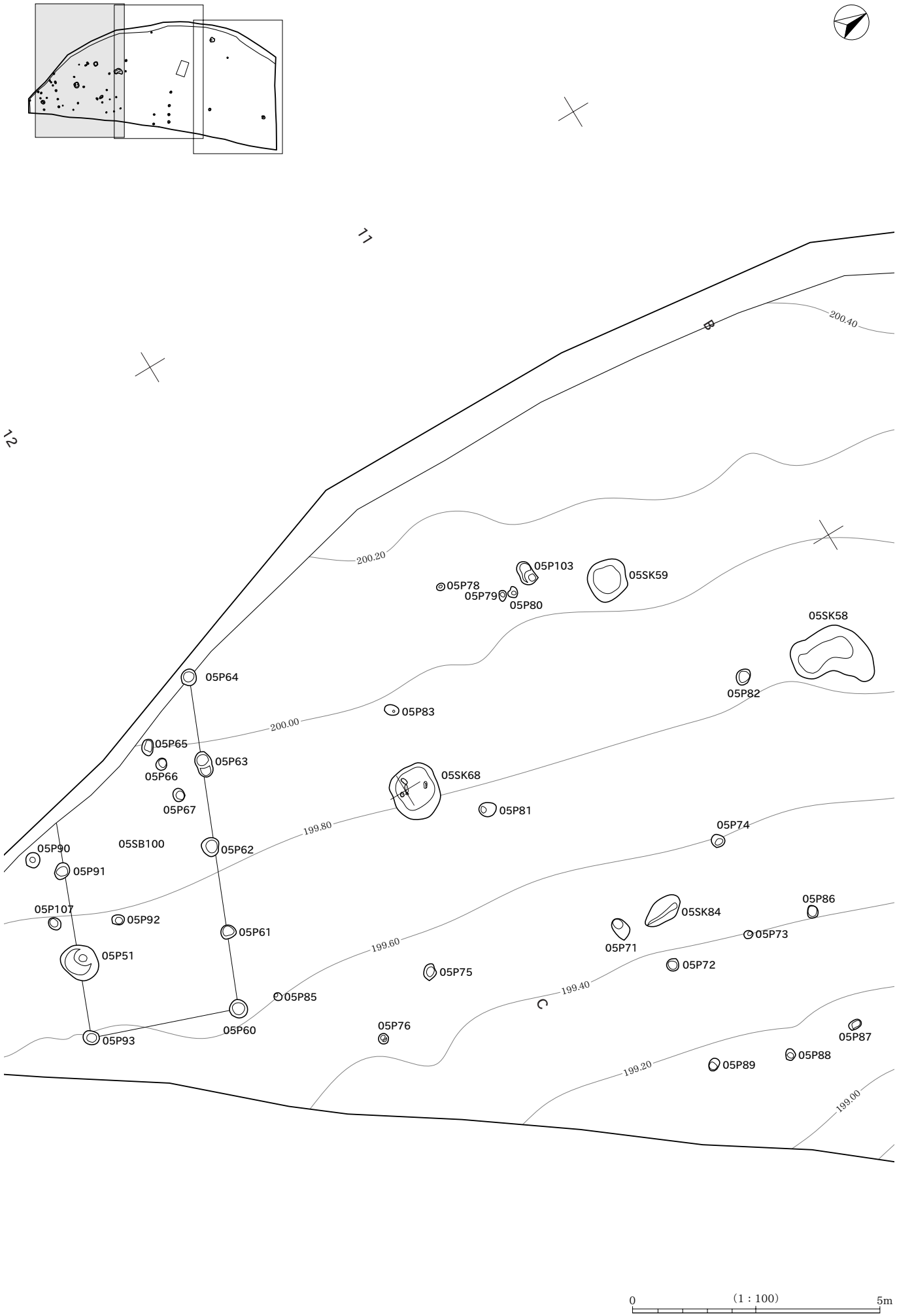
05SK11
1　暗褐色粘質土。炭化物(径7mm)をまばらに少量含む。赤褐色粘質土をブロック状にやや多く含む。
2　黒褐色粘質土。炭化物(径5mm)をまばらに少量含む。

0　(1：40)　2m

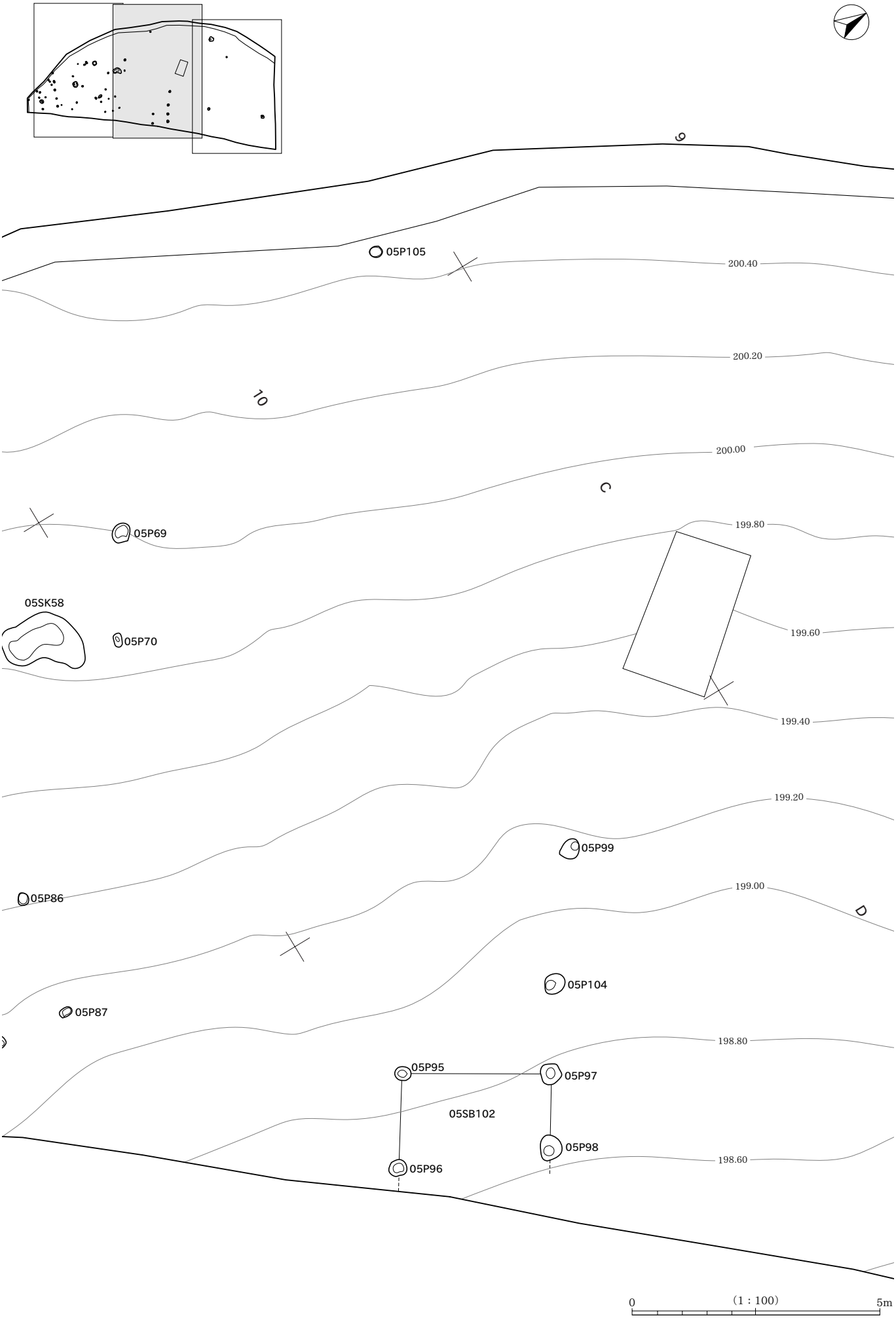
H17年度 下層 遺構全体図

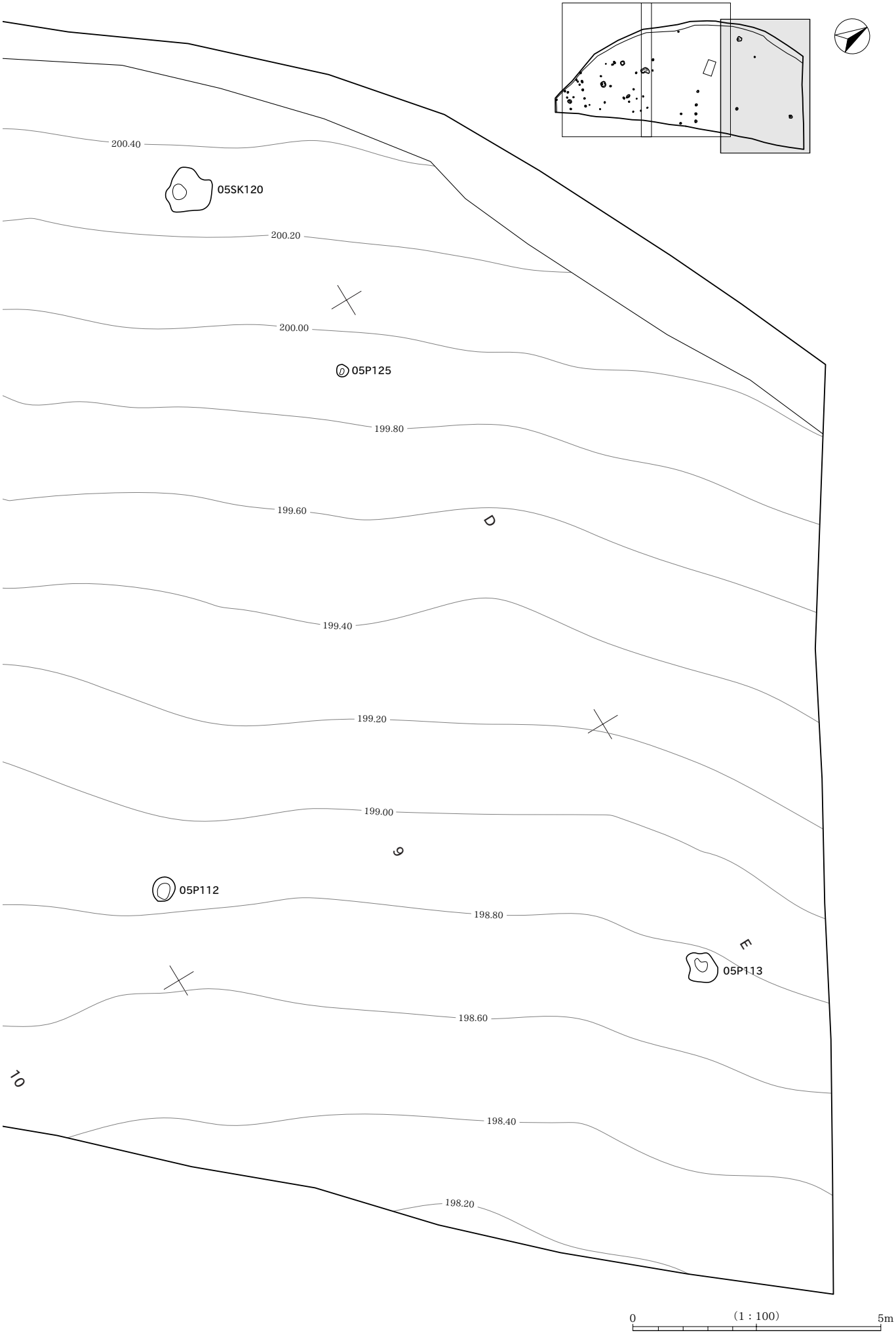


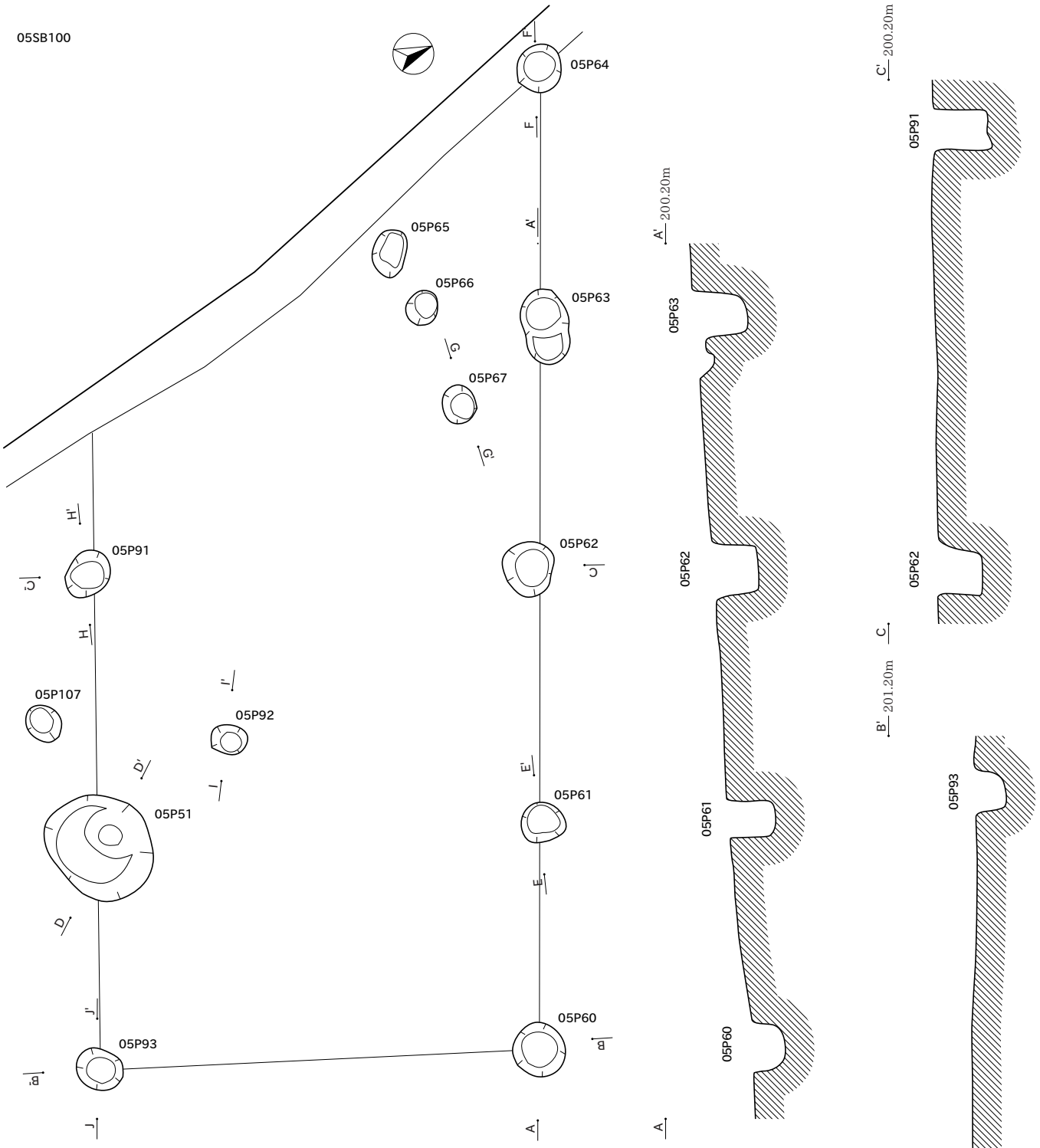
0 (1：200) 10m

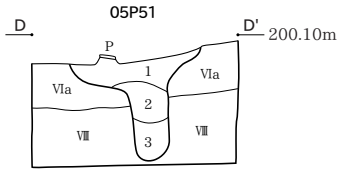

11
12
B
200.40
200.20
200.00
199.80
199.60
199.40
199.20
199.00
05P103
05SK59
05P78
05P79
05P80
05SK58
05P82
05P64
05P83
05P65
05P63
05P66
05P67
05SK68
05P81
05P74
05P90
05SB100
05P62
05P91
05P107
05P92
05P61
05SK84
05P86
05P71
05P73
05P51
05P72
05P75
05P85
05P60
05P76
05P93
05P87
05P88
05P89
0
(1：100)
5m

H17年度 下層 遺構分割図（2）

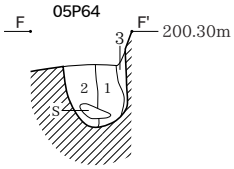



200.40
05SK120
200.20
200.00
05P125
199.80
199.60
D
199.40
199.20
199.00
9
05P112
198.80
E
05P113
198.60
10
198.40
198.20
0
(1：100)
5m

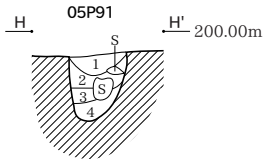




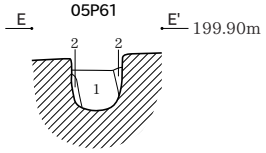
05P51
1　黒色粘質土。炭化物をまばらにごく少量含む。
　　礫(径1cm)をまばらにごく少量含む。黄褐色粘質土を
　　ブロック状に少量含む。
2　黒色粘質土。礫(径3～5cm)をごく少量含む。黄褐色粘質土
　　をブロック状にやや多く含む。
3　黒色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。



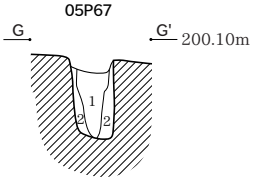
05P64
1　黒色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状にやや多く含む。
2　黒色粘質土。黄褐色粘質土をまばらにごく少量含む。
3　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に多く含む。



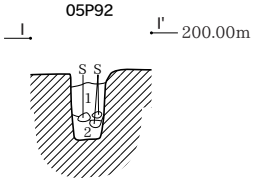
05P91
1　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土をまばらに少量含む。
2　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土をまばらに少量含む。
3　黒褐色粘質土。礫(径1cm)をまばらに少量含む。
4　黒褐色粘質土。



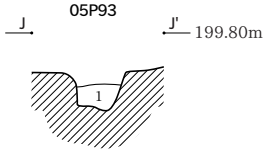
05P61
1　黒色粘質土。礫(径5mm)をまばらにごく少量含む。
　　黄褐色粘質土をごく少量含む。
2　黒色粘質土。黄褐色粘質土を全面にやや多く含む。



05P67
1　黒褐色粘質土。炭化物をごく少量含む。
2　にぶい黄褐色粘質土。黄褐色粘質土をまばらに含む。

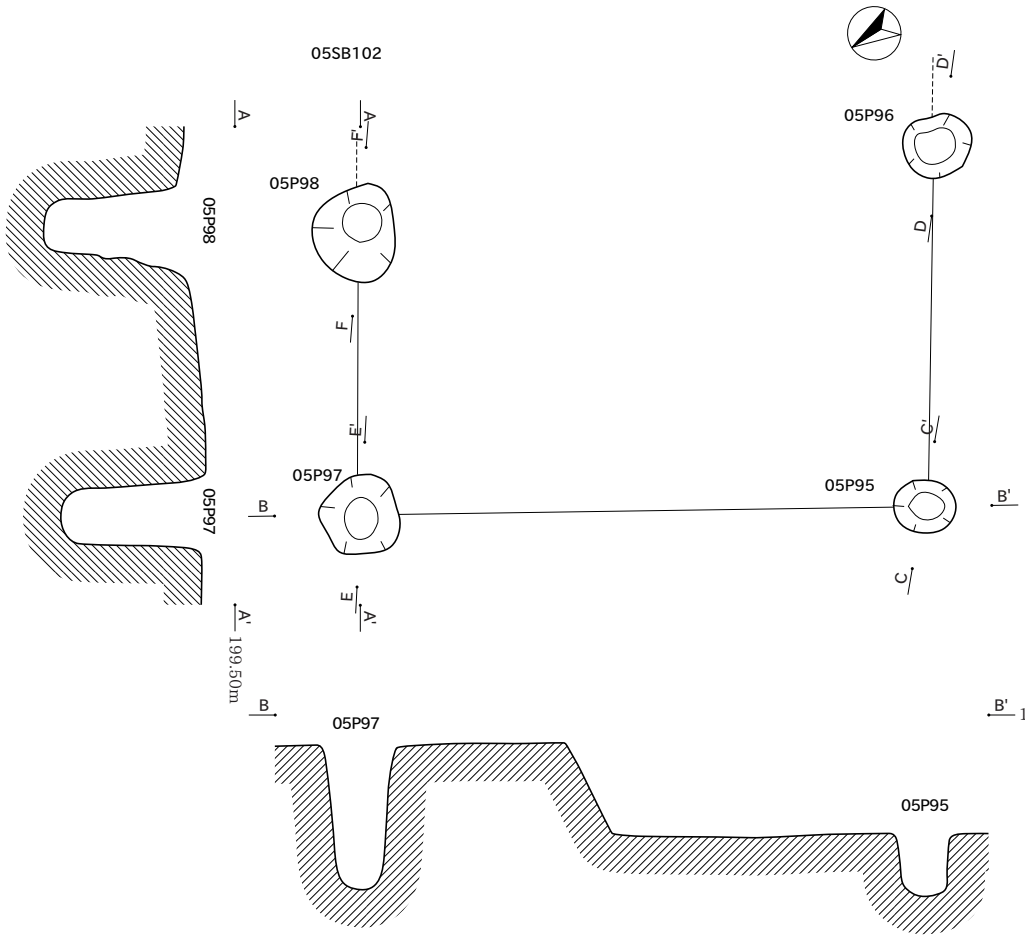


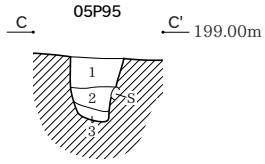
05P92
1　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土をまばらに少量含む。
2　黒褐色粘質土。



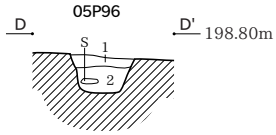
05P93
1　黒褐色粘質土。炭化物をまばらにごく少量含む。

0　(1：40)　2m

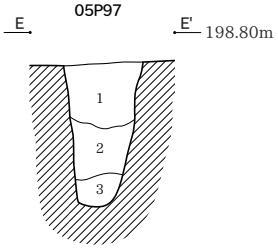




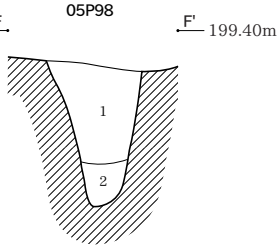
05P95
1　黒褐色粘質土。礫(径5～10mm)をまばらにごく少量含む。黄褐色粘質土をまばらに少量含む。
2　黒褐色粘質土。
3　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土を全面にやや多く含む。



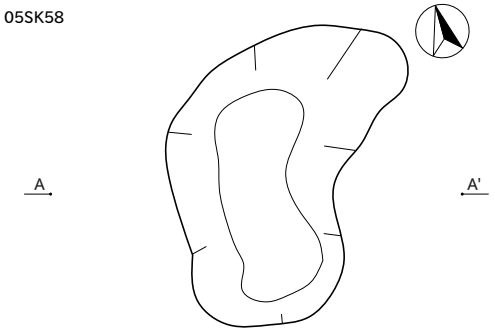
05P96
1　黒褐色粘質土。炭化物をまばらにごく少量含む。礫(径1～2cm)をまばらに少量含む。黄褐色粘質土を全面にやや多く含む。
2　極暗褐色粘質土。礫(径1～2cm)をまばらにごく少量含む。黄褐色粘質土をブロック状にやや多く含む。

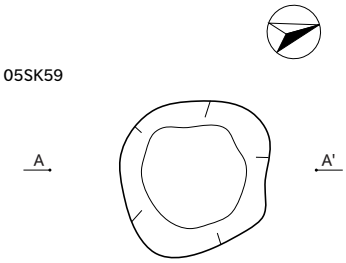


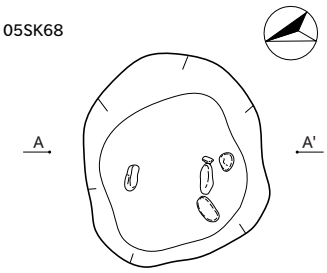
05P97
1　黒色粘質土。礫(径5～30mm)をまばらにごく少量含む。
2　黒褐色粘質土。黄褐色粘質土を全面にやや多く含む。
3　黒褐色粘質土。礫(径1cm)をまばらにごく少量含む。

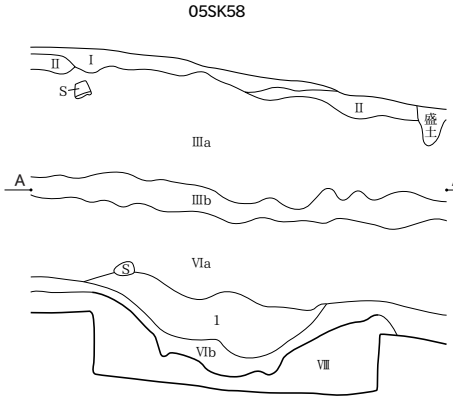


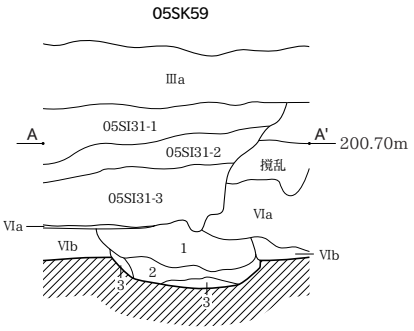
05P98
1　黒褐色粘質土。礫(径3cm)をまばらに少量含む。
2　黒褐色粘質土。礫(径1～3cm)をまばらにごく少量含む。



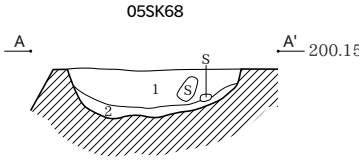








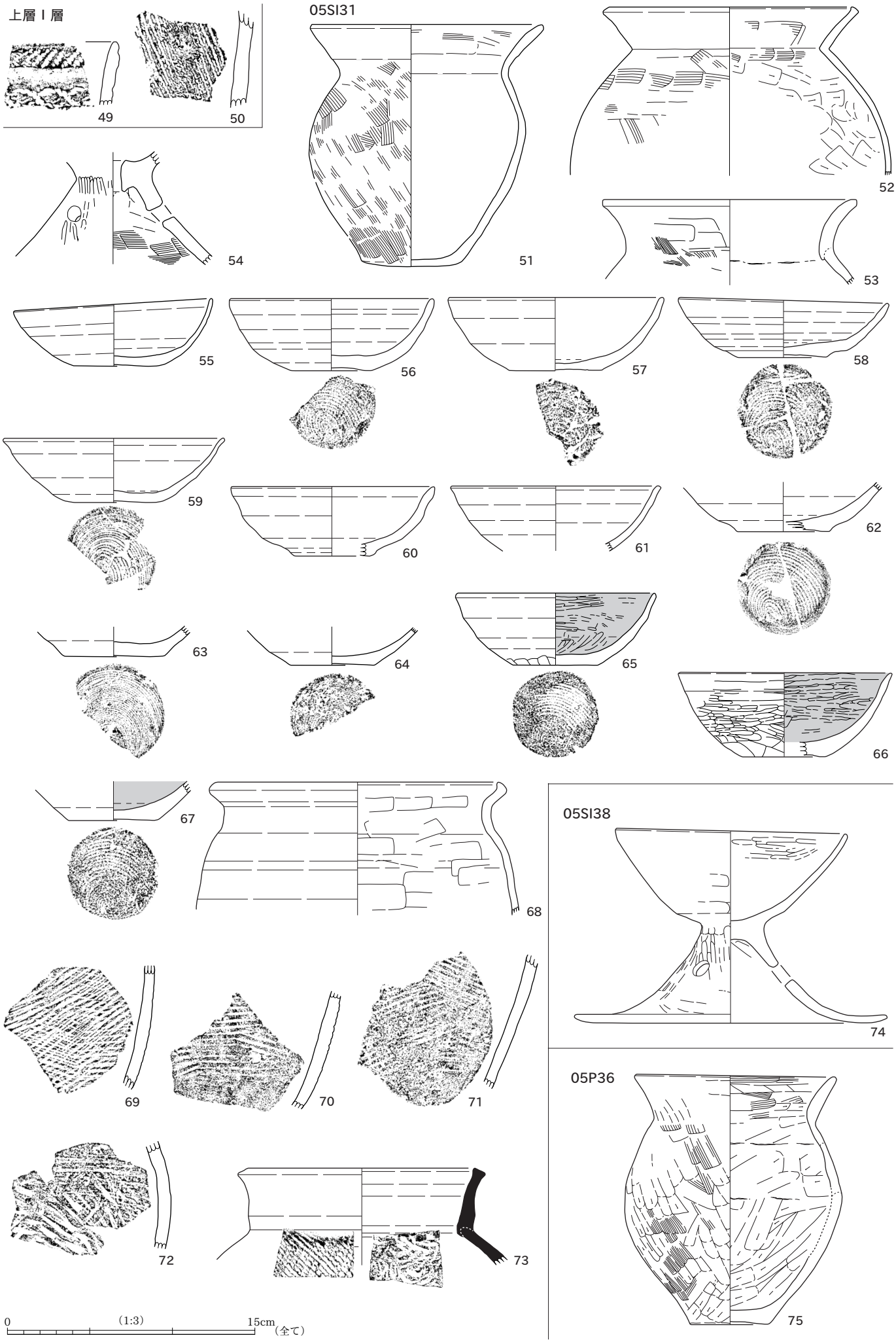
05SK59
1　黒褐色粘質土。
2　黒褐色粘質土。ローム粒子を含む。
3　黄褐色粘質土。

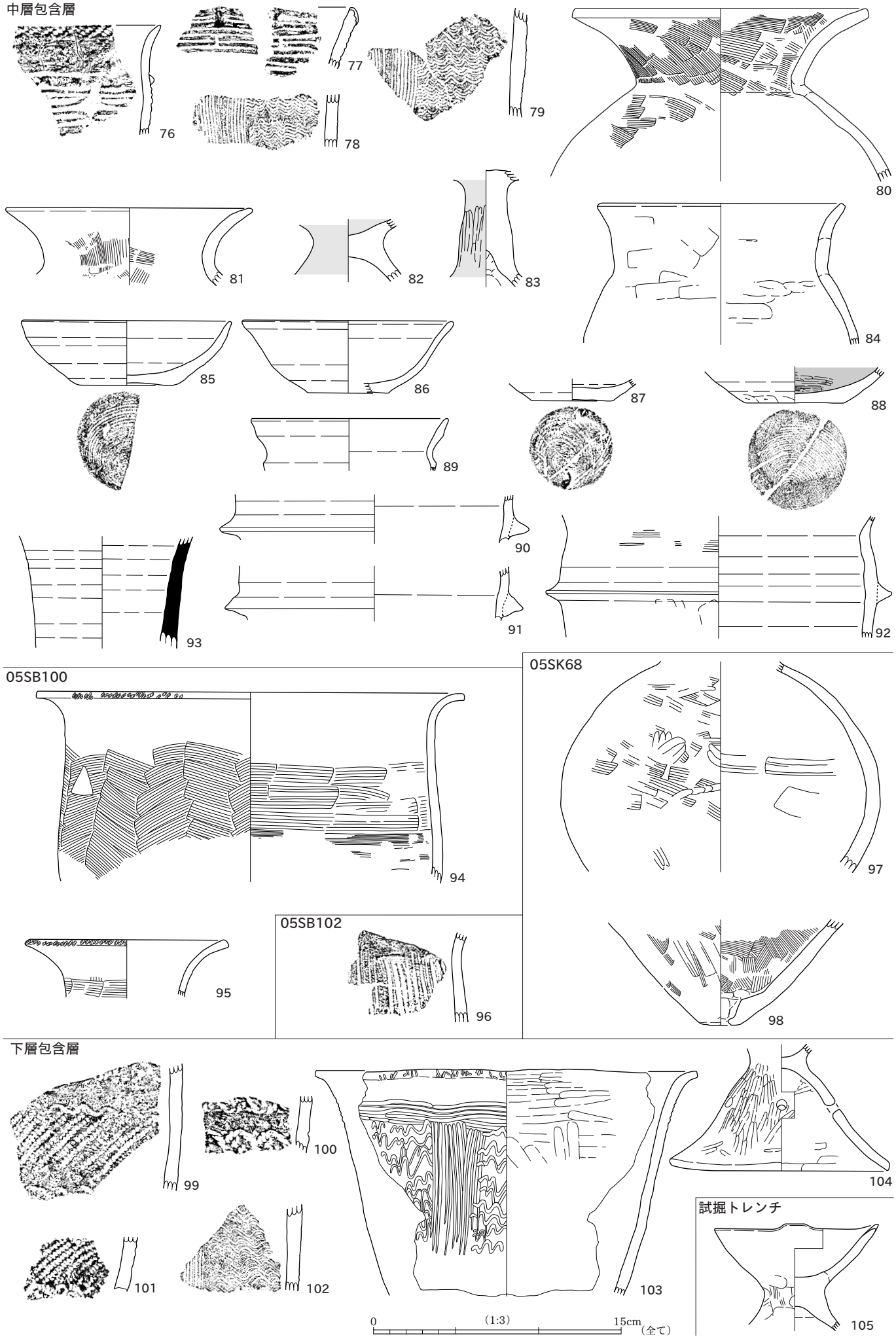


05SK68
1　黒色粘質土。炭化物を少量含む。礫(径3～30mm)をまばらに含む。
2　黒褐色粘質土。炭化物をごく少量含む。礫(径3～5cm)をまばらに含む。黄褐色粘質土をまばらにごく少量含む。

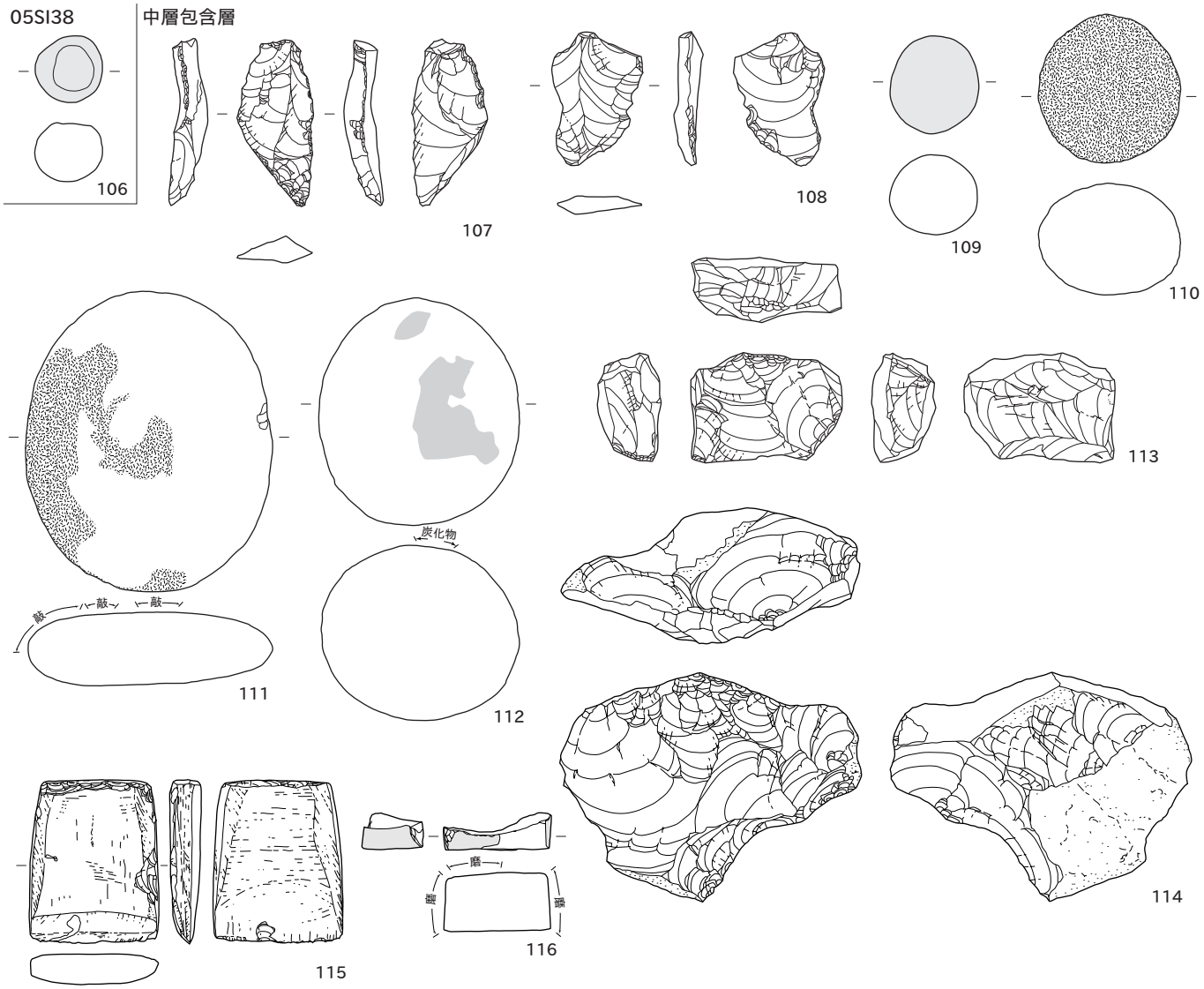
05SK58
1　黒褐色粘質土。礫(径5mm)を少量含む。

0　(1：40)　2m

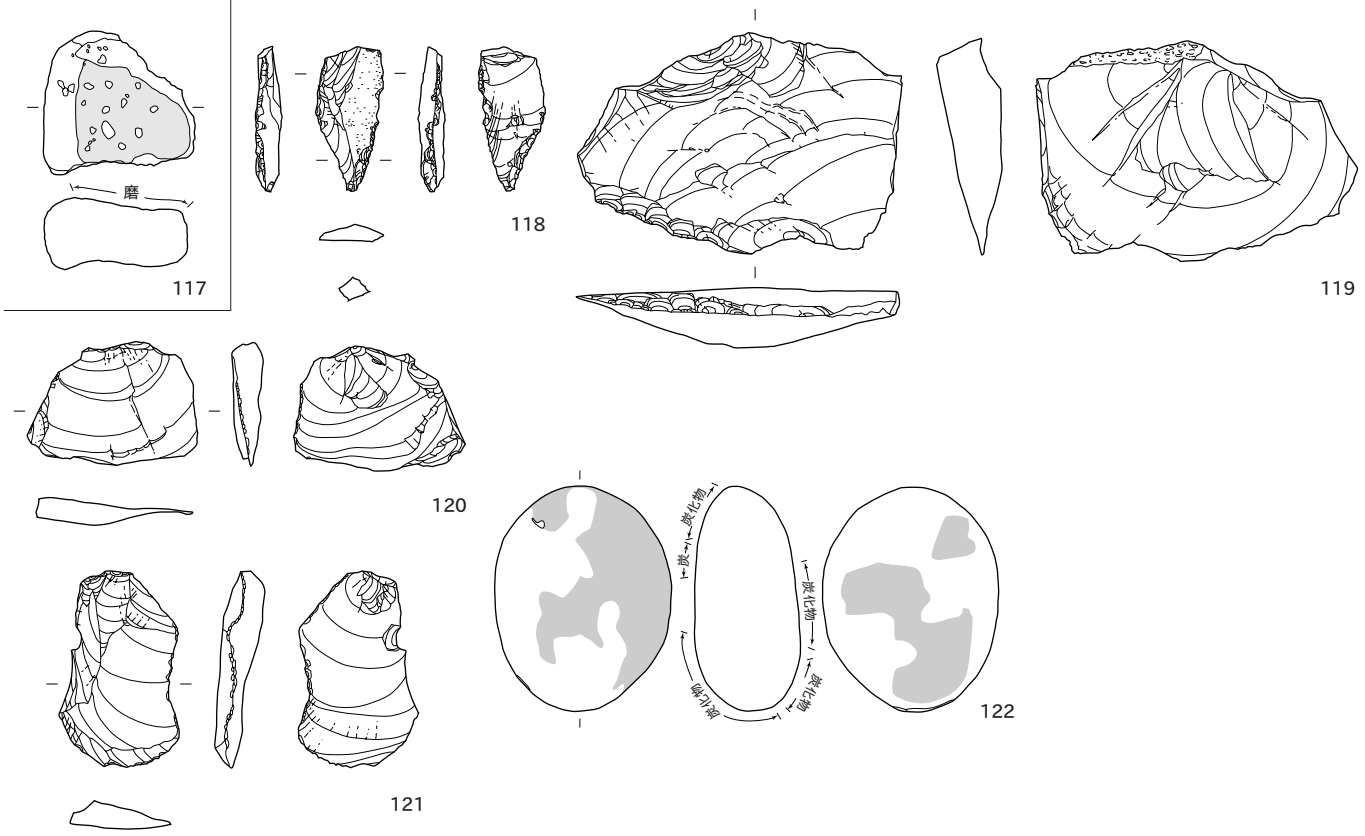

上層Ⅰ層
49
50
05SI31
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
05SI38
74
05P36
75
0
(1:3)
15cm
（全て）


中層包含層
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
05SB100
94
95
05SB102
96
05SK68
97
98
下層包含層
99
100
101
102
103
104
試掘トレンチ
105
0
(1:3)
15cm
(全て)

05SI38　中層包含層



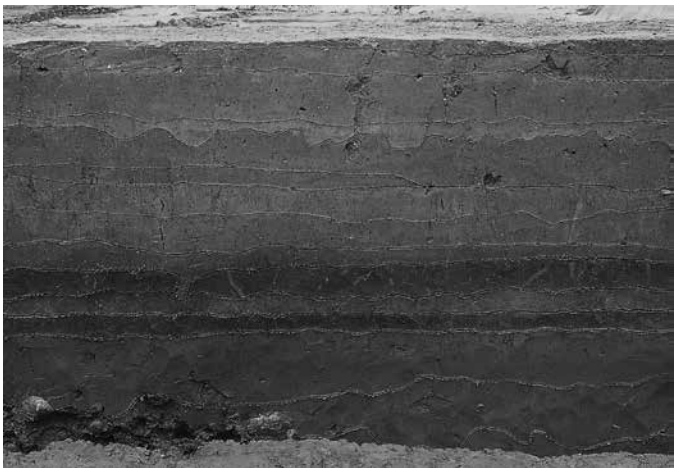
05SK68　下層包含層



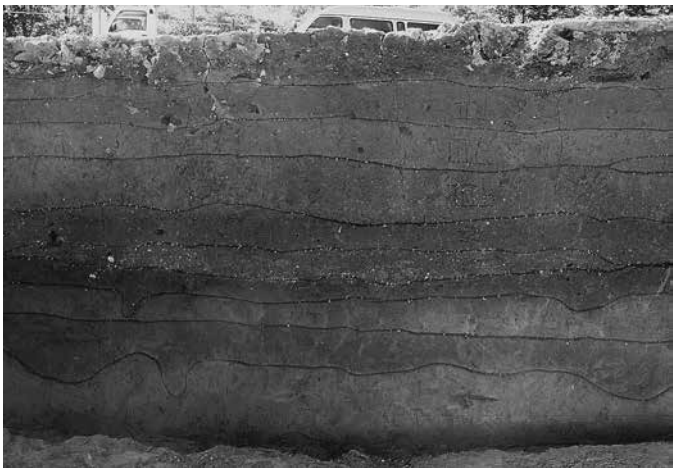
0　(1:2)　10cm　(107・108・113・114・118～121)

0　(1:3)　15cm　(その他)

遺跡近景（上空から）



水田側調査区基本層序（東から）

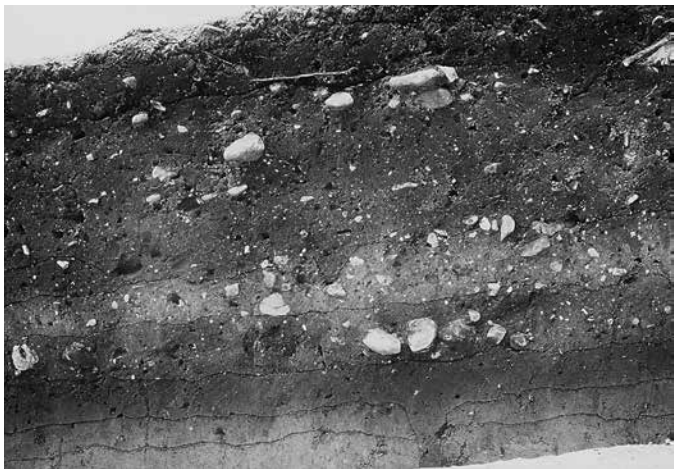


水田側調査区基本層序（南から）

丘陵側調査区基本層序⑬（南から）

丘陵側調査区基本層序⑮（南から）

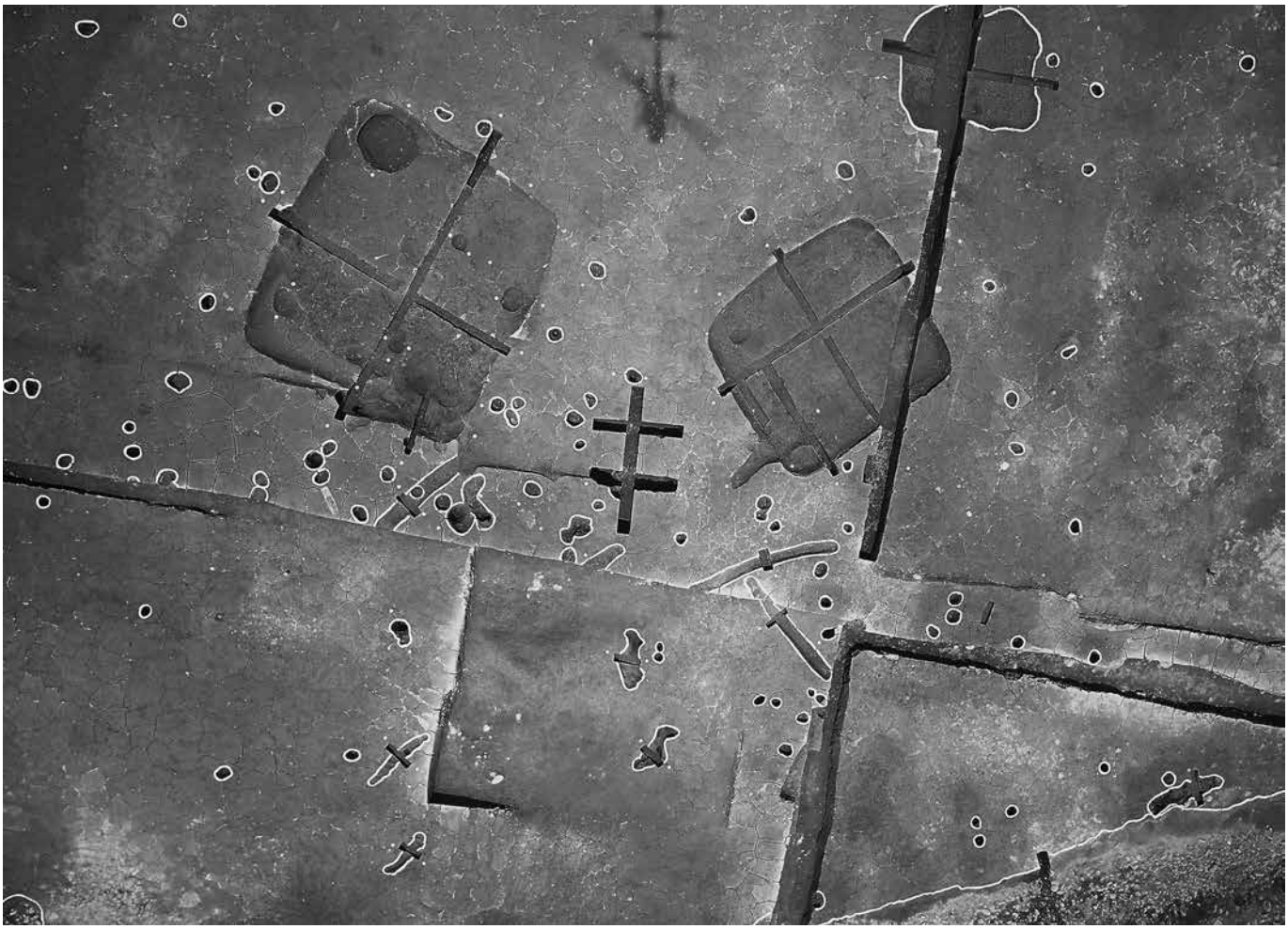
丘陵側調査区基本層序⑩～⑫（東から）



丘陵側調査区基本層序⑩～⑫（東から）

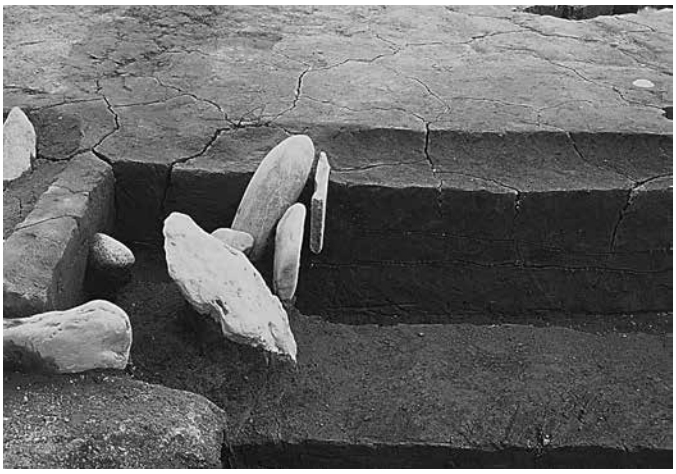
丘陵側調査区基本層序⑩～⑫（東から）

丘陵側調査区基本層序⑩～⑫（東から）



竪穴住居周辺（上空から）

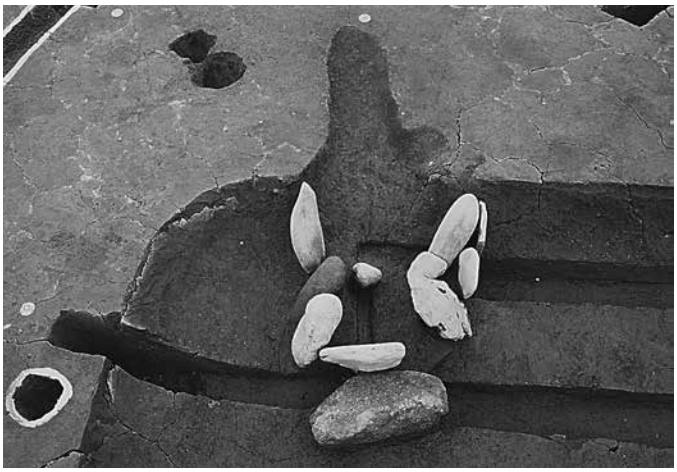
04SI39　断面B-B'（北から）



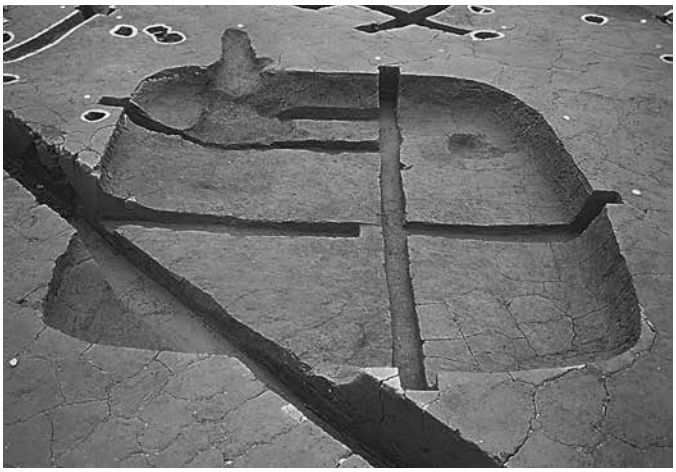
04SI39カマド　断面C-C'（北から）

04SI39カマド　断面D-D'（西から）

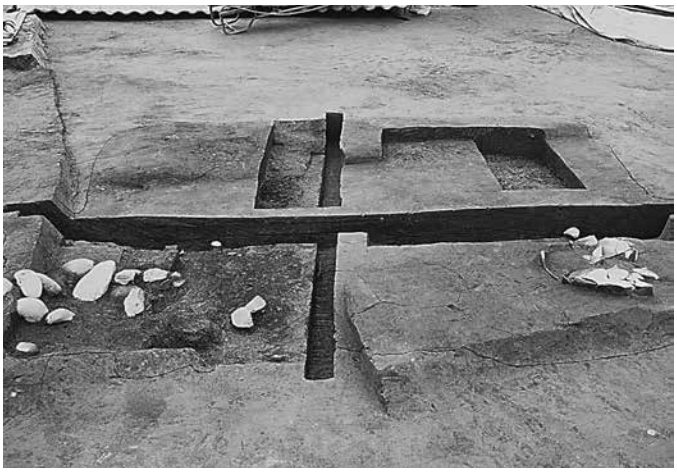
04SI39礫　出土状況（北から）



04SI39カマド（西から）



04SI39　完掘（北から）

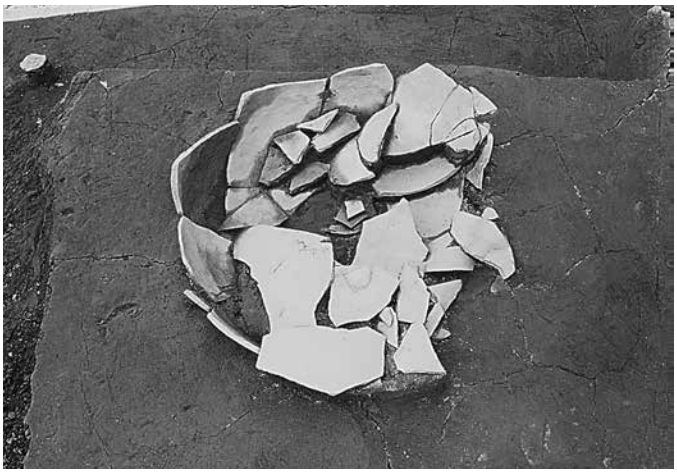


04SI40　断面A-A'（北東から）

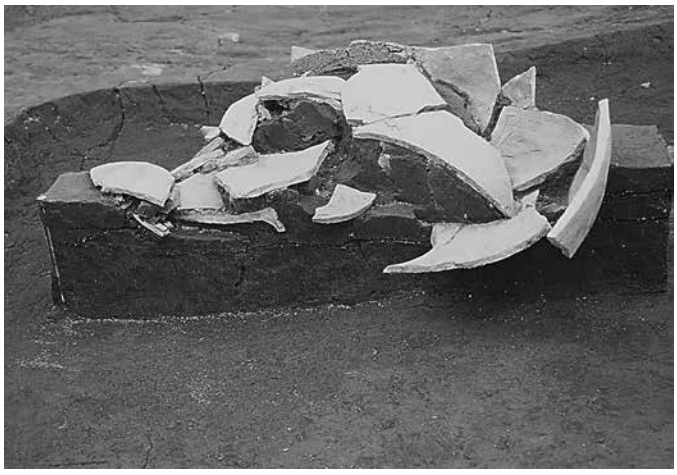
04SI40カマド　断面C-C'（西から）

04SI40カマド　断面D-D'（西から）

04SI40カマド　断面E-E'（西から）

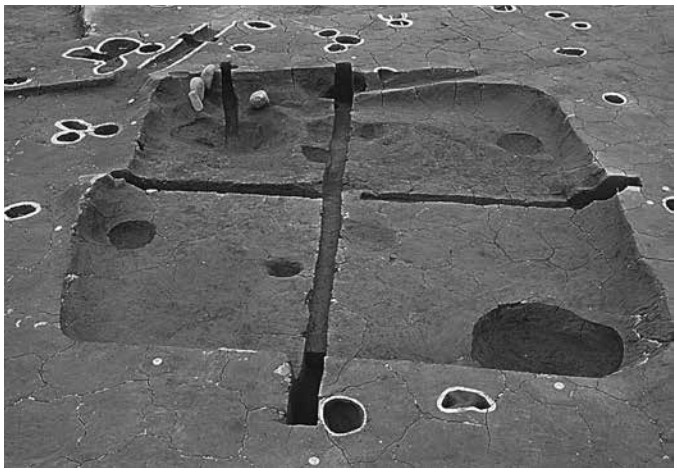


04SI40　須恵器（30）出土状況（北から）



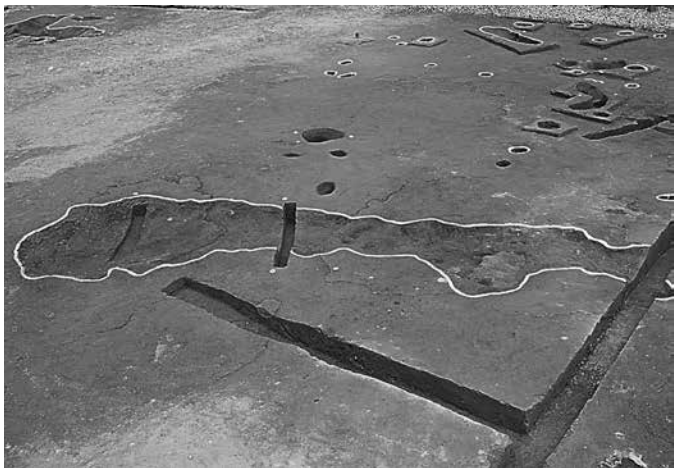
04SI40　須恵器（30）断面G-G'（北から）

04SI40カマド　完掘（北西から）



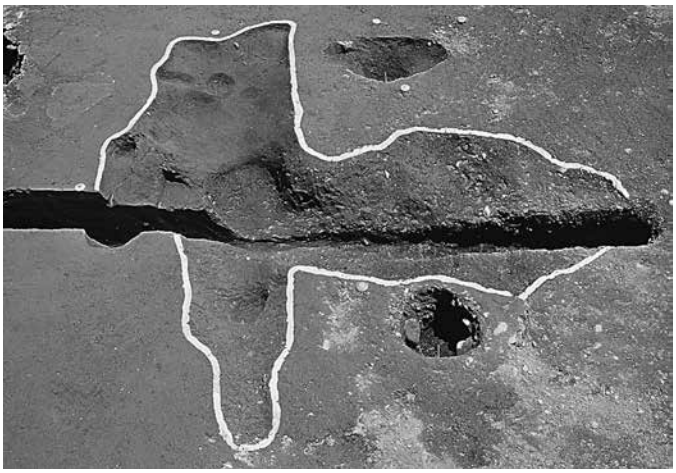
04SI40　完掘（北西から）

04SD11　断面（南東から）

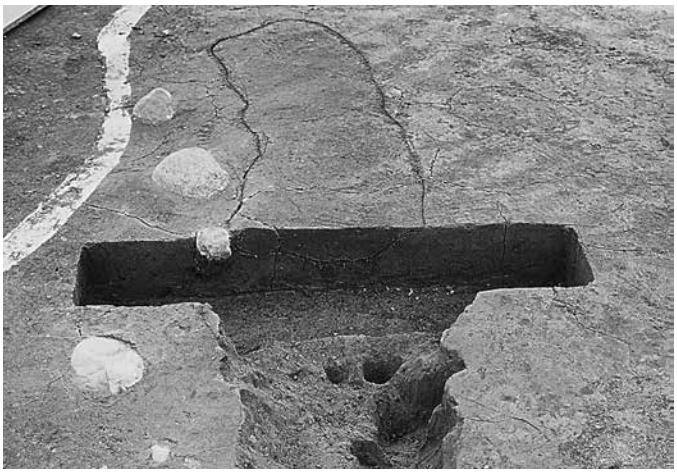


04SD11　完掘（西から）

04SD14　断面（西から）



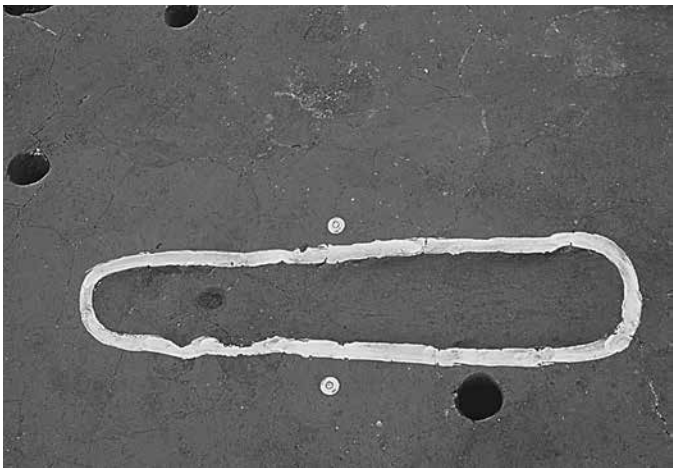
04SD14　完掘（西から）



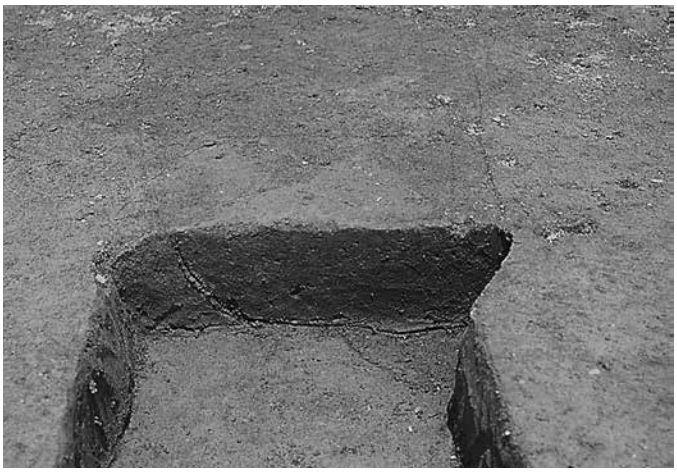
04SD16　断面（北東から）

04SD16　完掘（北から）

04SD27　断面（北から）



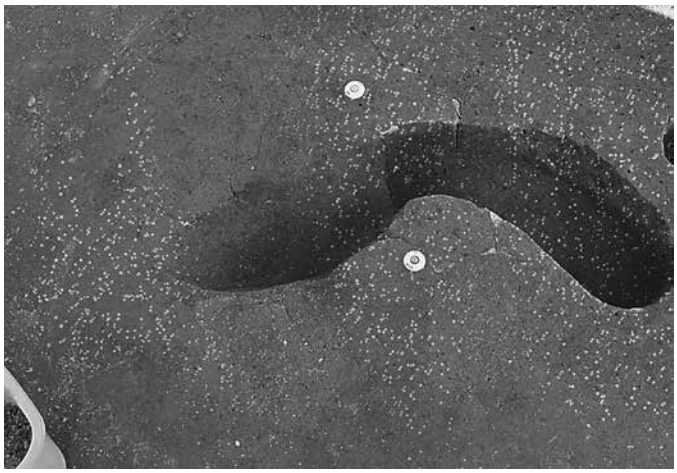
04SD27　完掘（北東から）



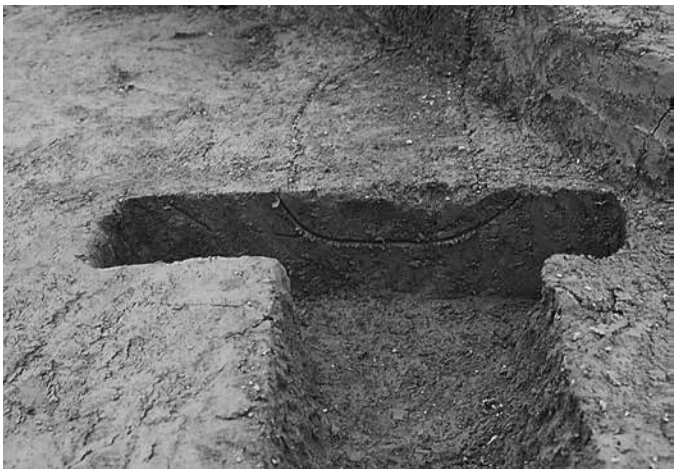
04SD28　断面（南から）

04SD28　完掘（西から）

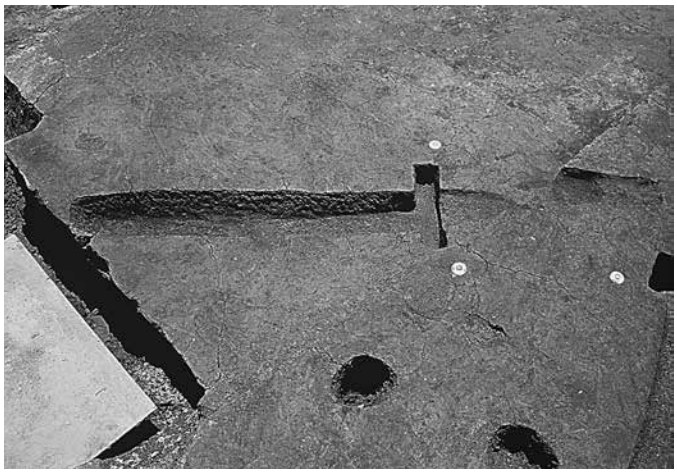
04SD29　断面（南西から）



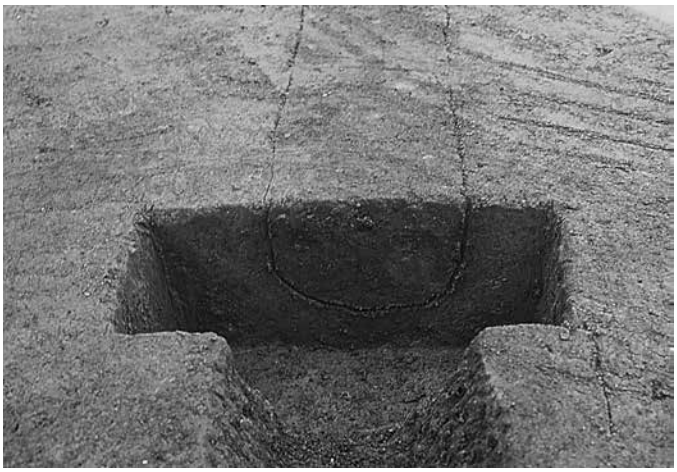
04SD29　完掘（西から）



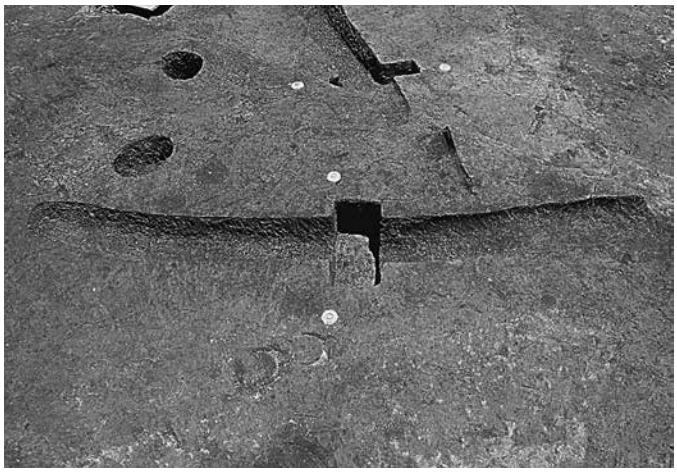
04SD108　断面（東から）



04SD108　完掘（北から）



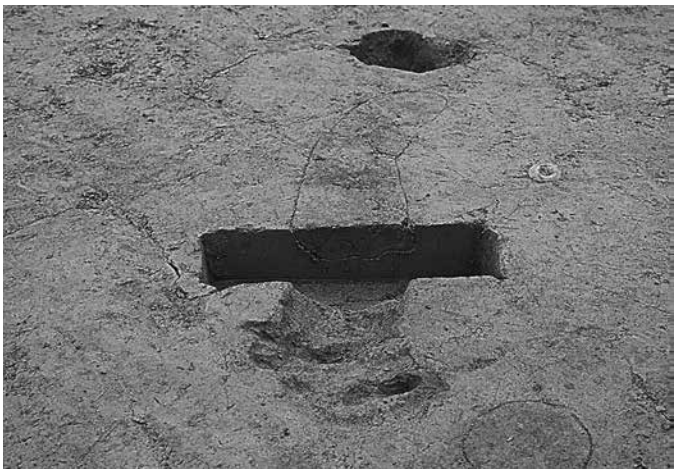
04SD110　断面（南から）



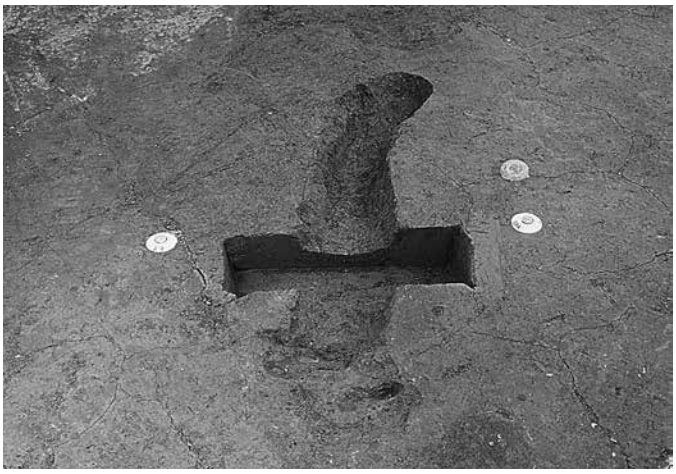
04SD110　完掘（西から）

04SD111　断面（南から）

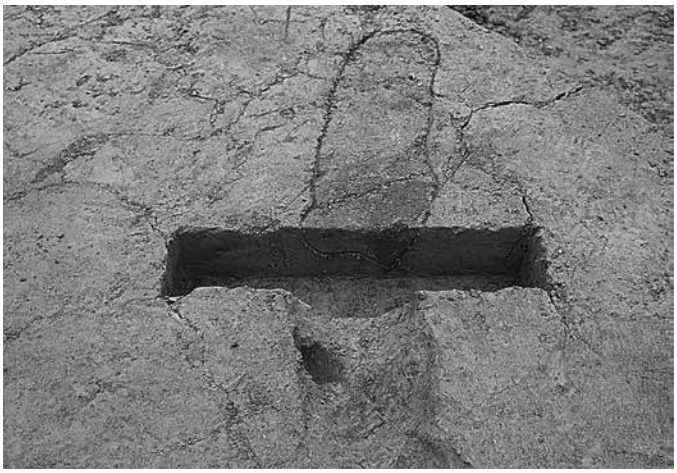
04SD111　完掘（西から）



04SD116　断面（北から）



04SD116　完掘（北から）

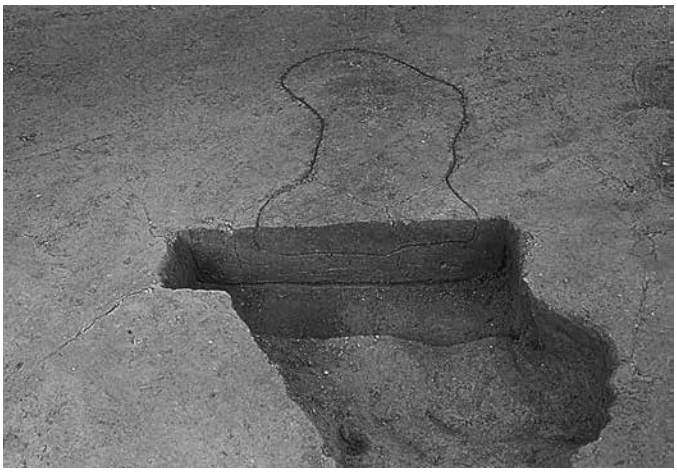


04SD117　断面（南から）

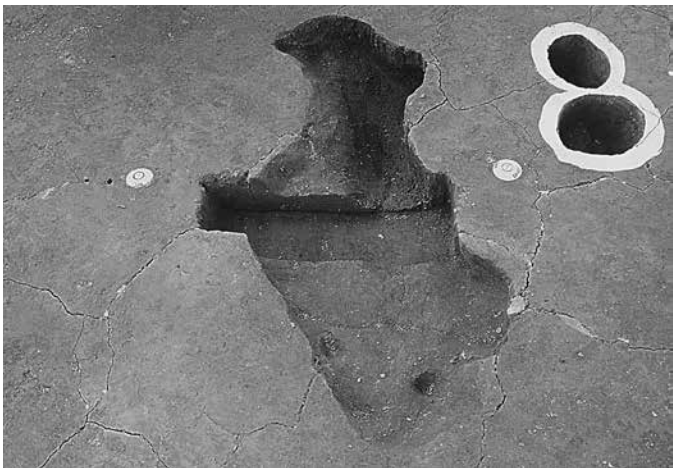
04SD117　完掘（南から）

04SD119　断面（南から）

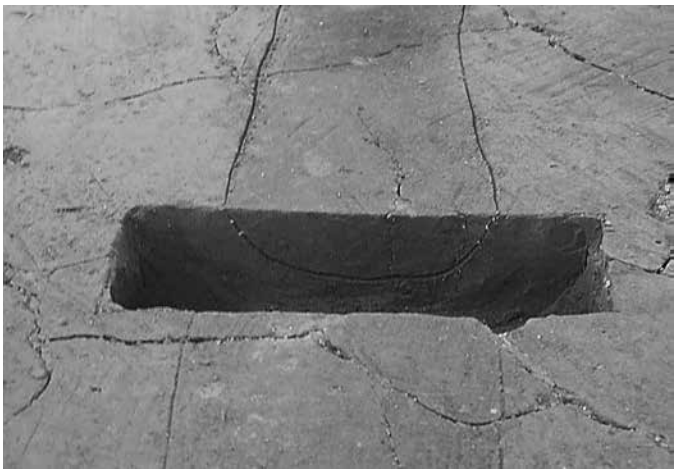
04SD119　完掘（南西から）



04SD122　断面（南東から）



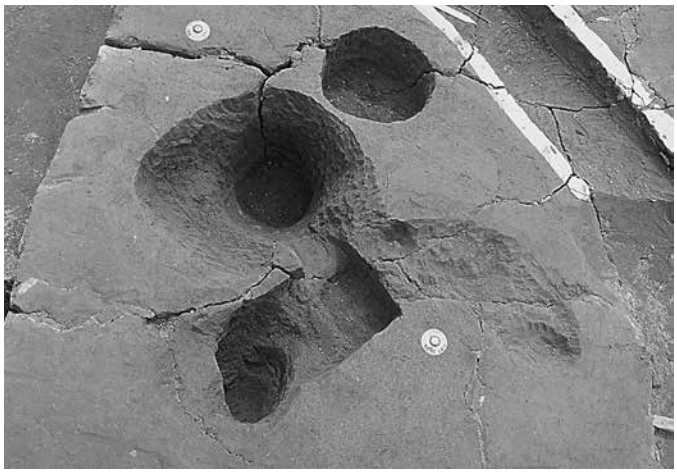
04SD122　完掘（南から）



04SD138　断面（南から）

04SD138　完掘（南から）

04P187・04SD216　断面（東から）

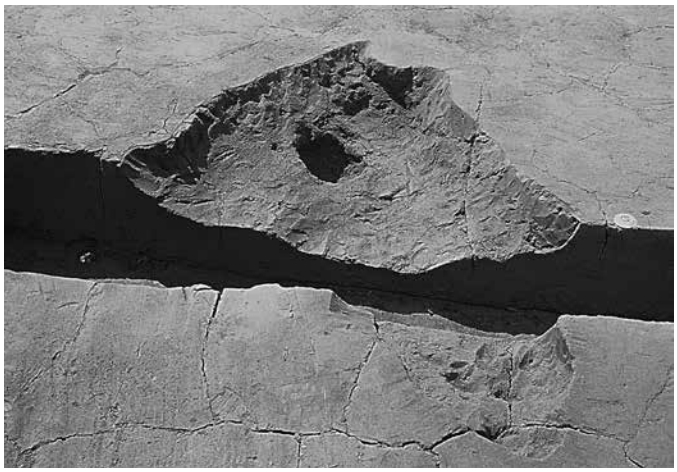


04P187・04SD216　完掘（北から）

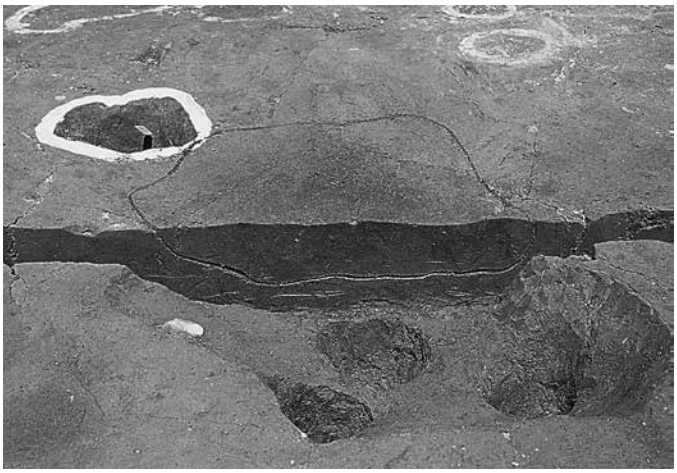
04SK33　断面（北から）

04SK33　完掘（西から）

04SK146　断面（北から）

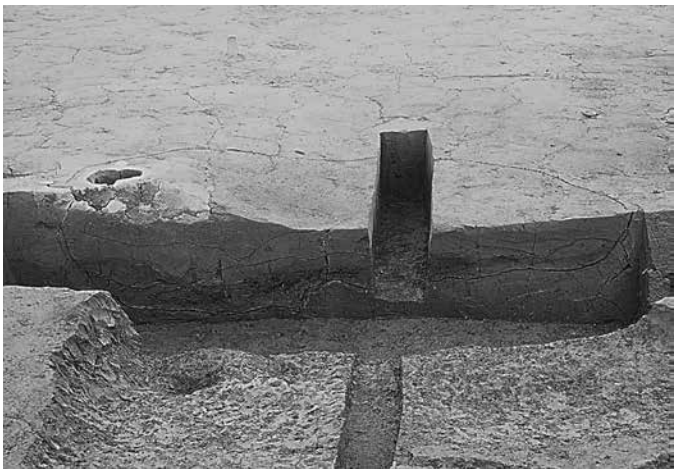


04SK146　完掘（北東から）

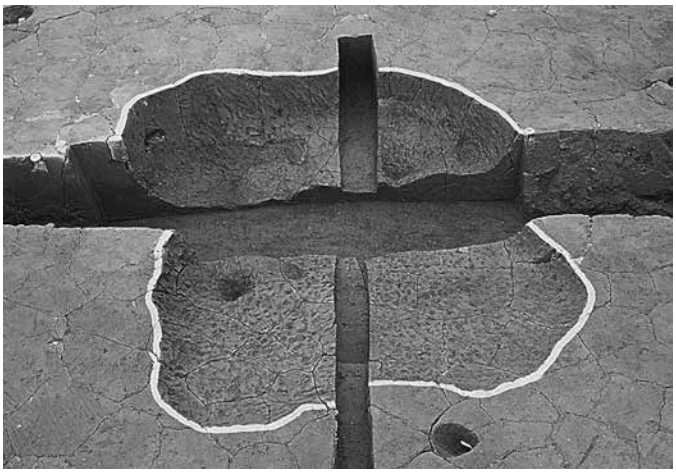


04SK152　断面（南東から）

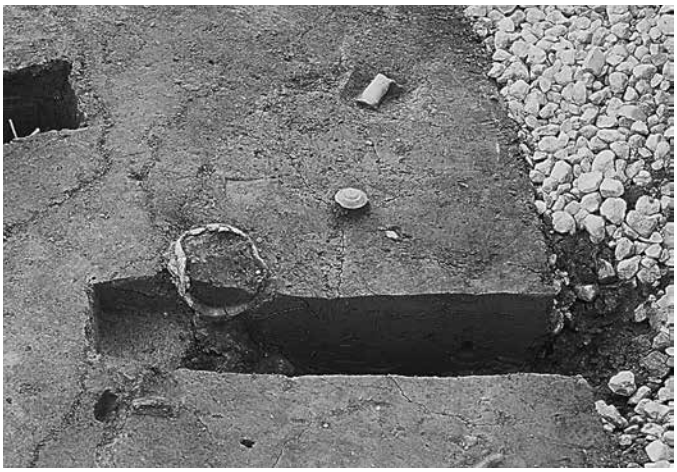
04SK152　完掘（南東から）



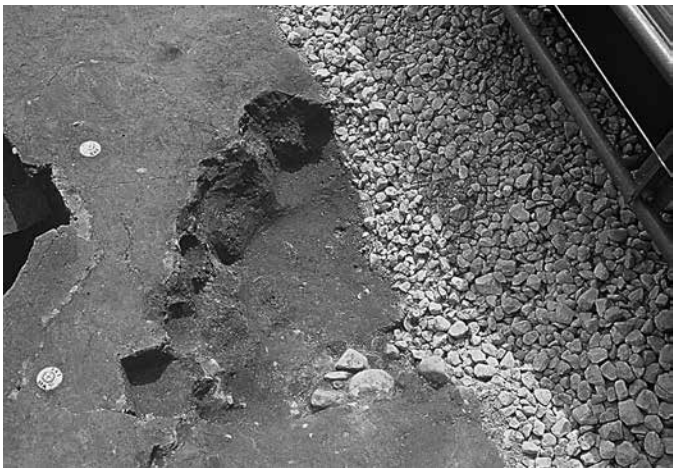
04SK258　断面（東から）



04SK258　完掘（東から）



04SX1　断面（北から）

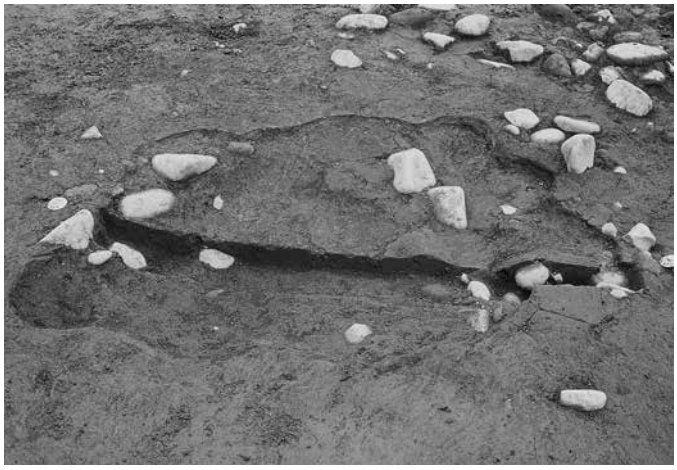


04SX1　完掘（北から）

04SX2　断面（北から）

04SX2　完掘（南から）

04SX3　完掘（北から）



04SX56　完掘（東から）

04SD17　断面A-A'（東から）

04SD17　断面B-B'（東から）

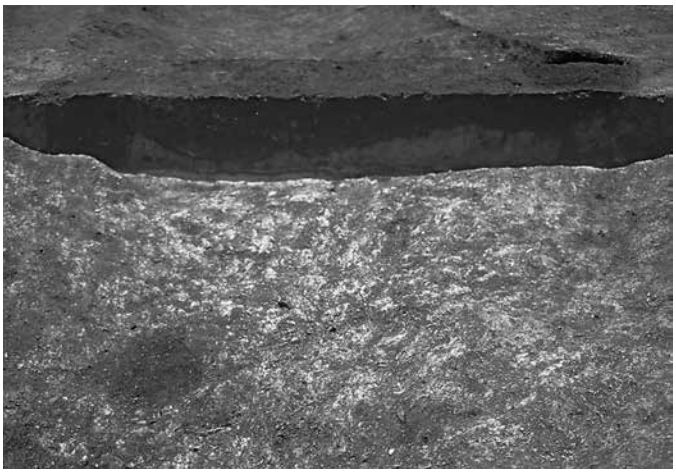
04SD17　断面C-C'（西から）

04SD17　断面D-D'（西から）

04SD17　断面E-E'（北から）

04SD17　完掘（西から）

04SB1　周辺（南から）



04SD327　断面A-A'（西から）

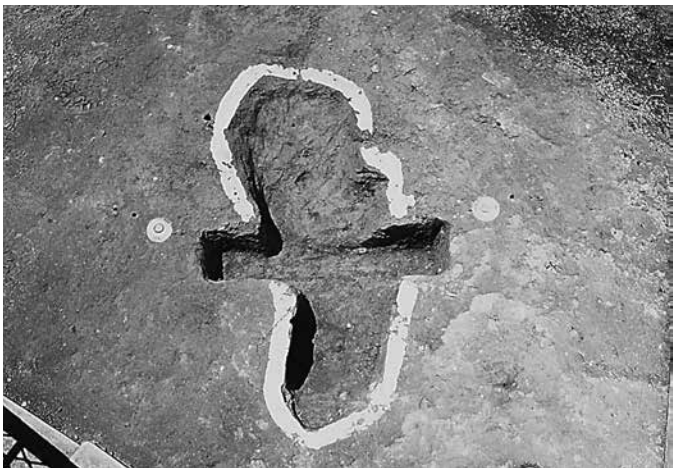
04SD327・04SD330　断面B-B'（北から）

04SD327　断面C-C'（北から）

04SD301　断面（北から）

04SD301　完掘（北から）

04SD364　断面（東から）



04SD364　完掘（北東から）

04SD395　断面（南から）

04SD395　完掘（北西から）

04SD330　断面（北から）

作業風景

04SK316　断面（西から）

04SK316　完掘（西から）

04SK328　断面（北から）

04SK328　完掘（北から）

04SK331　断面（西から）

04SK331　完掘（東から）

04SK358　断面（北から）

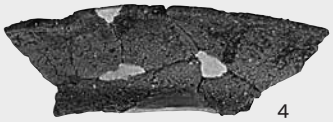
04SK358　完掘（東から）

蟻子山92・93号墳（南西から　手前が93号墳）

1

2

3

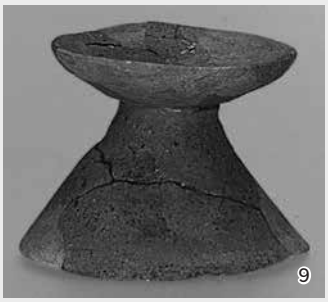

4

6

7

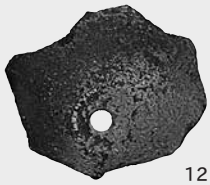
8

5


9

10

11


12

14

13

15

16

17

18

19

20

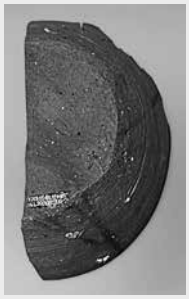
全て　〔1:3〕

21

22

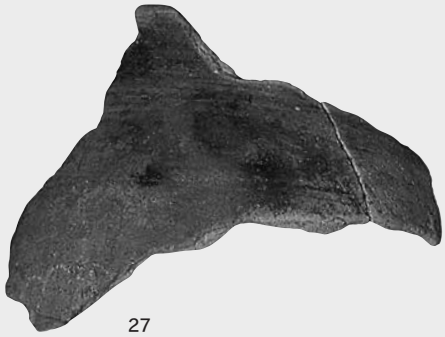
23

24



25

26


27

28

29

31

32

33

34

29　〔1:4〕
その他　〔1:3〕

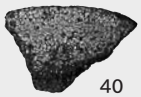
35

36

37

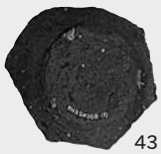
38

39

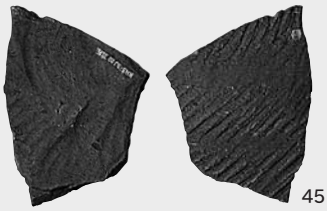

40

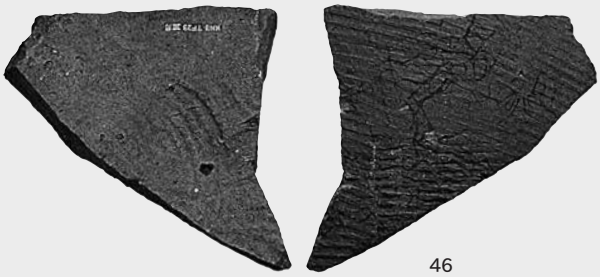
41

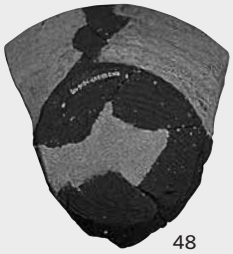
42


43

44


45


46


48

30　〔1:5〕
その他　〔1:3〕

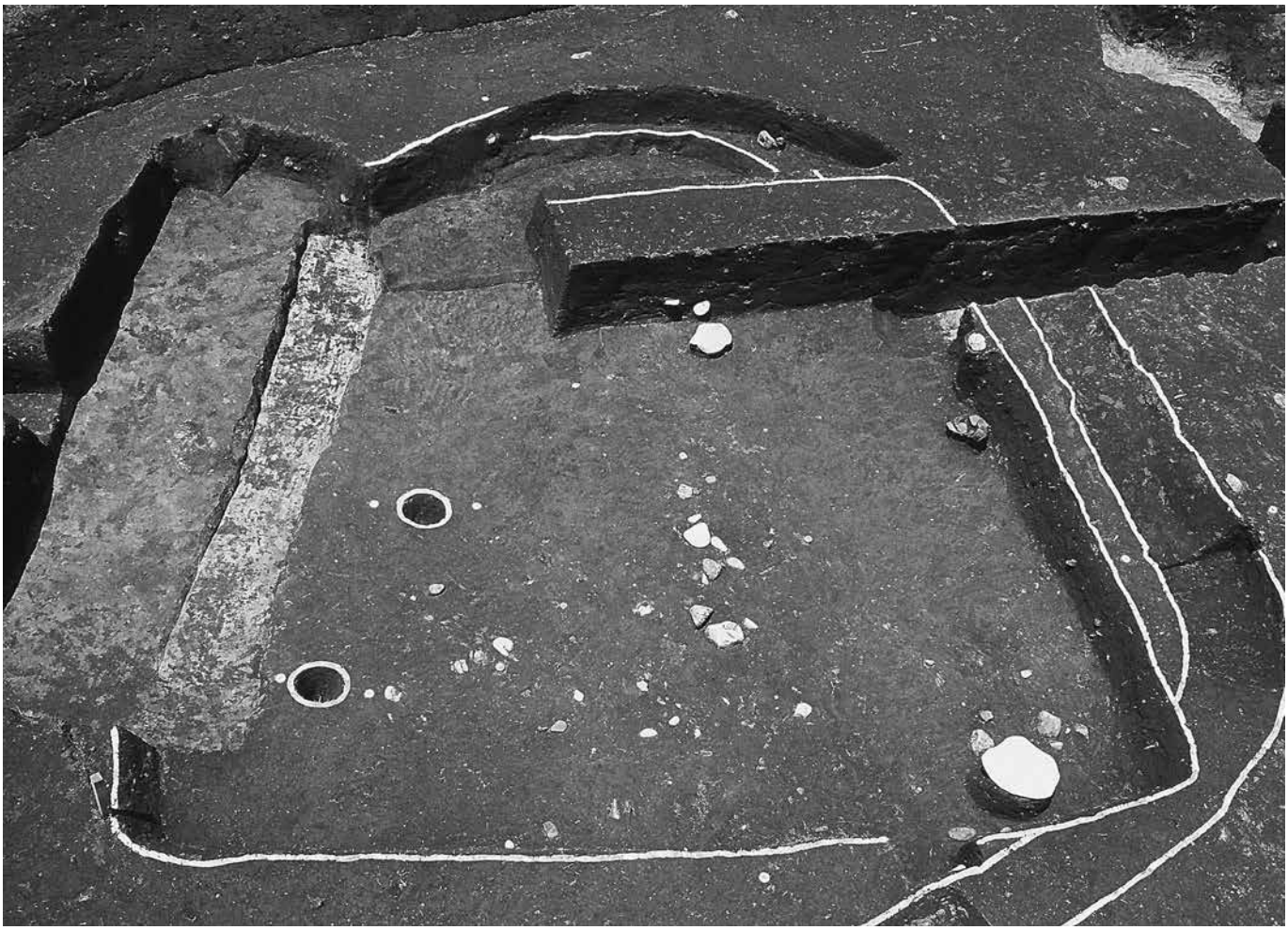
遺跡近景（上空から）

05礎石建物２　検出（南東から）

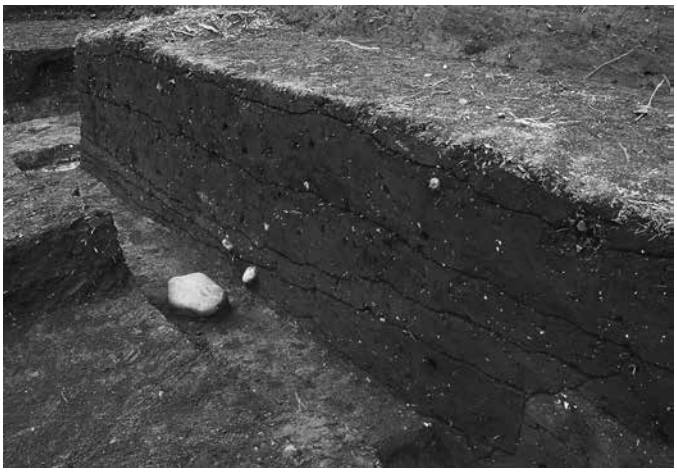
05SX1断面E-E'（東から）

05SX1断面E-E'（東から）

05SX1　断面F-F'（南から）



05SI31・38、05SD32　完掘（東から）



05SI31　断面A-A'（北東から）

05SD32　断面（東から）

05SI31・38　断面B-B'（南から）

05SI31・38　断面B-B'（南から）

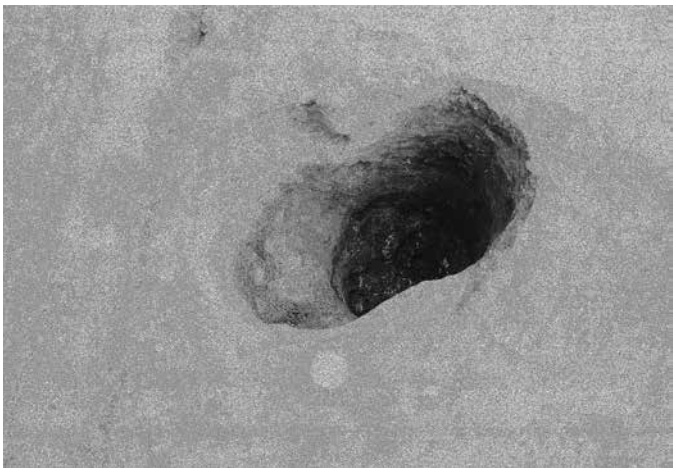
05SI31　焼土断面（南から）

05SI31　焼土断面（南から）

05SI31　河原石検出状況（南東から）

05SI38　土器（74）出土状況（北から）

05P55　断面（東から）



05P55　完掘（南から）

05P56　断面（東から）

05P56　完掘（南から）

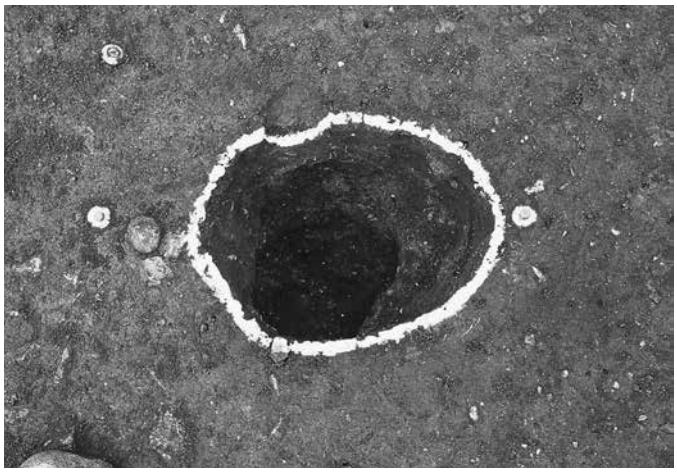
05P57　断面（南から）

05P57　完掘（南から）

作業風景

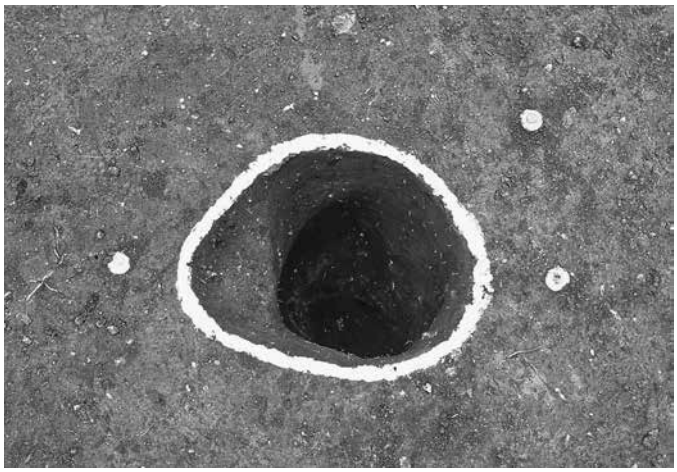
05SB28　完掘（南から）

05P23　断面（東から）



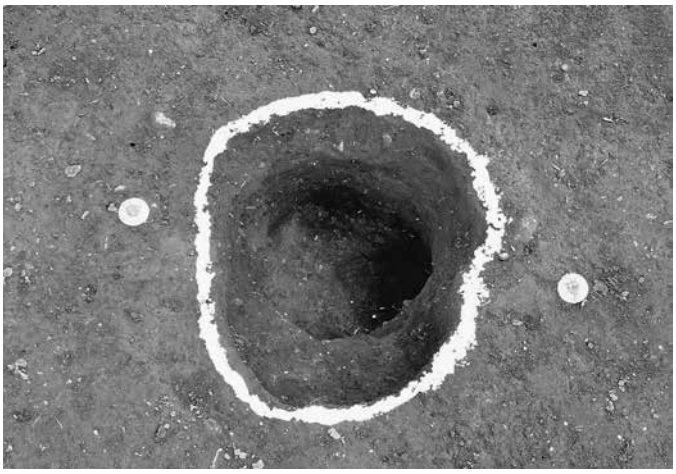
05P23　完掘（東から）

05P24　断面（東から）

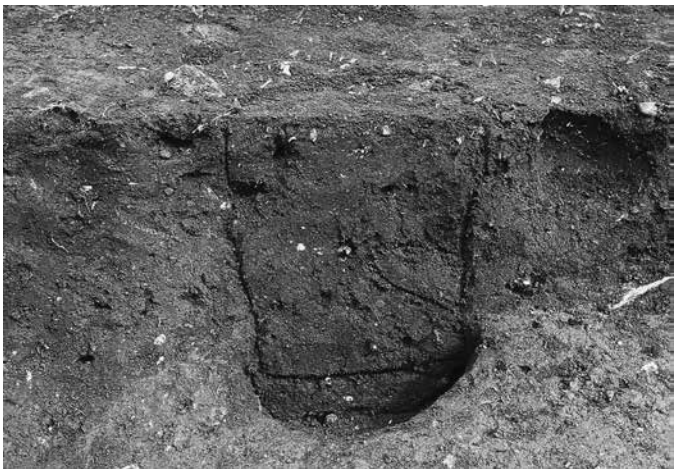


05P24　完掘（南から）

05P25　断面（南西から）



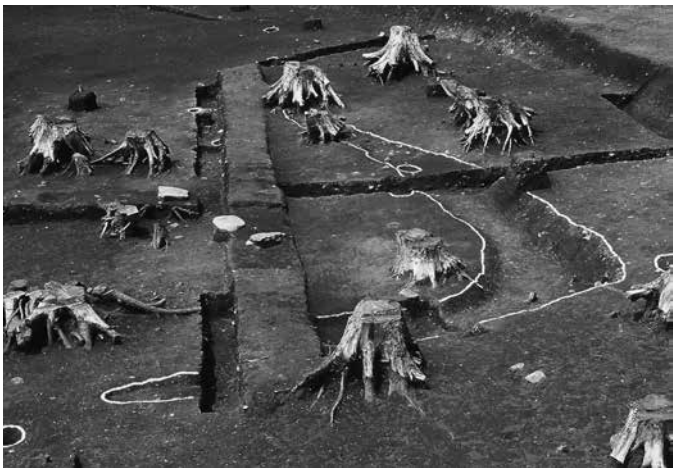
05P25　完掘（西から）



05P27　断面（西から）

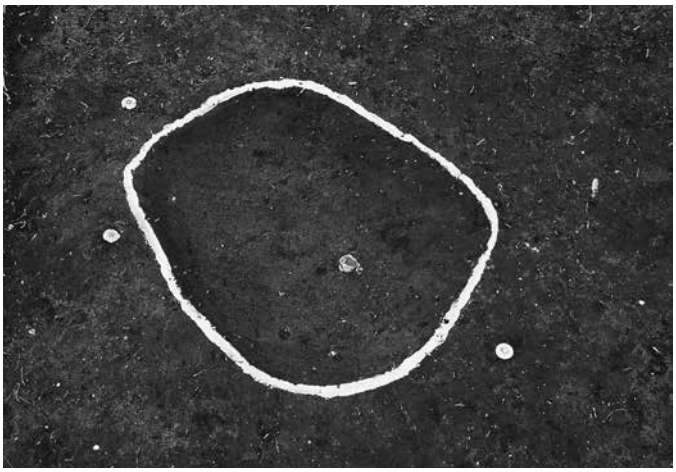
05P27　完掘（西から）

05SD30　断面（南西から）



05SD30　完掘（北から）

05SK11　断面（南西から）



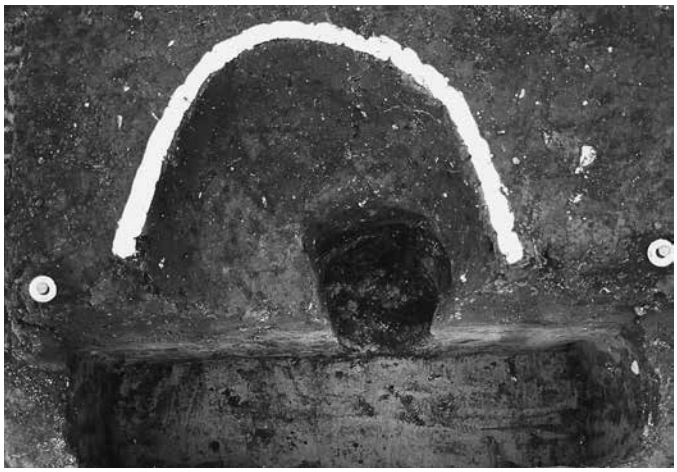
05SK11　完掘（北から）

Ⅷ層南側（上空から）

05SB100　完掘（南西から）

05P51　土器出土状況（北から）

05P51　断面（北から）

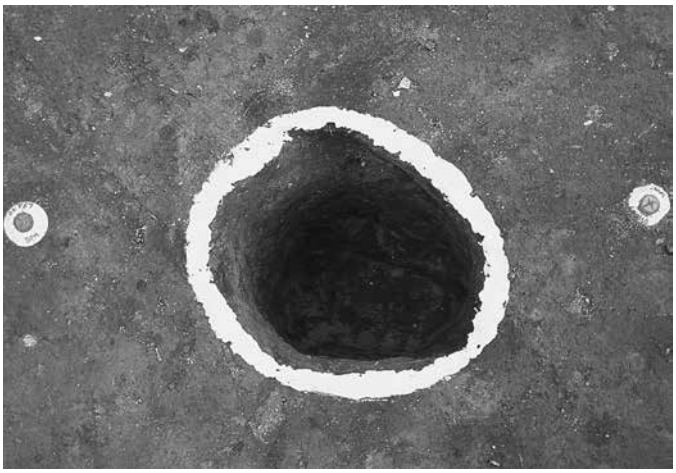


05P51　完掘（北から）

05P61　断面（北から）

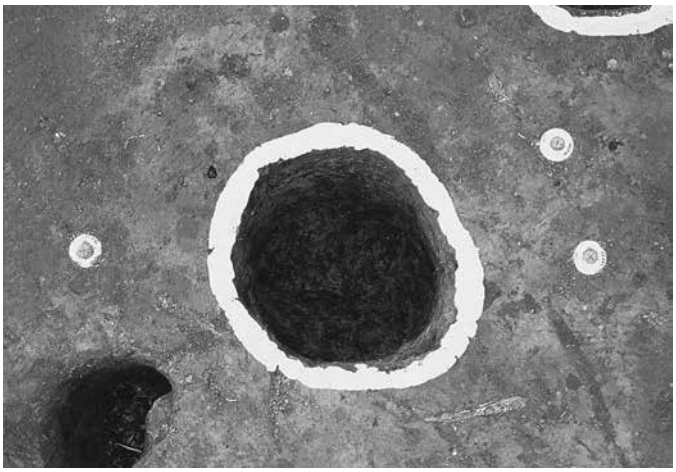
05P64　断面（北から）

05P67　断面（南から）



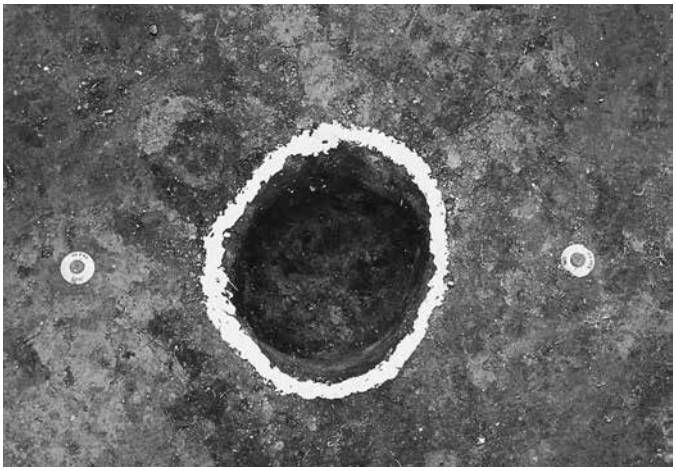
05P67　完掘（南から）

05P91　断面（西から）



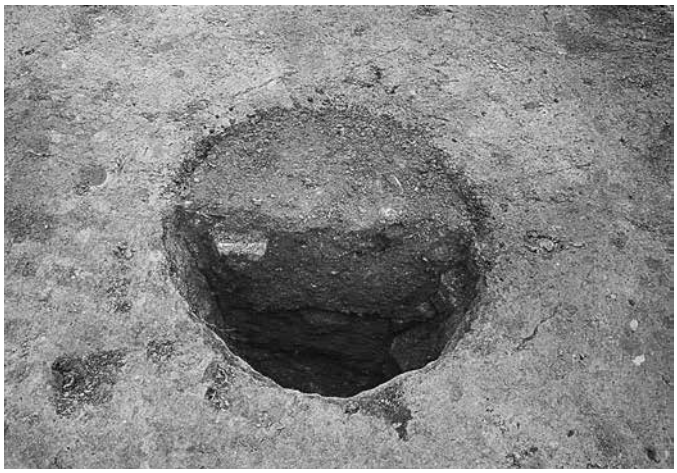
05P91　完掘（北から）

05P92　断面（東から）



05P93　完掘（南から）

05SB102　完掘（西から）

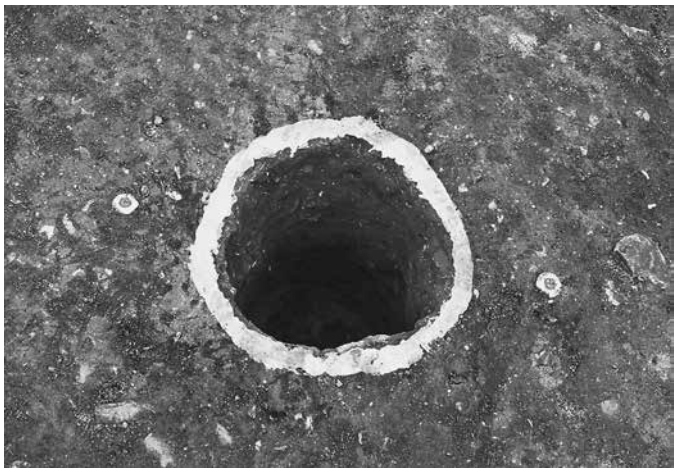


05P95　断面（南から）

05P96　断面（南から）

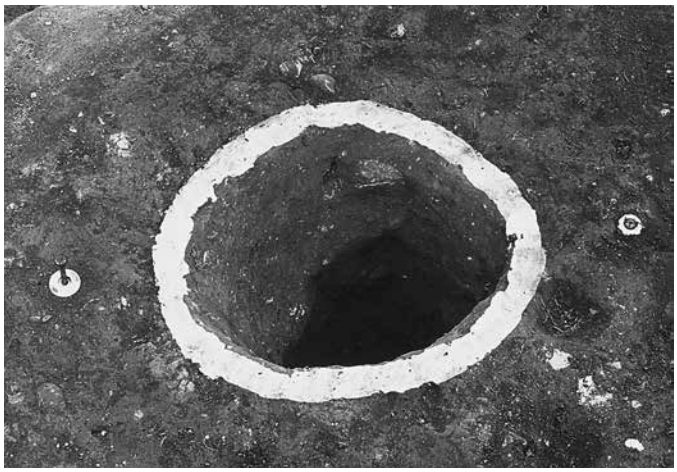
05P96　完掘（南から）

05P97　断面（南から）



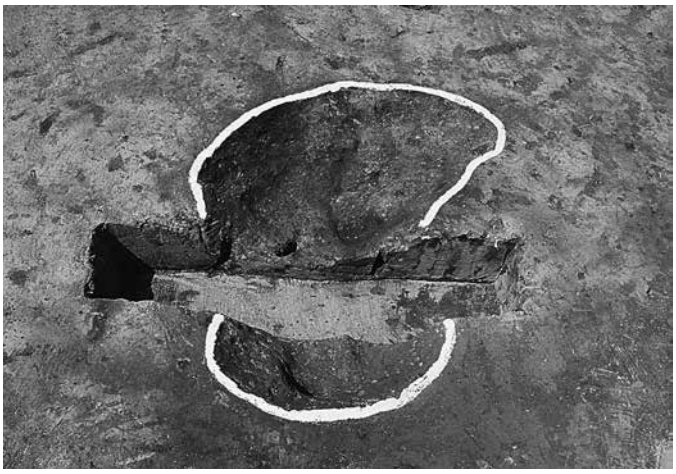
05P97　完掘（南から）

05P98　断面（南から）



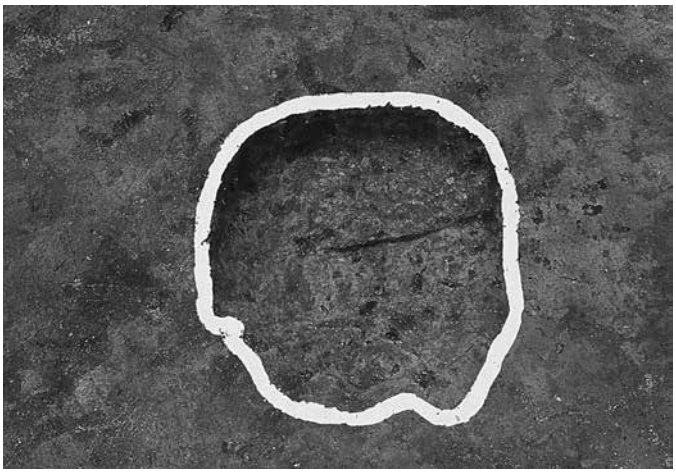
05P98　完掘（南から）

05SK58　断面（南から）



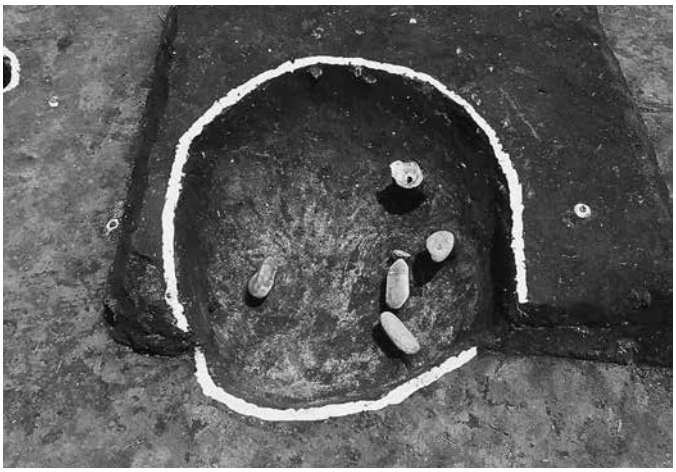
05SK58　完掘（南から）

05SK59　断面（東から）



05SK59　完掘（東から）

05SK68　断面（西から）



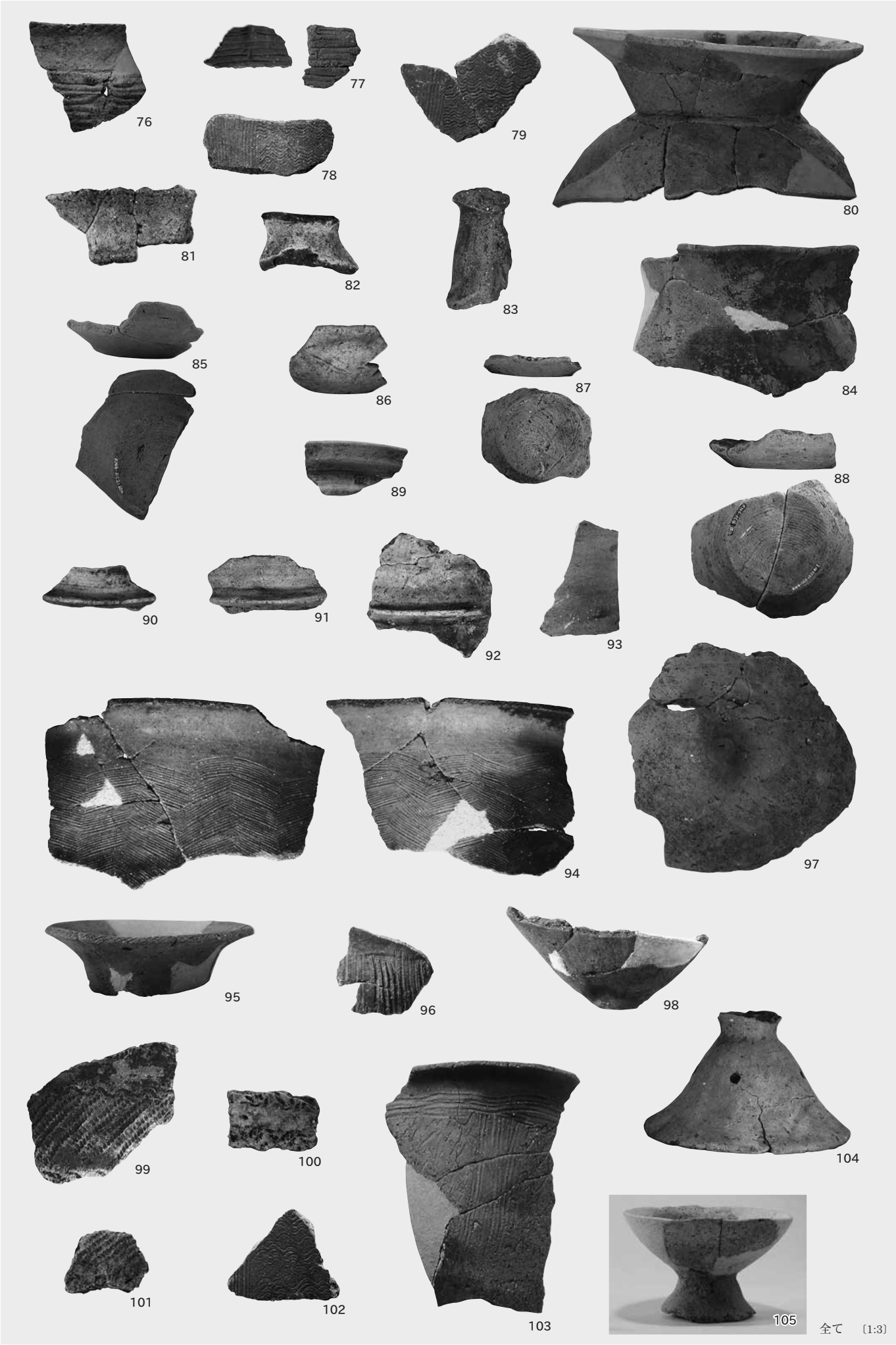
05SK68　完掘（西から）

作業風景（火山灰分析サンプリング）

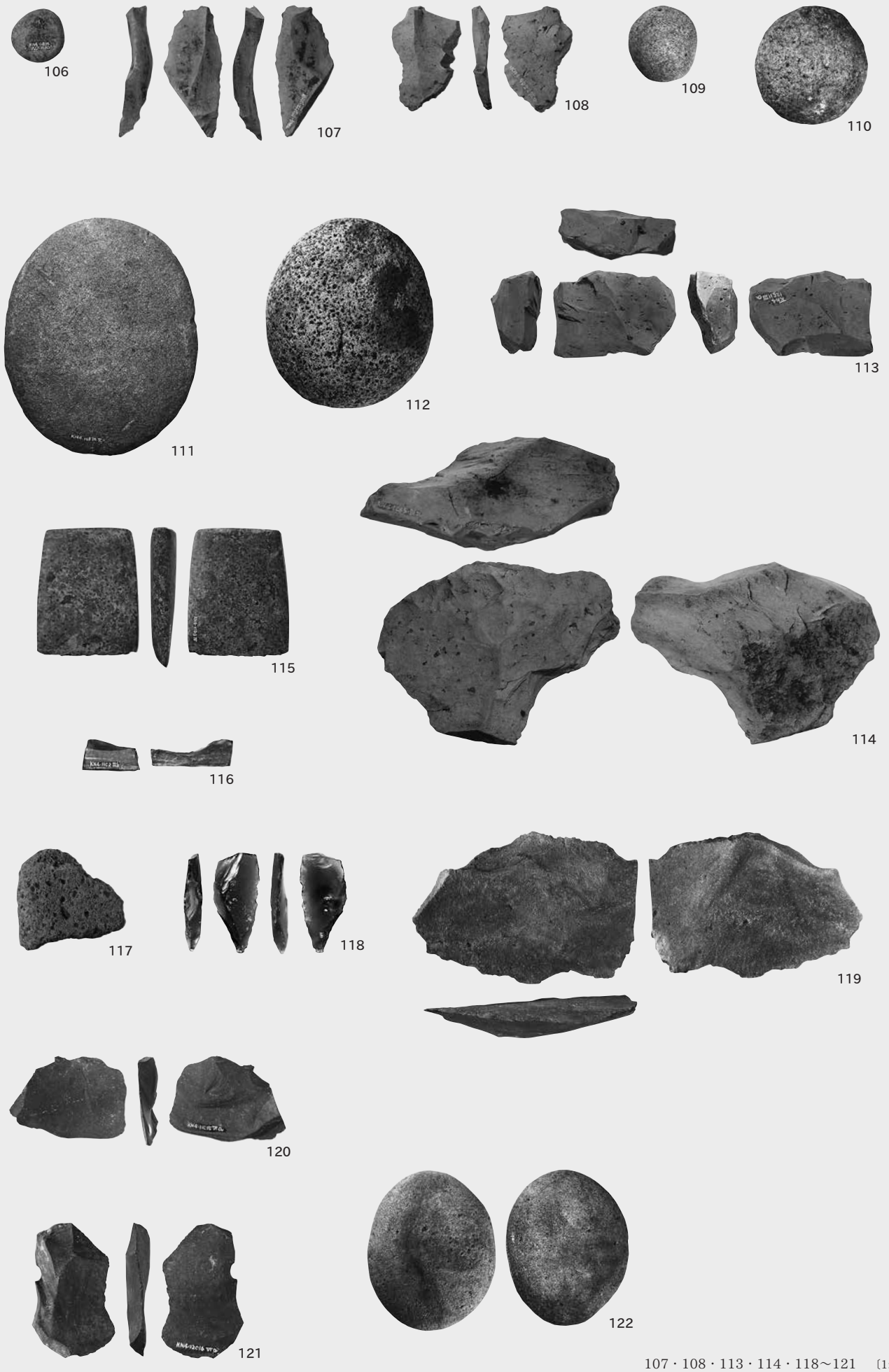
作業風景

49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75

全て　〔1:3〕


76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105

全て　〔1:3〕



107・108・113・114・118～121　〔1:2〕
その他　〔1:3〕

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かなやいせき　に
書　　名	金屋遺跡Ⅱ
副　書　名	関越自動車道関係発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第155集
編 著 者 名	飯坂盛泰・山崎忠良・笹川　隆（埋文事業団）、實川順一・桑原　健（株式会社みくに考古学研究所）、辻本崇夫・矢作健二・石岡智武（パリノ・サーヴェイ株式会社）
編 集 機 関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒956-0845　新潟県新潟市金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2006（平成18）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金屋遺跡（かなやいせき）	新潟県（にいがたけん）南魚沼市（みなみうおぬまし） 余川字蟻子山（よかわあざありごやま） 35－1ほか	15226	24	37度 04分 50秒	138度 52分 13秒	20040414～ 20040813 20050426～ 20050627	4,370 m²	関越自動車道六日町雪氷Uターン路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金屋遺跡	散布地	旧石器時代		ナイフ形石器	
	散布地	縄文時代 （前期・晩期）		縄文土器	
	集落	弥生時代中期	掘立柱建物2棟・土坑5基・ピット33基	弥生土器	栗林式出土
	集落	古墳時代前期	竪穴住居2軒・掘立柱建物1棟・溝4条・土坑4基・ピット30基・性格不明遺構3基・河川跡1条	土師器（甕・壺・鉢・高杯・器台）	集落の縁辺
	集落	古代 （9世紀～10世紀）	竪穴住居2軒・掘立柱建物1棟・溝1条・ピット7基、河川跡1条	土師器（甕・椀）・須恵器（甕・杯・杯蓋）	集落の縁辺
	散布地	不明	礎石建物1棟・溝18条・土坑8基・ピット344基・性格不明遺構3基		

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第155集

関越自動車道関係発掘調査報告書

金　屋　遺　跡　Ⅱ

平成18年3月25日印刷
平成18年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986
URL　http://www.maibun.net

印刷・製本　株式会社　第一印刷所
〒950-8724 新潟市和合町２丁目４番18号
電話　025（285）7161